

一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2

浜寄・地方遺跡

— 1A・1B・1C・1D・1F・2A・2C・2F・2G区の調査 —

2006年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2

浜寄・地方遺跡

— 1A・1B・1C・1D・1F・2A・2C・2F・2G区の調査 —

2006年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

一般国道9号は、京都府京都市を起点として山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和し、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成13年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成14・15・16年度に実施した浜寄・地方遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成18年3月

国土交通省中国地方整備局
浜田河川国道事務所
所長 宮原 慎

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成14年度から平成16年度に実施した益田道路建設予定地内の浜寄・地方遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

この調査では、水田跡をはじめとして弥生時代以降の各時代にわたる遺構や遺物が確認され、この地域の歴史を解明していくうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、この地域における人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として、学校教育や生涯学習に役立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の発刊にあたり御協力いただきました国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめ、地元の方々ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

島根県教育委員会
教育長 広 沢 卓 嗣

例 言

1 本書は、島根県教育委員会が平成14年度から平成16年度に実施した一般国道9号益田道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本書で報告する遺跡は次のとおりである。

浜寄・地方遺跡 島根県益田市高津2丁目・3丁目

3 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

平成14年度 現地調査

[事務局] 宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田 融（同総務課長）
川原和人（同調査第二課長）、坂本淑子（同総務係長）

[調査員] 田原淳史（同主事）、川崎英司（同教諭兼文化財保護主事）
板倉芳朗（同教諭兼文化財保護主事）、寺尾 令（同臨時職員）

平成15年度 現地調査

[事務局] 宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）、永島静司（同総務課長）、川原和人（同調査第二課長）

[調査員] 大庭俊次（同調査第6係長）、田原淳史（同主事）
川崎英司（同教諭兼文化財保護主事）、板倉芳朗（同教諭兼文化財保護主事）
渡辺 聡（同臨時職員）、世良 啓（同臨時職員）

平成16年度 現地調査

[事務局] 山根正巳（埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）、永島静司（同総務グループ課長）、宮澤明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 大庭俊次（同主幹）、田原淳史（同文化財保護主事）都田敬樹（同講師兼主事）、
鳥屋孝太郎（同講師兼主事）渡辺 聡（同臨時職員）、世良 啓（同臨時職員）

平成17年度 報告書作成

[事務局] 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）
宮澤明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 田原淳史（同文化財保護主事）、谷 徹（同教諭兼主事）

4 発掘調査（発掘作業員・重機借り上げ・発掘用具調達・測量発注）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

[現場担当] 斉藤義徒 藤井敏治 松下芳久

[事務担当] 池野真由美

5 現地調査及び報告書の作成に際しては、以下の機関、方々から有益な助言をいただいた。

小野正敏（国立歴史民俗博物館教授）、大庭康次（福岡市教育委員会文化財保護部主査）、
岡野雅則（鳥取県埋蔵文化財調査センター）、亀山 将（浜寄自治会長）、木原 光（益田市教育委員会文化振興課文化財係長）、篠原和大（静岡大学人文学部助教授）、滝沢 誠（静岡大学

人文学部教授)、田中義昭(島根県文化財保護審議会委員)、中村唯史(三瓶自然館学芸員)、村上 勇(広島県立美術館次長兼学芸課長)、山崎純男(福岡市教育委員会文化財保護部部长)、山田和芳(島根大学汽水域研究センター研究機関研究員)、益田市教育委員会、益田市立歴史民俗資料館、山口県埋蔵文化財センター

- 6 挿図方位は第Ⅲ系座標により、レベルは海拔を示す。
- 7 第1図は国土地理院発行の1/25,000(益田・石見横田)を使用した。第4図は同じく国土地理院発行の1/50,000(益田, 日原)を使用した。
- 8 本書の執筆・編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力、助言を得て、調査員が協議分担して行い、文責は目次に明示した。
- 9 本書に掲載した写真撮影は調査員が行った。
- 10 本書掲載の実測図、出土遺物、写真等は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地)で保管している。

凡 例

- 1 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
(1)遺構図 1/20, 1/30, 1/60
(2)遺物実測図 1/3, 1/4
- 2 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、石器、土製品には断面に斜線を入れた。
- 3 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。
- 4 本報告書における遺構名の内、いくつかのものについては現地調査の段階でつけたものから変更している。報告書においては、新遺構名—(旧遺構名)の順に表示した。
- 5 遺物観察表の色調は「標準土色帖」を参考にした。
- 6 本報告書で用いた土器の分類および編年観は下記の各論文、報告書を参考にした。

松本岩雄「石見地域」『弥生土器の様式と編年—山陰・山陽—』木耳社 1992

島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』1992

大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財 第49集 2000

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(田原)	1
第2章 遺跡の位置と環境	(田原・板倉・川崎)	3
第1節 遺跡の位置		3
第2節 地理的環境		3
第3節 歴史的環境		4
第3章 調査の概要と経過	(田原)	8
第1節 現地調査の概要		8
第2節 現地調査の経過		10
第3節 整理作業の概要		11
第4章 基本層序	(田原)	12
第5章 1区の調査	(田原)	14
第1節 1A区の調査		14
第2節 1B区の調査		19
第3節 1C区の調査		23
第4節 1D区の調査		32
第5節 1F区の調査		49
第6節 1区出土の中世遺物		82
第6章 2区の調査	(田原)	85
第1節 2A区の調査		85
第2節 2C区の調査		97
第3節 2F区の調査		100
第4節 2G区の調査		110
第7章 自然科学分析		115
第1節 立地環境について	(中村)	115
第2節 浜寄・地方遺跡発掘調査に伴うボーリングコア解析から復元される 益田平野の古環境	(山田)	117
第3節 浜寄・地方遺跡発掘調査に伴う花粉分析 およびプラント・オパール分析	(渡辺)	131
第8章 まとめ	(田原)	174

挿 図 目 次

第1図	益田道路建設予定地内の遺跡 (S=1/50,000)	2
第2図	浜寄・地方遺跡の位置	3
第3図	地形概念図	3
第4図	周辺の主な遺跡 (S=1/75,000)	6
第5図	浜寄・地方遺跡周辺図 調査区配置図 (S=1/4,000)	8
第6図	土層概念図 (1区)	12
第7図	土層概念図 (2区)	13
第8図	1 A区 遺構配置図 (S=1/300)	14
第9図	1 A区 土層図 (S=1/80)	15
第10図	1 A区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	16
第11図	1 A区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	17
第12図	1 A区 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	18
第13図	1 B区 遺構配置図 (S=1/300)	19
第14図	1 B区 土層図 (S=1/80)	20
第15図	1 B区 水田跡実測図 (S=1/200)	21
第16図	1 B区 出土遺物実測図 (S=1/3)	22
第17図	1 C区 遺構配置図 (S=1/300)	23
第18図	1 C区 土層図 (S=1/80)	24
第19図	1 C区 土器溜り 1 (1 C-D 1) 実測図 (S=1/20)	25
第20図	1 C区 土器溜り 2 (1 C-D 2) 実測図 (S=1/20)	26
第21図	1 C区 土器溜り 3 (1 C-D 5) 実測図 (S=1/20)	26
第22図	1 C区 土器溜り出土遺物実測図 (S=1/3)	27
第23図	1 C区 水田跡実測図 (S=1/200)	28
第24図	1 C区 溝状遺構 2 (1 C-S D 2) 実測図 (S=1/80)	29
第25図	1 C区 溝状遺構 2 (1 C-S D 2) 出土遺物実測図 (S=1/3)	30
第26図	1 C区 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
第27図	1 D区 建物跡 1・2 (1 D-D 1) 実測図 (1) (S=1/30)	32
第28図	1 D区 遺構配置図 (S=1/300)	33
第29図	1 D区 土層図 (S=1/80)	34
第30図	1 D区 建物跡 1・2 (1 D-D 1) 実測図 (2) (S=1/30)	35
第31図	1 D区 建物跡 1・2 (1 D-D 1) 実測図 (3) (S=1/30)	35
第32図	1 D区 建物跡 1 (1 D-D 1) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	36
第33図	1 D区 建物跡 1 (1 D-D 1) 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	37
第34図	1 D区 建物跡 2 (1 D-D 1) 下層出土遺物実測図 (S=1/3)	38
第35図	1 D区 建物跡 2 実測図 (S=1/60)	38

第36図	1 D区	土器溜り 2 (1 D-D 2) 遺物出土状況図 (S=1/20)	39
第37図	1 D区	土器溜り 2 (1 D-D 2) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	40
第38図	1 D区	土器溜り 2 (1 D-D 2) 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	41
第39図	1 D区	土器溜り 3 (1 D-D 8) 遺物出土状況図 (S=1/20)	42
第40図	1 D区	土器溜り 3 (1 D-D 8) 出土遺物実測図 (S=1/3)	42
第41図	1 D区	出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	44
第42図	1 D区	出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	45
第43図	1 D区	出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	46
第44図	1 D区	出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	48
第45図	1 F区	遺構配置図 (S=1/300)	49
第46図	1 F区	土層図 (S=1/80)	50
第47図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 遺物出土状況図 (S=1/20)	53・54
第48図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	55
第49図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	56
第50図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	57
第51図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	58
第52図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	59
第53図	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2) 出土遺物実測図 (6) (S=1/4)	60
第54図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 遺物出土状況図 (S=1/20)	61
第55図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	62
第56図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (2) (S=1/4)	63
第57図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (3) (S=1/4)	64
第58図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	65
第59図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	66
第60図	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)	67
第61図	1 F区	土器溜り 3 (1 F-D 4) 遺物出土状況図 (S=1/20)	68
第62図	1 F区	土器溜り 3 (1 F-D 4) 出土遺物実測図 (S=1/3)	68
第63図	1 F区	建物跡 1 (1 F-S B 1) 実測図 (S=1/60)	69
第64図	1 F区	畦畔状遺構・溝状遺構 (1 F-S D 1) 実測図 (S=1/100)	70
第65図	1 F区	出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	73
第66図	1 F区	出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	74
第67図	1 F区	出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	75
第68図	1 F区	出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	76
第69図	1 F区	出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	77
第70図	1 F区	出土遺物実測図 (6) (S=1/3)	78
第71図	1 F区	出土遺物実測図 (7) (S=1/3)	79
第72図	1 F区	出土遺物実測図 (8) (S=1/3)	80
第73図	1 F区	出土遺物実測図 (9) 須恵器 (S=1/3)	81

第74図	1区出土 土師器・磁器実測図 (S=1/3)	82
第75図	1区出土 陶器・瓦質土器実測図 (S=1/3)	83
第76図	2A区 遺構配置図 (S=1/300)	85
第77図	2A区 土層図 (S=1/80)	86
第78図	2A区 建物跡1 (2A-SB1) 出土遺物実測図 (S=1/3)	87
第79図	2A区 建物跡1 (2A-SB1) 実測図 (S=1/60)	87
第80図	2A区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	90
第81図	2A区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	91
第82図	2A区 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	92
第83図	2A区 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	93
第84図	2A区 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	94
第85図	2A区 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)	95
第86図	2A区 出土遺物実測図 (7) (S=1/3)	96
第87図	2C区 実測図 (S=1/100)	97
第88図	2C区 出土遺物実測図 (S=1/3)	98
第89図	2F区 遺構配置図 (5層) (S=1/150)	100
第90図	2F区 土層図 (S=1/80)	101
第91図	2F区 建物跡1 (2F-SB1) 実測図 (S=1/60)	102
第92図	2F区 土器溜り 遺物出土状況図 (S=1/20)	103
第93図	2F区 土器溜り (2F-D1, 2F-D2) 出土遺物実測図 (S=1/3)	104
第94図	2F区 土器溜り (2F-D2) 出土遺物実測図 (S=1/3)	105
第95図	2F区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	107
第96図	2F区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	108
第97図	2F区 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	109
第98図	2G区 実測図 (S=1/100)	110
第99図	2G区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	111
第100図	2G区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	112
第101図	調査地周辺の地形	115
第102図	HMY04-1コアの掘削地点	117
第103図	HMY04-1コアの柱状図と堆積年代	119
第104図	HMY04-1コアにおける含水比, および強熱減量の鉛直方向変化	122
第105図	HMY04-1コアにおける全有機炭素 (TOC), 全窒素 (TN), 全硫黄 (TS) 含有量, C/N比, およびC/S比の鉛直方向変化	124
第106図	HMY04-1コアの堆積ユニット区分とその推定堆積環境	128
第107図	等高線図 (調査区の配置)	140
第108図	試料採取地点 (Ib区、Ic区)	141
第109図	1B区No.4地点 (簡易ボーリング) の花粉ダイアグラム	142
第110図	1C区No.1地点の花粉ダイアグラム	143

第111図	B P No. 1 の花粉ダイアグラム	144
第112図	1 B 区No. 1 地点のプラント・オパールダイアグラム	145
第113図	1 B 区No. 2 地点のプラント・オパールダイアグラム	146
第114図	1 B 区No. 3 地点のプラント・オパールダイアグラム	147
第115図	1 C 区No. 1 地点のプラント・オパールダイアグラム	148
第116図	1 C 区No. 2 地点のプラント・オパールダイアグラム	149
第117図	イネ起源プラント・オパールの分布	150
第118図	1 区 (1 B, 1 C, 1 D, 1 F) 2 層遺構状況図 (S = 1/1,000)	176
第119図	1 区 (1 B, 1 C, 1 D, 1 F) 3 層中・4 層上面検出遺構 (S = 1/1,000)	177
第120図	1 区 (1 B, 1 C, 1 D, 1 F) 5 層上面検出遺構 (S = 1/1,000)	178

表 目 次

第1表	益田道路建設予定地内の遺跡一覧表	1
第2表	浜寄・地方遺跡周辺の遺跡	7
第3表	1 A区 出土遺物観察表	153
第4表	1 B区 出土遺物観察表	154
第5表	1 C区 土器溜り 出土遺物観察表	154
第6表	1 C区 溝状遺構2 出土遺物観察表	154
第7表	1 C区 出土遺物観察表	154
第8表	1 D区 建物跡1 (1 D-D1) 出土遺物観察表	155
第9表	1 D区 建物跡1 (1 D-D1) 下層 出土遺物観察表	155
第10表	1 D区 土器溜り2 (1 D-D2) 出土遺物観察表	155
第11表	1 D区 土器溜り3 (1 D-D8) 出土遺物観察表	156
第12表	1 D区 出土遺物観察表	156
第13表	1 F区 土器溜り2 (1 F-D2) 出土遺物観察表	158
第14表	1 F区 土器溜り3 (1 F-D3) 出土遺物観察表	161
第15表	1 F区 土器溜り4 (1 F-D4) 出土遺物観察表	162
第16表	1 F区 出土遺物観察表	163
第17表	1区出土 土師質土器・磁器・陶器・瓦質土器観察表	166
第18表	2 A区 建物跡1 (2 A-SB1) 出土遺物観察表	167
第19表	2 A区 出土遺物観察表	167
第20表	2 C区 出土遺物観察表	170
第21表	2 F区 土器溜り1・2 (2 F-D1, 2 F-D2) 出土遺物観察表	170
第22表	2 F区 出土遺物観察表	171
第23表	2 G区 出土遺物観察表	172

写真図版目次

- 図版 1 浜寄・地方遺跡遠景（上空南から）
浜寄・地方遺跡遠景（上空東から）
- 図版 2 浜寄・地方遺跡 調査前の風景
浜寄・地方遺跡遠景（上空西から）
- 図版 3 1区 調査前の状況
1区 調査前の状況
1A区 トレンチ
- 図版 4 1A区 調査後
1B区 トレンチ
1B区 トレンチ内（4層）遺物出土状況
- 図版 5 1B区 土層
1B区 土層（畦畔）
1B区 水田跡 溝
- 図版 6 1B区 水田跡 畦畔検出状況
1B区 水田跡
- 図版 7 1C区 土器溜り 1（1C-D1）
1C区 土器溜り 2（1C-D2）
1C区 土器溜り 3（1C-D5）
- 図版 8 1C区 溝状遺構 1 検出状況
1C区 溝状遺構 2 水田跡？ 検出状況
1C区 溝状遺構 1 調査後及び水田跡
- 図版 9 1C区 水田跡 畦畔検出状況
1C区 溝状遺構 2
- 図版10 1D区 土層 基本土層（1・2・3層）
1D区 建物跡 1（1D-D1） 遺物出土状況（1）
1D区 建物跡 1（1D-D1） 土層
- 図版11 1D区 建物跡 1（1D-D1） 遺物出土状況（2）
1D区 建物跡 1（1D-D1） 遺物出土状況（3）
- 図版12 1D区 建物跡 1（1D-D1） 遺物出土状況（4）
1D区 建物跡 1（1D-D1） 遺物出土状況（5）
1D区 土器溜り 3（1D-D8） 遺物出土状況
- 図版13 1D区 土器溜り 2（1D-D2） 遺物出土状況
1F区 調査後

図版14	1 F区	土層	
	1 F区	建物跡	
	1 F区	建物跡	
図版15	1 F区	遺物出土状況	
	1 F区	土器溜り 2 (1 F-D 3)	遺物出土状況
	1 F区	土器溜り 3 (1 F-D 4)	遺物出土状況
図版16	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2)	遺物出土状況
	1 F区	土器溜り 1 (1 F-D 2)	遺物出土状況
図版17	2 A区	土層	
	2 A区	遺物出土状況	
	2 A区	建物跡ピット	遺物出土状況
図版18	2 A区	遺構検出状況	
	2 A区	調査後	
	2 A区	建物跡	
図版19	2 C区	調査後	
	2 G区	調査後	
図版20	2 F区	土層	
	2 F区	土器溜り	
	2 F区	土器溜り	
図版21	1 A区	出土遺物 (1)	
	1 A区	出土遺物 (2)	
図版22	1 A区	出土遺物 (3)	
	1 A区	出土遺物 (4)	須恵器
図版23	1 A区, 1 B区, 1 C区	出土遺物	
図版24	1 C区	出土遺物 (土器溜り)	
	1 C区	出土遺物	
図版25	1 D区	建物跡 1・2	出土遺物
図版26	1 D区	土器溜り 2 (1 D-D 2)	出土遺物 (1)
図版27	1 D区	土器溜り 2 (1 D-D 2)	出土遺物 (2)
	1 D区	土器溜り 3 (1 D-D 8)	出土遺物 (外面)
	1 D区	土器溜り 3 (1 D-D 8)	出土遺物 (内面)
図版28	1 D区	出土遺物 (1)	
	1 D区	出土遺物 (2)	
図版29	1 D区	出土遺物 (3)	
	1 D区	出土遺物 (4)	
図版30	1 D区	出土遺物 (5)	
図版31	1 D区	出土遺物 (6)	

- 図版32 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (1)
 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (2)
- 図版33 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (3)
 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (4)
- 図版34 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (5)
- 図版35 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (6)
- 図版36 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (7)
- 図版37 1 F区 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物 (8)
- 図版38 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (1)
 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (2)
- 図版39 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (3)
- 図版40 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (4)
- 図版41 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (5)
- 図版42 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3) 出土遺物 (6)
- 図版43 1 F区 土器溜り 4 (1 F-D 4) 出土遺物 (1)
- 図版44 1 F区 土器溜り 4 (1 F-D 4) 出土遺物 (2)
 1 F区 土器溜り 4 (1 F-D 4) 出土遺物 (3)
- 図版45 1 F区 出土遺物 (1)
 1 F区 出土遺物 (2)
- 図版46 1 F区 出土遺物 (3) (外面)
 1 F区 出土遺物 (3) (内面)
- 図版47 1 F区 土器溜り 3 (1 F-D 3), 土器溜り 2 (1 F-D 2) 出土遺物
- 図版48 1 F区 出土遺物 (4)
- 図版49 1 F区 出土遺物 (5)
- 図版50 1 F区 出土遺物 (6)
- 図版51 1 F区 出土遺物 (7)
- 図版52 1 F区 出土遺物 (8) (外面)
 1 F区 出土遺物 (8) (内面)
- 図版53 1区 出土遺物 (1) 磁器 (外面)
 1区 出土遺物 (1) 磁器 (内面)
- 図版54 1区 出土遺物 (2) 陶器 (外面)
 1区 出土遺物 (2) 陶器 (内面)
- 図版55 2 A区 出土遺物 (1) 弥生土器
 2 A区 出土遺物 (2) 土師器
- 図版56 2 A区 出土遺物 (3) 土師器
 2 A区 出土遺物 (4) 土師器
- 図版57 2 A区 出土遺物 (5) 土師器
- 図版58 2 A区 出土遺物 (6) 須恵器

- 図版59 2 C区 出土遺物 弥生土器, 須恵器
2 G区 出土遺物
- 図版60 2 C区, 2 G区 出土遺物
- 図版61 2 F区 土器溜り 1 (2 F-D 1) 出土遺物
2 F区 土器溜り 2 (2 F-D 2) 出土遺物 (1)
- 図版62 2 F区 土器溜り 2 (2 F-D 2) 出土遺物 (2)
- 図版63 2 F区 出土遺物 (1)
2 F区 出土遺物 (2)
- 図版64 2 F区 出土遺物 (3)
- 図版65 2 F区 出土遺物 (4)
2 F区 出土遺物 (5)

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長690kmの主要幹線道路である。この道路はまた、山陰諸都市間を結ぶ唯一の幹線道路でもあり、経済的・文化的活動に重要な役割を果たしている。

しかし、近年の交通量の増加と沿線の市街化の影響もあり、主に都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生している。このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となっており、その様相は益田市においても例外ではない。さらに益田市においては、一般国道9号及び191号が市内中心部で交差するという地理的要因もあって交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に支障をきたし始めていた。

こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成8年度に建設省（現 国土交通省）により益田道路（延長7.8km、益田市遠田町～須子町）の建設が計画・事業化されることとなった。

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の存否について照会があった。これを受けて、益田市教育委員会の協力のもと、平成10年度に予定地内において遺跡の分布調査が実施されることとなった。分布調査は平成11年3月に実施され、その結果、27ヶ所の遺跡及び遺跡推定地（最終的にはルート上から外れるものを含んでいたため24ヶ所の遺跡及び遺跡推定地）を確認し、建設省に回答した。

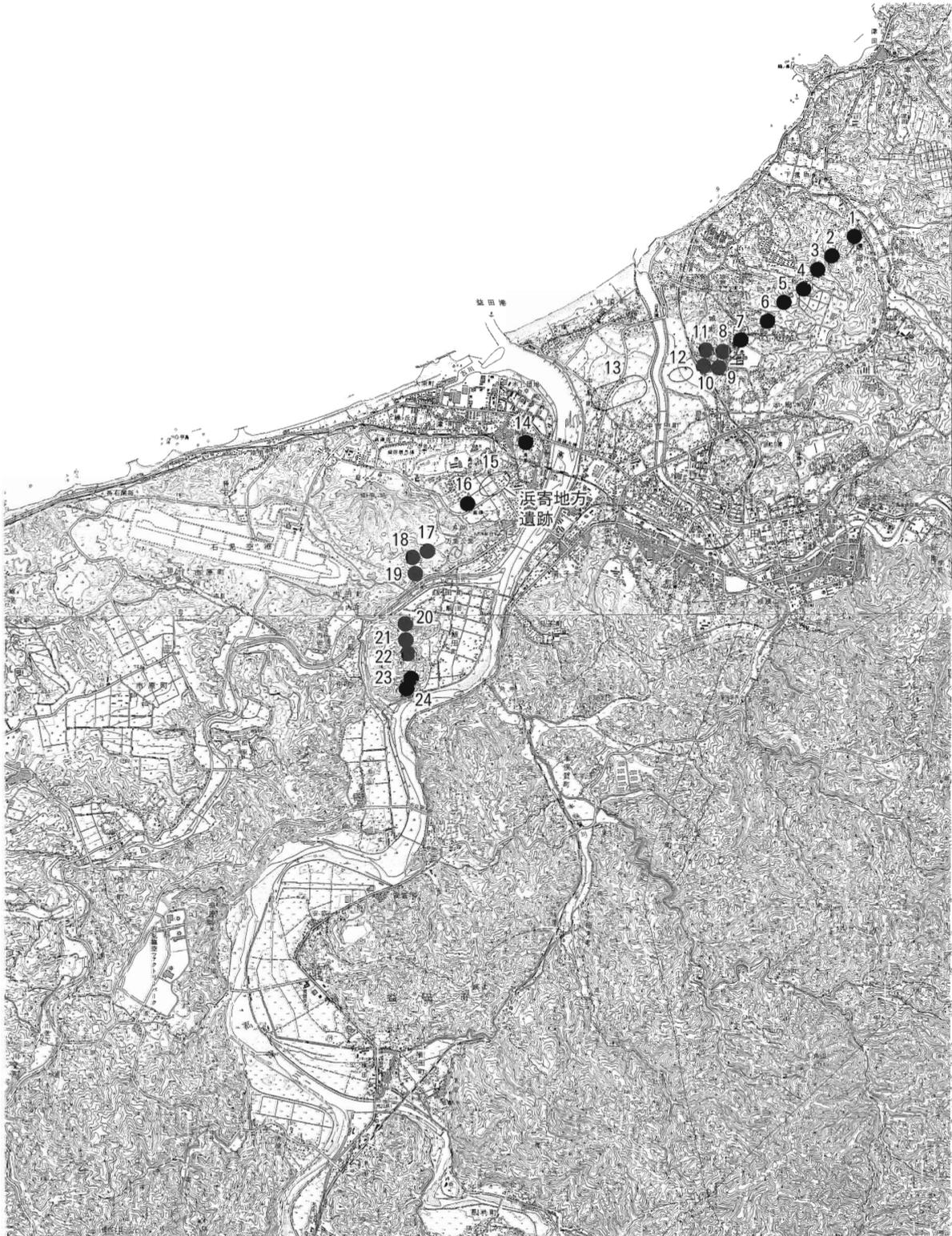
第1表 益田道路建設予定地内の遺跡一覧表

遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代	遺跡総面積(m ²)	施行範囲内面積(m ²)	現 状	調査年度	備 考
1 流松遺跡	益田市遠田町	集落跡		34,900	8,600	水田	平成17年度	
2 流松南遺跡	益田市遠田町	集落跡		7,600	2,200	山林	平成17年度	
3 原浜遺跡	益田市遠田町	古墳及び集落跡	古墳?～	31,000	18,600	山頂・山腹		平坦地 緩斜面 北側に周知の遺跡「尾堤古墳群」が隣接
4 久城西Ⅱ遺跡	益田市久城町		古墳?～	8,300	4,200	山林		尾根上に緩斜面
5 久城西Ⅰ遺跡	益田市久城町			35,400	11,800	山林		H11年夏頃に一部削平される 尾根上に平坦地 緩斜面
6 若葉台遺跡	益田市久城町			14,500				
7 久城東遺跡	益田市久城町	近世の石囲墓 集落跡 散布地	奈良～	23,900	11,200	宅地・畑・墓地		平坦地 遺物表採
8 城角遺跡	益田市久城町	城館跡	中世～	18,600	3,500	宅地		
9 堂ノ上遺跡	益田市久城町			15,900	12,700	宅地・畑		平坦面
10 迫ノ谷古墳群	益田市久城町	古墳(横穴墓) 城館 散布地	古墳～	11,100	2,100	宅地・山林・畑		平坦面 緩斜面 周知の遺跡 須恵器表採
11 専光時胎古墳群	益田市久城町	古墳群 城跡 五輪塔	古墳～	9,700	2,800	山林・墓地		平坦地 周知の遺跡 普月城跡も含む
12 沖手遺跡	益田市中島町	散布地	中世～	80,000	29,700	水田	平成16年度 ～17年度	集落跡
13 幸河原遺跡	益田市沖島町	散布地 仮塚地遺跡	中世～	184,800	47,100	水田・畑・宅地		
14 浜遺跡	益田市高津町	神社跡 散布地	中世～	37,000	14,700	畑・宅地	平成13年度 ～16年度	
15 浜寄・地方遺跡	益田市高津町	散布地 集落跡か	古墳～	118,400	42,200	畑・宅地	平成14年度 ～16年度	水田跡
16 津田遺跡	益田市高津町	散布地	弥生～古墳	45,100	16,400	山林・水田	平成13年度	
17 甘子Ⅰ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	11,200	8,000	山林	平成13年度	建物跡
18 甘子Ⅱ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	13,800	2,800	山林	平成13年度	
19 甘子Ⅲ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	5,800	2,700	山林	平成14年度	建物跡
20 やばらⅠ遺跡	益田市飯田町	近世以降の墓地	古墳・近世～	8,500	2,400	山林・墓地	平成13年度	
21 やばらⅡ遺跡	益田市飯田町	古墳・城館	古墳～	10,200	3,800	山林	平成13年度	
22 じんた遺跡	益田市飯田町		古墳～	18,800	9,100	山林	平成13年度	
23 恵比寿Ⅰ遺跡	益田市飯田町		古墳	7,400	3,900	山林	平成13年度	
24 恵比寿Ⅱ遺跡	益田市飯田町		古墳	8,600	3,800	山林	平成13年度	

※網かけは調査の終了した遺跡

以後、この結果をもとに建設省と島根県教育委員会との間で協議が適時行われ、予定地内遺跡の埋蔵文化財発掘調査について具体的に検討が行われた。

その結果、平成13年度から予定地内遺跡の現地調査を開始することとなり、平成13・14年度には飯田町地内8遺跡の調査を実施した。平成14年度には同じく工事の先行する高津町地内の浜寄・地方遺跡においても、調査を行う上での環境が整ってきたため9月より実施することとなった。



第1図 益田道路建設予定地内の遺跡 (S = 1/50,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

浜寄・地方遺跡は益田市高津（浜寄・地方）に所在する遺跡である。遺跡は、中国山地に源を發し日本海に向けて北流する高津川と日本海に沿って形成された広大な砂丘、そして南西に広がる低丘陵に囲まれた低地に、広範囲にわたって展開している。周辺には柿本人麻呂をまつた柿本神社や万葉公園、県立自然公園蟠竜湖などが存在しており、ここを訪れる観光客も多い。

第2節 地理的環境

（概況）益田市は島根県の西部、山口県との県境に位置する、人口約53,000人の地方都市である。現在でもJR山陰線と山口線、国道9号線と191号線の分岐点となり、広島・山口へ通じているように、その地理的位置により古くから広島県・山口県との結びつきが強く、民俗・文化や風土の面でも県東部とは異なった様相を見せている。

（地形）益田市は北部の平野部（益田平野）とそれを取り囲むようにある周辺の丘陵部・山間部からなっている。益田平野は美都・匹見町境の春日山に源を發して北流する益田川と、六日市町（現吉賀町）に源を發し、支流の津和野川・匹見川を合わせながら北流する高津川的作用によって形成された複合三角州であり、石見部で最大の規模を誇る平野である。これまでの研究によれば、約6,000年前までは「古益田湖」と称される湖が広がっていたものが、両河川による堆積作用の結果徐々に陸化していったと考えられている。⁽¹⁾ 平野の東側と南側は丘陵部で、中国山脈から伸びる支脈の先端部にあたり、東側の丘陵を開削している沖田川・津田川・遠田川の周辺には小規模な氾濫源や河岸段丘が見られる。また平野の北西側は海岸の砂が季節風によって吹き上げられた浜堤を形成し、南側は標高400m級の山々が連なり中国山地の中でも高い地点となるなど、変化に富んだ地形となっている。



第2図 浜寄・地方遺跡の位置



第3図 地形概念図

第3節 歴史的環境

石見部で最大規模の平野を有する益田市及びその周辺では、数多くの遺跡の存在が知られている。本節ではそれらのうち、旧益田市域⁽²⁾に存在する遺跡で代表的なものを取り上げて記述することを基本に、一部旧美都町・匹見町の状況にも触れることとしたい。

旧石器時代

現在までのところ旧石器時代に関する遺跡や遺物は確認されていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、安富王子台遺跡、三宅御土居跡、土居後遺跡など数カ所で確認されているものの多くはない。安富王子台遺跡は高津川中流域にあり、縄文後期から晩期にかけての土器や石器など多くの遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、安富王子台遺跡、羽場遺跡、井元遺跡、松ヶ丘遺跡、サガリ遺跡など十数カ所が知られている。縄文時代の遺跡の数からかなり増加しており、人々がこの地に広く住み始めたことを窺わせている。本格的に調査が行われた遺跡は少ないが、安富王子台遺跡の北側に位置する羽場遺跡からは、長さ50mにも及ぶV字形の大型の溝(環濠)が確認されている。遺構内からは突帯文や櫛描文など装飾に富んだ中期の土器が大量に出土しており、規模の大きな集落が存在したと考えられている。

古墳時代

古墳時代に入るとさらに遺跡数も増加する。古墳は石見の中では最も多く築かれていると考えられ、また大型古墳も早い時期から造られている。主要なものとしては、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳(前期)、全長89mを測り前期では県内最大規模の前方後円墳・大元1号墳(前期)、埴輪列や葺石を伴い二段築成の墳丘をもつスクモ塚古墳(中期)、墳丘長52mで周囲に周濠と外堤を持ち、馬具等も出土した小丸山古墳(後期)、50基以上の古墳で構成された鶴ノ鼻古墳群(後期)などがある。横穴墓も多く造られており、北長迫・南長迫両横穴墓群では合わせて50基近くが確認されている。

これらの古墳は、市内南西部にある横穴式石室を持った白上古墳を除けば、基本的に益田平野の東から南にかけての丘陵に築かれており、現状では東半分には偏在する傾向にある。しかし近年、高津川左岸地域においても一基のみではあるが横穴墓が確認されていることから、市内西側においても存在している可能性が考えられるようになってきている。こうした古墳の築造と不可分の関係をもつ集落については、これまでのところほとんど明らかになっていないが、それ以外のものとしては、市内北東部で後期の須恵器窯(芝窯跡・中塚窯跡など)がまとまって確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、大溢遺跡、庄屋東遺跡、サガリ遺跡、石塔寺権現経塚などが知られているが、数は少ない。大溢遺跡は日本海に面した丘陵にある遺跡で、建物跡のほか製塩土器や須恵器がまとまって出土している。また石塔寺権現経塚からは中国製褐釉四耳壺を含む優品が出土している。

鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺跡は、七尾城跡、三宅御土居跡、中世今市船着場跡などこの時代に活躍した

益田氏と関わるものを中心に多く知られている。七尾城跡は、益田平野の南東の丘陵に位置し、本丸跡や二の段の主郭部分を中心に曲輪や土塁等の防御施設を持ち、戦国時代の前期の山城として稀にみる整った構えを残している。瓦や土師器のほか、貿易陶磁器や天目茶碗など多種多様なものも多量に出土している。三宅御土居跡は、七尾城跡から約700mの距離にあり、益田川の対岸に位置している。戦国期の地方豪族の居館として、堀と大規模な土塁で守られた東西約185mに及ぶ屋敷跡で、多様な遺物も出土しており、益田氏の強い軍事力・経済力が窺える。このほか大谷土居跡や上久々茂土居跡など、城館跡だけでも50カ所近くが残っている。

市内には、雪舟作の庭園を持つ医光寺・万福寺、益田氏の菩提寺である妙義寺など、関連する多くの社寺なども存在し、全体として中世に関連した史跡の割合が高い。

江戸時代以降

江戸時代以降の遺跡としては、仁右エ門山遺跡や相生遺跡など瓦や日常雑品などを焼いた石見焼窯跡が認められる。また磁器を焼いた白上焼の窯跡も知られている。

註

(1) 林 正久「益田平野の古地理の変遷」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会 2000

(2) 平成16年10月 美都・匹見両町と合併

(主要参考文献)

矢富熊一郎『益田市史』

益田市誌編纂委員会『益田市誌』上巻

益田市教育委員会『安富王子台遺跡発掘調査概報』1981

益田市教育委員会『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報』1984

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅰ』1986

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅱ』1987

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅲ』1988

益田市教育委員会『小丸山古墳発掘調査報告書』1990

益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅰ』1991

益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅰ－勝達寺・七尾城跡一』1993

益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅱ』1994

益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅲ』1995

益田市教育委員会『益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996

益田市教育委員会『七尾城跡・三宅御土居跡－益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』1998

益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』2000

益田市教育委員会『身近なまちづくり支援街路事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う暁音寺発掘調査概要報告書』2001

益田市教育委員会『自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う浜寄遺跡発掘調査報告書』2002

益田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』2003

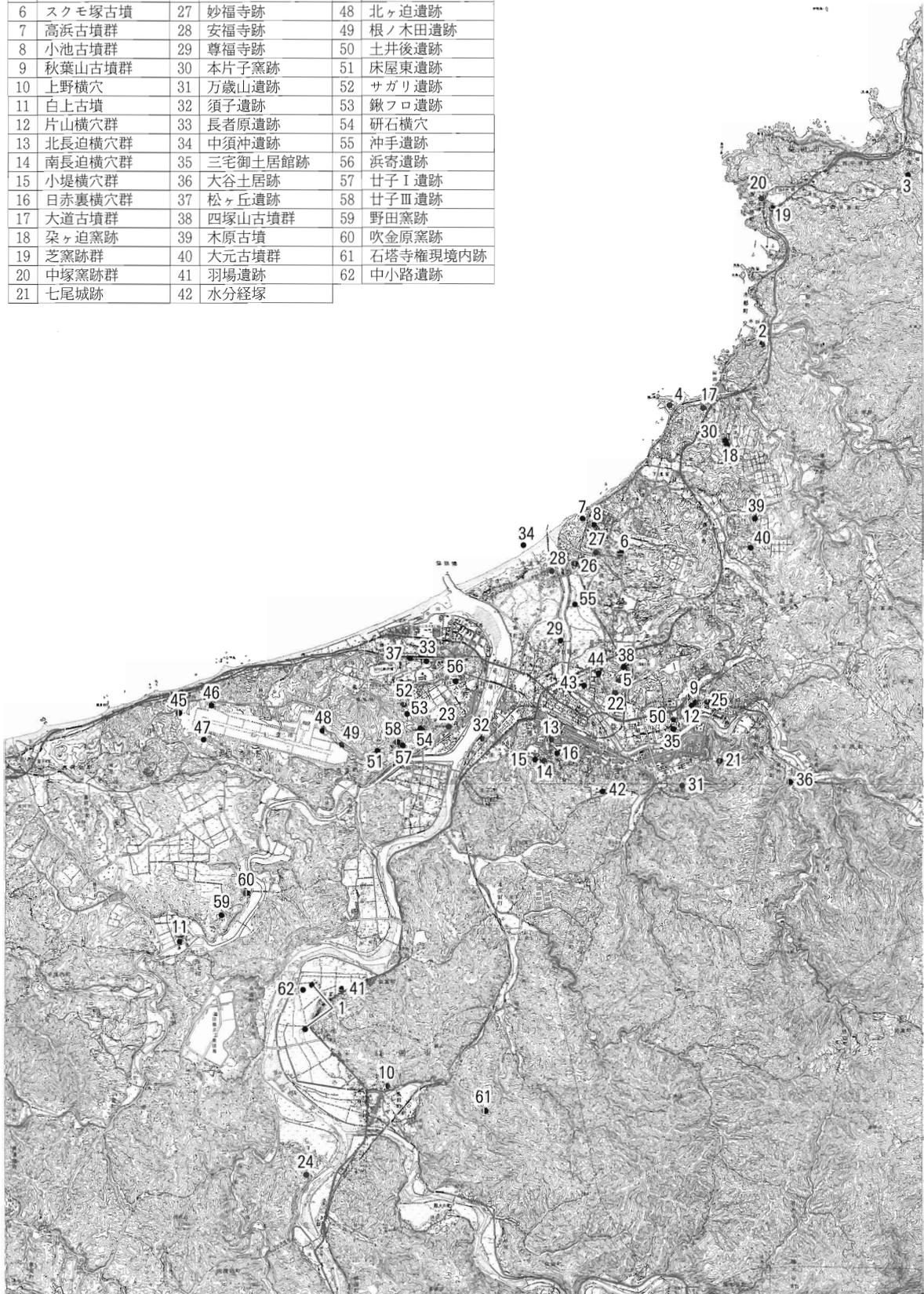
益田市教育委員会『中小路遺跡－平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』2004

益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅱ』1992

島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』1992

島根県教育委員会『上久々茂土居跡・大峠遺跡』1994

1	安富遺跡	22	嵩ヶ松城跡	43	日赤敷地遺跡
2	井元遺跡	23	高津城跡	44	中世今市船着場
3	鎌手丸山古墳	24	向横田城跡	45	大溢遺跡
4	鶴ノ鼻古墳群	25	勝達寺跡	46	仁右エ門山遺跡
5	小丸山古墳	26	真如坊跡	47	相生遺跡
6	スクモ塚古墳	27	妙福寺跡	48	北ヶ迫遺跡
7	高浜古墳群	28	安福寺跡	49	根ノ木田遺跡
8	小池古墳群	29	尊福寺跡	50	土井後遺跡
9	秋葉山古墳群	30	本片子窯跡	51	床屋東遺跡
10	上野横穴	31	万歳山遺跡	52	サガリ遺跡
11	白上古墳	32	須子遺跡	53	鍬フロ遺跡
12	片山横穴群	33	長者原遺跡	54	研石横穴
13	北長迫横穴群	34	中須沖遺跡	55	沖手遺跡
14	南長迫横穴群	35	三宅御土居館跡	56	浜寄遺跡
15	小堤横穴群	36	大谷土居跡	57	竹子I遺跡
16	日赤裏横穴群	37	松ヶ丘遺跡	58	竹子II遺跡
17	大道古墳群	38	四塚山古墳群	59	野田窯跡
18	朶ヶ迫窯跡	39	木原古墳	60	吹金原窯跡
19	芝窯跡群	40	大元古墳群	61	石塔寺権現境内跡
20	中塚窯跡群	41	羽場遺跡	62	中小路遺跡
21	七尾城跡	42	水分経塚		



第4図 周辺の主な遺跡 (S=1/75,000)

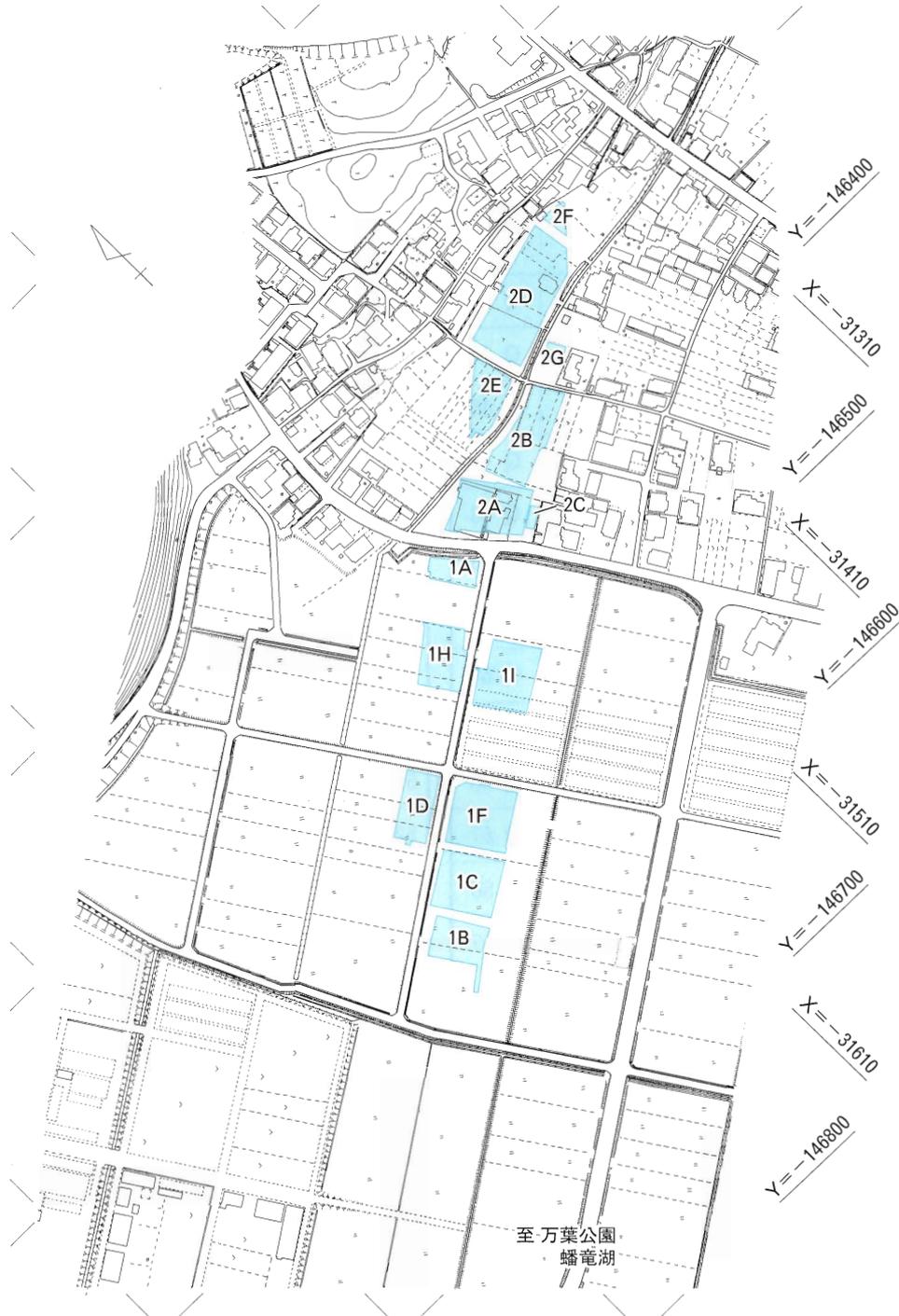
第2表 浜寄・地方遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	備考	遺跡地図
1	安富遺跡	散布地		Q 1
2	井元遺跡	散布地		Q 2
3	鎌手丸山古墳	古墳		Q 3
4	鶴ノ鼻古墳群	古墳		Q 9
5	小丸山古墳	古墳		Q 17
6	スクモ塚古墳	古墳		Q 24
7	高浜古墳群	古墳		Q 26
8	小池古墳群	古墳		Q 27
9	秋葉山古墳群	古墳		Q 32
10	上野横穴	横穴		Q 38
11	白上古墳	古墳		Q 39
12	片山横穴群	横穴		Q 44
13	北長迫横穴群	横穴		Q 46
14	南長迫横穴群	横穴		Q 47
15	小堤横穴群	横穴		Q 48
16	日赤裏横穴群	横穴		Q 49
17	大道古墳群	古墳		Q 51
18	朶ヶ迫窯跡	窯跡		Q 54
19	芝窯跡群	窯跡		Q 55
20	中塚窯跡群	窯跡		Q 56
21	七尾城跡	城跡		Q 57
22	鷹ヶ松城跡	城跡		Q 58
23	高津城跡	城跡		Q 67
24	向横田城跡	城跡		Q 77
25	勝達寺跡	寺院跡		Q 90
26	真如坊跡	寺院跡		Q 91
27	妙福寺跡	寺院跡		Q 92
28	安福寺跡	寺院跡		Q 93
29	尊福寺跡	寺院跡		Q 94
30	本片子窯跡	窯跡		Q 99
31	万歳山遺跡	散布地		Q100
32	須子遺跡	散布地		Q106
33	長者原遺跡	散布地		Q107
34	中須沖遺跡	鏡出土地		Q115
35	三宅御土居館跡	館跡		Q136
36	大谷土居跡	館跡		Q137
37	松ヶ丘遺跡	散布地		Q142
38	四塚山古墳群	古墳		Q143
39	木原古墳	古墳		Q145
40	大元古墳群	古墳		Q149
41	羽場遺跡	散布地		Q150
42	水分経塚	経塚		Q153
43	日赤敷地遺跡	散布地		Q191
44	中世今市船着場	その他		Q200
45	大溢遺跡	集落跡		Q204
46	仁右エ門山遺跡	窯跡		Q205
47	相生遺跡	窯跡		Q206
48	北ヶ迫遺跡	窯跡		Q207
49	根ノ木田遺跡	散布地		Q208
50	土井後遺跡	散布地		Q215
51	床屋東遺跡	散布地		Q258
52	サガリ遺跡	散布地		Q259
53	鎌フロ遺跡	散布地		Q260
54	研石横穴	横穴墓		Q261
55	沖手遺跡	散布地		Q271
56	浜寄遺跡	散布地		Q274
57	廿子Ⅰ遺跡	集落跡他		Q283
58	廿子Ⅲ遺跡	集落跡他		Q285
59	野田窯跡	窯跡		Q318
60	吹金原窯跡	窯跡		Q320
61	石塔寺権現境内跡	神社跡		Q342
62	中小路遺跡	集落跡		

第3章 調査の概要と経過

第1節 現地調査の概要

今回の調査は、遺跡のほぼ中央を東西に貫くように計画された益田道路の建設に先立って行われたものである。したがって調査対象となるのは益田道路建設予定地内の42,200㎡についてであるが、実際の調査範囲は確認調査の結果をもとに絞り込んでおり、これよりも少ない。



第5図 浜寄・地方遺跡周辺図 調査区配置図 (S=1/4,000)

調査は、平成14年9月の開始から平成16年12月の終了まで約2年4ヶ月にわたって行われた（詳細は第2節参照）。

本調査は、工事主体である国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所と適時協議を行いながら実施した。また、調査の成果については現地説明会・発掘調査だより『石見路の言伝』等により周辺住民の方々に公開したほか、広く市民にも還元するため、益田市立歴史民俗資料館において「調査速報展」も開催している。

調査を実施するにあたってはできる限り面的に行うことを基本としたが、工事工程その他の諸条件が必ずしもそれに合致しないこともあり、全体を浜寄側（2区）、地方側（1区）の2つの大調査区に分け、さらにそれを7と9の小調査区（計16の調査区）に分割して行うこととなった（第5図）。

また、調査対象地隣接部分では、水田耕作が行われている場所に近い調査区や民家に隣接している調査区もあったことから、用地境から3～5m前後の控地を設定して掘削を行った。

その結果、1区からは水田跡や建物跡のほか弥生時代から江戸時代に至る多くの遺物を、また2区からは建物跡や溝状遺構（流路跡）のほか同じく弥生時代から江戸時代に至る多くの遺物を検出した。

なお、浜寄・地方遺跡では、益田道路建設本体工事以外にもそれに関連してさまざまな事業が実施されたが、それらに関連した調査については、益田市教育委員会によって行われ、既に調査成果も公表されている。



発掘調査だより『石見路の言伝』

第2節 現地調査の経過

調査は平成14年度に1 A・1 B・1 C・1 D・2 Aの各調査区、平成15年度に1 C・1 F・2 B・2 Dの各調査区、平成16年度は残る1 H・1 I・2 C・2 D・2 E・2 F・2 Gの各調査区で実施した。これらの調査の経過について、主に本報告に関わる部分を中心に概略を記す。

平成14年度

- 9月2日 調査開始
- 中旬 1 A区より調査を開始
順次1 B区・1 D区の調査にかかる
- 下旬 1 B区において水田跡検出
- 10月30日 山崎純男氏による調査指導（水田跡）
- 31日 田中義昭氏による調査指導（水田跡、出土遺物）
- 11月16日 現地説明会開催（150名の見学者）
- 12月5日 1 B区プラント・オパール分析及び簡易ボーリングによる資料採取（文化財調査コンサルタント）
- 1月31日 14年度現地調査終了（1 C区は翌年度継続調査）



作業風景

平成15年度

- 4月8日 1 C区調査開始
- 13日 1 C区畦畔検出
- 5月28日 田中義昭氏による調査指導（水田跡）
- 6月4日 1 C区・1 B区空撮・現地説明会
- 5日 1 F区調査開始
- 16日 中村唯史氏による調査指導（地質）
- 23日 1 C区プラント・オパール採取（文化財調査コンサルタント）
- 7月5日～ 益田道路発掘調査展開催（益田市立歴史民俗資料館）
- 7月7日 益田養護学校地域交流学習による遺跡発掘体験
- 7月8日 益田公民館講座

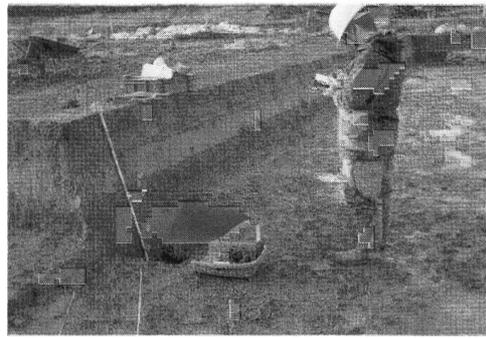


水田跡検出状況



調査指導

- 16日 1 C区プラント・オパール分析資料採取
(文化財調査コンサルタント)
- 8月7日 1 F区調査終了
- 18日 2 D A区調査開始
- 9月29日 高齢者大学発掘体験
- 1月28日 田中義昭氏による調査指導(検出遺構・出土遺物)



プラント・オパール採取作業状況

平成16年度

- 4月 2 D区調査再開
- 5月26日 高津中学校 発掘体験学習
- 5月27日 地方自治会長現地見学
- 6月1日 山田和芳氏による調査指導
- 7月3日 「平成15年度発掘調査速報展」開催
(益田市立歴史民俗資料館)
- 23日 2 F区調査開始
- 30日 国土交通省浜田河川国道事務所職員現地
視察
- 31日 2 D区空撮
- 8月3日 2 F区、2 C区、2 G区掘り下げ
- 28日 現地説明会開催
- 9月9日 調査終了



調査指導

第3節 整理作業の概要

整理作業及び報告書の作成は、平成17年度に行った。注記作業と種別ごとの分類については、可能な限り現地調査と平行して行っており、以下の整理作業を実施した。

出土遺物は主に土器類(磁器・陶器を含む)で、未注記のものについては注記を行い、注記済みの遺物から器種ごとに分類し、接合作業を行った。接合したもののうち補強が必要なものについては補強剤を用いて補強を施し、復元可能なものについては復元作業を行った。

実測にあたっては、小破片であったり器種が不明であったりするもの以外は、特徴的なものの抽出を行い、それらについて基本的に実測を行うこととしたが、時間の関係上それらすべての実測には至っていない。また特徴的な文様や調整を施したもの、実測図において明確に表現できないものなど数点については拓本をとった。完成した実測図については、トレース作業を行い、実測が終了した遺物については実測番号を付し、調査区ごとに遺物観察表を作成した。

実測を終えた時点で、完形もしくは接合、復元できたもの、あるいは特徴的なものについては、必要に応じて写真撮影を行った。

上記の一連の作業を終えた遺物については、最終的に実測台帳に記載し、收藏した。

第4章 基本層序

基本層序

ここでは浜寄・地方遺跡で確認された基本的な層序について述べたい。

本遺跡における層序は、調査区の分断に伴いそれぞれの層の関連が不明確な部分も存在するものの、以下のとおりと考えられる。以下、主な土色、出土遺物の傾向について、上層より基本1層、基本2層の順に概略を記す。なお、浜寄側と地方側とでは基本的な層序に違いが見られることから、ここではそれぞれに分けて記述することとする。

—地方側（1区）の基本層序—

1区の基本層序は以下のとおりである。ただし、1A区についてはその状況が若干異なっており該当しない。

基本1層—主に灰色系の粘質土

約30～40cmほど堆積している。色調の違いから上層（現在の水田耕作土）と下層（圃場整備以前の層か）とに分層が可能である。肥前系の陶器・磁器類及びそれ以降のものが出土しており、近世～現代にかけての層と考えられる。基本的に1層については重機により掘削した。

基本2層—主に灰白色系の粘質土

約20～30cmほど堆積している。キメの細かい砂を含んでおり、過去の洪水に由来すると考えられる層である。奈良・平安～近世にかけての遺物が出土しているが、中世前半までの遺物の割合が高く、そうした時期の層と判断される。

基本3層—主に黒色系の土

約20～30cmほど堆積している。2層に比べかなり黒味がかっており、土壌化を窺わせている層である。3層からは弥生時代～古墳時代にかけての遺物が出土しているが、特に古墳時代の遺物が多く出土している。

基本4層—主に灰色系の砂

約10～20cmほど堆積している。この層も過去の洪水に由来する層と考えられる。なお、1C・1D区ではこの層の存在が確認できない場所も存在した。基本的に4層からは遺物が出土していない。

基本5層—主に黄色系の土

約10～15cmほど堆積している。上面では酸化マンガンや鉄分の沈着が見られる。後述する水田検出面にあたる。なお、1F区ではこの層の存在が確認できない場所も存在した。5層以下の層については遺構・遺物とも検出されなかったため調査を行っていない。

基本1層 主に灰色系の粘質土
基本2層 主に灰白色系の粘質土
基本3層 主に黒色系の土
基本4層 主に灰色系の砂
基本5層 主に黄色系の土
基本6層 主に暗褐色系の土
基本7層 主に黄褐色系の土
基本8層 粘土

第6図 土層概念図（1区）

これより以下は基本的に6層（暗褐色系の土）、7層（黄褐色系の土）と続き、標高1.1m地点で非常に粘性の強い層となる。

—浜寄側（2区）の基本層序—

2区の基本層序は以下のとおりである。

基本1層—主に褐色系の土

約20cm堆積している。肥前系の陶器・磁器類及びそれ以降のものが出土しており、近世～現代にかけての層と考えられる。調査前は畑などとして利用されていた。基本的に1層については重機により掘削した。

基本2層—主に暗褐色系の土

最大で20cmほど堆積している。ところどころに小礫を含む層で、中世～近世にかけての遺物が出土しているが、中世の遺物の割合が高く中世頃の層と判断される。

基本3層—主に暗褐色系の土

最大で20cmほど堆積している。ところどころに小礫を含む層で、中世～近世にかけての遺物が出土している。2層同様中世の遺物の割合が高く中世頃の層と判断される。なお2層・3層は、調査当初土色の違いから別のものとして認識していたが、両層に大差はなくほぼ同時代と考えられる。以下、2区においては2・3層として記す。

基本4層—主に灰色系の砂質土、礫、砂

約50～60cmほど堆積している。過去の洪水に由来すると考えられる層で、礫と砂から構成される。場所によっては約1m堆積しているところもあった。主に古墳時代～平安時代にかけての遺物が出土している。

基本5層—主に黒褐色系の砂質土

約20～30cmほど堆積している。キメの細かな砂質状の土で、土壌化がやや進んだ状況を示す層である。古墳時代の遺物を多く含むが、須恵器は認められず、基本的に古墳時代前期から中期にかけての層と判断できる。

基本6層—主に黒色系の土

約10～20cmほど堆積している。調査当初は1つの別の層と判断していたが、実際には流路跡を覆う埋土部分に相当する。年代的には5層とあまり大差のない層と判断できる。

以上1区・2区における基本的な層序について概要を示したが、実際には細部がそれぞれに異なっている。したがって、それぞれの調査区における土層については別途掲載している。

基本1層 主に褐色系の土
基本2層 主に暗褐色系の土
基本3層 主に暗褐色系の土
基本4層 主に灰色系の砂質土、礫、砂
基本5層 主に黒褐色系の砂質土
基本6層 主に黒色系の土
基本7層 礫層

第7図 土層概念図（2区）

第5章 1区の調査

1区は1A～1Iまでの調査区に分かれるが、本報告書では1A・1B・1C・1D・1Fの各調査区について報告する。なお、中世の遺物については一定量が認められたが全体からすればわずかであったため、第6節において一括して扱うこととする。

第1節 1A区の調査

概要

1A区は調査対象地のほぼ中央付近に設定した調査区である。市道蟠竜湖高津線の西側にあり、浜寄と地方の境付近になる。

本調査区の土層は第9図のとおりである。調査では、水田耕作土の層である第1層を重機で取り除いた後、第2層から掘削を開始し3層途中まで掘り下げたが、これより下は遺物を含まない砂層が続くと判断したため、以下の調査を行っていない。しかしながら、次年度に行った2D区の調査から判断すると、砂層下に遺物包含層が存在した可能性は高い。後述する出土遺物の状況なども勘案すると、2層が2区の基本2層・3層に相当し、3層が2区の基本4層に相当すると判断されるが、その可能性にとどめておく。

2層上面及び3層上面において遺構の検出を行ったが、顕著な遺構は検出されなかった。また遺物は2層と3層の境付近から多く出土した。

検出遺構とそれに伴う遺物

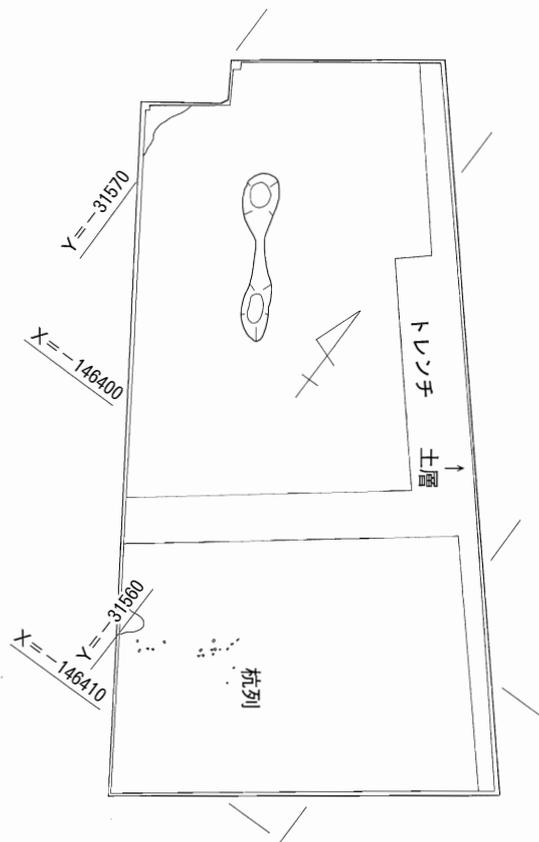
先述のとおり、顕著な遺構は確認されなかった。なお、調査区の南東側において杭列が確認されているが、水田耕作土直下で検出されており近世以降のものと想定される。

遺構に伴わない遺物

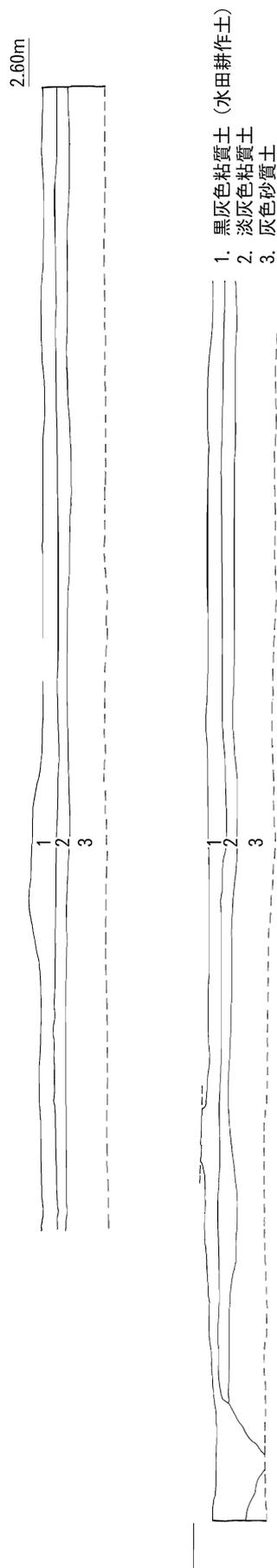
出土した遺物は弥生土器、土師器、須恵器などであるが、古墳時代後期～奈良・平安時代にかけての遺物が多く見られる。層位的に分けることが難しいので、以下まとめて記載することとする。

第10図

1は弥生土器で甕または壺の底部と考えられる。器面は摩滅しているものの、外面・内面とも指頭痕が観察できる。2は土師器環と考えられるものである。内



第8図 1A区 遺構配置図 (S=1/300)



第9図 1A区 土層図 (S=1/80)

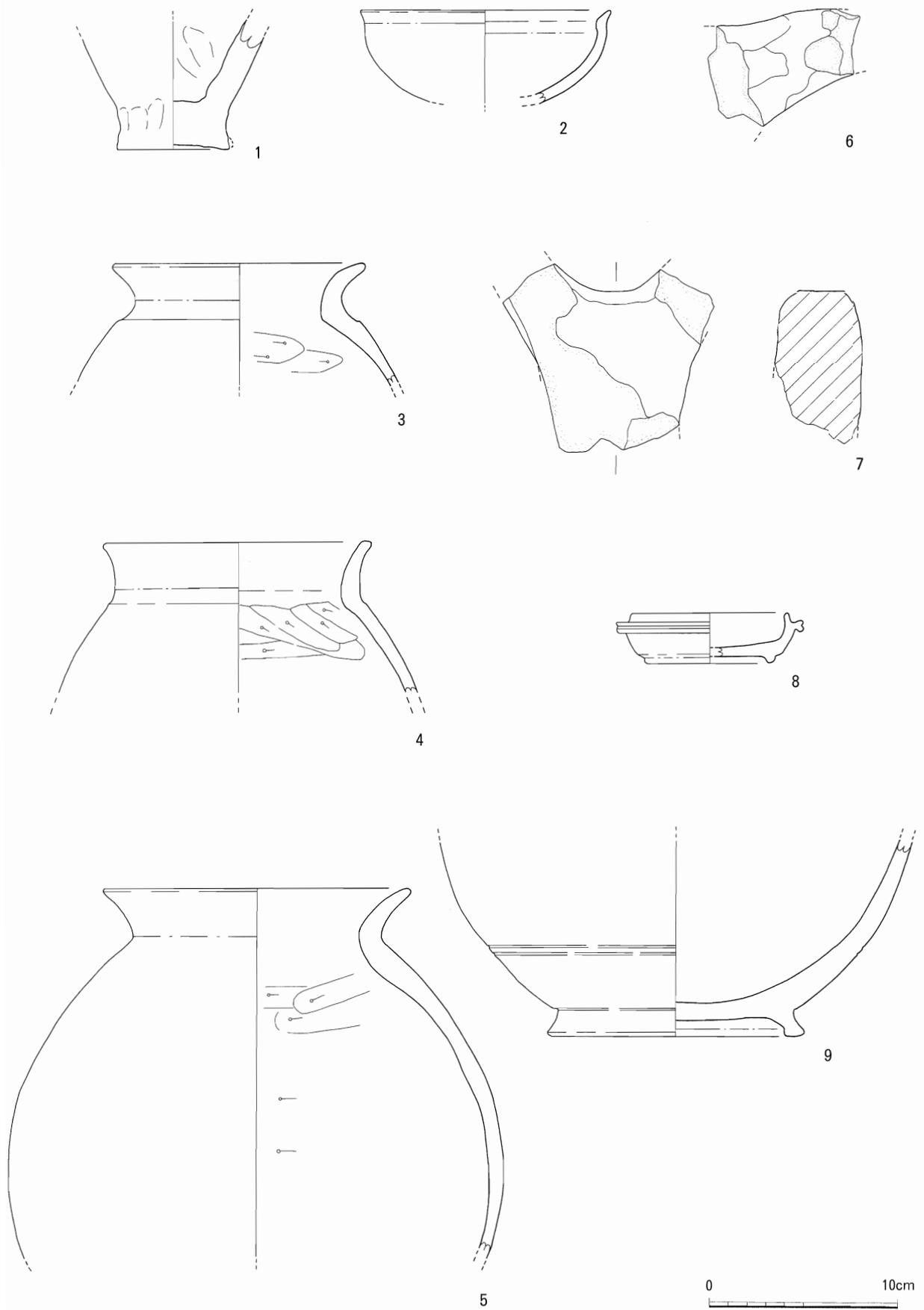
湾しながら立ち上がり、端部は外方に屈曲する。風化が激しく調整は不明である。3～5は土師器甕である。いずれも単純口縁のもので、外反しながら立ち上がる口縁部を持ち、体部が張り出す形のものと考えられる。3は頸部が強く撫でられており、段状になっている。5は球状に張る胴部を持つもので、口径は16.0cmを測る。6・7は土製支脚である。7は胴部のみ出土であり、全形は明らかでないが、二又のものと考えられる。8は合子の可能性が高いが不明。あまり類例を見ないものである。9は土師器の短頸壺または鉢と考えられるものである。外面には2条の沈線がめぐり、赤色顔料が認められる。

第11図

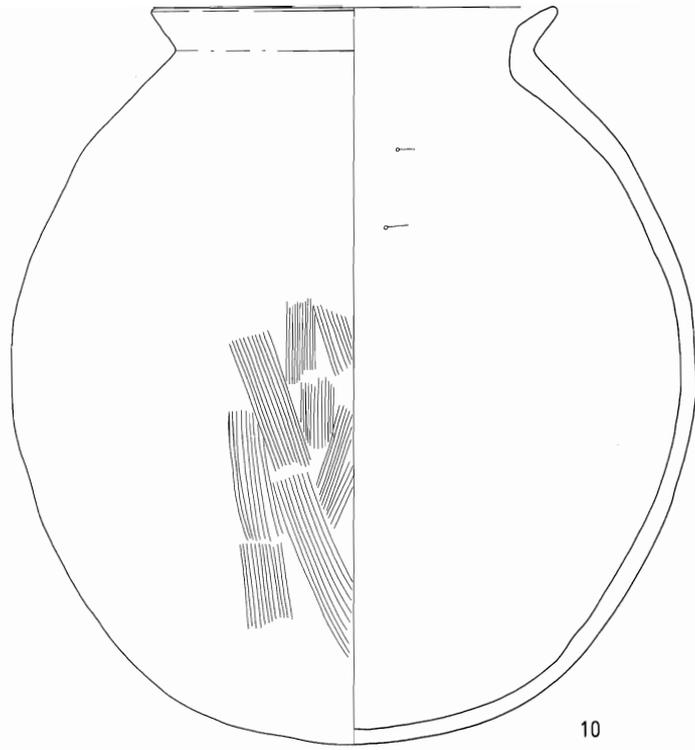
10・11とも土師器甕である。10は短い口縁部、11はやや長めの口縁部を持つもので、ともに胴部は張り、球状である。風化等によりわかりにくいものの外面にはハケメが観察できる。

第12図

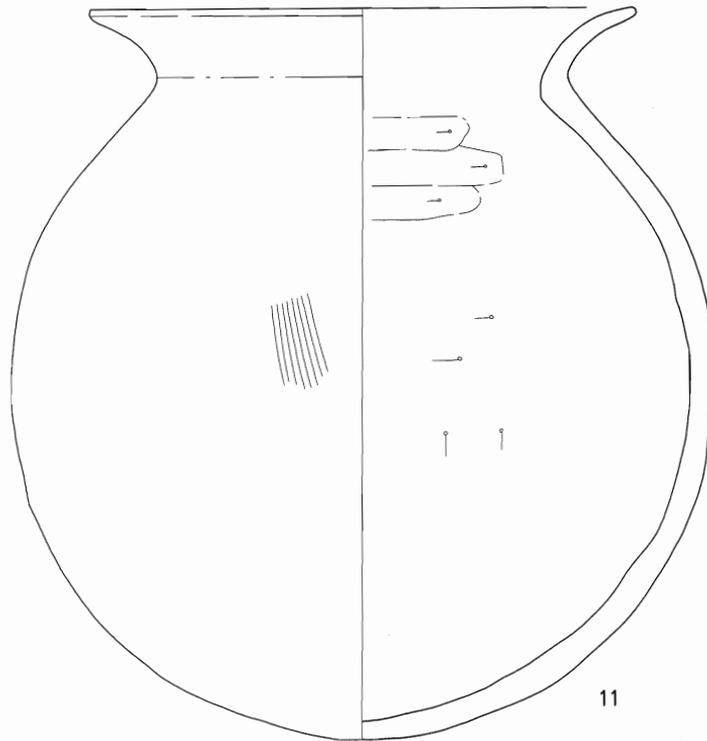
全て須恵器である。12・13は坏。体部下半にヘラケズリが行われるが、12の底部は板目状の条痕が見られる。14・15は蓋。輪状のつまみを有する。16～21は高台を持つ坏である。19は皿の可能性もあるもので、厚みのある底部を持ち、底部と体部との境に高台が付く。20・21は直線的に伸びる体部を持つものである。22は高台の付かない坏。この形態の坏は、1A区からはあまり確認されていない。24・25は椀と考えられるもの。25には胴部に2条の沈線が描かれる。26・27は高坏である。26は外面にカキメが顕著に見られる。28～30は甕と考えられるものである。29には櫛状工具による波状文、30にはヘラ描きによると考えられる波状文が施される。31は短頸壺等の底部と考えられるもので、やや足高の高台を伴う。32は壺の底部と判断される。



第10图 1A区 出土遺物実測図(1) (S=1/3)



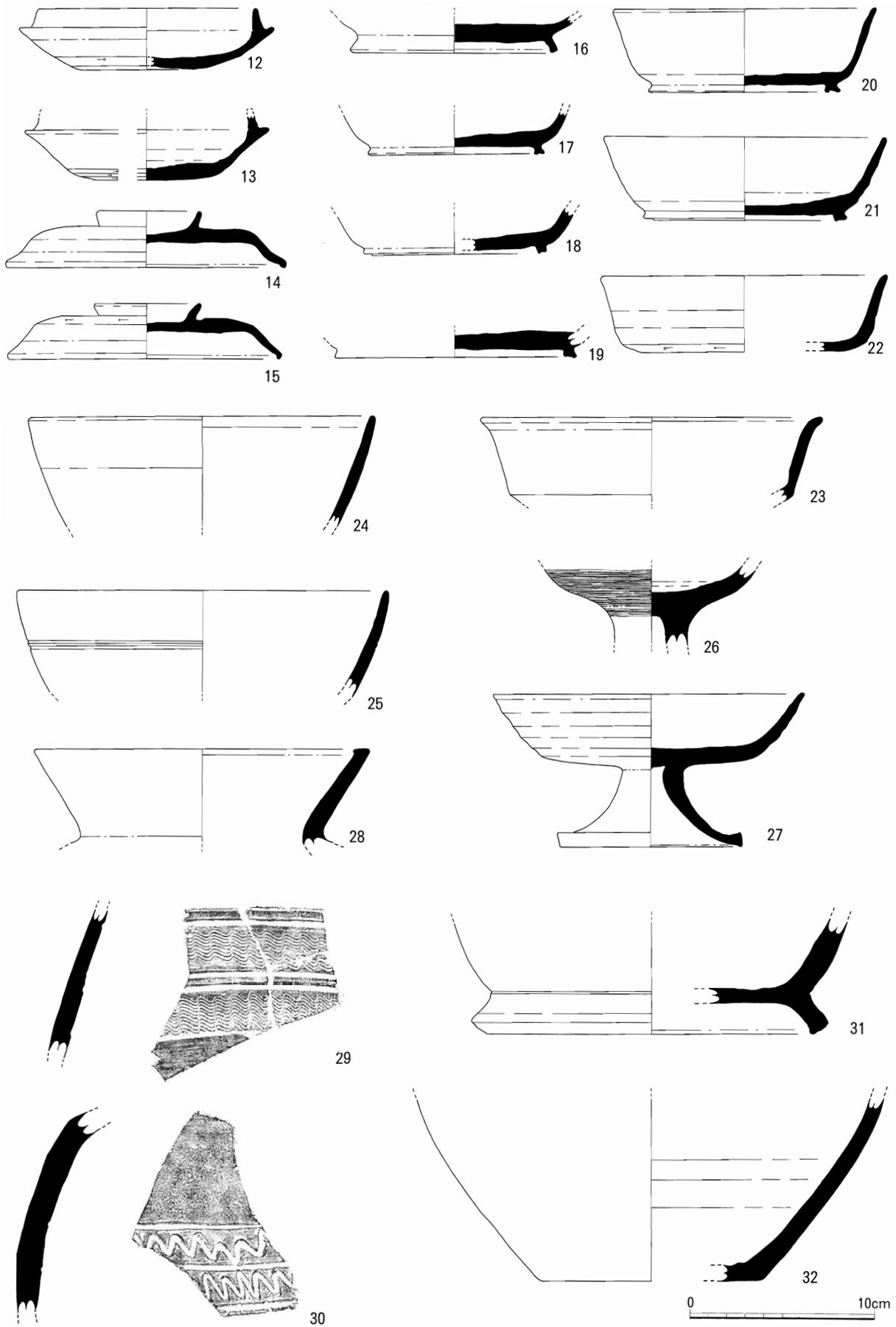
10



11



第11图 1 A区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



第12图 1A区 出土遺物実測図(3) (S=1/3)

第2節 1B区の調査

概要

1B区は、トレンチ調査の際に弥生土器（第16図-1）が出土したことにより設定した調査区で、今回調査を行ったもののうち最も南西側にある。調査前は水田として利用されていた。

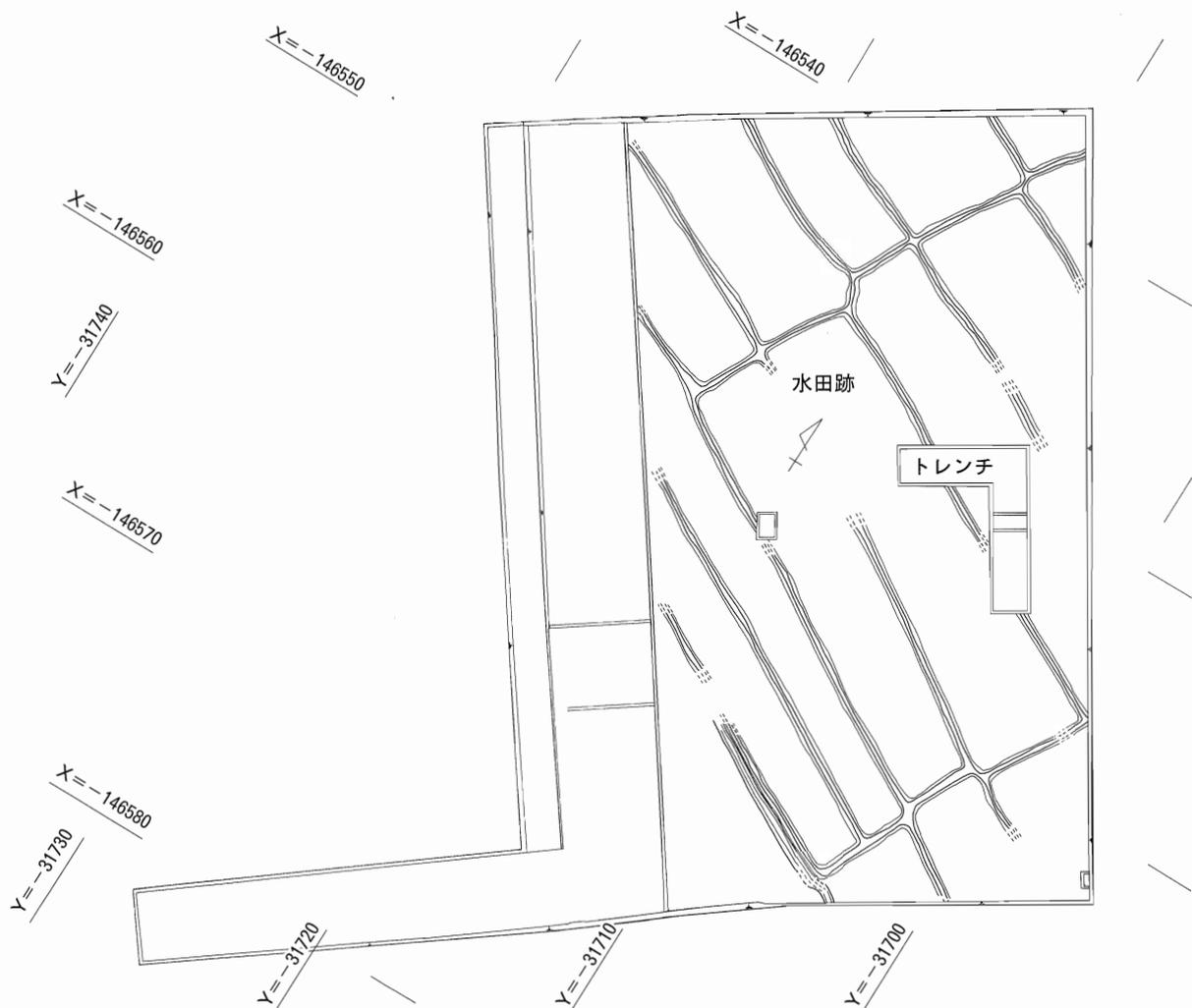
1B区における土層は第14図のとおりで、1区の基本土層と異なる。

2層～5層の上面においてそれぞれ遺構の検出作業を行ったが、5層（基本5層）上面において水田跡を確認した以外、顕著な遺構は認められなかった。また出土した遺物もほかの調査区に比べて極めて少なかった。

検出遺構とそれに伴う遺物

水田跡

5層の上面において検出した。洪水による堆積と考えられる4層により覆われていたため、比較的良好な状態で確認された。検出した面の標高は1.4mで、現在の地表面からは約1m下になる。水田跡は、幅が約40～50cm、検出時の高さで約5～10cmの畦畔によって区画されており、一枚の長



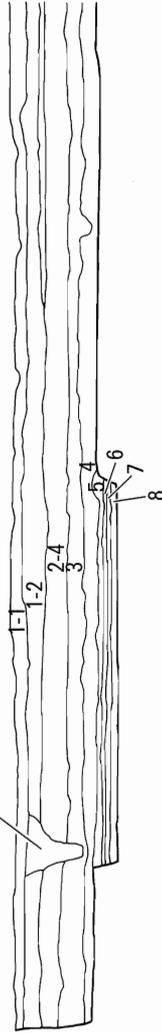
第13図 1B区 遺構配置図 (S=1/300)

L = 3.00m



L = 3.00m

暗渠



- 1-1. 黒灰色粘質土 (現在の水田耕作土)
- 1-2. 黒灰色粘質土 (やや橙色気味、圃場整備以前の水田耕作土か?)
- 2-1. 淡灰色粘質土 (酸化マンガンを多く含む)
- 2-2. 淡灰色粘質土 (酸化マンガンを多く含む)
- 2-3. 黄褐色粘質土 (2-4層に比べ白っぽい、酸化マンガンを多く含む)
- 2-4. 淡灰色粘質土
- 3. 黒褐色土 (砂混じりの層)
- 4. 灰色砂質土
- 5. 茶褐色土 (酸化マンガン・鉄分を含む)
- 6. 淡黒褐色土
- 7. 茶褐色土
- 8. 濃灰色粘質土

基本1層

基本2層

基本3層

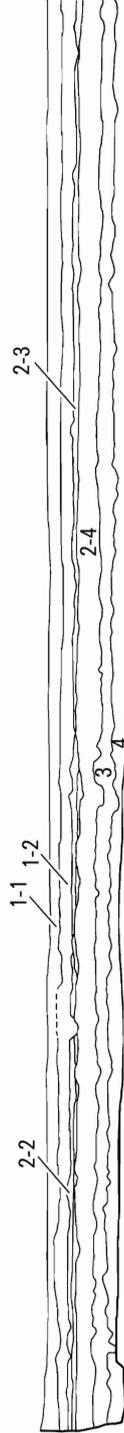
基本4層

基本5層

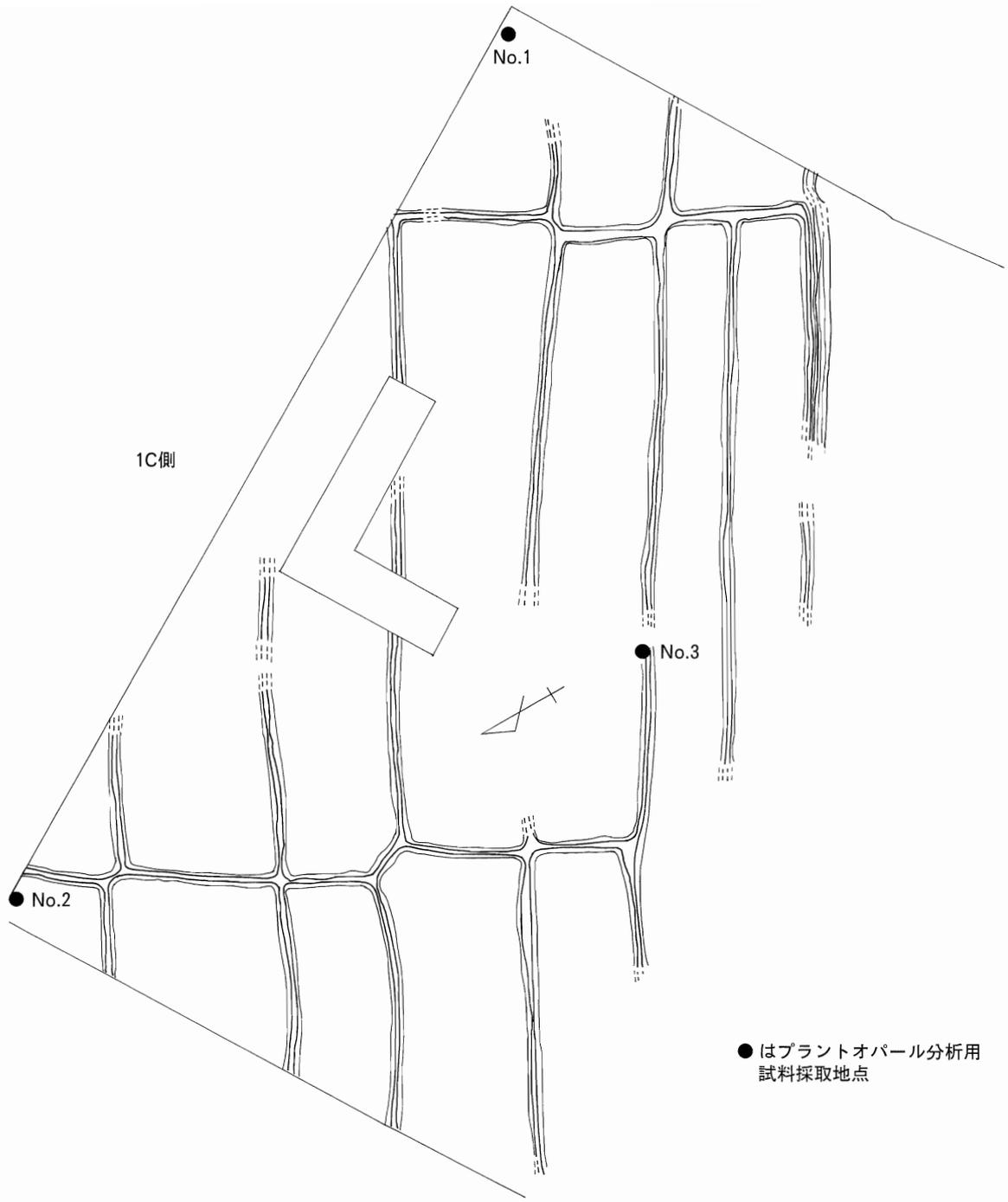
L = 3.00m



L = 3.00m



第14図 1B区 土層図 (S=1/80)



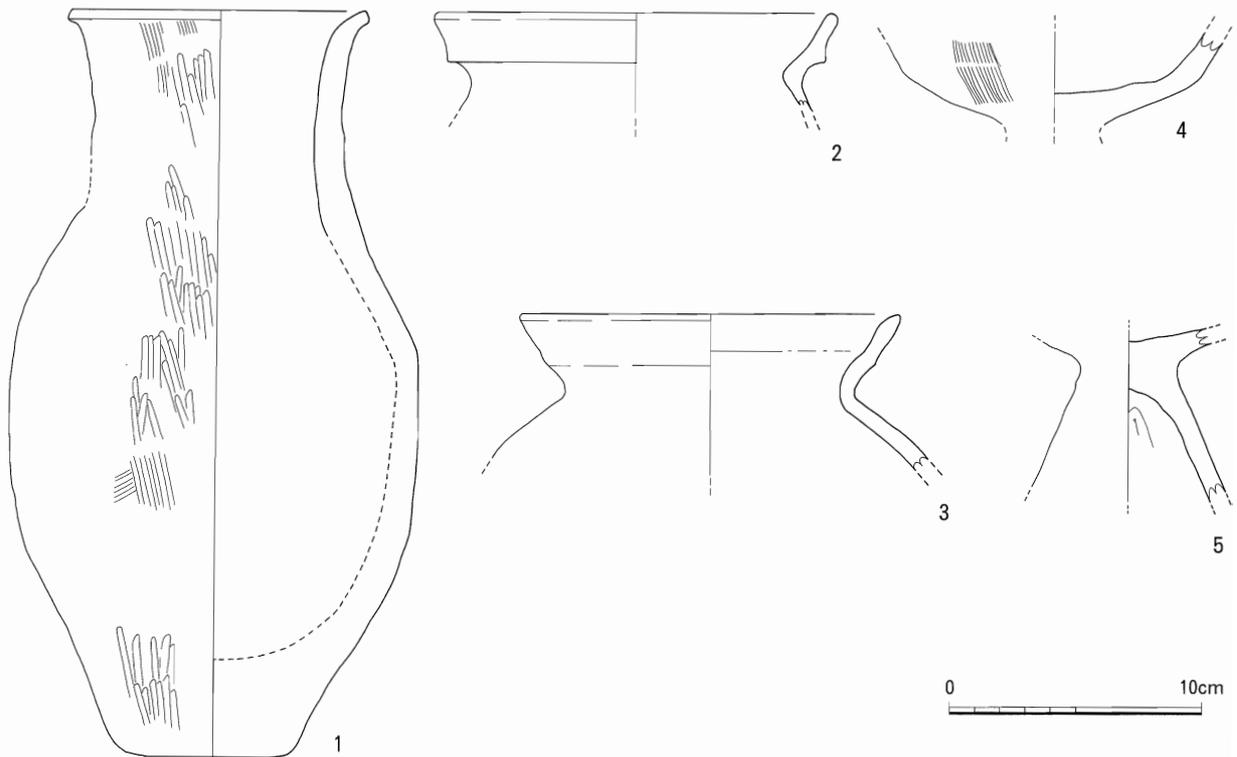
第15図 1B区 水田跡実測図 (S=1/200)

さが約20m、幅約3～5mの長方形の整った形をしている。水田は全部で15枚の存在が確認できるが、その検出状況等から東西方向及び北方向に広がっていると判断される。これに対し、南側では畦畔が確認できていない。掘削段階で確認し損なったことも否定できないが、検出した畦畔のうち最も南側のものに隣接して浅い溝状の遺構が確認されていることから、本来の範囲がここまでであったとも考えられる。

遺構に伴わない遺物

遺物は第16図-1の遺物が4層（基本4層）からの出土であることを除き、2層・3層（基本2・3層）から出土している。出土量はコンテナ1箱程度で、ほかの調査区と比べると格段に少ない。これらのうち実測が可能だったものは掲載したものを含めわずかで、そのほとんどが小片であった。

第16図-1は弥生土器壺と考えられるもので、ほぼ完形で出土した。器高は29.8cmを測るが、胴部はほとんど張らず長胴である。底部は約4cmの厚みがある。器表面はハケメ調整が一部で観察されるものの、基本的にはヘラミガキがされる。2・3は土師器甕である。2は短い複合口縁を持つ。3も複合口縁を持つが、それは既に退化しておりわずかに認識できる程度である。4・5は高坏である。4は坏部の下半で、体部は屈曲しながら立ち上がると判断される。5は坏部から脚部にかけての部分である。風化が進んでおり、調整等は明らかでない。



第16図 1 B区 出土遺物実測図 (S=1/3)

第3節 1C区の調査

概要

1C区は1B区の東に隣接する調査区である。調査前は水田として利用されていた。

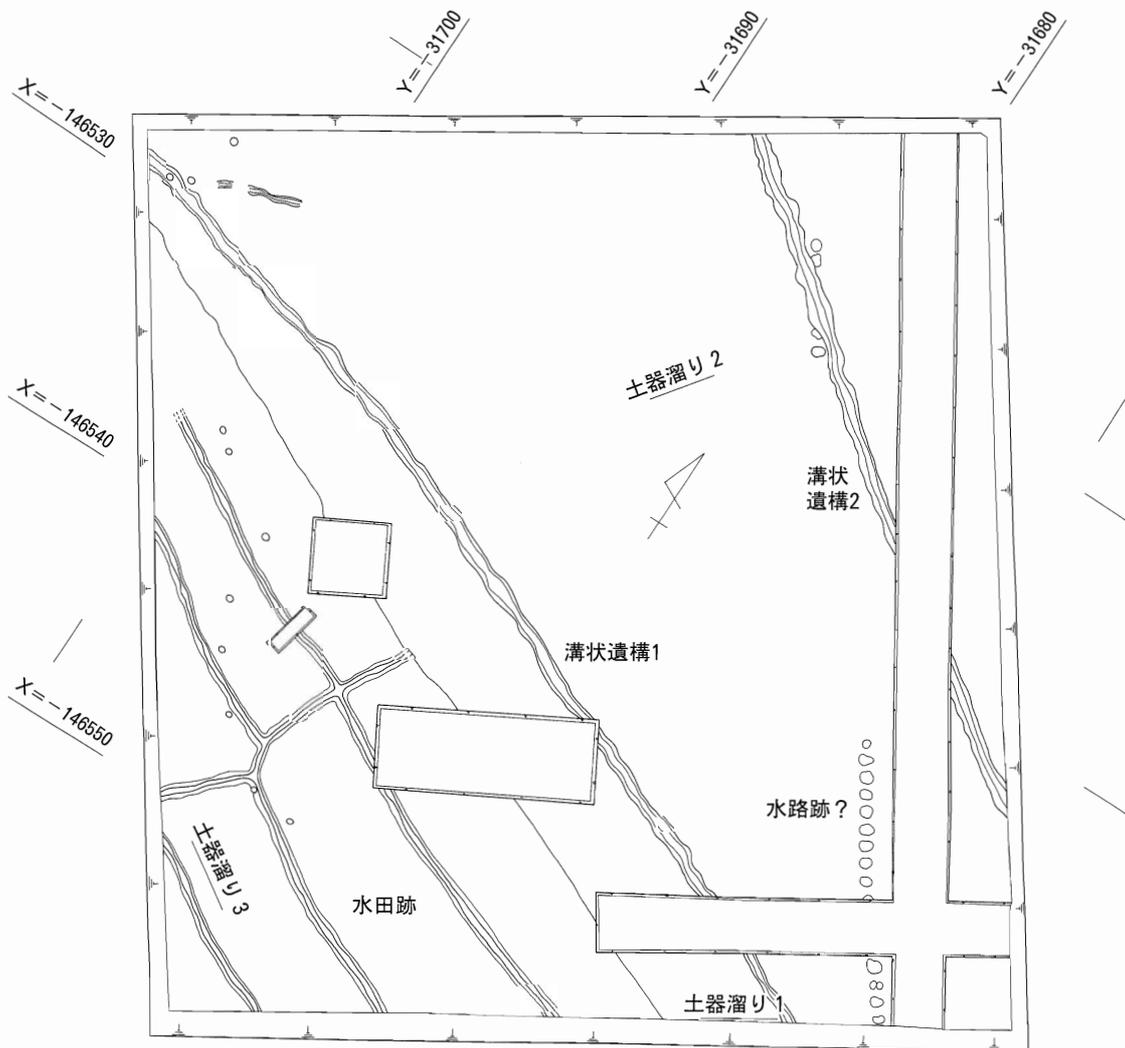
1C区における土層は第18図のとおりで、1B区と同様に1区の基本土層と異ならないが、調査区の東側半分では基本4層が認められなかった。

調査では、2層～5層の上面においてそれぞれ遺構の検出を行い、その結果5層（基本5層）上面において水田跡、溝状遺構を確認した。また3層（基本3層）中より数ヶ所の土器溜りも検出している。遺物は主に基本2層・3層からの出土である。

検出遺構とそれに伴う遺物

水路跡

調査区北東側でピットが列状になっている部分が2ヶ所確認された。当初柵跡などを考えたが、ほかの例などを参考にすると水路跡（水路の底面）の可能性が高い。全て2層に由来する土が堆積しており、2層の段階のものと判断される。



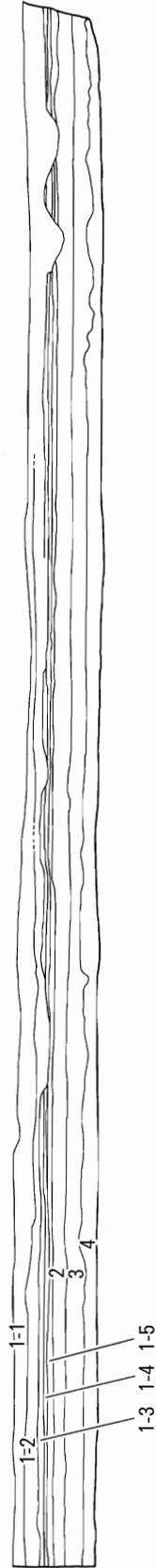
第17図 1C区 遺構配置図 (S=1/300)

L=3.0m



- 1-1 灰色粘質土
 - 1-2 灰色粘質土 (黒褐色ブロックを含む)
 - 1-3 灰色粘質土
 - 1-4 黄色粘質土
 - 2 淡灰色粘質土
 - 3 淡黒色土
 - 4 灰色砂
- } 基本1層
- } 基本2層
- } 基本3層
- } 基本4層

L=3.0m



第18図 1C区 土層図 (S=1/80)

土器溜り 1 (1C-D1)

調査区南側で確認した。表土からは約70cm下、3層中よりの検出で、幅3mにわたって遺物が密集していた。遺物は、上下に重なり合うというような状況ではなく、面的に広がりを持つという状況で検出された。これよりも南側にさらに広がると考えられたが、検出した場所が本調査区の端にあたるため、これ以上の調査は行っていない。

土器溜り1からの出土遺物は第22図のとおりである。水田からの浸水作用のためか、ここから出土した土器はその器表面が溶けたような状況で、取り上げ段階で既に原形を留めないものがほとんどであったため、図示できたのはわずかである。第22図-1は小型の壺である。外面は風化により調整不明であるが、内面はヘラケズリ痕が観察できる。2は須恵器甕。外面は格子目状のタタキが見られ、内面は当て具痕を丁寧にナデている様子が観察できる。

時期判断の可能な遺物は少ないが、須恵器などから判断して古墳時代中期頃のものと考えられる。



第19図 1C区 土器溜り1 (1C-D1) 実測図 (S=1/20)

土器溜り2 (1C-D2)

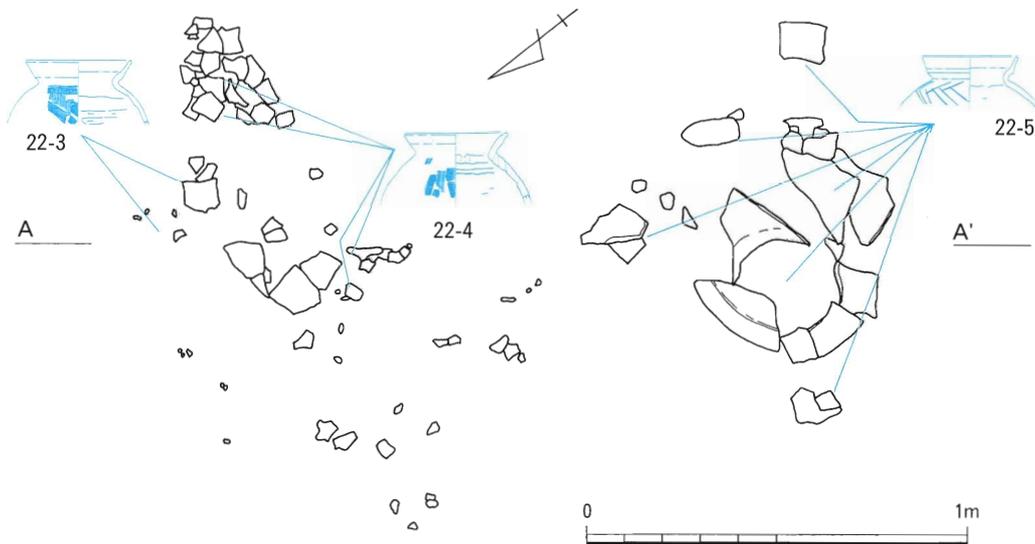
調査区の北側で確認した。1C-D1と同様、3層(基本3層)上層で検出している。1C-D1ほど密集している状況ではないが、比較的まとまりをもって出土したため、土器溜りとして扱うこととした。

土器溜り2からの出土遺物は第22図のとおりである。3~5とも土師器甕である。3は単純口縁の甕と考えられるが、口縁部外面にはわずかに複合口縁状の稜線が認められる。また内面では、口縁部と胴部との境付近であまり調整が行われていないため、粘土紐の痕跡が顕著に観察できる。4は複合口縁を持つ個体である。退化傾向が進んでおり、わずかに屈曲する程度である。5も複合口縁の甕である。外面・内面とも風化しており調整ははっきりとしないが、外面には無軸羽状文が施されている。

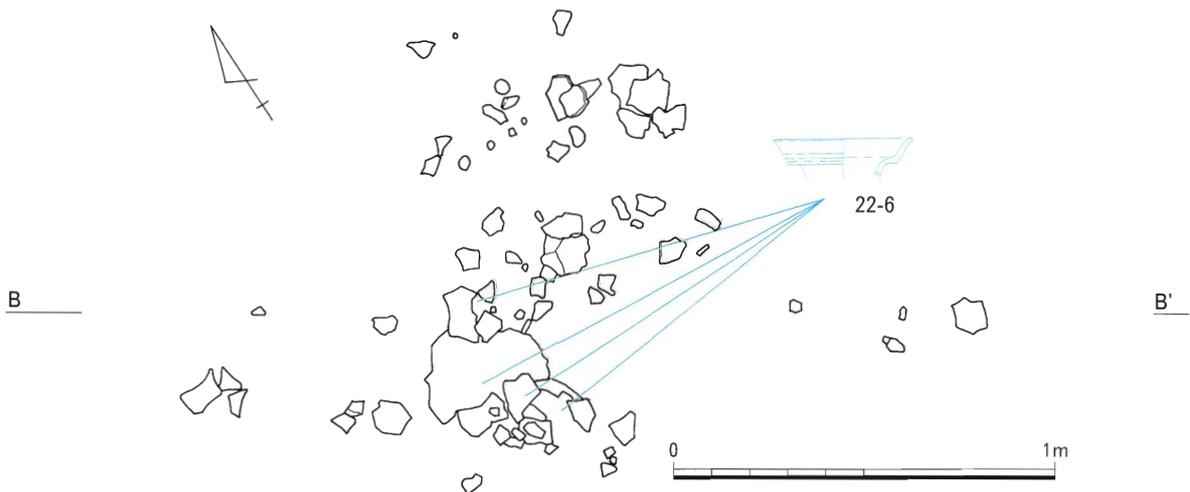
これらの遺物は、古墳時代中期頃のものと考えられる。

土器溜り3 (1C-D5)

調査区の南側で確認した。土器溜り2と同様に密集している状況ではなく、土器溜りとして把握



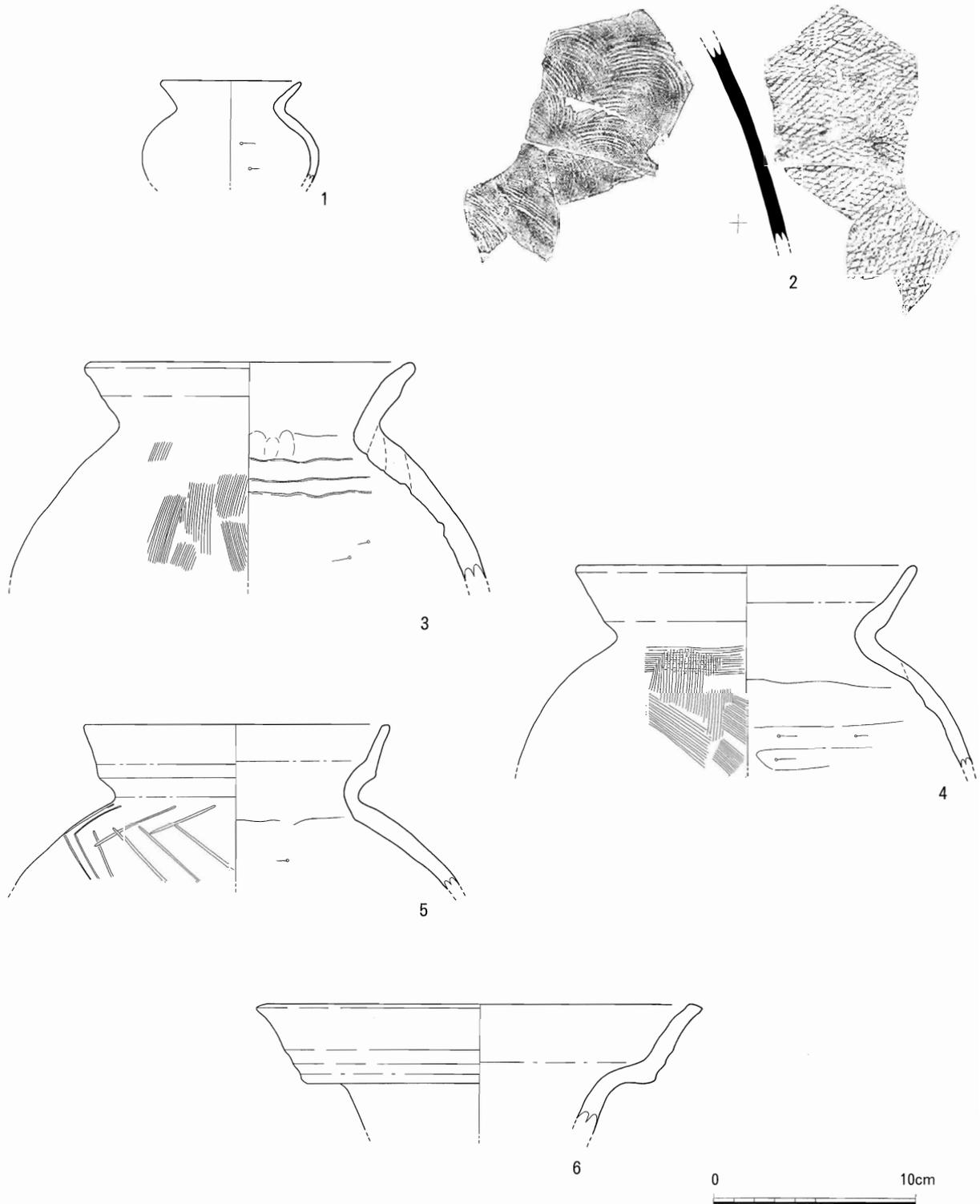
第20図 1C区 土器溜り2 (1C-D2) 実測図 (S=1/20)



第21図 1C区 土器溜り3 (1C-D5) 実測図 (S=1/20)

することは適切でないかもしれないが、ここでは調査段階のとおり土器溜りとして報告する。

土器溜り3からの出土遺物は第22図—6のみである。図示できたもの以外は小片のため掲載していないが、その違いから本来は数個の個体があったと判断される。6は土師器壺である。半分以上の破片が出土したが、いずれも風化が激しく復元ができなかったため、口縁部のみを掲載した。複合口縁で外反気味に立ち上がり、端部には平坦面を有する。

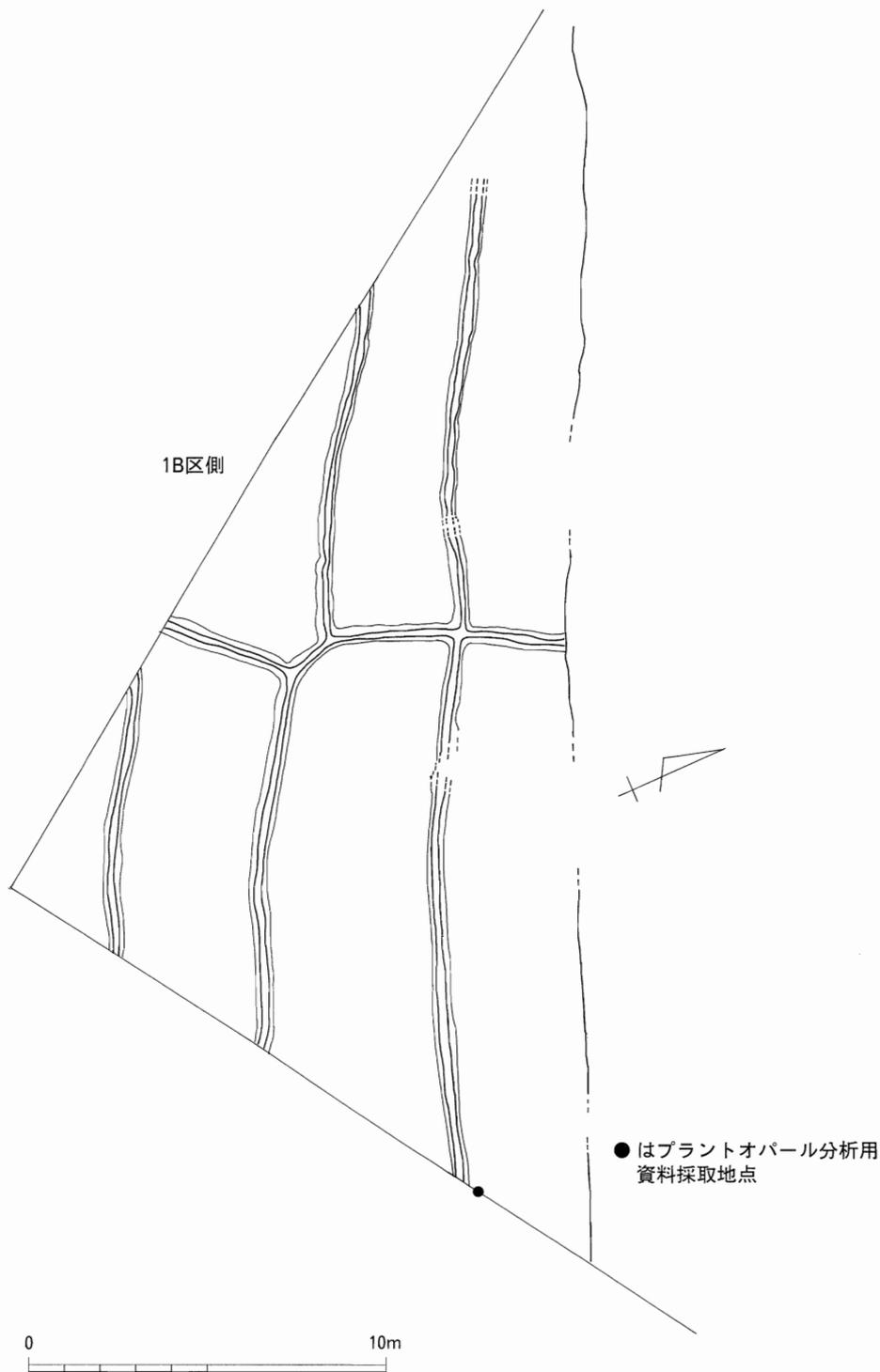


第22図 1C区 土器溜り出土遺物実測図 (S=1/3)

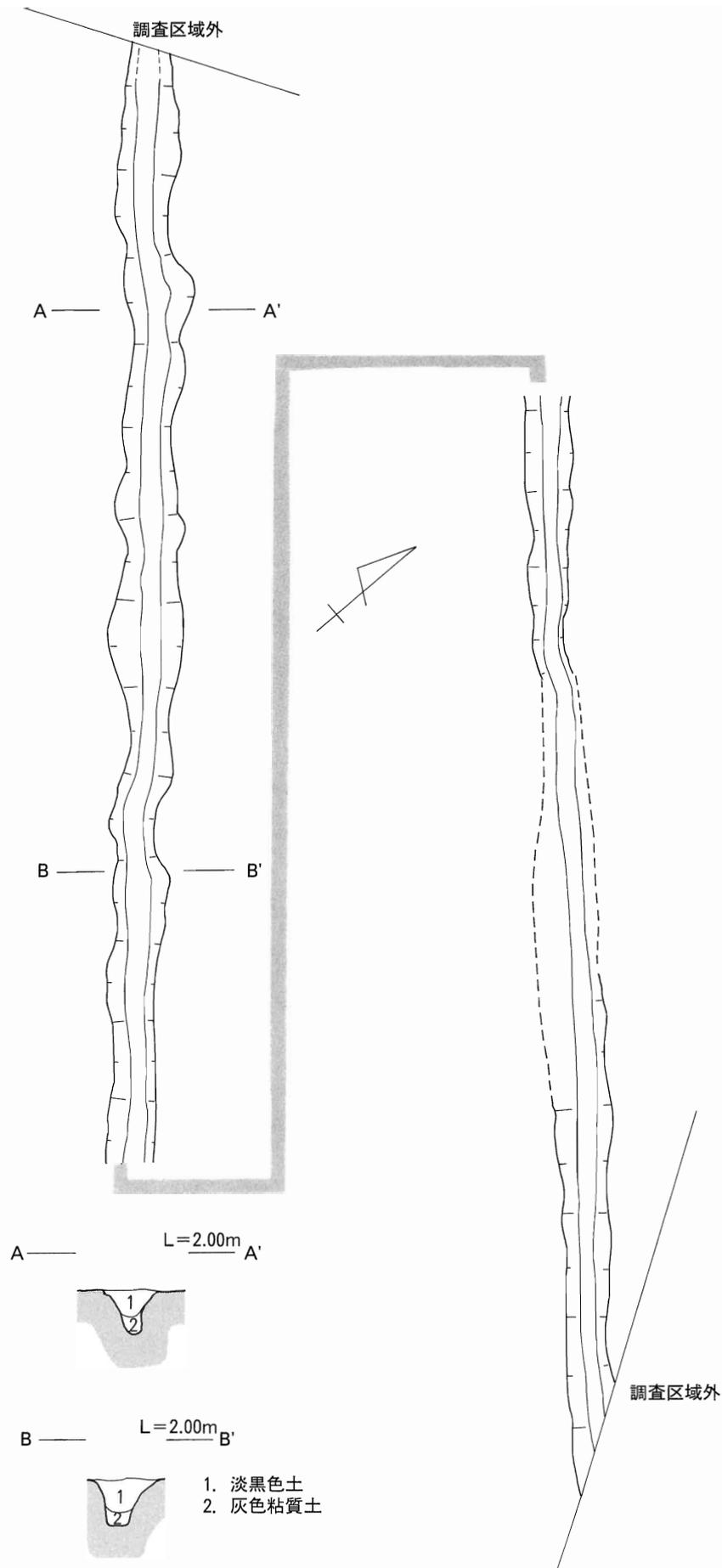
水田跡

5層（基本5層）の上面で確認した。水田跡は1B区から続くものと考えられ、1B区と同じように幅が約40～50cm、検出時の高さで約5～10cmの畦畔によって区画されていた。全部で7枚が認められるが、これより北側では確認できなかった。北側では基本4層そのものが存在しておらず、そのため検出できなかった可能性も考えられるが、水田跡が確認できた部分に比べ、畦畔が確認できなかった部分の方が数cm程度高くなっていることから、水田耕作が行われていた時代以後に削平された可能性もあると言えよう。

なお、これに伴う遺物は確認されなかった。



第23図 1C区 水田跡実測図 (S=1/200)



第24図 1C区 溝状遺構2 (1C-SD2) 実測図 (S=1/80)

溝状遺構 1

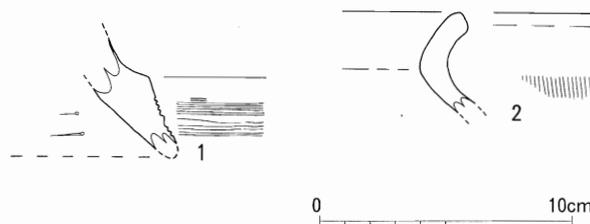
5層（基本5層）上面で確認した。東西方向に延びており、幅約50cmを測る。深さは約10cmと浅い。東側では水田跡に向かって曲がっていく状況が窺えた。

これに伴う遺物は出土していない。したがって時期等も明らかでない。

溝状遺構 2

5層（基本5層）上面で確認した。調査区北側に位置し北東—南西方向に延びている。幅約80cm、深さ約60cmを測る。溝内下部には粘性の強い土が堆積していた。

溝状遺構 2 に伴う遺物は第25図に掲載したものである。1は器台形土器の脚部と考えられるものである。小片のため大きさは明らかでないが、外面には擬凹線文が廻らされ、内面調整はヘラケズリが行われているのが観察できる。2は甕の口縁部と考えられる破片である。端部は丸みを持ち、外面にはハケメが観察できる。



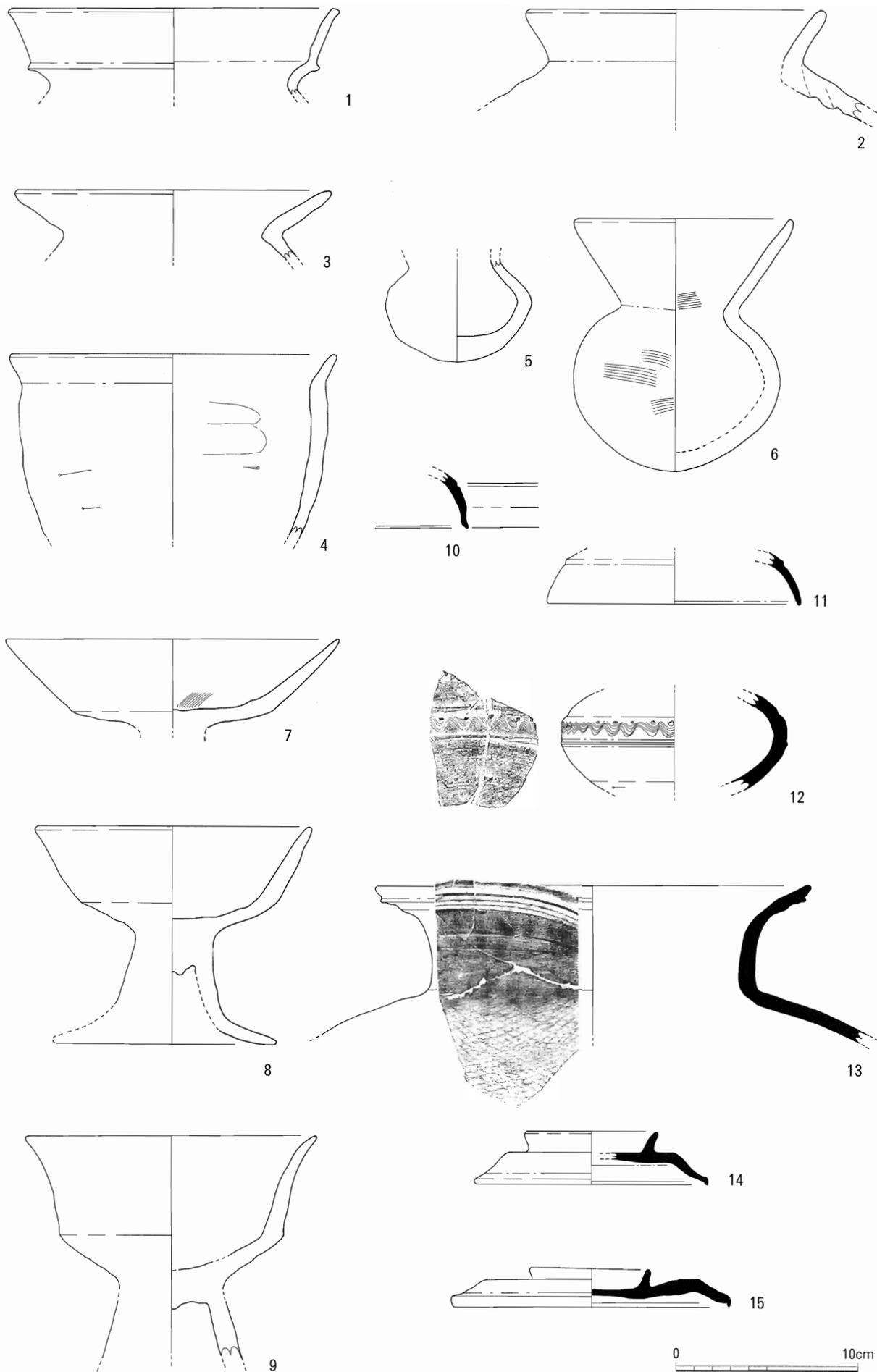
第25図 1C区 溝状遺構 2 (1C-SD2)
出土遺物実測図 (S=1/3)

この遺構の時期は、1などから判断して、弥生時代後期頃のものである可能性が高い。

遺構に伴わない遺物

1C区からは整理用コンテナ10箱分の遺物が出土したが、ほとんどが小片で実測が可能だったものは一部である。基本的に2・3層（基本2・3層）からの出土であり土師器の出土点数が多かったが、須恵器や中世の遺物が一定量認められた。

第26図—1は土師器甕である。複合口縁で外反気味に立ち上がり、端部は平坦面状となっている。2・3も土師器甕である。2の内面では、口縁部と胴部の境付近で粘土紐痕が観察できる。3は口縁部が4分の3出土しており、口径は17.2cmを測る。4は口縁部がわずかに外反する器形の土器で、甕と考えられるものである。外面には煤の付着が見られる。5・6は壺である。5は小型のもので、外面は比較的丁寧な調整がされているが、内面はほとんど未調整に近い。6は丸底で球状の胴部に長めの口縁部を伴うものである。他のものに比べて良好な状態であり、調整が明瞭に観察できる。7～9は高坏である。7は坏部。稜を持ち逆「ハ」状に立ち上がる。8はやや深めの坏部を持つものである。器表面は風化が著しく調整等は明らかでない。9も深めの坏部を持つもので、外反しながら立ち上がる。10～15は須恵器である。10・11は坏蓋である。どちらも小片であり口径等是不確定な数値である。いずれのものも端部に段を有している。12は甕と考えられる。体部は肩が張らず扁平な球状で、中位には櫛状工具による波状文が施されている。13は甕である。同一個体と考えられる破片がこのほかにも出土しているが、接合・図化ができたのは口縁部から肩部にかけての部分のみである。復元した口径で23.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部よりやや下には尖帯を廻らせる。外面には格子目状のタタキが施され、内面は丁寧なナデがされる。14・15は蓋である。輪状つまみを持つ個体で、端部は下方に折れ曲がる。



第26图 1 C区 出土遺物実測図 (S=1/3)

第4節 1D区の調査

概要

1D区は1C区の北側にある調査区である。調査前は水田として利用されていたところで標高は約2.2mであった。

1D区における土層は第29図のとおりである。3層までは基本土層と変わらないが、北東側では基本4層に相当する層が確認されなかった。これに対して南西側では、基本4層は確認されたものの、基本5層に相当する層が確認されなかった。

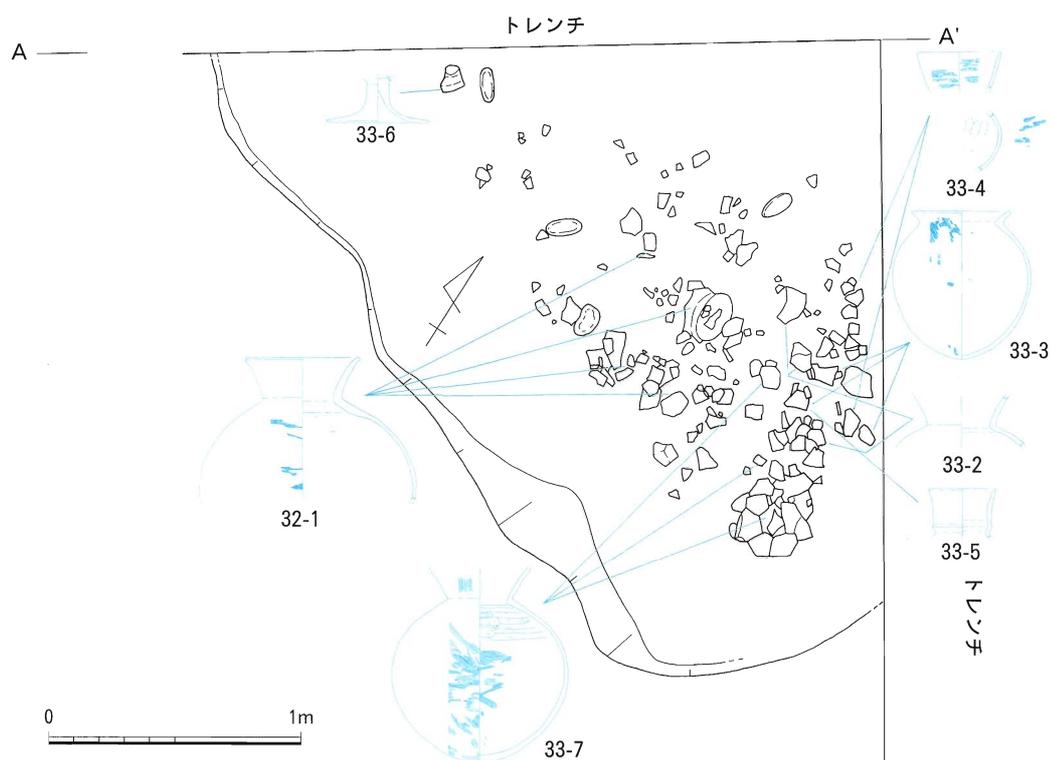
なお、これらより以下の層では遺構・遺物とも存在しないと判断したため調査を行っていない。

1D区においては、2層、3層、4～5層の上面において遺構の検出を行った。その結果、3層中より土器溜りを確認したほか、4層上面において建物跡を検出した。遺物は調査区東側から中央付近にかけての出土が多く、特に中央付近では土器溜り状で出土する傾向にあった。遺構は調査区の東側に集中する傾向にあり、西側では確認できなかった。

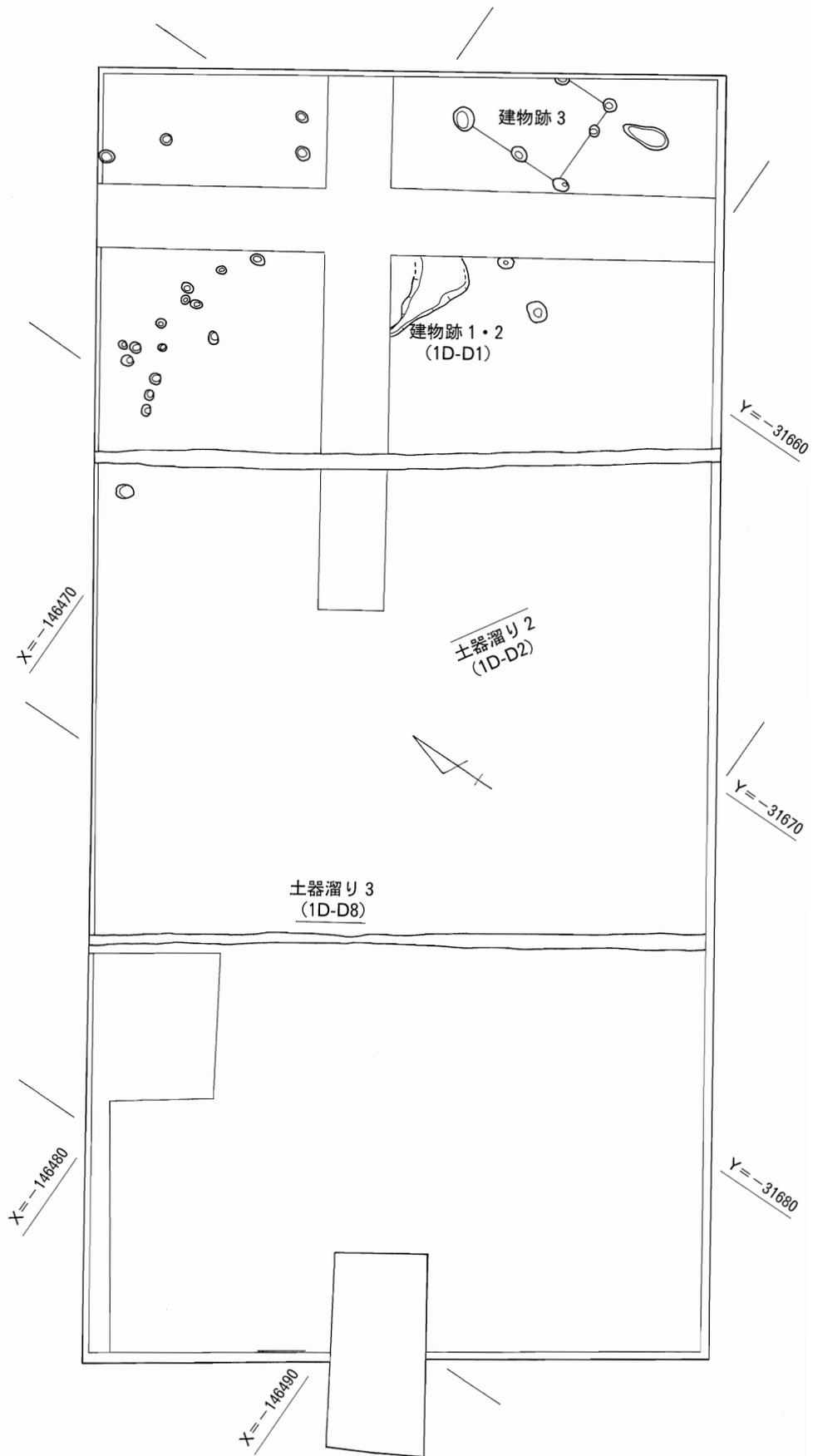
検出遺構とそれに伴う遺物

建物跡1・建物跡2（1D-D1）

3層（基本3層）の掘削段階で土器がまとまって出土しており、当初は土器溜りと認識していたものである。3層（基本3層）の段階では確認できなかったものの、4層の上面でわずかながらその輪郭を捉えることができたため建物跡とした。



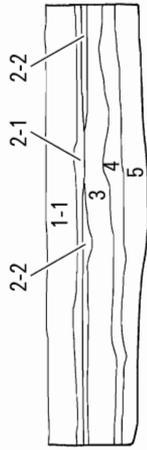
第27図 1D区 建物跡1・2（1D-D1）実測図（1）（S=1/30）



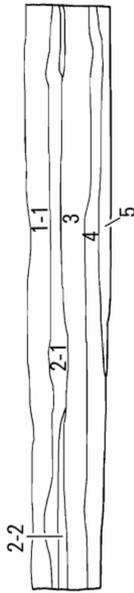
第28図 1D区 遺構配置図 (S=1/300)

- | | | |
|-----|-----------|----|
| 1-1 | 黑茶色粘質土 | 基本 |
| 1-2 | 淡黑茶色粘質土 | 1層 |
| 1-3 | 淡灰色粘質土 | 基本 |
| 1-4 | 黄褐色粘質土 | 2層 |
| 1-5 | 淡黑茶色粘質土 | 基本 |
| 2-1 | 淡灰色粘質土 | 3層 |
| 2-2 | // | |
| 3. | 黑褐色土..... | |
| 4. | 茶褐色土 | |
| 5. | 淡黑色粘質土 | |

3.00m

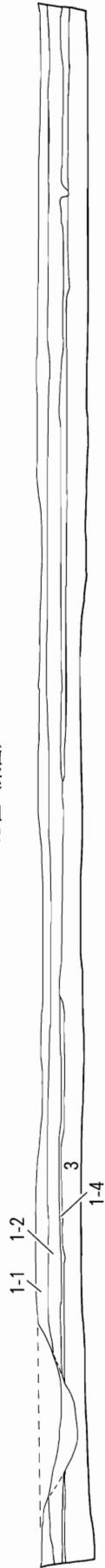


3.00m



3.00m

1D区 (東面)



3.00m

1D区 (北面)



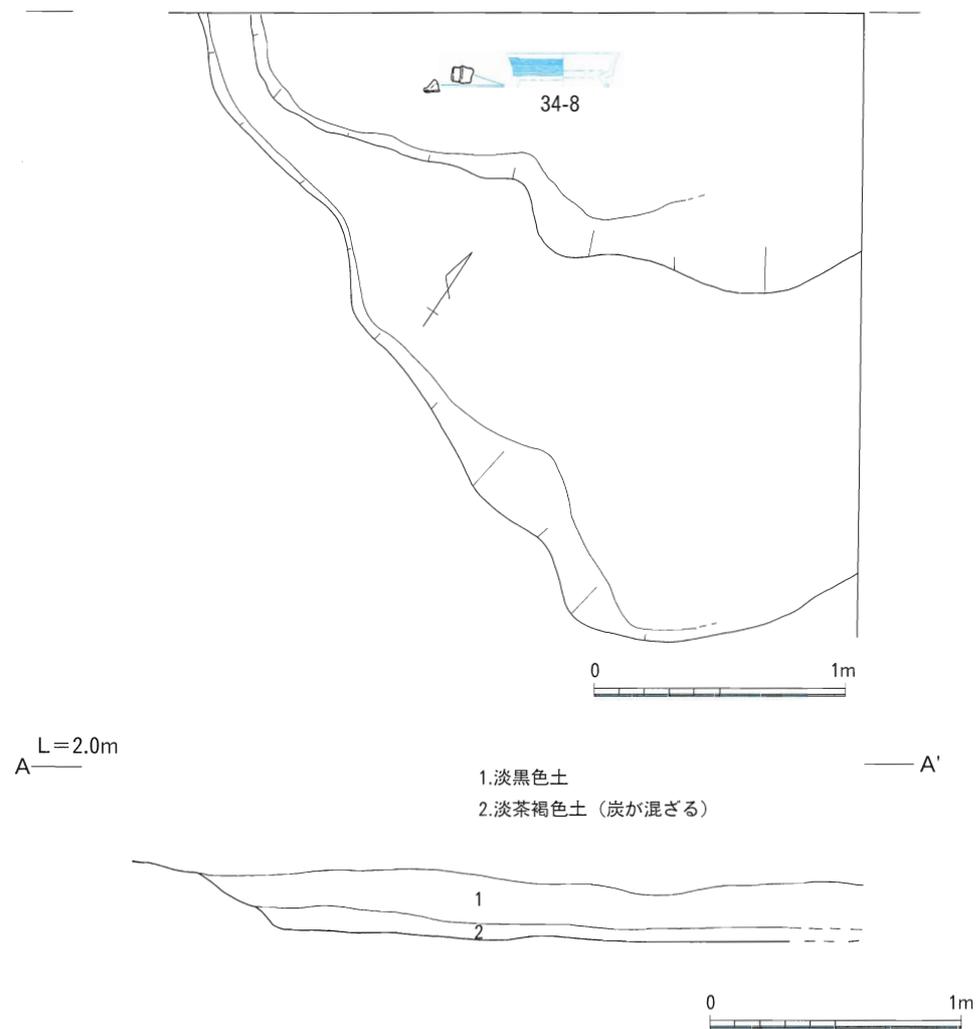
3.00m



第29图 1D区 土層图 (S=1/80)



第30図 1D区 建物跡1・2 (1D-D1) 実測図(2) (S=1/30)



第31図 1D区 建物跡1・2 (1D-D1) 実測図(3) (S=1/30)

建物跡はトレンチ調査の際にも認識できなかったため、結果として多くの部分を失ってしまっている。断片的な情報から判断するしかないが、床面と思われる面が2面確認でき、時期の異なる遺物も出土していることから、二つの遺構が重複しているものと考えられる。

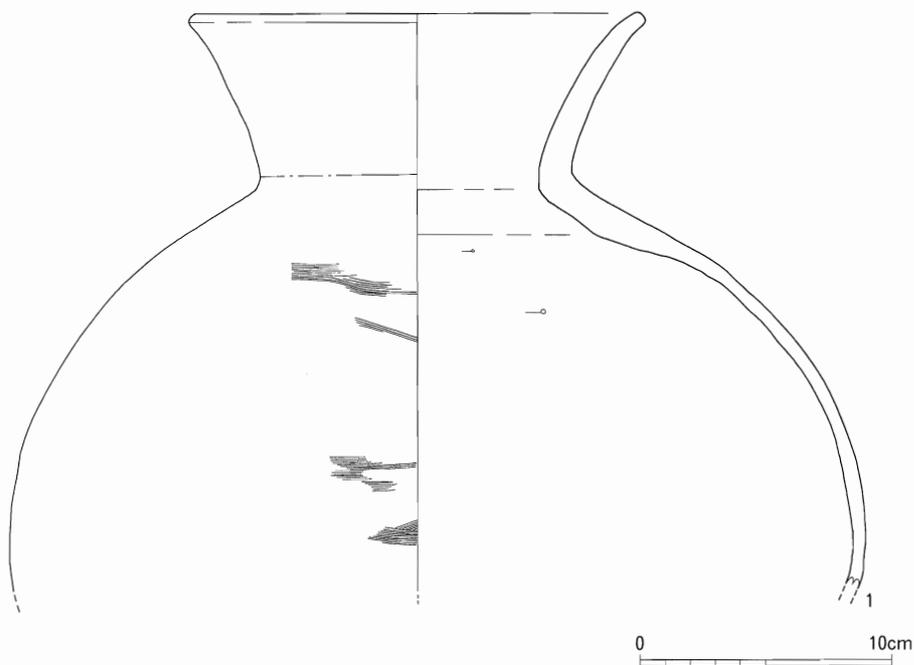
このうち上側で確認したものを建物跡1、下側で確認したものを建物跡2とすることとする。下側のものについてはその大半を失っており建物跡と判断できる積極的な根拠に乏しいが、一応建物跡と捉えておきたい。

建物跡1は、南側の部分のみ残存している。竪穴の建物で、直線的に伸びる壁面から判断すると、平面形は方形であると考えられる。規模は、トレンチを挟んだ反対側で残りが検出されていないことから判断して、一辺の長さが3.5m前後と考えられる。これに伴う柱穴などは確認されなかった。

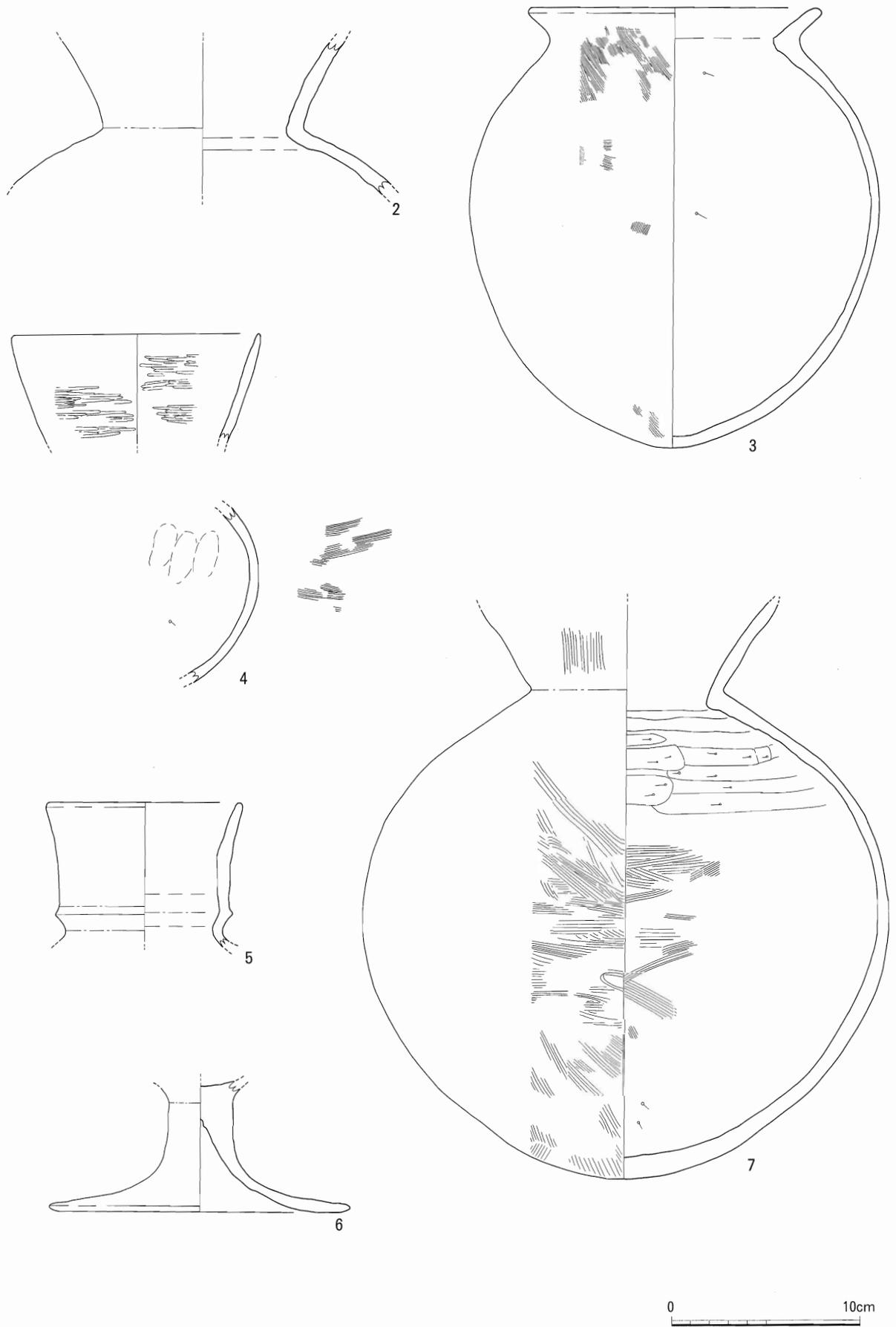
建物跡2は平面形・規模等は明らかにしえないが、建物跡1と同規模かそれよりも小さいと推測される。いずれも柱穴などは検出されなかった。なお、建物跡2からは、西側床面において焼土や炭化物が広がる部分が確認された。

出土した遺物は第32図～第34図のとおりで、建物跡1からの出土遺物を第32・33図に、建物跡2からの出土遺物を第34図に掲載した。

第32図に掲載したものは壺である。外反しながら立ち上がる長い口縁部を持ち、口径は17.4cmを測る。外面には横方向のハケメが観察できる。第33図-2も壺と考えられるものである。口縁端部を失っているものの、形態としては32図に掲載した壺に類似すると考えられる。3は甕である。体部の多くを失っているが、口縁部から底部まで復元できる。口径15.0cm、器高23.4cmを測る。器壁は薄く、球状に近い体部を持つ。4は壺と考えられるものである。口縁部と体部は接合できなかったが、同一個体と考えられるため同時に掲載している。口縁部は外面・内面とも丁寧なミガキが施されており、表面は滑らかである。5は直口壺である。複合口縁で、複合部の稜は鋭く以後の立ち上がりは長い。6は高坏。坏部を失っており全形は明らかでないが、脚部は大きく開く形態のものである。7は壺。口縁端部を欠いているものの、ほぼ全形の分かる個体である。直線的に開く口縁部に球状の胴部を有するもので、外面にはハケメが観察できる。



第32図 1D区 建物跡1 (1D-D1) 出土遺物実測図(1) (S=1/3)

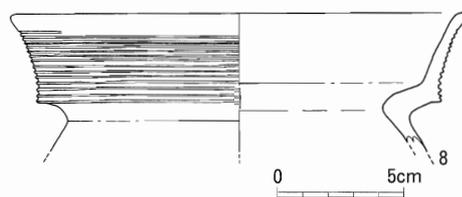


第33图 1D区 建物跡1 (1D-D1) 出土遺物実測図(2) (S=1/3)

第34図は弥生土器甕である。複合口縁で、外反する口縁部を持つ。端部は丸く、外面には擬凹線文が廻らされる。

以上の遺物は、第34図のものが弥生時代後期後半と考えられる以外、いずれも古墳時代前期のものだと判断される。

したがって、建物跡1は古墳時代前期、建物跡2は弥生時代後期後半のものと考えられる。



第34図 1D区 建物跡2 (1D-D1) 下層出土遺物実測図 (S=1/3)

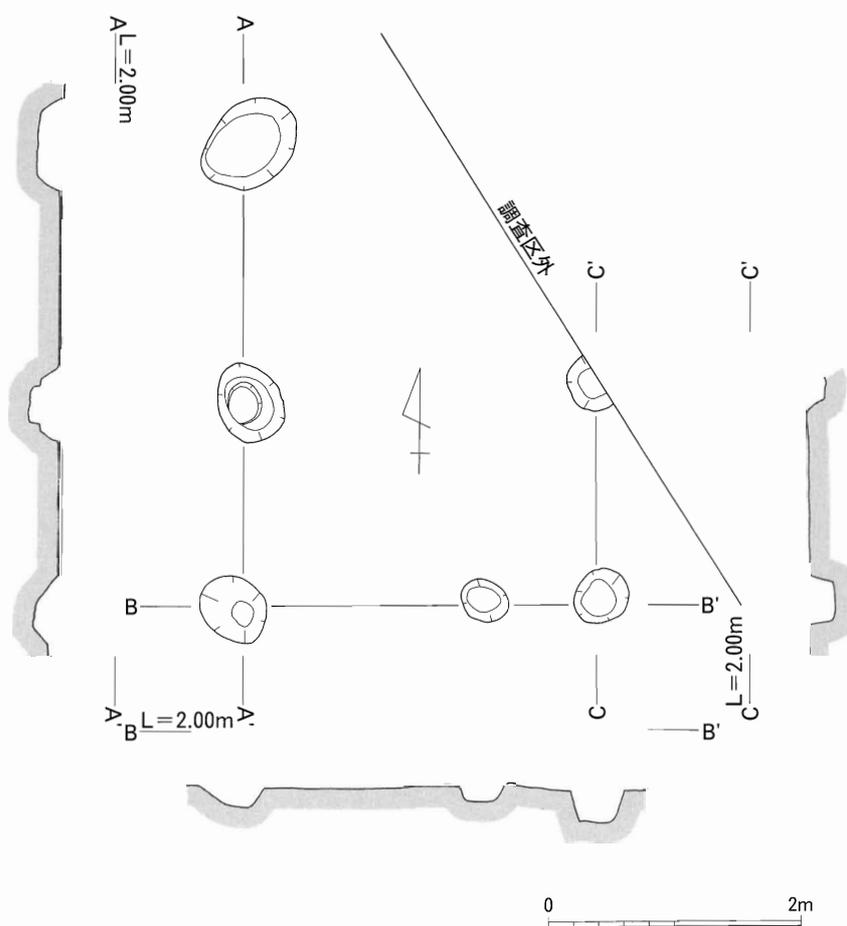
建物跡3

調査区の西側に位置する。

調査区の境で検出しているため、一部が調査区の外に出ており詳細は明らかでないが、1×2間ないしはそれ以上の規模と判断できる。ほぼ南北方向を向いており、建物跡1とは主軸を若干異にするようである。

これを構成するピットは径が50cm前後、深さ20~30cm前後のものであった。

これに直接伴う遺物は出土していない。したがって時期等は明らかでない。



第35図 1D区 建物跡2 実測図 (S=1/60)

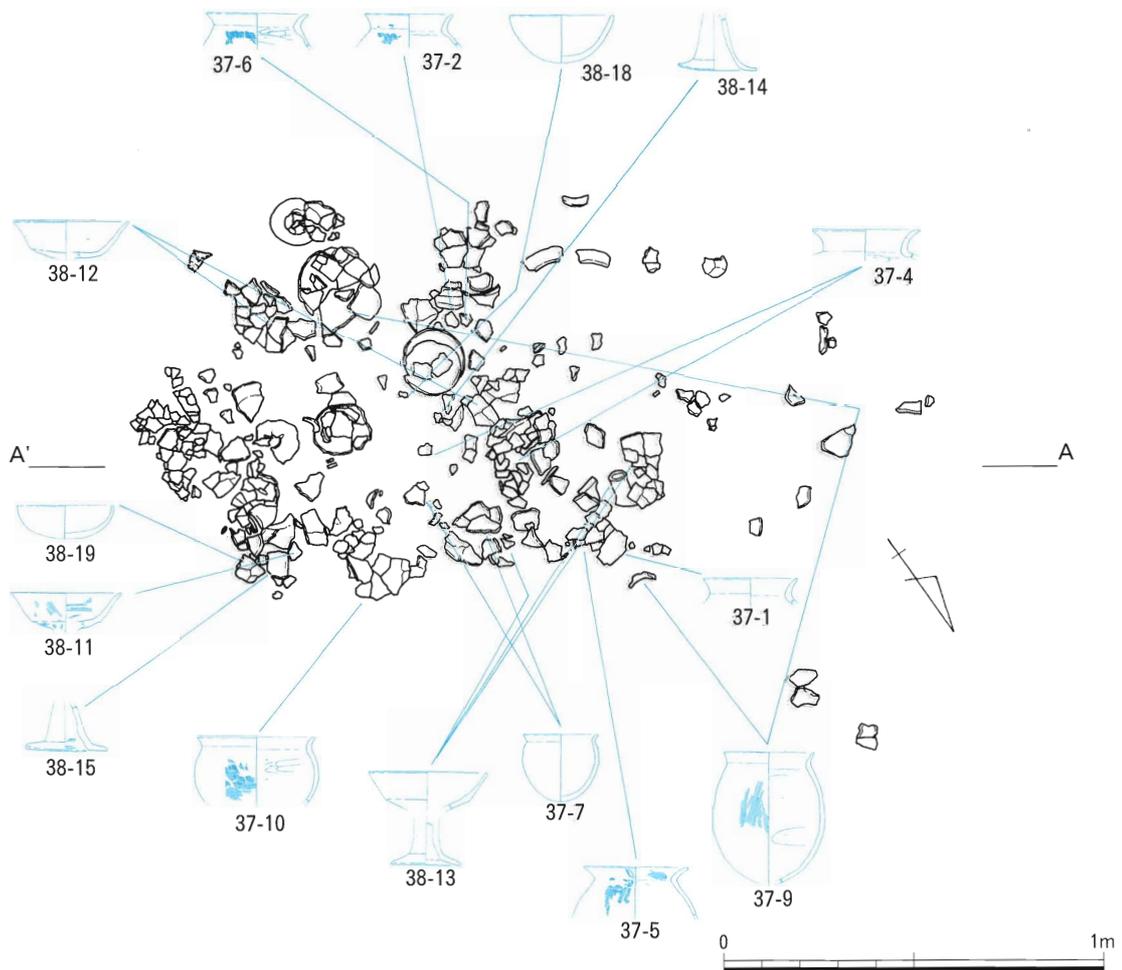
土器溜り 2 (1D-D2)

調査区中央付近で確認した。3層(基本3層)中よりの出土で、長さ約2m、幅約1mにわたって遺物が密集していた。出土状況は、上下に重なり合うというような状況ではなく、面的に広がりを持っていて、全て土師器であり須恵器は出土していない。出土遺物は第37・38図のとおりである。甕や高坏、碗などが見られるが、全体的に残存状況は良くない。

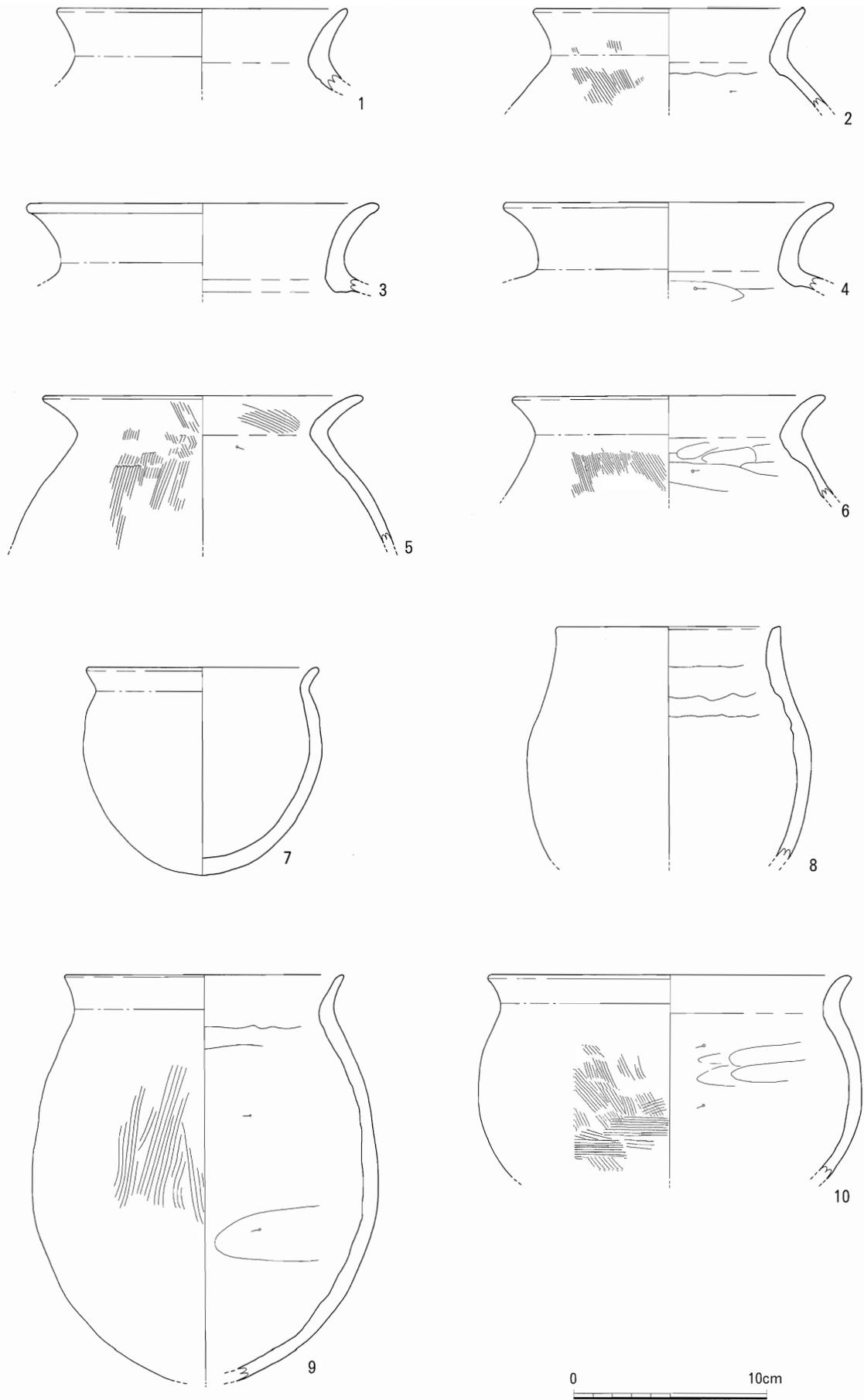
第37図1～6は甕の口縁部と考えられるものである。1・2はやや短めの口縁部で、緩やかに外反しながら立ち上がる。2の外面には縦～斜め方向のハケメが観察できる。3～6は口縁端部がそれよりもさらに外反しながら立ち上がるものである。7・9も甕と考えられるもので、外反する短い口縁部を持つものである。8の口縁部は外反せず、また胴部もあまり張らない器形である。10は甕と考えられる。口縁部は短く外反する。

第38図11～17は高坏である。11・12は坏部のみが復元できた個体で、ともに坏部には稜が認められる。13は完形ではないが、坏部から脚部までがおおよそ復元できるものである。坏部には稜を持ち、脚部は下部で強めに屈曲する。14～17は脚部。14・15は脚端部近くで強く屈曲する形態のものである。18～21は碗で、いずれも胴部が内湾しながら立ち上がるものである。

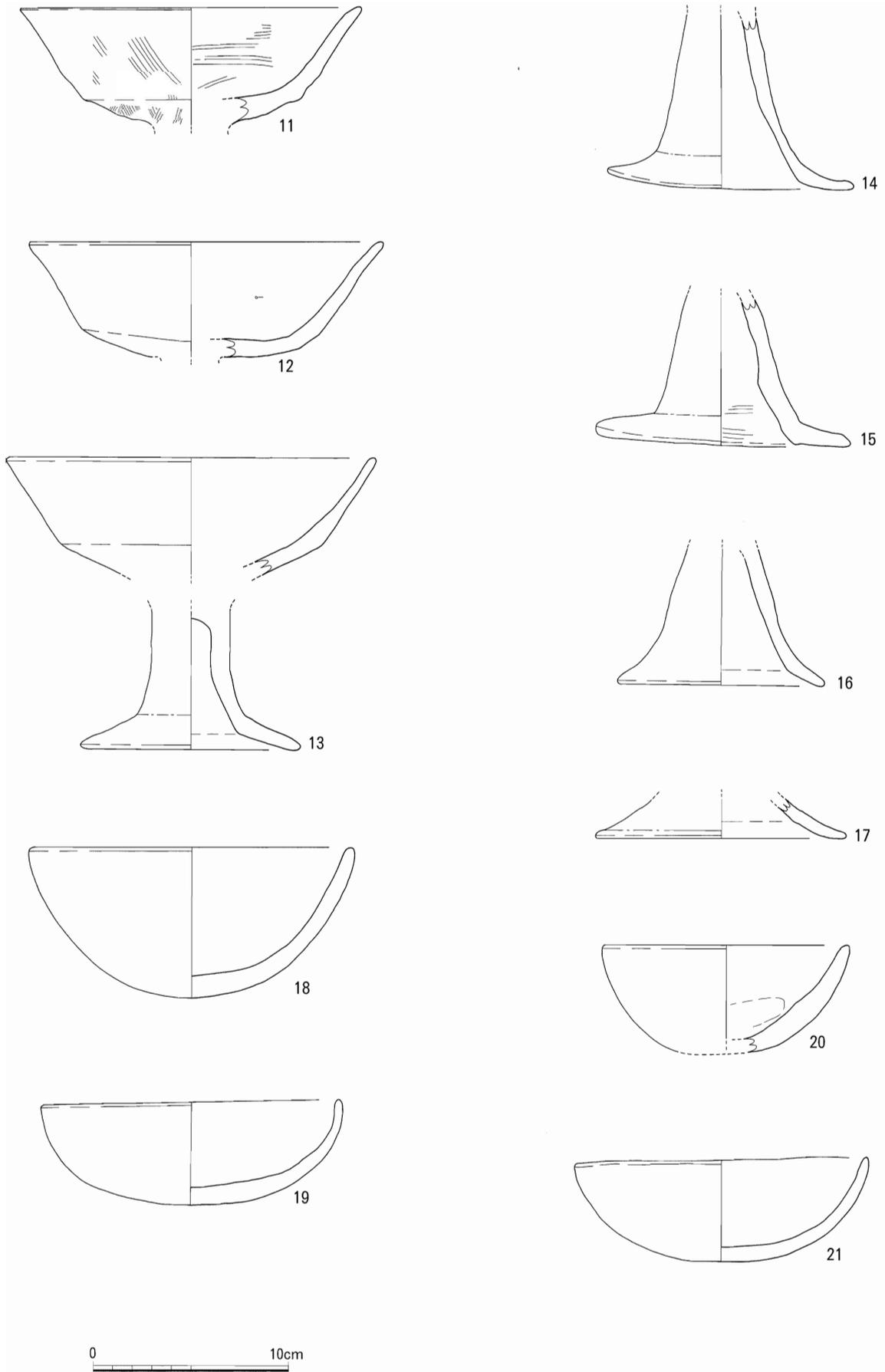
これらの遺物は、基本的に古墳時代中期のものと考えられる。



第36図 1D区 土器溜り 2 (1D-D2) 遺物出土状況図 (S=1/20)



第37図 1D区 土器溜り2 (1D-D2) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



第38図 1D区 土器溜り2 (1D-D2) 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

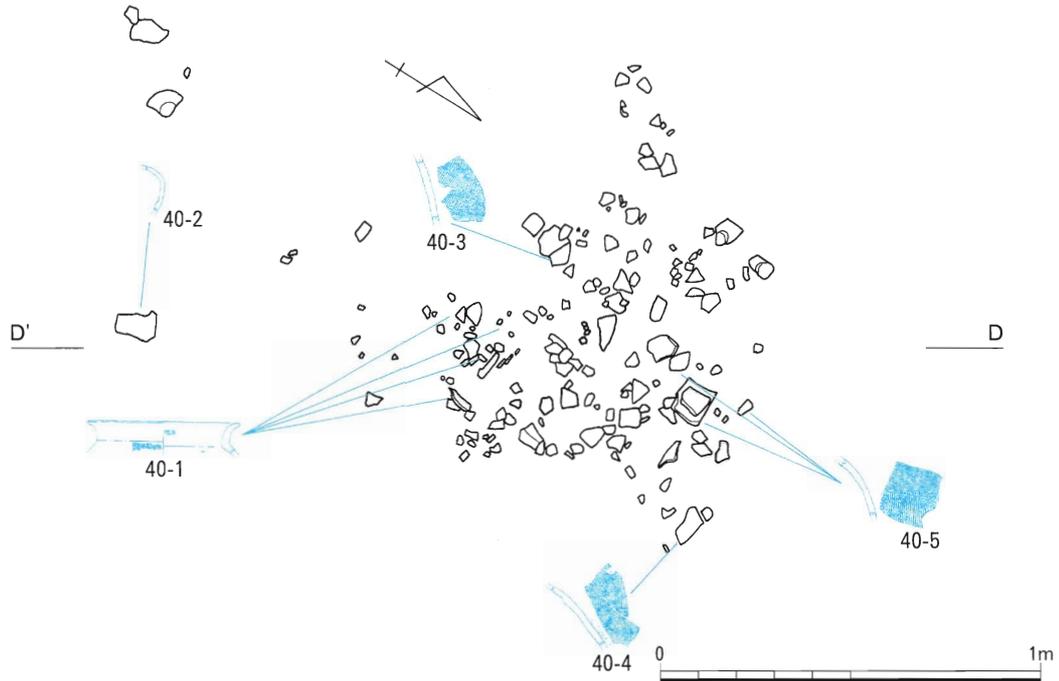
土器溜り3 (1D-D8)

調査区中央よりやや南西側で確認した。ほかの土器溜り同様3層(基本3層)中からの出土である。

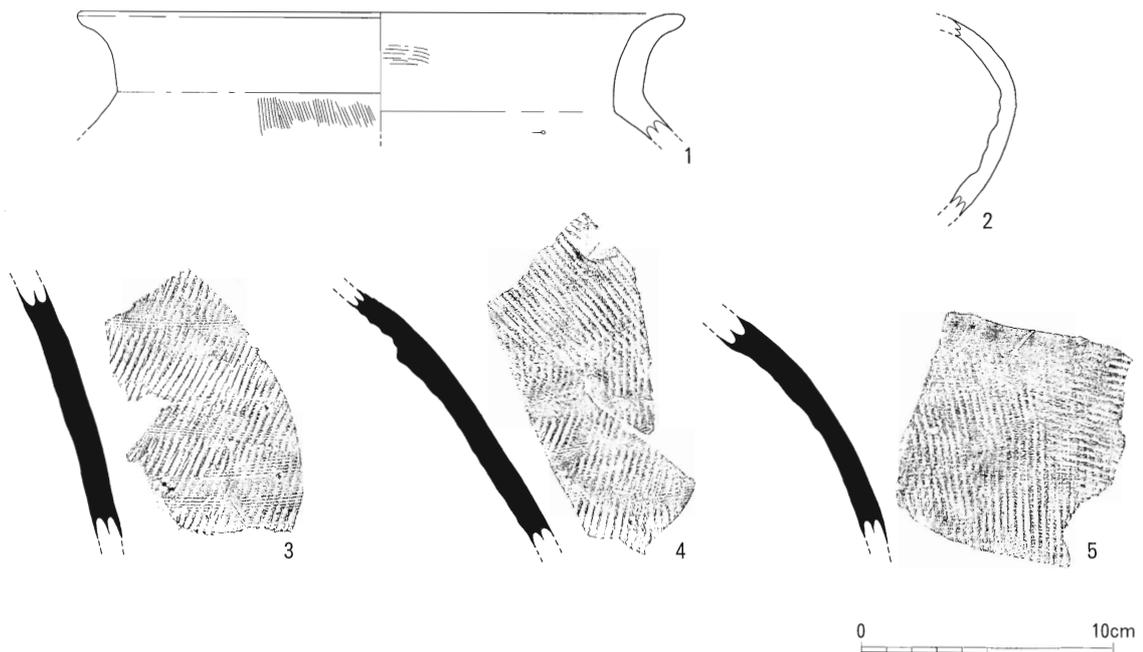
出土した遺物は第40図に掲載している。土師器・須恵器があるが、土師器はほとんどが小片の状態であり、全形の分かるものはなかった。また、須恵器はいずれも甕片と考えられるものであった。

1は土師器甕。口縁部は緩やかに外反し、端部は外方に曲げられている。外面には縦方向のハケメが観察できる。2は壺の胴部と考えられるが詳細は明らかでない。3~5は須恵器甕。外面には平行タタキが施されている。

これらの時期は、土器溜り2同様に古墳時代中期のものと考えられる。



第39図 1D区 土器溜り3 (1D-D8) 遺物出土状況図 (S=1/20)



第40図 1D区 土器溜り3 (1D-D8) 出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構に伴わない遺物

1 D区からは弥生時代～江戸時代に至る多くの遺物が出土した。ほとんどが2層・3層（基本2層・基本3層）からの出土であり、4層以下では確認できなかった。出土遺物のうち主なものを第41図～第44図に掲載した。基本的には種類・時期ごとに掲載したが、一部これと異なる部分がある。以下、各遺物について記述する。

第41図

1～8は弥生土器である。1は甕の口縁部と考えられるもので、端部には刻み目が施されている。2～4は甕の頸部と考えられる破片で、頸部屈曲部には有刻突帯が貼り付けられている。5～8は甕の口縁部である。いずれも複合口縁で、口縁部は外反しながら立ち上がる。外面には擬凹線文が施されている。このうち、7の肩部には波状文が、また8の肩部には刺突文が施される。

9～11は土師器甕と考えられる個体である。いずれも複合口縁で、口縁部は外反気味に立ち上がる。外面に擬凹線文などは観察されない。11は肩部に平行線文と波状文が廻らされている。12は半分以上を失っているものの、口縁部から底部まではほぼ復元のできる個体である。口縁端部にわずかな平坦面を有し、胴部は上位から中位にかけては横方向のハケメ調整が、中位から下位にかけては縦方向のハケメ調整が観察できる。全体的に非常に薄い器壁となっている。13は壺または甕の胴部と考えられるものである。羽状文が観察されるが、小片のため全形は明らかでない。14は甕の胴部と考えられるもの。外面には直線文や貝殻による施文が観察でき、内面にはヘラケズリが認められる。15～17は壺または甕の底部。17は厚い器壁の個体で、胎土には石英・長石を多く含んでいる。厚さは1.8cmを測る。

第42図

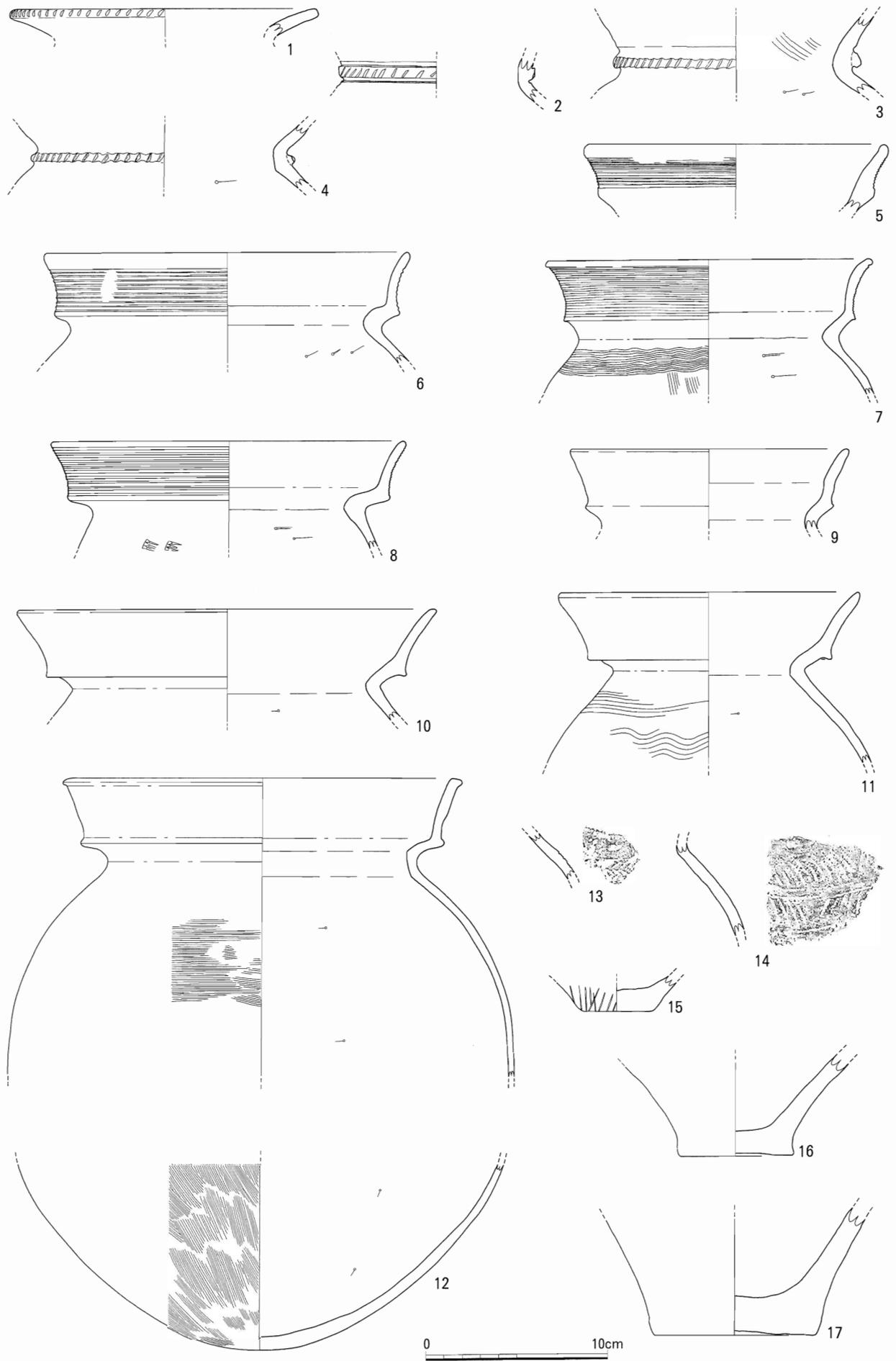
18～23は土師器甕である。いずれも単純口縁で器壁は薄い。18の表面は滑らかで、口縁端部は丸く収められる。また、口縁部内面では一部に淡い赤色部分が観察できることから、本来は赤色顔料が塗彩されていたと考えられる。19の口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや肥厚する。21は非常に薄い器壁の個体で、口縁端部は内側にわずかに突出する。20は緩やかに外反する口縁部を持つ個体。23の口縁端部は内湾気味となり、その外面には沈線が施されている。

24～26は壺と考えられるものである。24は口縁部の長さが6.5cmを測るもので、端部はわずかに平坦面となっている。器表面は風化しており、調整等は明らかでない。25は直線的に立ち上がった後、端部がさらに外方に反る形態のものである。器壁は薄く、外面の色調は橙色である。26は口縁部が直線的に開く。27は壺。複合口縁で稜は突出している。口縁端部には平坦面を有し、頸部には有軸羽状文、肩部には波状文が描かれている。

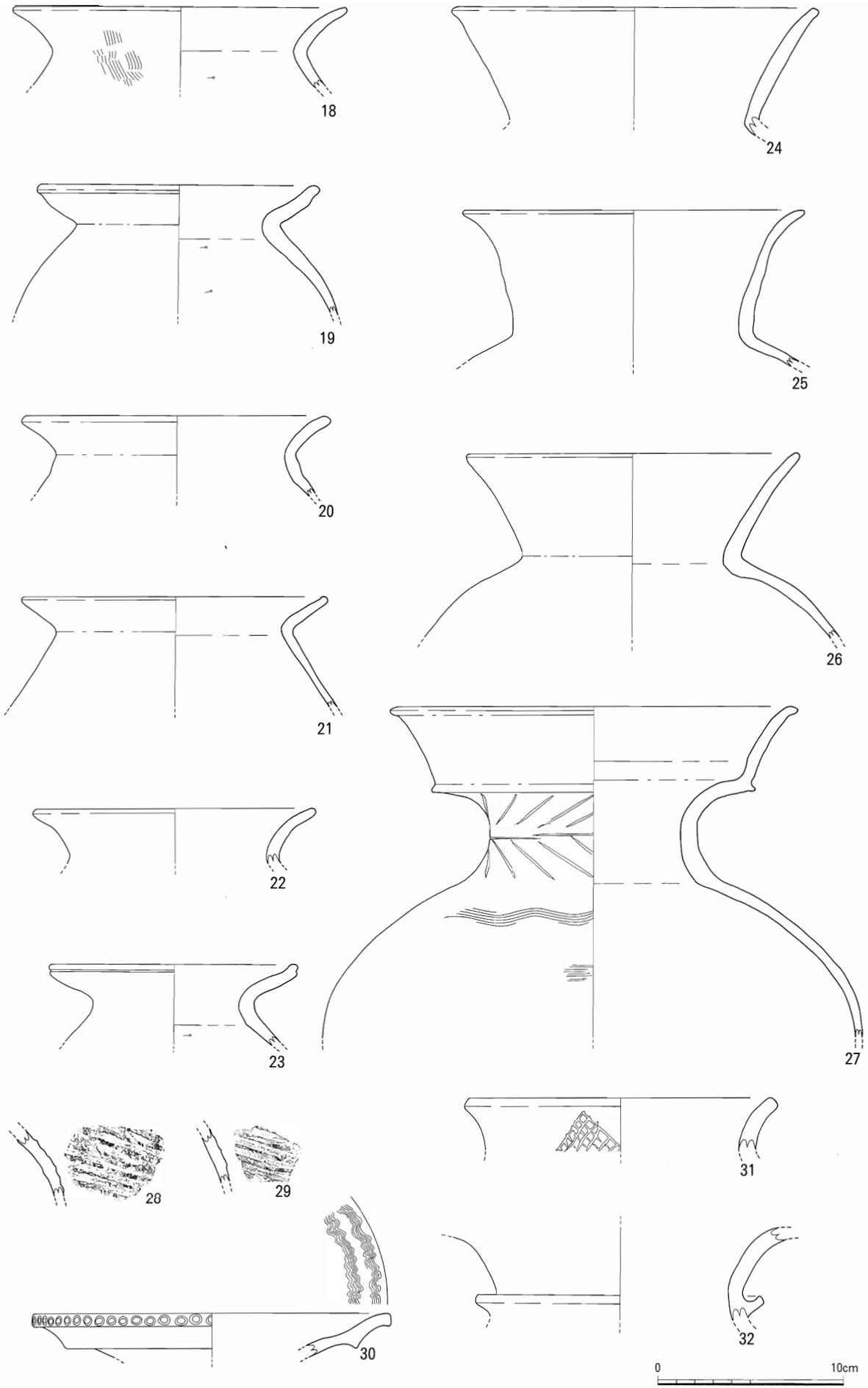
28・29は甕の胴部と考えられる破片である。外面にはタタキが観察できる。30は壺の口縁部と判断される。加飾性の強い壺の口縁部と考えられ、端部平坦面には竹管文が、また内面には2段の波状文が施されている。31も壺の口縁部と考えられるものである。口縁部外面にはヘラ状工具によると考えられる斜格子目状の三角文が描かれている。32は壺の頸部と考えられる個体である。断面方形の突帯が貼り付けられている。30～32は当地域ではあまり類例を見ない。

第43図

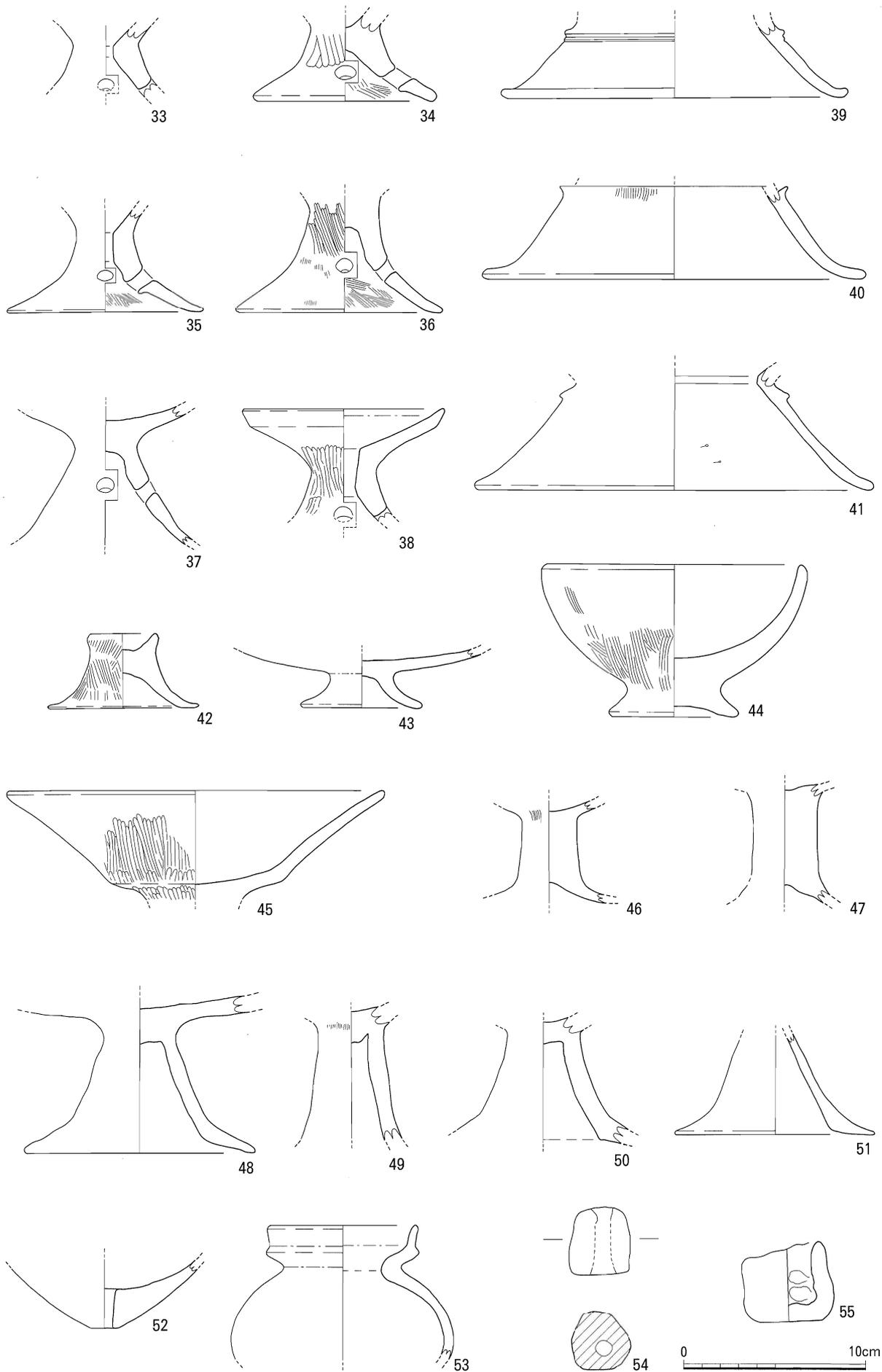
33～38は器台（小型器台）または高坏の脚部と考えられる個体で、円形の透かしを有するものである。透かしは4方向に認められる。33は器台と考えられるが、受部と脚部を失っており詳細は明



第41图 1D区 出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第42图 1D区 出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第43图 1 D区 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

らかでない。受部中央から脚部にかけて孔が穿たれている。34は脚部のみの出土である。外面にはヘラミガキ、内面にはハケメが観察でき、内面の一部には赤色顔料が残る。35は口縁部を失う個体で、受部から脚部へは孔が穿たれている。36も脚部のみの出土で、外面・内面ともハケメが施される。37は高坏の脚部と考えられる個体。38は器台である。受部から脚部にかけては孔が穿たれており、器表面には赤色顔料が残っている。

39～41は器台（鼓形器台）と考えられるものである。いずれも内面にヘラケズリが観察できるもので、脚部と判断される。

42は端部が原形を保っていると判断して、器台状の遺物と判断したが、なんらかの脚部である可能性も十分考えられる。

43は低脚坏、44は台付鉢と考えられるもの。44は口径13.8cm、底径6.4cmで、外面にはハケメが観察できる。

45は高坏の坏部である。坏部には稜を有し、そこから外反しながら開く形のものである。外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

46～51は高坏の脚部である。46・47は脚部上半が中実棒状となるものである。いずれも坏部・脚端部は失っている。48は下位で外方に屈曲する形態のものである。49は径の細いものである。50・51も下位で外方に屈曲するものである。

52は壺または甕の底部と考えられるもので、焼成前に穿孔されている。53は小型の複合口縁壺である。器表面の摩滅が激しく、調整等は明らかでない。54は土錘。長さは3.8cmと短い、最大径3.3cmを測る胴の太い形のものである。55は手づくね土器。内面には指頭痕が明瞭に観察できる。

第44図

56・57は甕。56は外反する口縁部に扁平な胴部のものである。57は口縁部が短く外反するものである。胎土は粗く、小石を多く含んでいる。

58・59は鉢・碗と考えられるものである。58は体部が外方に直線気味に立ち上がり、復元した口径が16.2cmを測るものである。59は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外方に強く折り曲げられる。

60・61は移動式竈の脚部と考えられるものであるが、風化が進んでおり詳細は明らかでない。

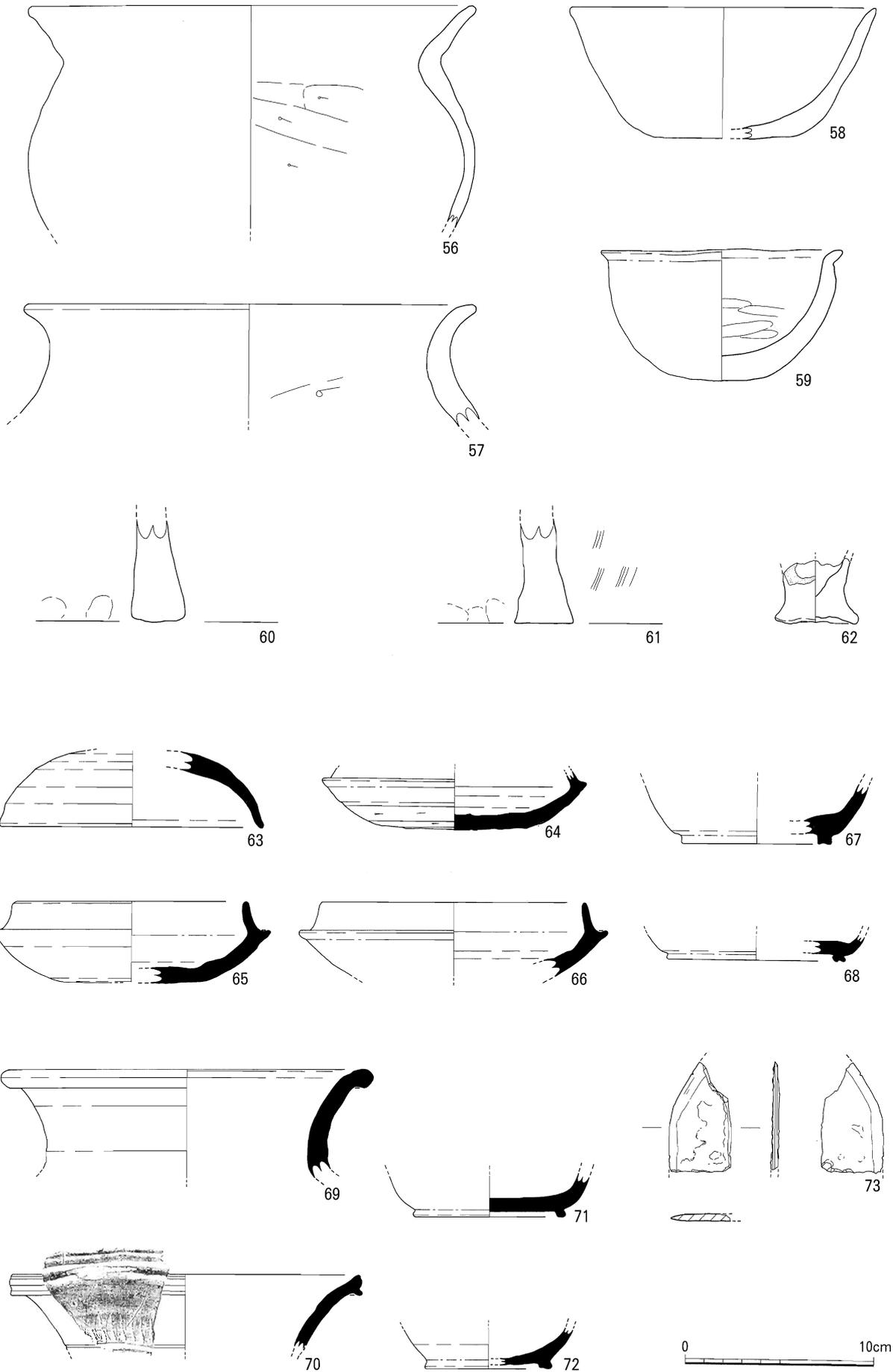
62は上部を失っているためはっきりとしないが、製塩土器脚部の可能性が考えられるものである。

63～72は須恵器である。63は坏蓋、64～66は坏身である。64は口縁端部を失っており、径は推測による復元である。外面底部にはヘラケズリが観察できる。なお、63～66のような形態のものはあまり出土していない。

67・68、71・72は高台を伴う坏である。胴部から口縁部にかけて失っているため全形を明らかにしえないが、72を除き、体部が直線的に開く形態のものと考えられる。

69・70は甕の口縁部と判断できるものである。69は復元した口径が18.8cmを測るもので、口縁端部は丸く膨らむ形のものである。70は口縁端部が面を持ち、そこに沈線が施されている。

73は石包丁である。半分以上を失っている。



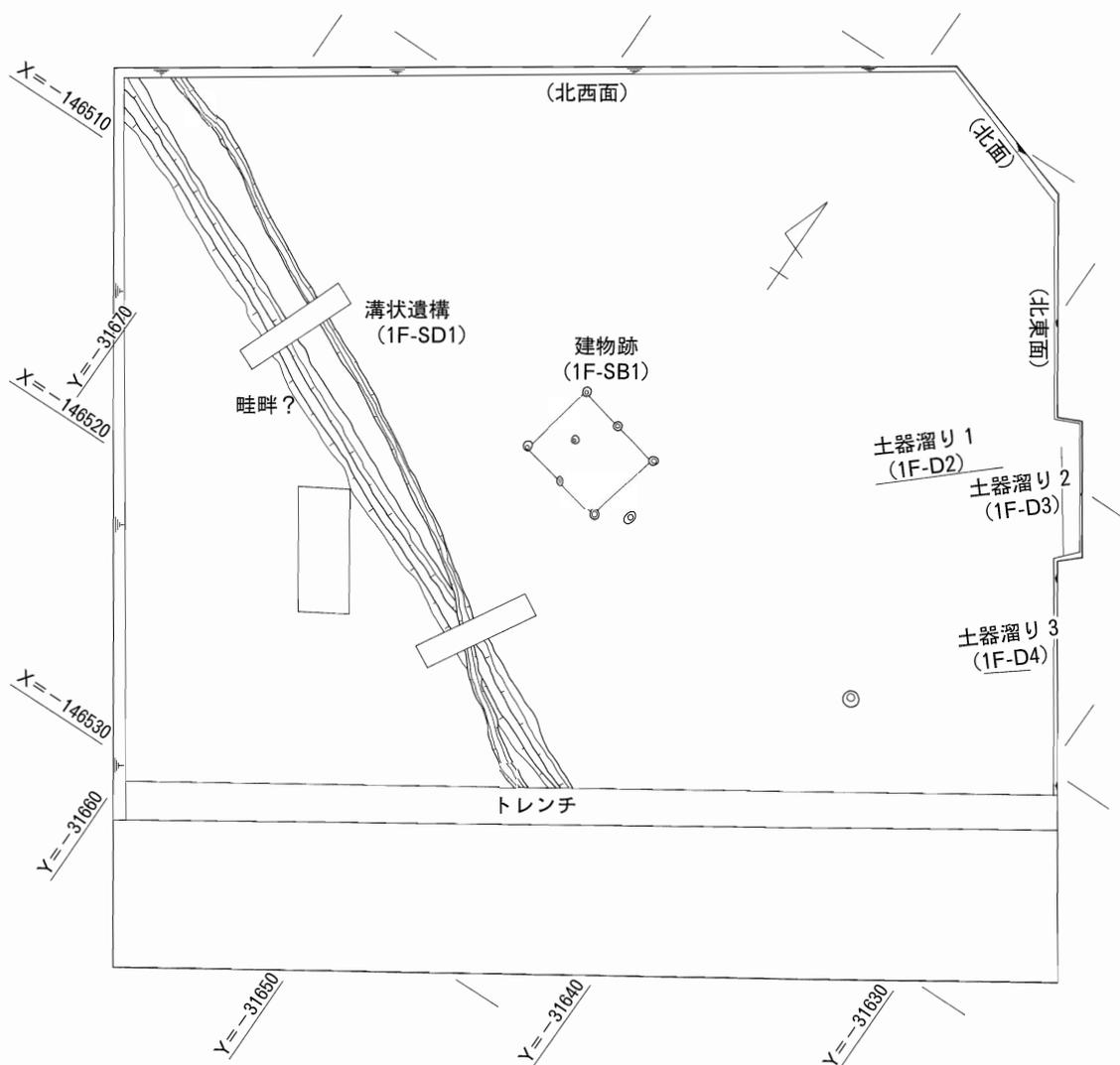
第44图 1D区 出土遺物実測図(4) (S=1/3)

第5節 1F区の調査

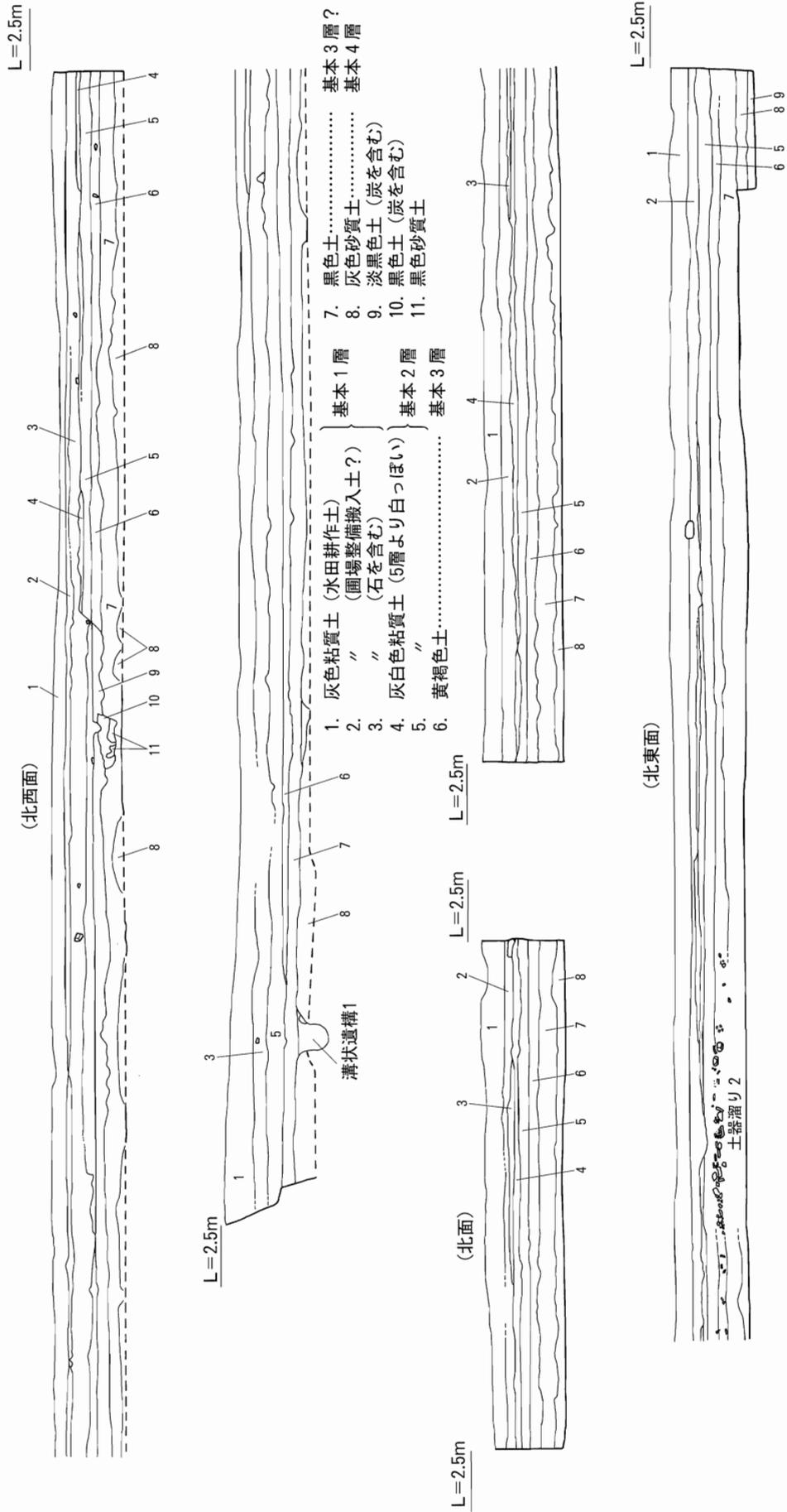
概要

1F区は1C区の東側にある調査区である。調査前は水田として利用されており、標高は約2.2mであった。調査区の南側の一部は、工事及び水田耕作に伴う仮設道の設置が必要であったため、調査を実施していない。

1F区における土層は第46図のとおりである。基本3層までは基本土層と大きく異ならないが、それ以下の層では次の点で様相が異なっている。1つは、東側において1D区で確認した4層（茶褐色土層）に相当する層が認められ、その下に基本4層である砂層が存在する点である。但し、この層が西側で基本3層と同一化している点から判断すると、その色調から別の層位と判断した6層と7層が単に土壌化の違いを反映していると考えられる。その場合、その下に基本4層が存在している状況は矛盾がないと判断することができる。もう1つは、基本5層の存在が調査区の南西側では確認できるものの、北東側ではそれが認められないことである。この状況は、1D区の南西側において確認されたのと同じであり、1F区から1D区に向けて連続した状況であると判断される。



第45図 1F区 遺構配置図 (S=1/300)



第46図 1 F区 土層図 (S = 1/80)

以上のように層位が基本土層と異なる部分があるものの、基本的には大差のないものとして捉えることが可能と判断して調査を行った。なお、基本5層と判断された層より下からは遺構・遺物とも検出されなかったため、5層上面まで5層が確認されなかった北東側ではほぼ同じ高さまで一調査を実施することとした。

1F区においても各層の上面で遺構の検出作業を行った。その結果、基本3層中より土器溜りを確認したほか、基本5層上面からは畦畔状遺構、溝状遺構、建物跡を検出した。遺物は全面的に出土したが、北東側で多く出土する傾向があった。

検出した遺構とそれに伴う遺物

土器溜り1（1F-D2）

調査区北東側中央付近で確認した。表土からは60cm下、基本3層中よりの検出で約25㎡の中に遺物が密集していた。遺物は上下に重なり合うというような状況ではなく、面的な広がりをもって出土している。厳密にはいくつかのまとまりがあるが、調査段階では全て1F-D2出土遺物として取り上げた。甕・高坏などのほか手づくね土器が多くある。また、礫を伴うという特徴がある。

出土した遺物は第48～53図に掲載したとおりである。

第48図に掲載したものは単純口縁の壺・甕類である。内湾気味に立ち上がる4と底部のみの出土で口縁部の明らかでない11を除き、いずれも外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。1・3・6・7は外反しながら立ち上がり、端部がさらに反る口縁部を持つものである。このうち3は、比較的残りのよい個体で、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが顕著に観察できる。

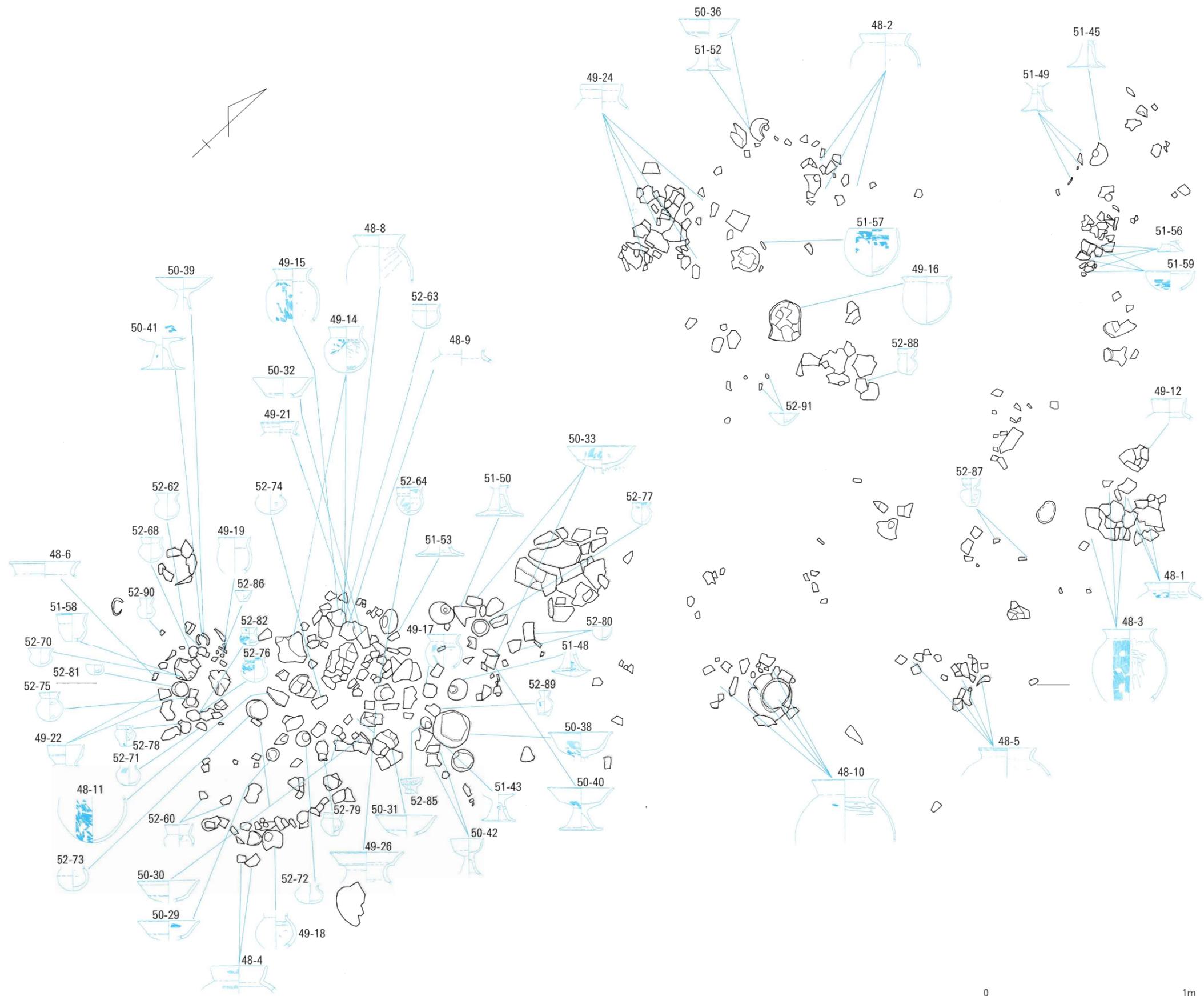
第49図に掲載したものは単純口縁および複合口縁の壺・甕類である。単純口縁のものは12～19で、第48図のものよりは小型のものである。12は壺の口縁部と考えられるものである。直線的に立ち上がり、口径は10.2cmを測る。19はあまり外反しない口縁部に、肩の張らない体部のもので、ややほかのものと形態が異なる。

20～26は複合口縁のものである。20・26のように稜の比較的鋭いものは少なく、21～25のようにあまりはっきりとしない形態のものが多い。

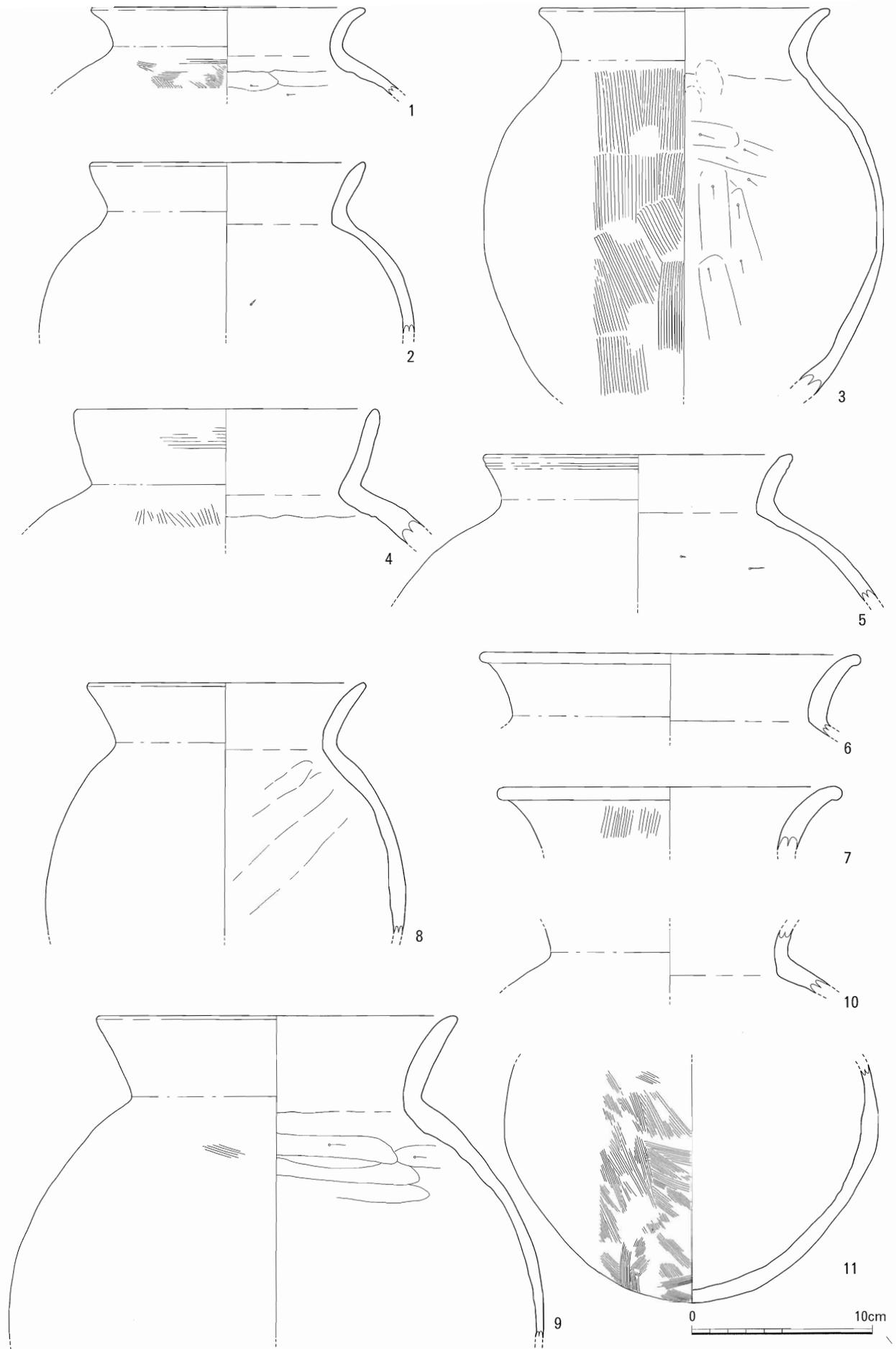
第50図に掲載したものは主に高坏の坏部である。高坏と考えられる破片は多く出土しているが、脚部から口縁部まで復元できるものはあまりなかった。坏部には27～37のように途中で段状の屈曲部を持つものや、38～40のように緩やかにつながるもの、42のように椀状となるものなど、いくつかの形態が認められるが、段状の屈曲部を持つものが多数を占める。このうち40は口縁部から脚部にかけてがほぼ明らかになるもので、復元した口径が19.2cm、高さ12.4～12.8cmを測るものである。

第51図には高坏の脚部、低脚坏、鉢などを掲載した。43～55は高坏の脚部である。そのほとんどが脚端部近くで強く屈曲するものである。43には円形透かしが施されている。56は低脚坏の脚部と考えられるものである。なお、低脚坏は土器溜り2からはほとんど出土していない。57は鉢と考えられるもので、底部は穿孔されている。58も鉢と考えられるものだが、平底で口縁部が開くこのような形態のものはほかには出土していない。59は椀と考えられるものである。

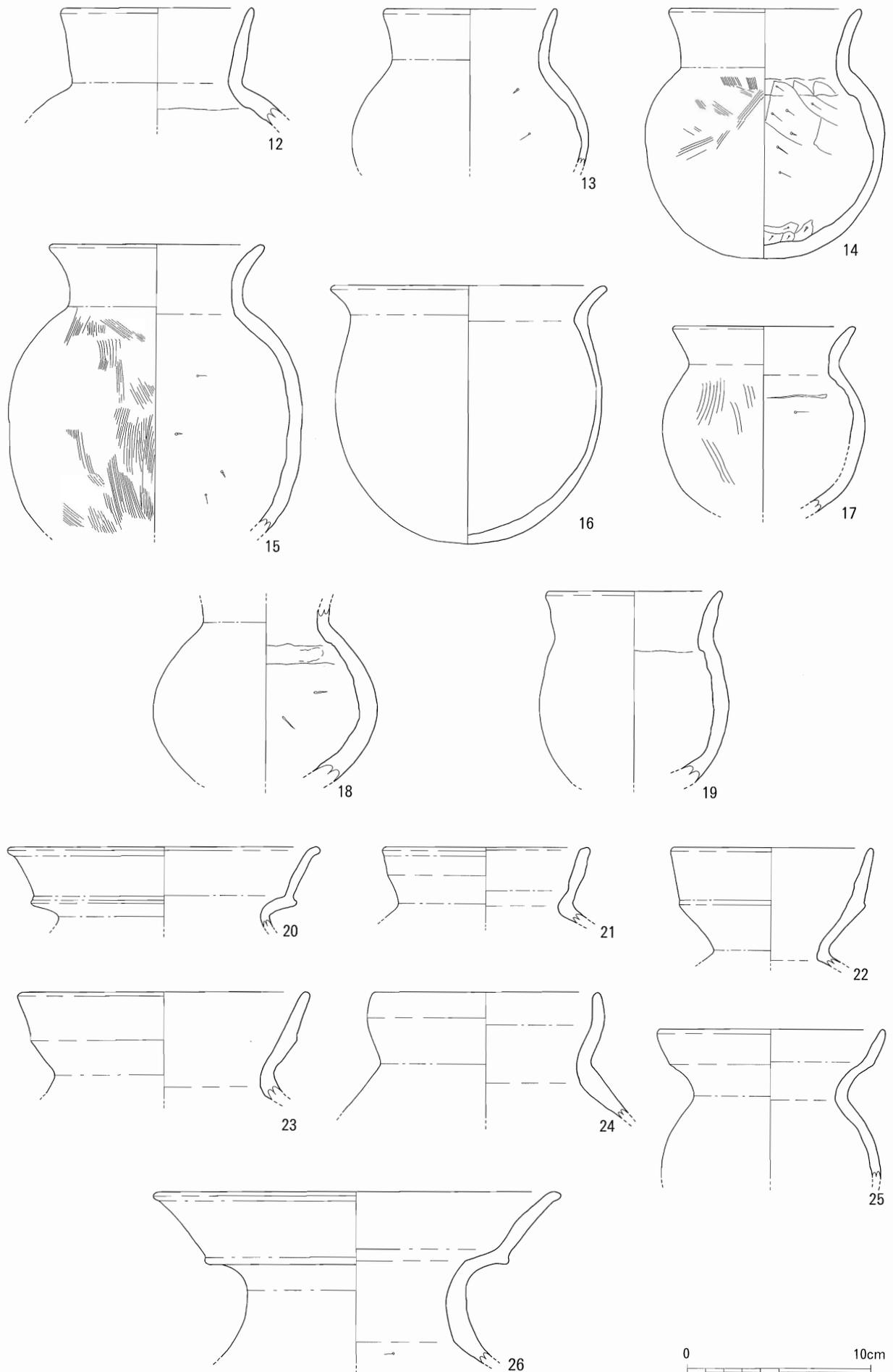
第52図に掲載したものは壺（小型丸底壺）や手づくね土器である。この土器溜りでこれらの小型の土器が占める割合は高い。手づくね土器の中には80・81・85・86のようにお猪口状のものや、87・88のように複合口縁壺を模したものも見られ、さまざまな形態のものが出土している。



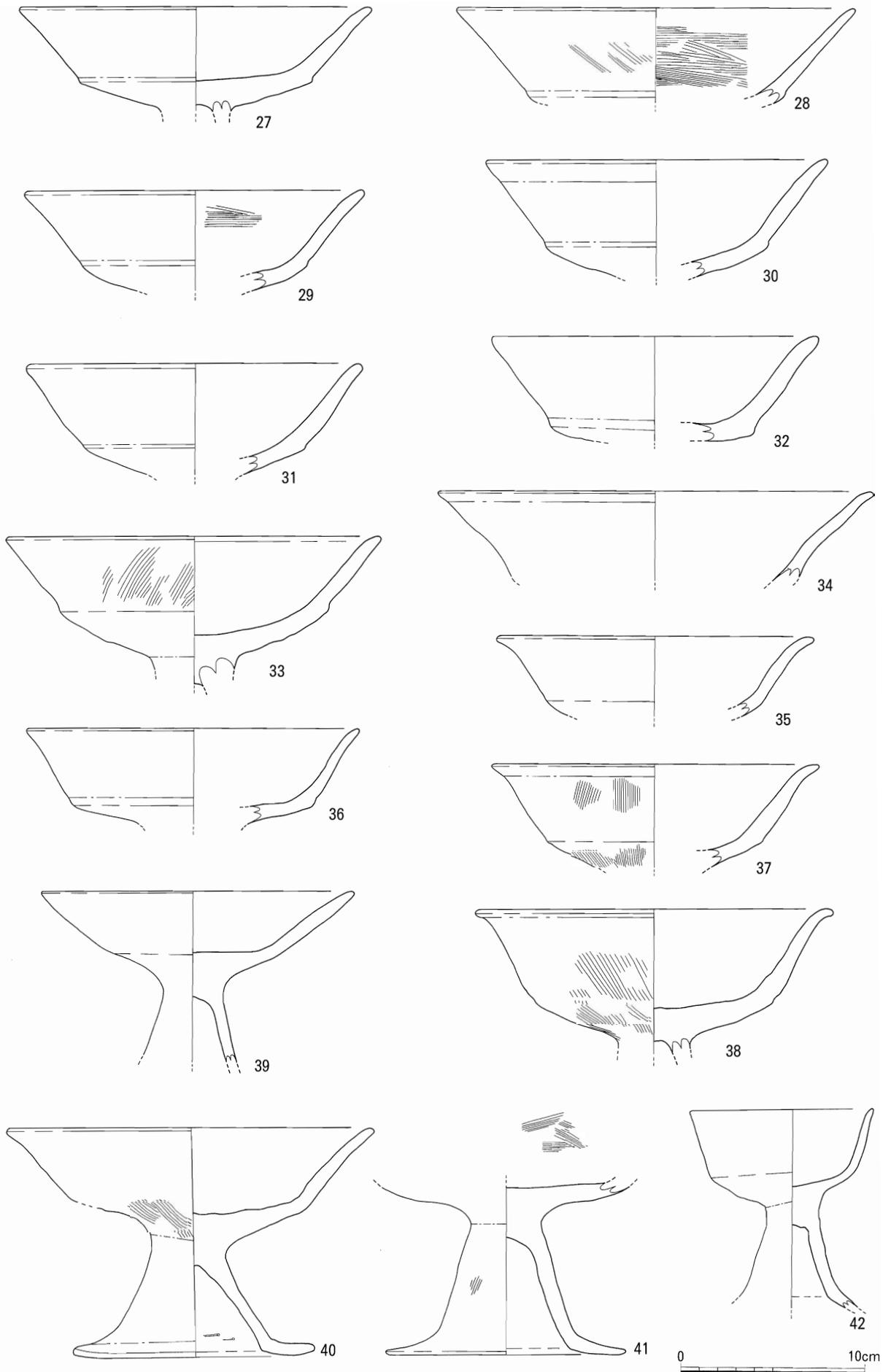
第47図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 遺物出土状況図 (S=1/20)



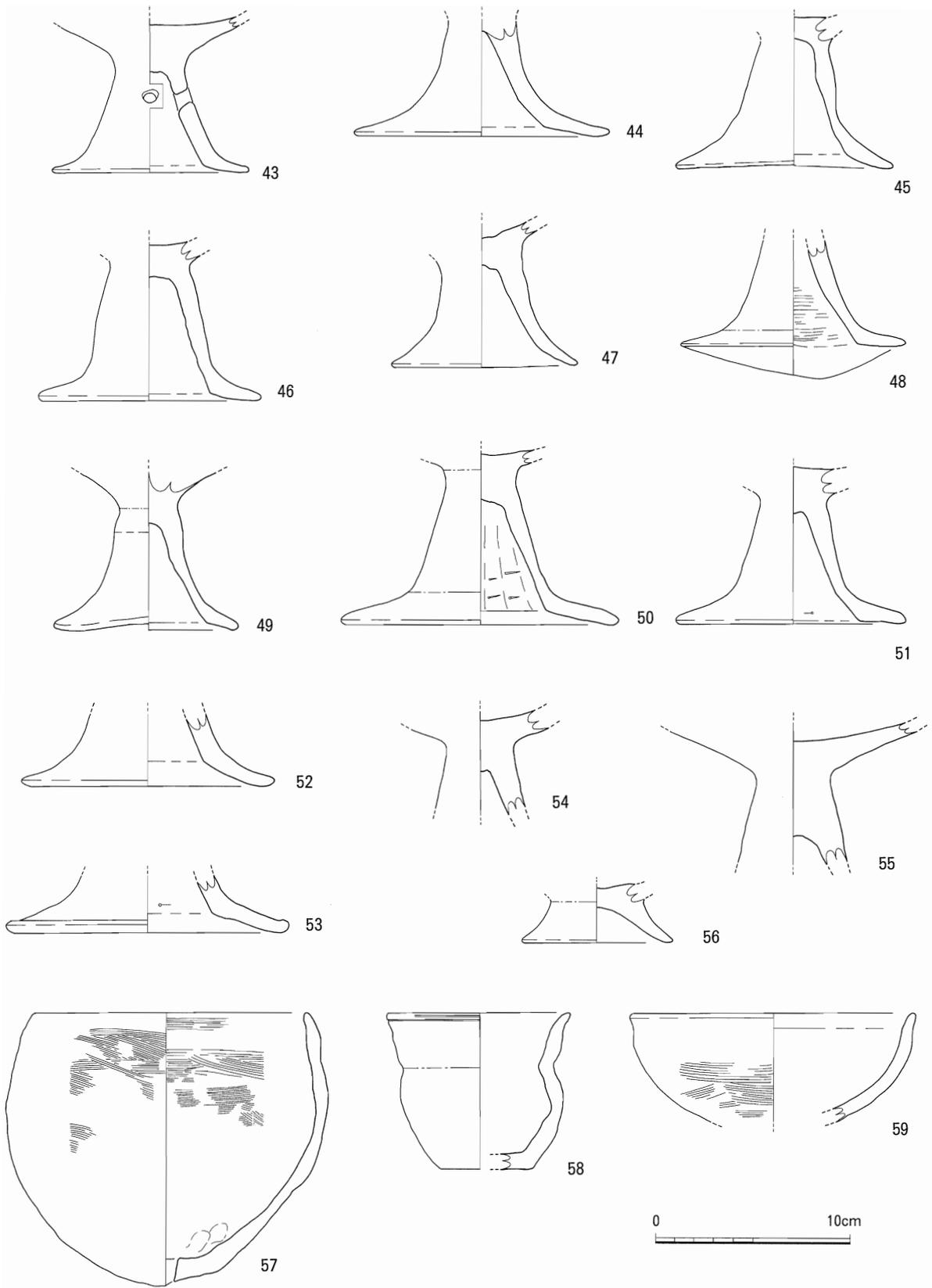
第48図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



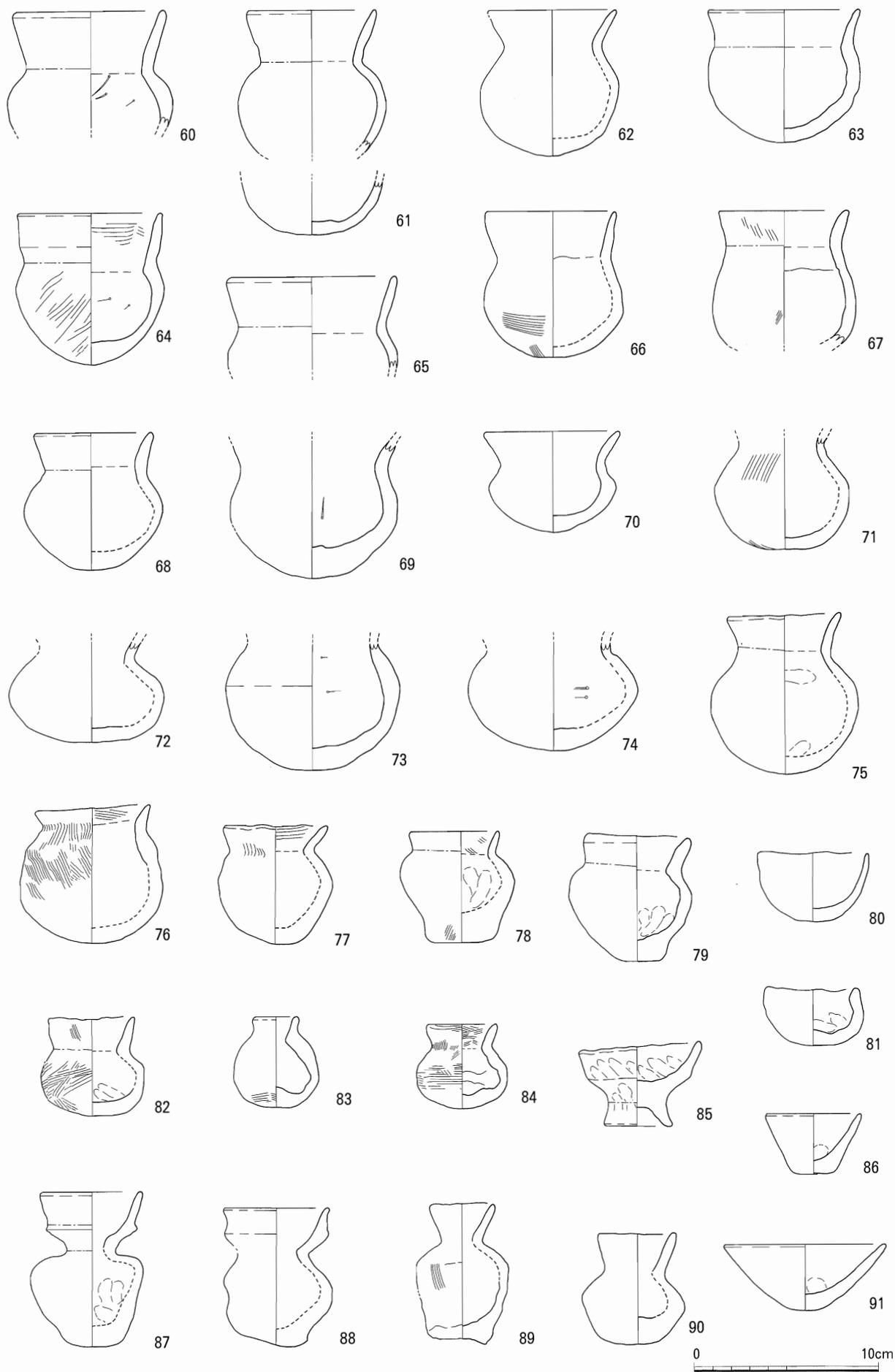
第49図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図(2) (S=1/3)



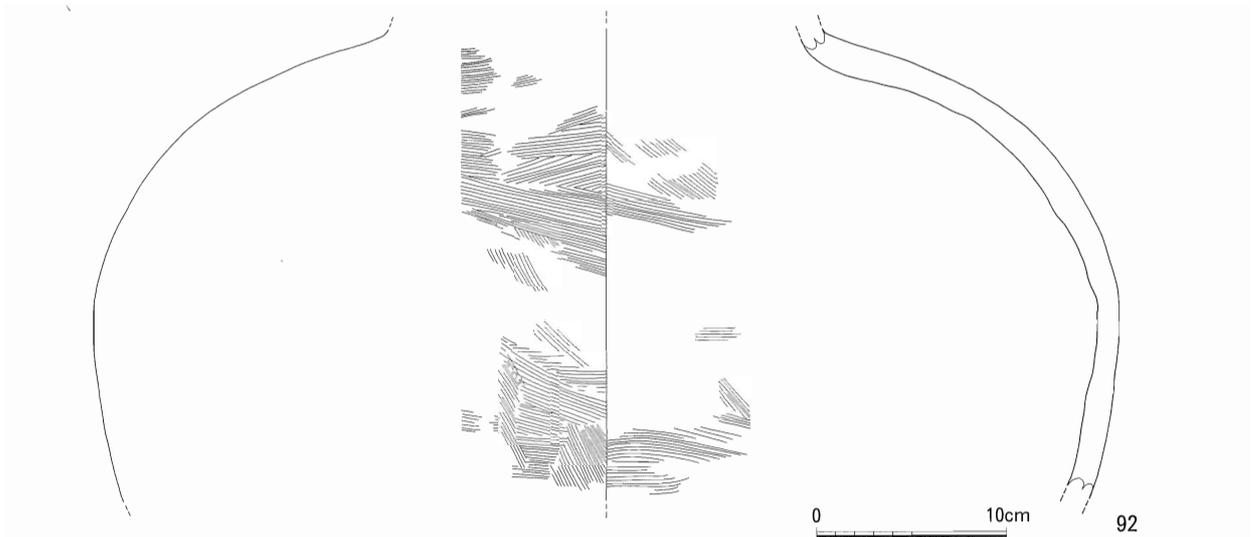
第50図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図(3) (S=1/3)



第51図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図(4) (S=1/3)



第52図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図(5) (S=1/3)



第53図 1F区 土器溜り1 (1F-D2) 出土遺物実測図(6) (S=1/4)

第53図に掲載したものは土師器大型壺の胴部と考えられるものである。約60個の破片となって出土しているが、口縁部や底部に相当するものは確認できなかった。肩の張る形態と考えられ、復元した最大径が、約53.6cmを測る。外面にはハケメが施されている。

これらは、古墳時代前期のものが一部認められるが、ほとんどが中期と考えられるものである。

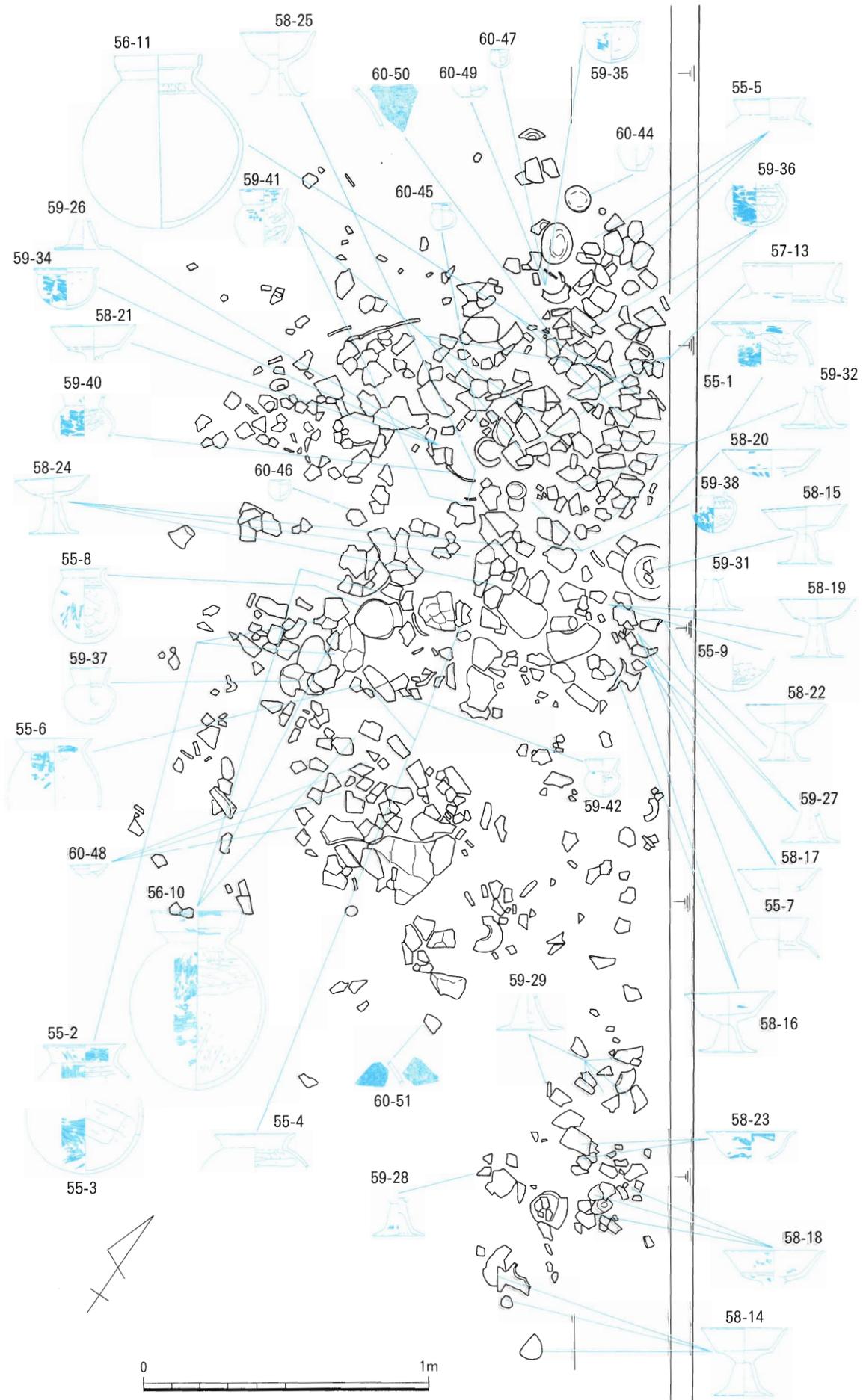
土器溜り2 (1F-D3)

調査区の東側壁付近で確認した。土器溜り1からは約4mの位置にある。表土よりは約60cm下、土器溜り1と同様基本3層中より検出した。長さ約4m、幅は現状で約1.5mほどの間に遺物が密集している状態であるが、壁面までの検出にとどまっているため全容は明らかでない。出土状況からは東側に向かってさらに広がることは確実に判断される。

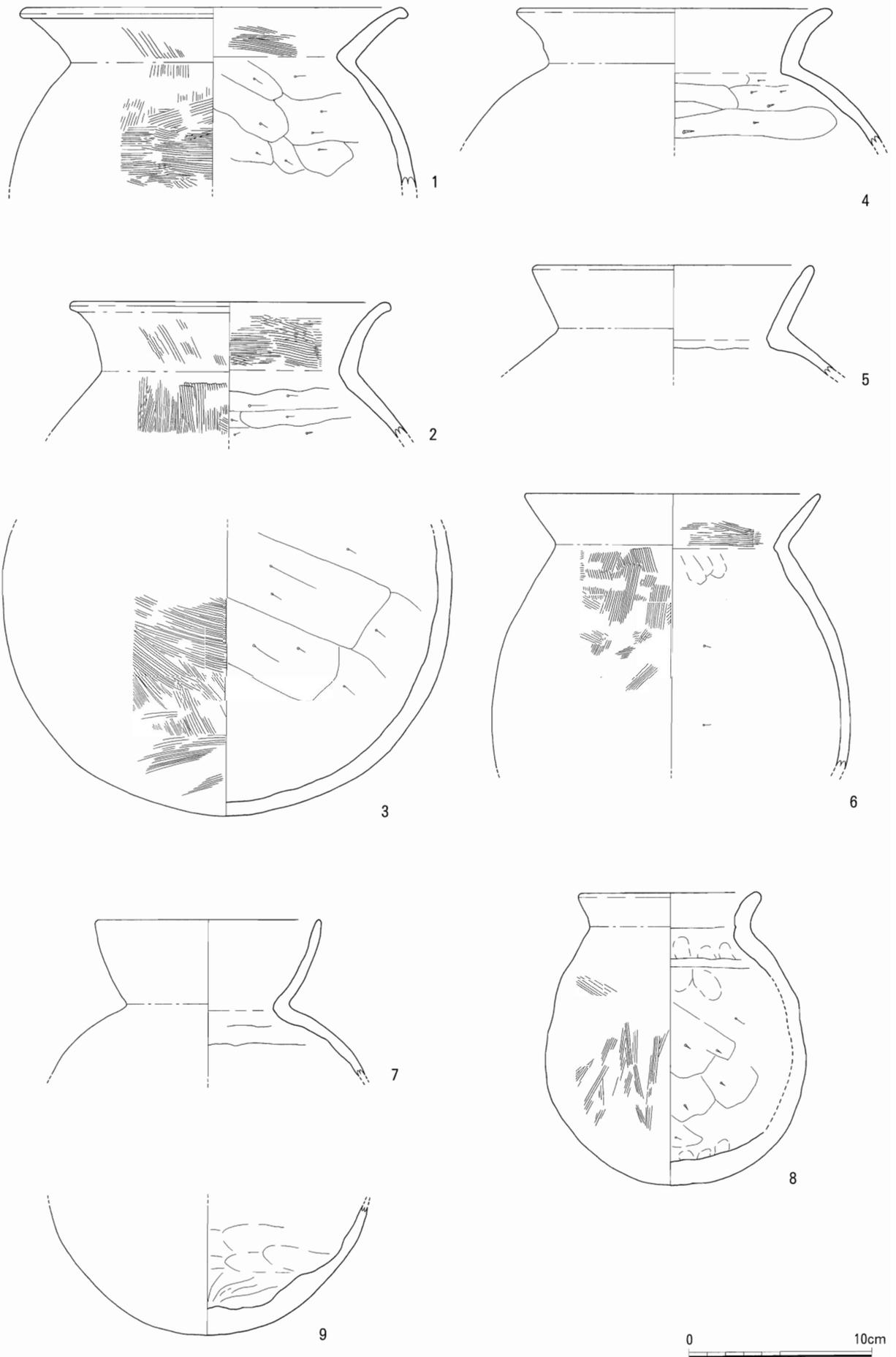
出土した遺物は第55図～第60図に掲載している。土師器のほか須恵器がわずかながら出土している。この土器溜りにおいても礫を伴うという特徴が認められた。

第55図に掲載したのは壺・甕類である。直線的に伸びる5・6、内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ7を除いて、いずれも外反しながら立ち上がる口縁部のものである。1・2・4はさらにその端部が反る形態のものである。なお、2と3は調整・色調・胎土などが似通っており、同一個体と考えられる。

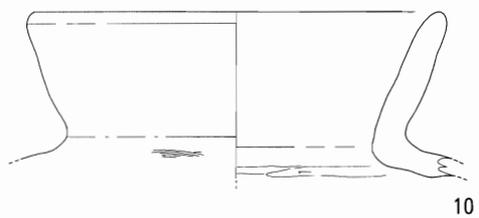
第56図に掲載したのは中～大型の壺である。11・12とも完形ではないが、口縁部から底部までの形状の判明する個体である。11は複合口縁のもので、口縁部は直線的に外方へ立ち上がり、端部は6mm程度の平坦面を有している。外面には縦方向・横方向のハケメが観察できる。内面中位までは横方向のヘラケズリがされ、中位から下位にかけては縦方向のヘラケズリがされている。12も複合口縁のもので、復元した口径が18.4cm、器高36.9cmを測る。外面の稜は退化気味であり、内面ほどはっきりとしない。調整等は風化が進んでおりはっきりとしないが、頸部内面には指頭痕が確認できる。



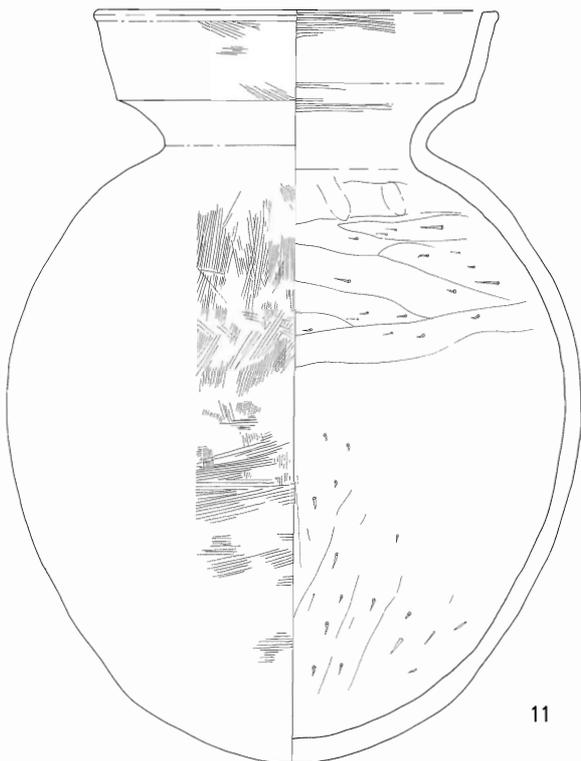
第54図 1F区 土器溜り2 (1F-D3) 遺物出土状況図 (S=1/20)



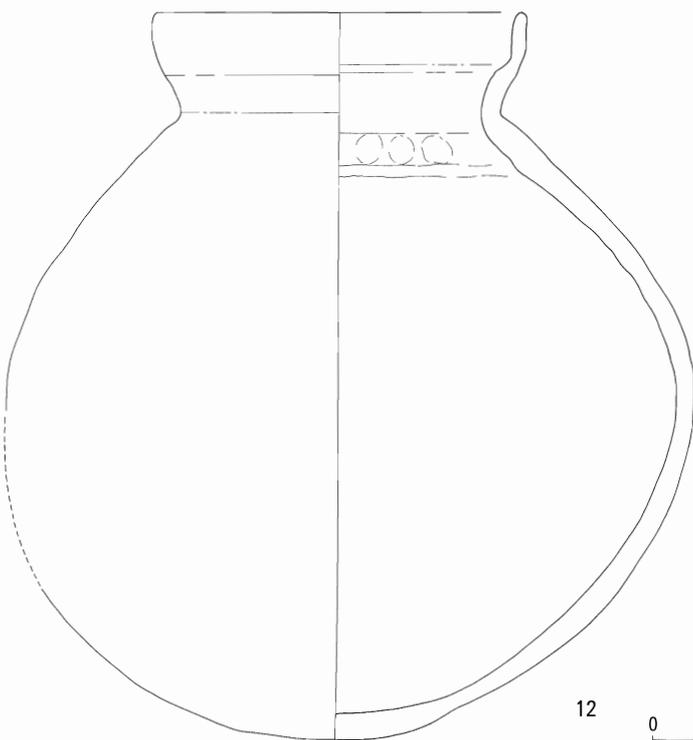
第55図 1F区 土器溜り2 (1F-D3) 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



10



11



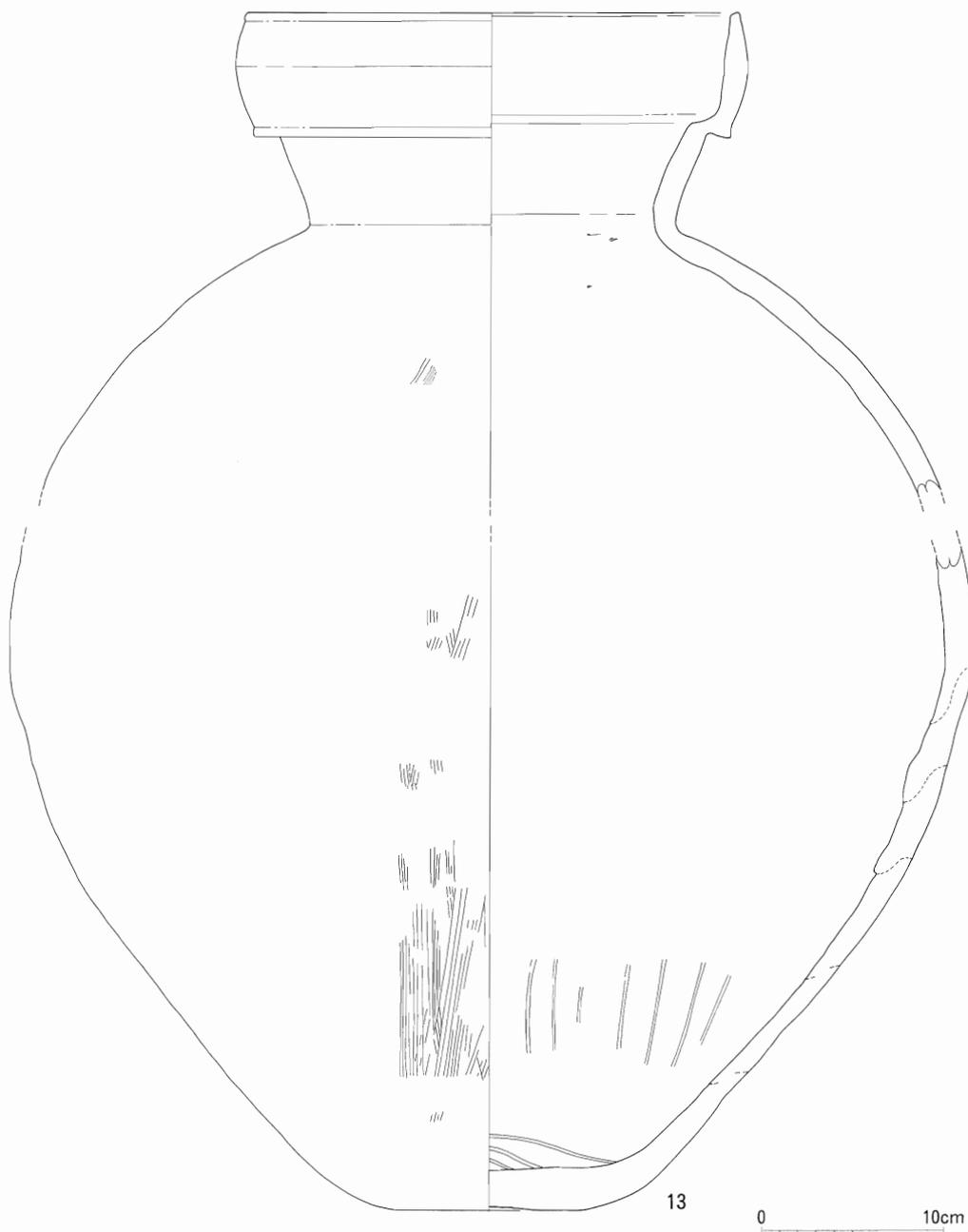
12



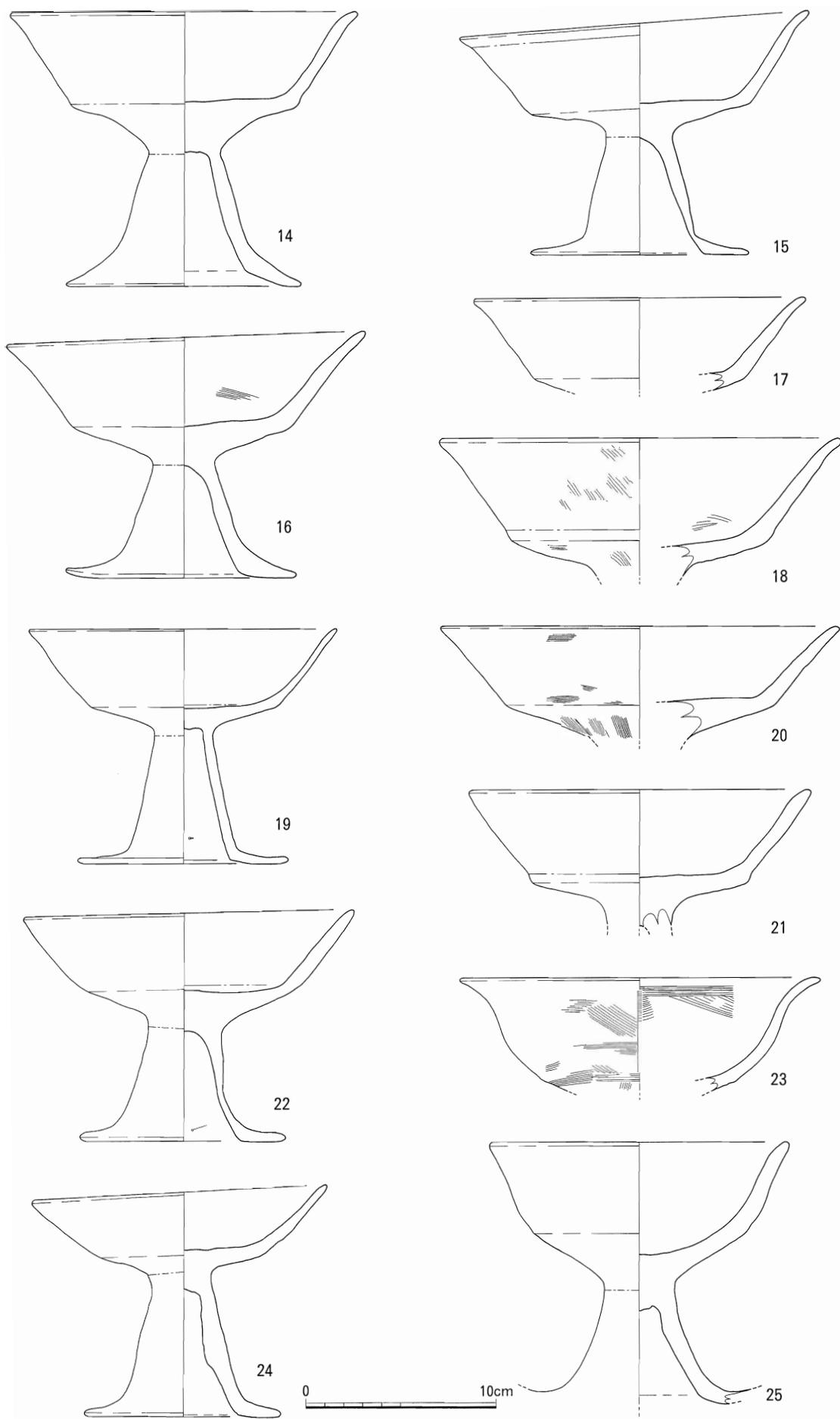
第56図 1 F区 土器溜り2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (2) (S=1/4)

第57図も壺である。大型の複合口縁壺で、口径27.0cm、推定高63.5cmを測るものである。口縁部の稜は下方に突出し、そこから外方に直線的に立ち上がる。ただ、口縁部は外側に向かって膨らみをもっているため、外側から見ると湾曲しているように見える。底部は平底となっている。体部外面・内面とも風化が進んで調整ははっきりとしないが、下半ではハケメが認められる。また体部下下部では粘土紐の接合痕が顕著に認められる。

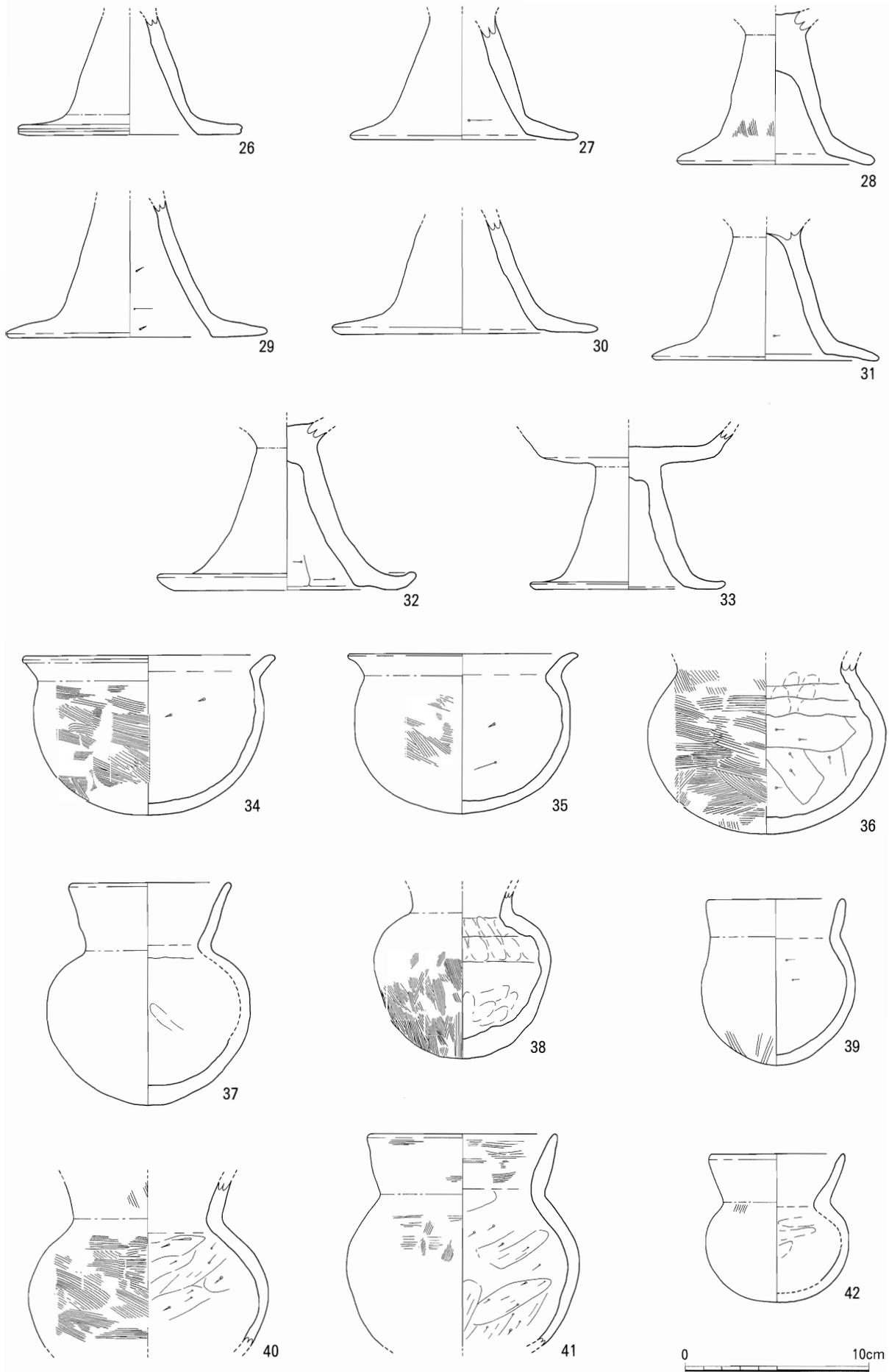
第58図は高坏である。土器溜り2出土のものは、坏部から脚部までの復元の出来るものがいくつかある。基本的には土器溜り1のものと同様の形態で、坏部には途中で段状の屈曲部を持つものや、緩やかにつながるもの、椀状になるものなどの形態が認められるが、段状の屈曲部を持つものが多い。



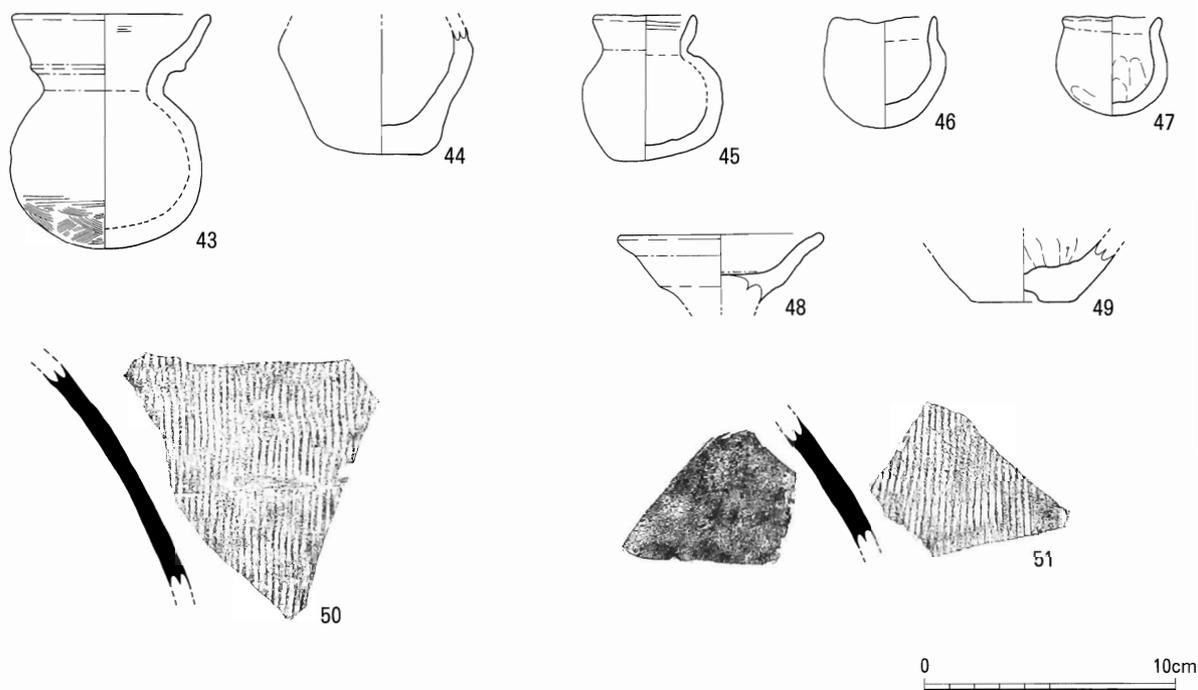
第57図 1 F区 土器溜り2 (1 F-D 3) 出土遺物実測図 (3) (S=1/4)



第58図 1F区 土器溜り2 (1F-D3) 出土遺物実測図(4) (S=1/3)



第59図 1F区 土器溜り2 (1F-D3) 出土遺物実測図(5) (S=1/3)



第60図 1F区 土器溜り2 (1F-D3) 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)

第59図は高坏の脚部・小型の壺・甕などを掲載している。26～33は高坏の脚部で、そのほとんどが脚端部近くで強く屈曲するものである。34～42は小型の壺・甕類である。いずれも外面にはハケメが観察される。38は、内面にヘラケズリではなく指頭痕が残っており、手づくね成形の可能性も高い。

第60図は手づくね土器・須恵器などを掲載している。50・51は須恵器である。甕片と考えられるもので、外面は平行タタキが観察できるが、内面は丁寧にすり消されている。

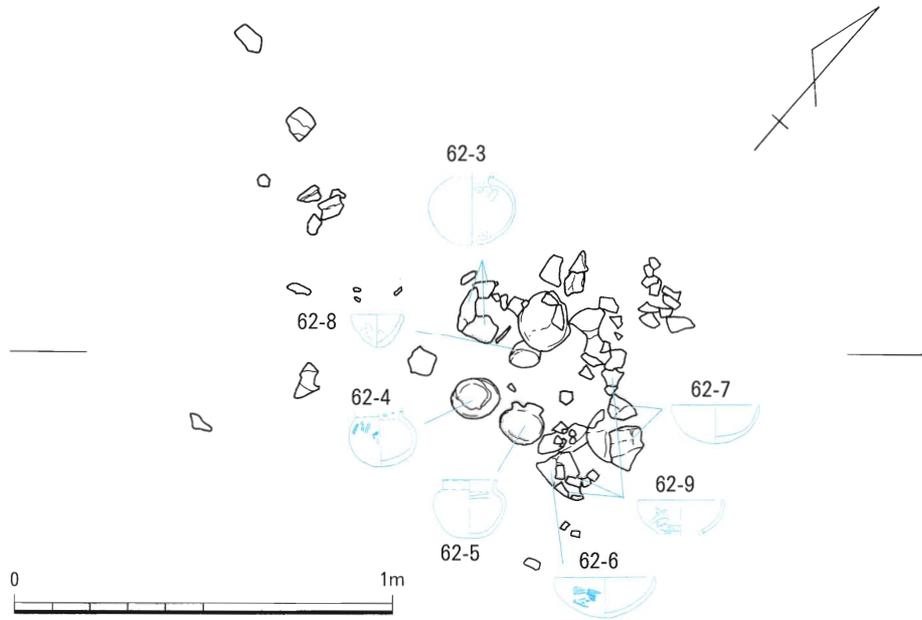
これらの時期についても、基本的には古墳時代中期のものと考えられる。

土器溜り3 (1F-D4)

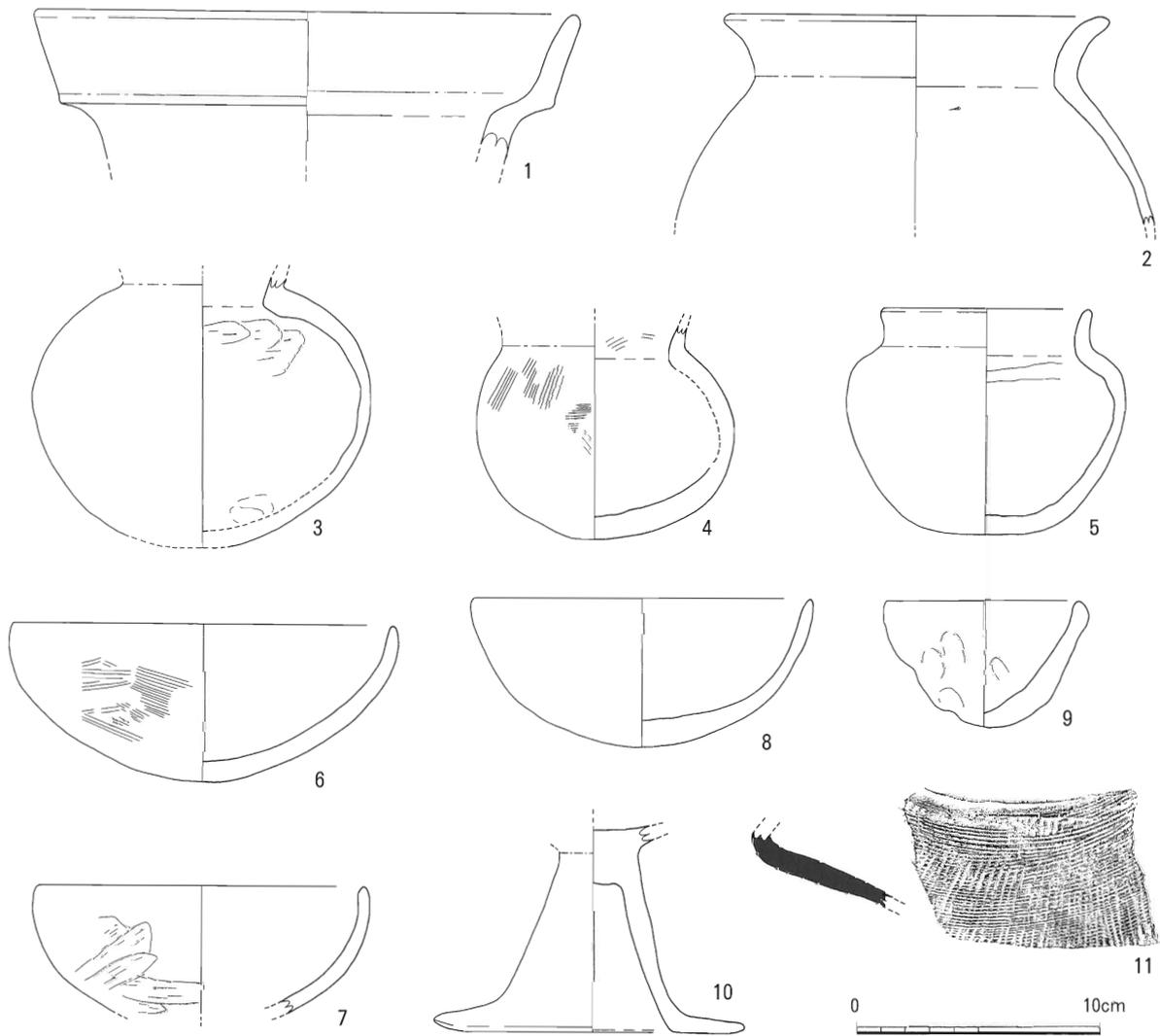
調査区の東側、土器溜り2からは約5mの位置にある。表土よりは約60cm下、ほかのものと同様基本3層中よりの出土である。土器溜り1・2のように面的に広くはないが、一定のまとまりをもって出土している。

出土した遺物は第62図に掲載した。

1は壺の口縁部である。複合口縁で外方に直線的に立ち上がり、復元した口径が22.0cmを測るものである。2は甕である。外反する口縁部を持つ。3・4は口縁部を失っているものの、小型の壺と考えられる。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施されている。5も壺と考えられるものである。口縁部は短く直口状である。6～8は碗と考えられるものである。口径は6が15.6cm、7が13.8cmを測る。9は手づくね土器である。お猪口のような形態をしている。10は高坏の脚部である。脚端部近くで強く屈曲する。11は須恵器で、甕の肩部と考えられるものである。



第61図 1F区 土器溜り3 (1F-D4) 遺物出土状況図 (S=1/20)



第62図 1F区 土器溜り3 (1F-D4) 出土遺物実測図 (S=1/3)

建物跡1 (1F-SB1)

調査区の中央付近に位置する。

規模は1間×2間と大きくはない。主軸はN-78°-Wである。

結果として基本5層（但しこれが確認されたところは、前述のとおり明確な基本5層は認められなかったところであり、厳密に言えば同レベルのところである）の上面で確認しているが、ピット内の埋土は基本3層に由来するものであり、その段階のものと考えられる。

これに伴う遺物は出土していない。

畦畔状遺構

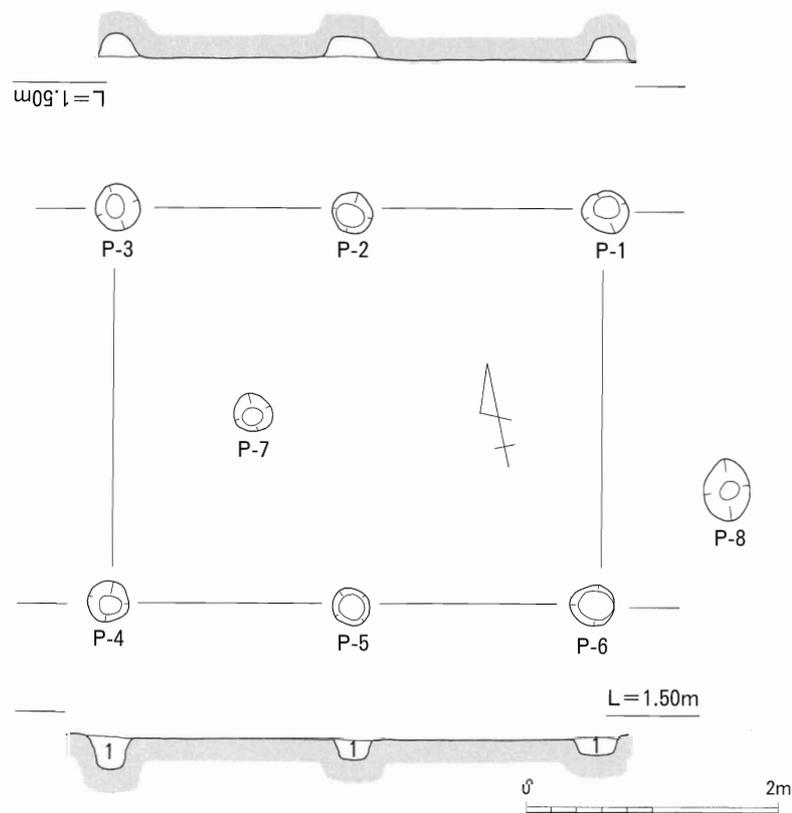
調査区の南側に位置する。畦畔状の高まりは幅約70cm、高さ約20cmを測るもので、東西方向に伸びている。この畦畔状の高まりについてはこれ以外の情報がないため、その性格や時期については明らかでない。ただし、1B・1C区において検出した水田跡とほぼ同じ方向に伸びていることなどからすると、それらに伴うものである可能性が考えられる。

溝状遺構

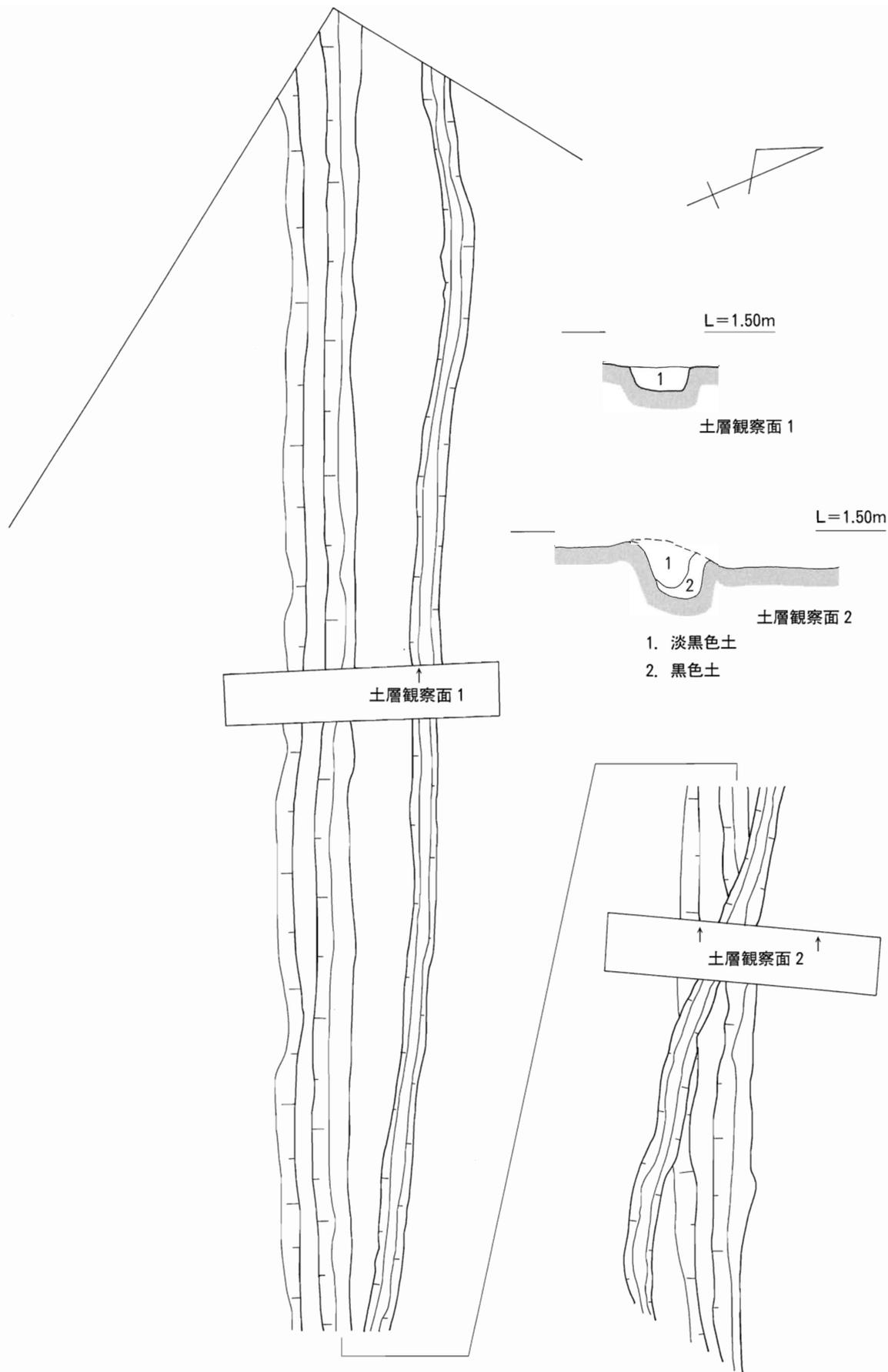
調査区の南側に位置し、東西方向に伸びるものである。畦畔状遺構とほぼ平行な位置関係にあるが、東側では大きく曲がりそれを切っている。

幅は約50cmとそれほど広くなく、深さも40cm程度と浅いものである。

遺物は出土しておらず、時期については明らかにできなかった。



第63図 1F区 建物跡1 (1F-SB1) 実測図 (S=1/60)



第64図 1F区 畦畔状遺構・溝状遺構 (1F-SD1) 実測図 (S=1/100)

遺構に伴わない遺物

1 F区からは弥生時代～江戸時代に至る多くの遺物が出土した。ほかの調査区と同様にほとんどが基本2・3層中からの出土であり、基本4層以下では出土していない。

出土遺物のうち主なものを第65～73図に掲載した。基本的に種類・時期ごとにまとめているが、一部これと異なる部分がある。以下、各遺物について記述する。

第65図

1・2・4・5は弥生土器甕の頸部と考えられるもので、刻み目のある突帯を有している。3・6は甕の口縁部と考えられるもので、端部は肥厚し平坦面を有する。風化が進行しており調整等はつきりしないが、3は外面に刺突文が施されているのが観察できる。7は器台型土器（鼓形器台）の脚部と判断できるもので、外面には擬凹線文が施されている。

8～14は土師器甕と考えられるものである。いずれも複合口縁のもので、口縁部は外方に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びるもの（8・9・11）や平坦面を有するもの（12～14）がある。14は底部を失っているが、ほぼ形の復元できるものである。口径は20.8cmを測り、外面肩部には刺突文が施されている。

第66図

15・16・17は土師器甕と考えられるものである。17は口縁部が垂直気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。復元した口径が11.4cmを測るもので、外面肩部には波状文が施されている。18は壺で大きく外反する口縁部を持つ。

第67図

19～21は土師器の中～大型の壺と判断されるものである。19はやや外方に、20は内傾気味に、21は垂直に立ち上がる口縁部を持つ。21は接点が見つからなかったものの、底部も出土しており、ほぼ全容の分かるものである。復元した口径が27.4cmを測るもので、推定される高さは47～48cmである。口縁端部は幅8mmほどの平坦面を有している。頸部には有軸羽状文が施されており、その下にもう1条の沈線が廻らされている。胴部外面は上位で横方向のハケメ、中位以下で縦方向のハケメが観察できる。底部は平底となっている。

第68図

22～35は土師器壺・甕と考えられるもので、いずれも単純口縁のものである。22は口縁部がやや強く外反するものである。23・24・25は口縁端部が内側にわずかに摘まれて段状になる。26は口縁部を失っているが、22～25などと類似する形態のものと考えられる。外面には刺突文が施されている。28・30も口縁部がやや強めに外反する形態のものである。これらの器壁はいずれも薄いつくりとなっている。27・29・31～35は緩やかに外反する口縁部を持つもので、やや器壁も厚くなっている。外面には縦方向のハケメ、内面にはヘラケズリが施される。34はやや長めの口縁部を持つ。

第69図

第69図に掲載したものは土師器甕と考えられるもので、いずれも単純口縁のものである。器壁はやや厚めとなっている。36・37・39は内湾気味の口縁部を持つ個体で、37は端部に平坦面を有している。38・40は外反しながら立ち上がる口縁部を持つ個体である。40は復元した口径が17.2cm、推定される高さ35.7cmのものである。外面には縦方向のハケメ、内面にはヘラケズリが施される。

第70図

41～46は高坏の坏部である。41～43・45は坏部に段を持つもので直線的に開く形態をしている。44・46は坏部に明瞭な段が確認できないものである。46の口縁部は外反しながら開く形態である。47はほぼ全形の分かるものである。坏部は外面に段を持ち、内面は椀状に凹んでいる。脚部は端部近くで強く屈曲している。48～50は高坏の脚部であり、いずれも端部が強く屈曲する形態のものである。51・52は台付の鉢と考えられるもので、口縁端部を失っている。53は低脚坏の脚部と考えられるもので、上部を失っている。54は器台型土器（鼓形器台）である。受部と判断したが、脚部の可能性も残るものである。

第71図

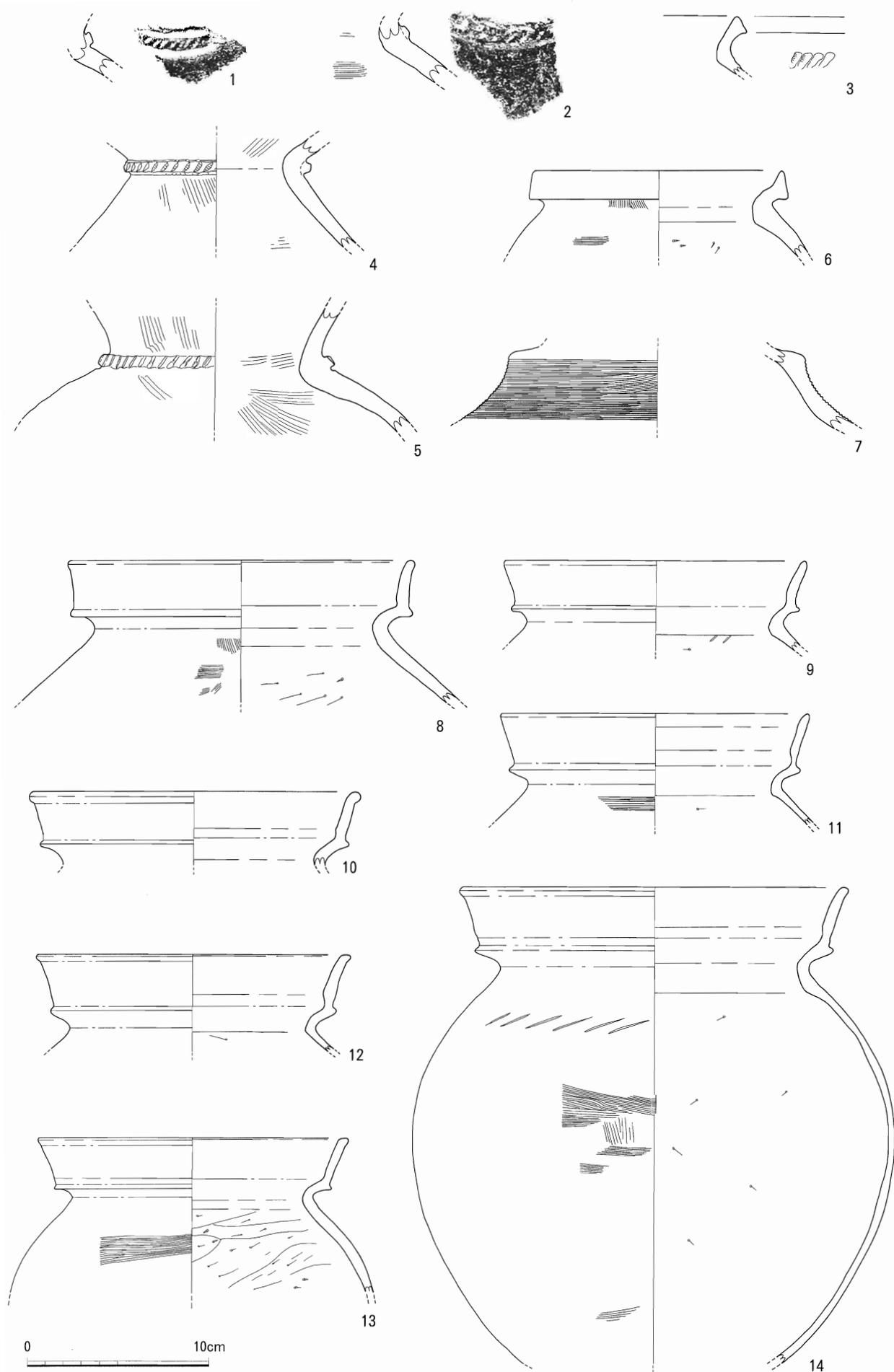
55・56は器台型土器（鼓形器台）である。56はほぼ全形の分かるもので、口径17.0cm、脚部径16.4cm、器高11.2cmを測る。筒部は約1.6cmとなっている。57も器台型土器（小型器台）と考えられるものである。58は高坏の脚部である可能性が高いもの。57・58ともに円形透かしを有するものである。59は壺の頸部と考えられるが明らかでない。60は小型壺と考えられるもの。口径7.0cm、器高9.0cmを測る。61・62は壺の口縁部と考えられるが、それ以下を失っている。63～65は鉢と考えられる。このうち63は口径9.0cm、器高8.9cmを測るもので、外面・内面ともハケメが観察できる。66・67・69は椀と考えられるものである。66・67は内湾しながら立ち上がる。67は端部がさらに内側に曲がるものである。68・71は壺・甕または鉢などの底部と判断できるもので、底部中央が穿孔されているものである。70・73・74も壺・甕の底部と考えられ、平底または円盤状のものを貼り付けて平底状としているものである。72は甑と考えられるものだが、小片のため不明な部分も多い。頂部には3箇所孔が確認できる。

第72図

75は大型の壺の口縁部と考えられるものである。複合口縁で複合部分が水平方向に大きく突出するものである。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、端部は平坦面となっている。複合部から口縁端部までの外面にはヘラ状工具によると考えられる斜格子状の文様が描かれている。76も大型の壺で、口径16.0cm、推定される器高は29.0cmを測るものである。胴部の一部を失っているが、比較的残りは良い。口縁部は内傾気味に立ち上がり、頸部には突帯が廻らされている。外面にはハケメが観察できる。

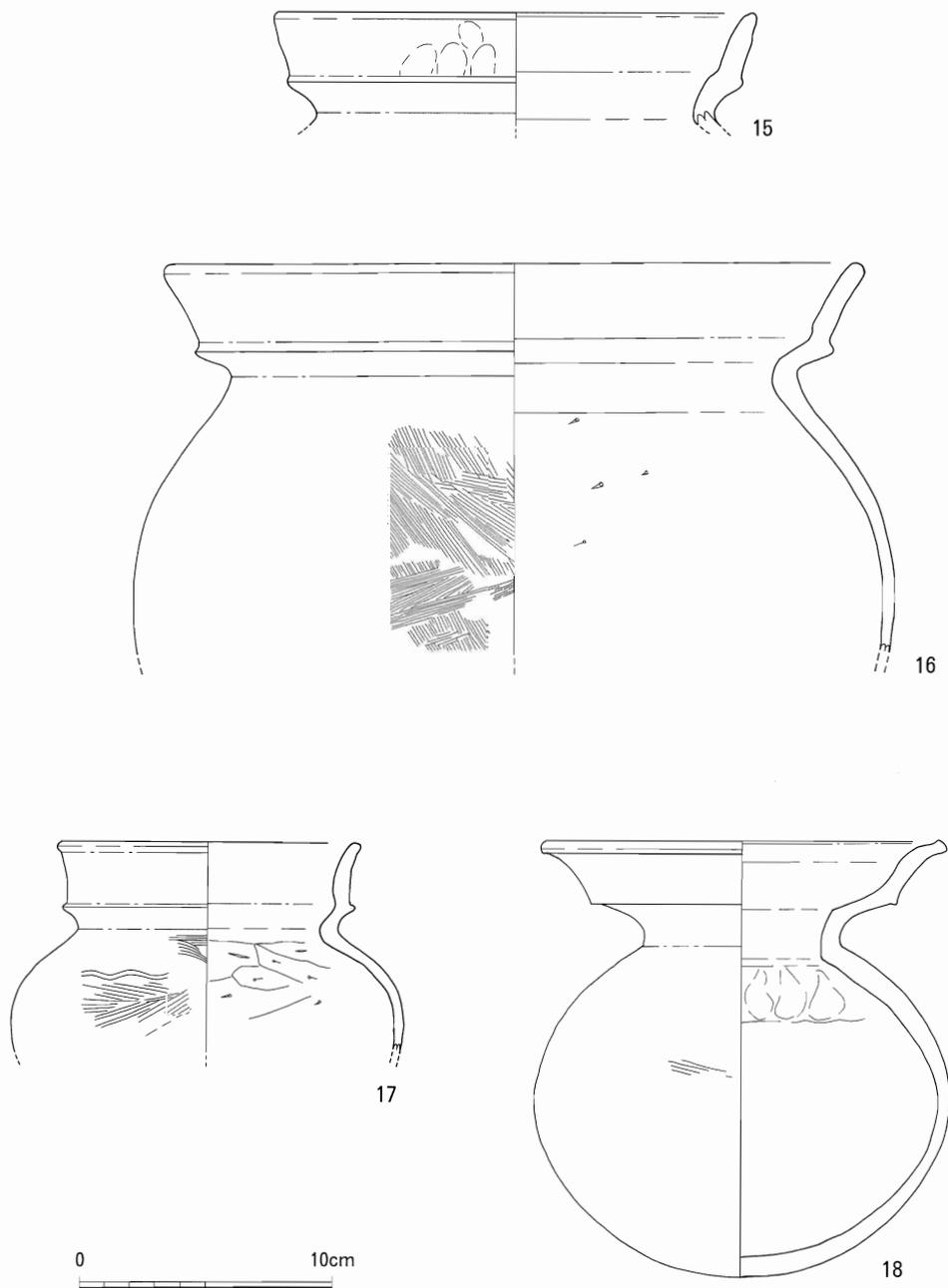
第73図

77～91は須恵器である。77は壺と考えられるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がるもので、外面には2条の突帯が廻らされている。突帯は上側のものが鋭く、下側のものが丸みを帯びる。上下の突帯の間には波状文が施されている。78は甗と考えられるが小片のためはっきりとしない。外面には確認できるもので4段の波状文が施されている。79は鉢と考えたが不明。把手の痕跡が残っており、本来は把手が付くものである。一部を失っているがほぼ完形に復元できる個体で、口径7.8cm、器高7.7cmを測る。体部は沈線及び突帯で3段に区画され、中央区画には波状文が施されている。80は高坏と考えられるものである。外面には2条の突帯が廻らされ、その下には波状文が施される。器壁は薄い。81は坏蓋である。復元した口径は10.8cmとなっているが、小片であり不確定な数値である。口縁端部をわずかに反らせ不明瞭ながらも沈線が入れられる。82～84は坏である。82は復元した口径が11.8cmを測るものである。口縁部が直線気味に立ち上がり、その端部は平坦面と

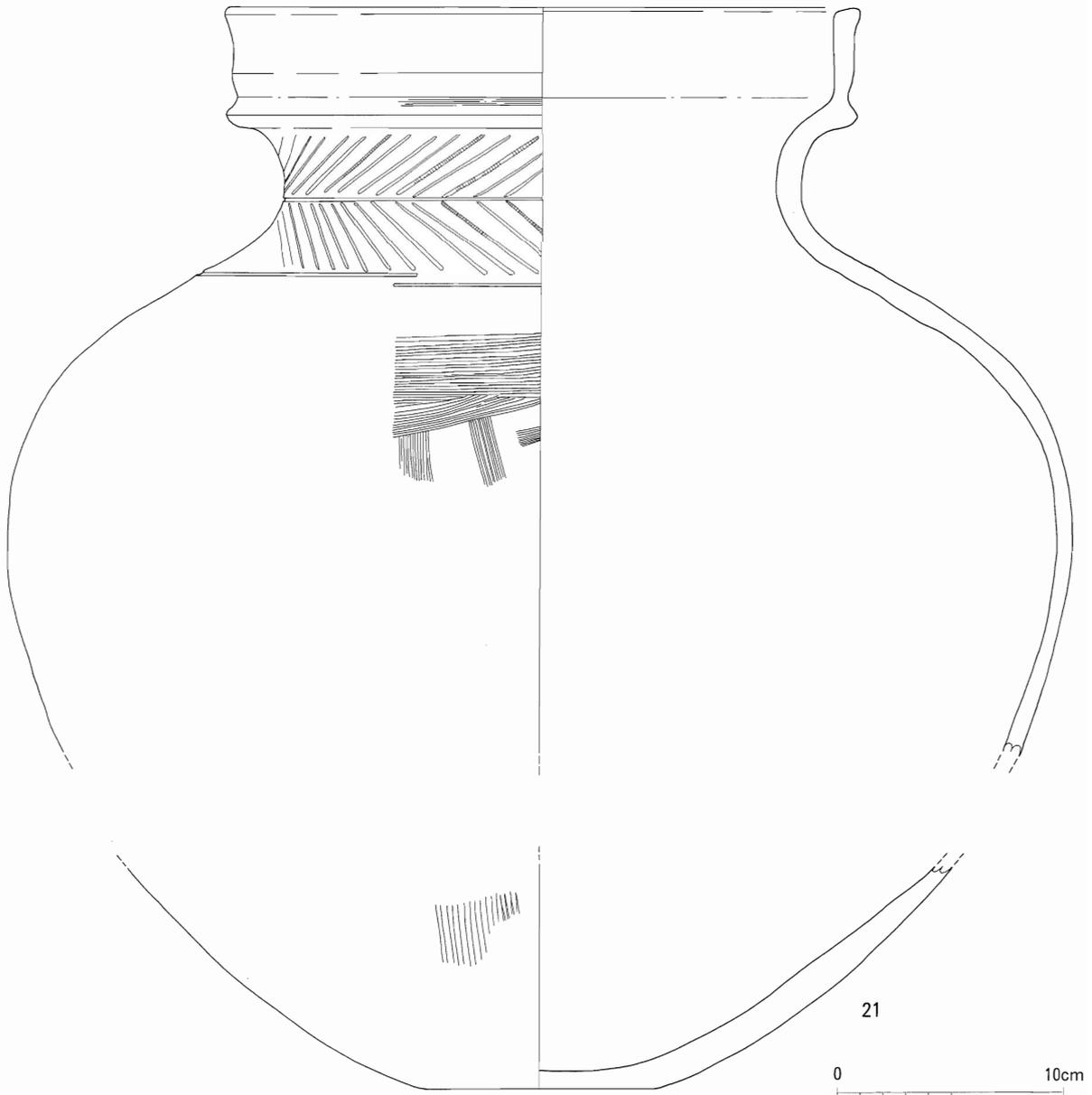
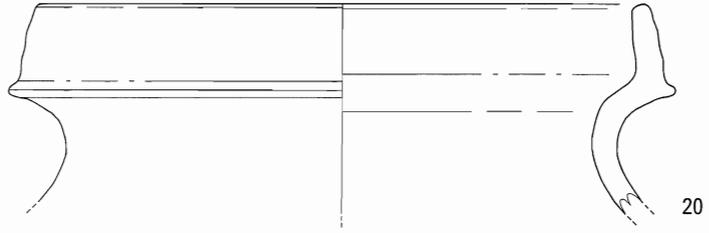
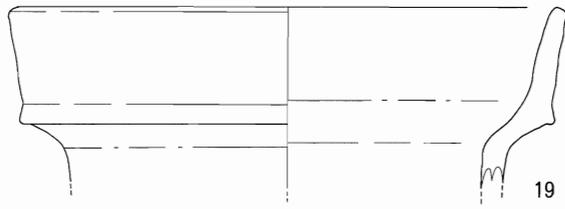


第65图 1 F区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

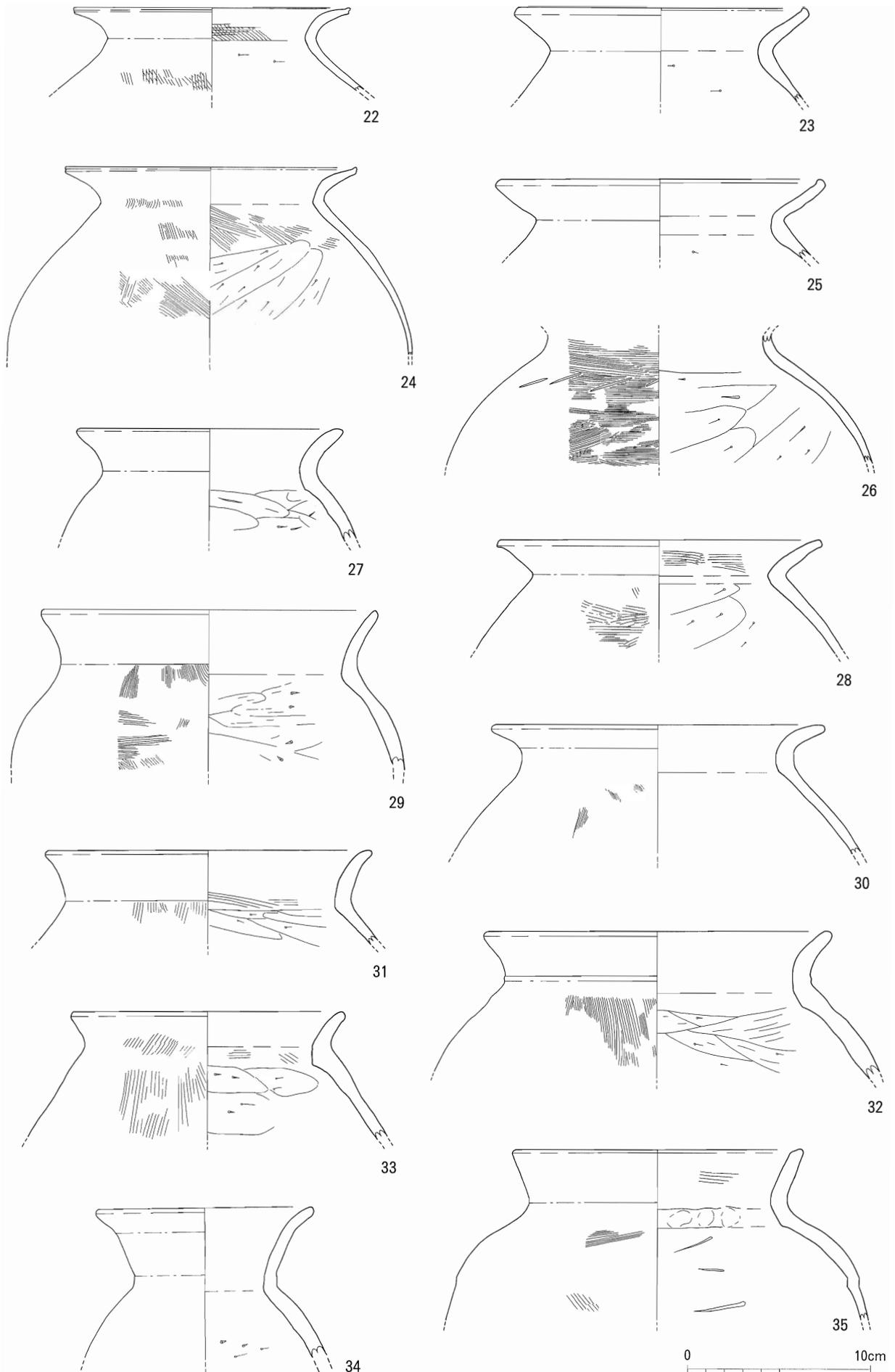
なっている。体部外面にはヘラケズリが施されている。83は口縁部がやや内傾気味に立ち上がる。復元した口径は10.4cmとなるが、小片であり不確定な数値である。口縁端部には段を有する。84は内傾気味に立ち上がる口縁部を有する個体で、口縁端部は薄く丸い。外面にはヘラケズリが観察できる。85は蓋である。天井部分はほとんど残っていないが、輪状のつまみを有するものと考えられる。86は高坏の脚部と考えられるもの。その形状から4方向に透かしのある個体と考えられる。87～90は甕の胴部と考えられるものである。87は外面にタタキ痕がわずかに認められるが、基本的に丁寧にナデ消されている。器壁は薄い。88はやや厚手の器壁のもので、外面には平行タタキ、内面には当て具痕が観察できる。89はやや薄手の器壁のもので、外面には格子目状のタタキが認められ、内面には丁寧なナデが施されている。90もやや薄手の器壁を持つものである。外面にははっきりとした平行タタキが認められ、内面には丁寧なナデが施される。91も甕である。口縁端部はやや肥厚する。



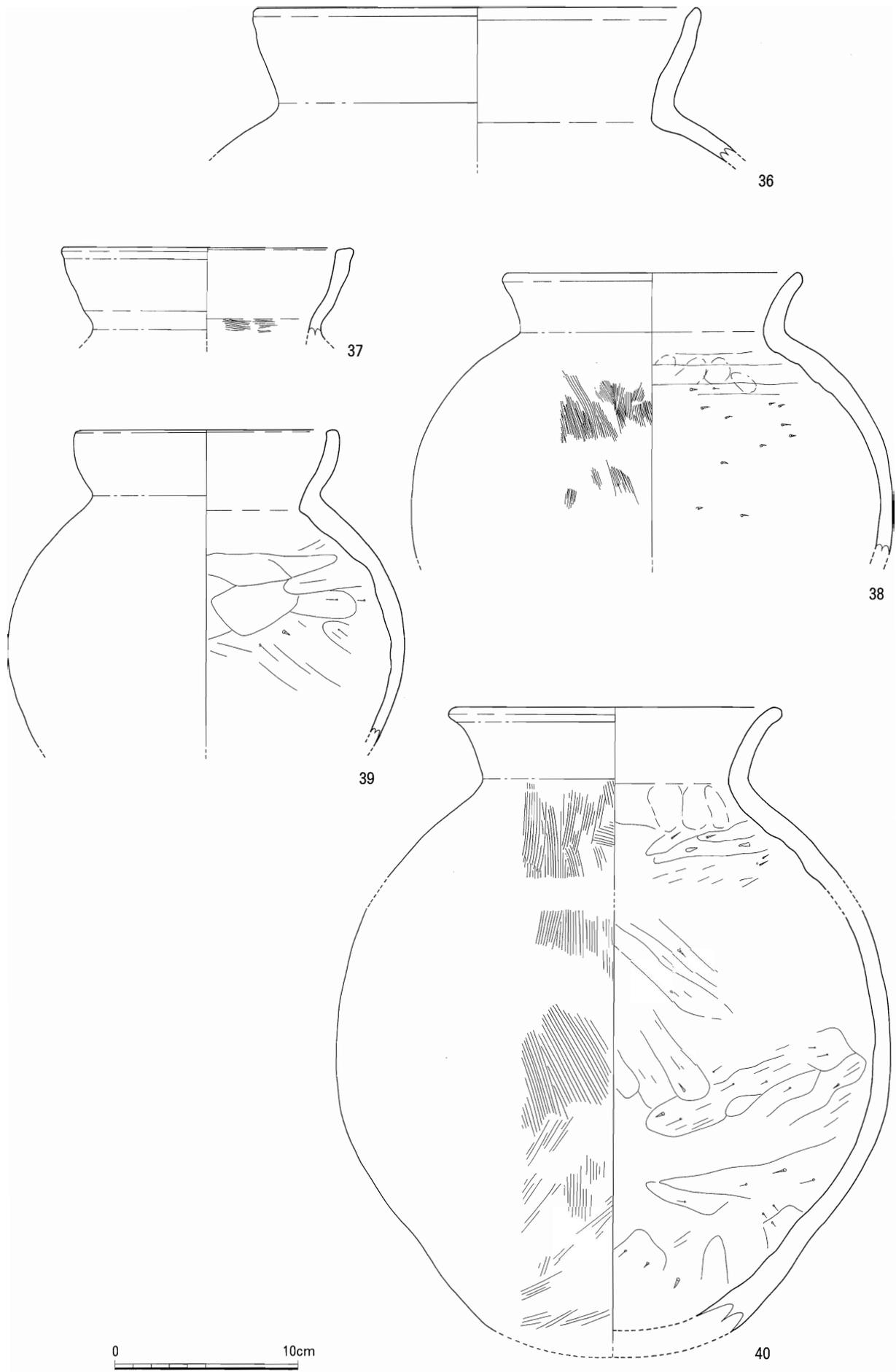
第66図 1 F区 出土遺物実測図(2) (S=1/3)



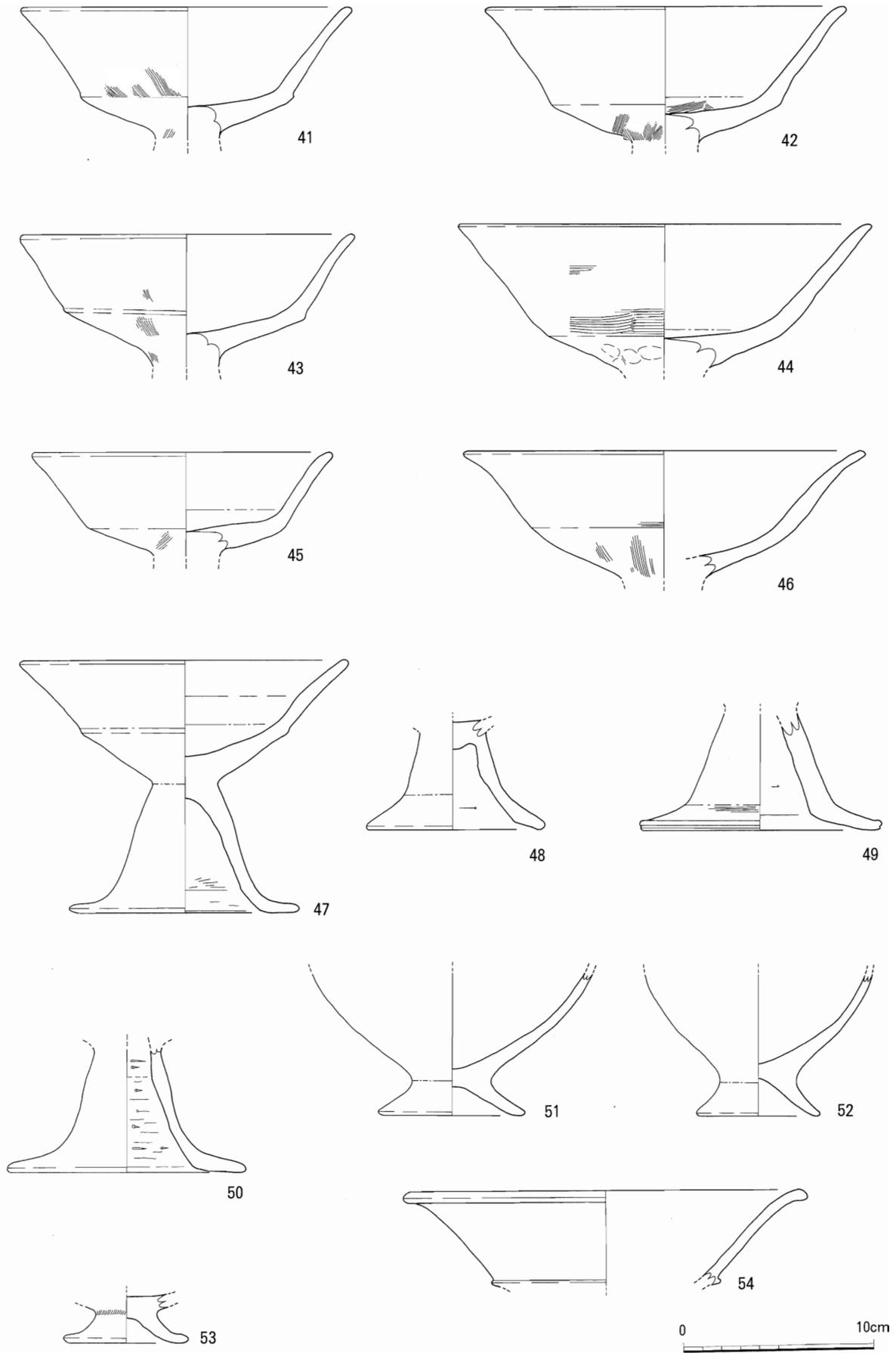
第67图 1 F区 出土遺物実測图 (3) (S=1/3)



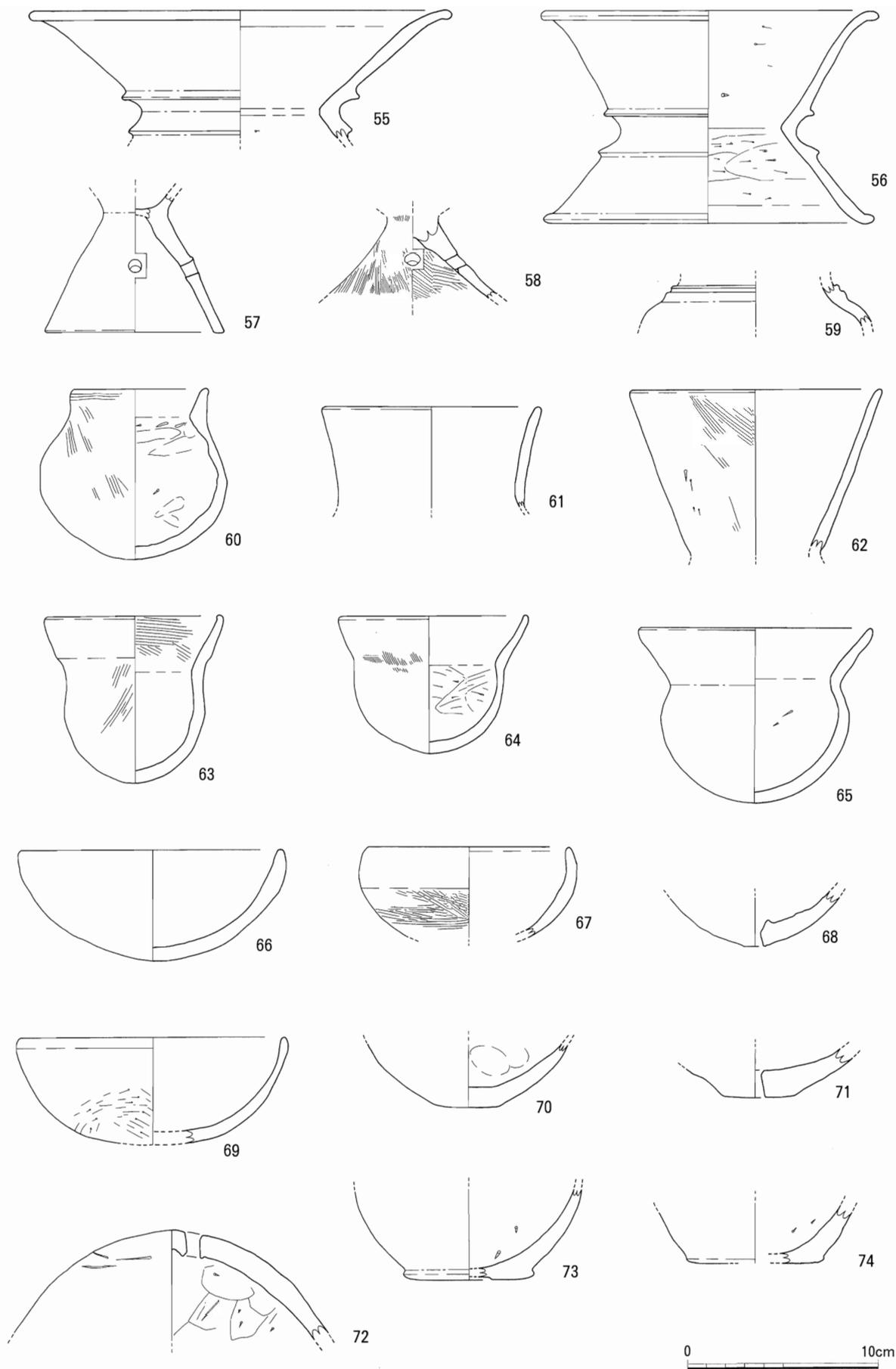
第68图 1 F区 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)



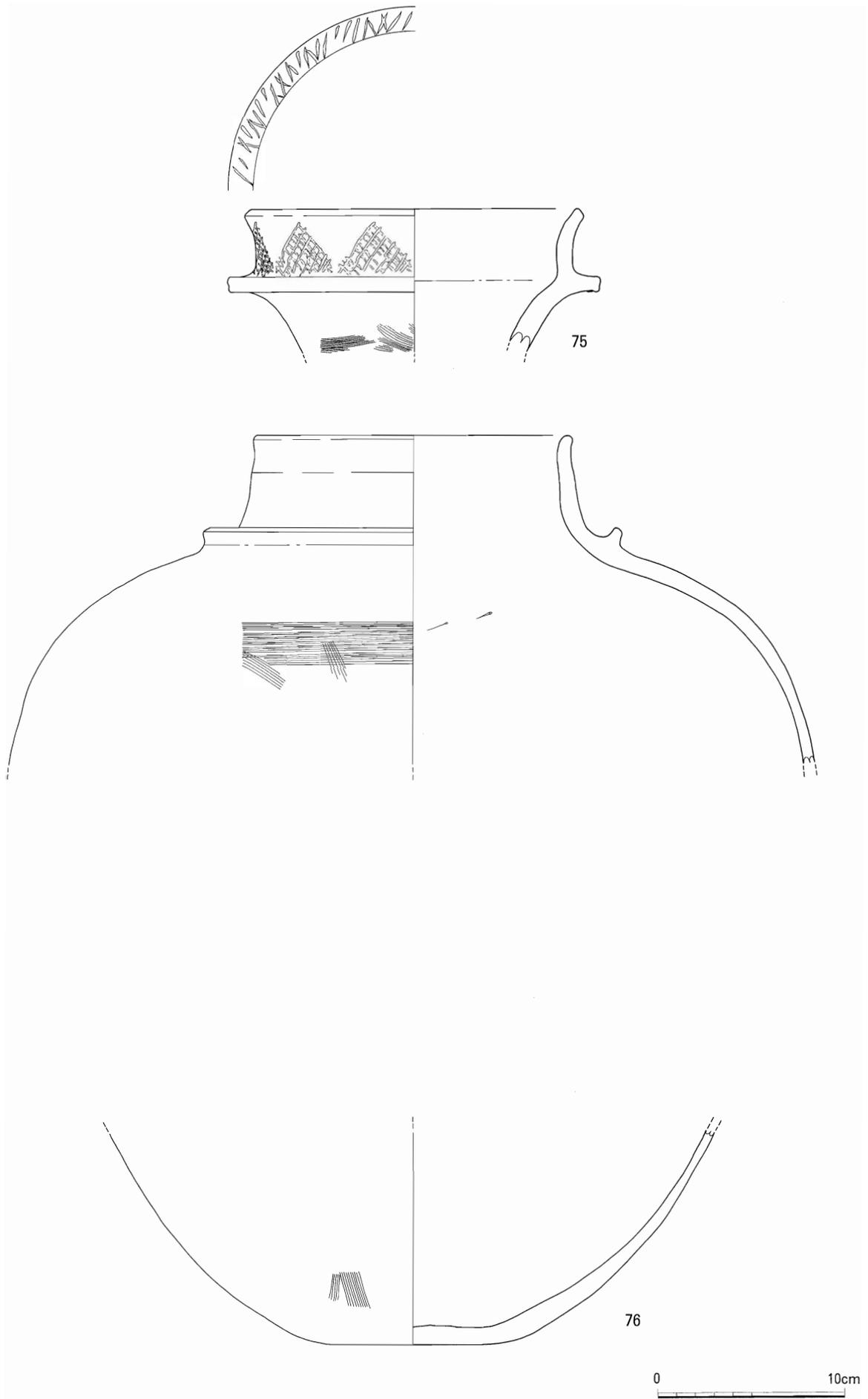
第69図 1 F区 出土遺物実測図(5) (S=1/3)



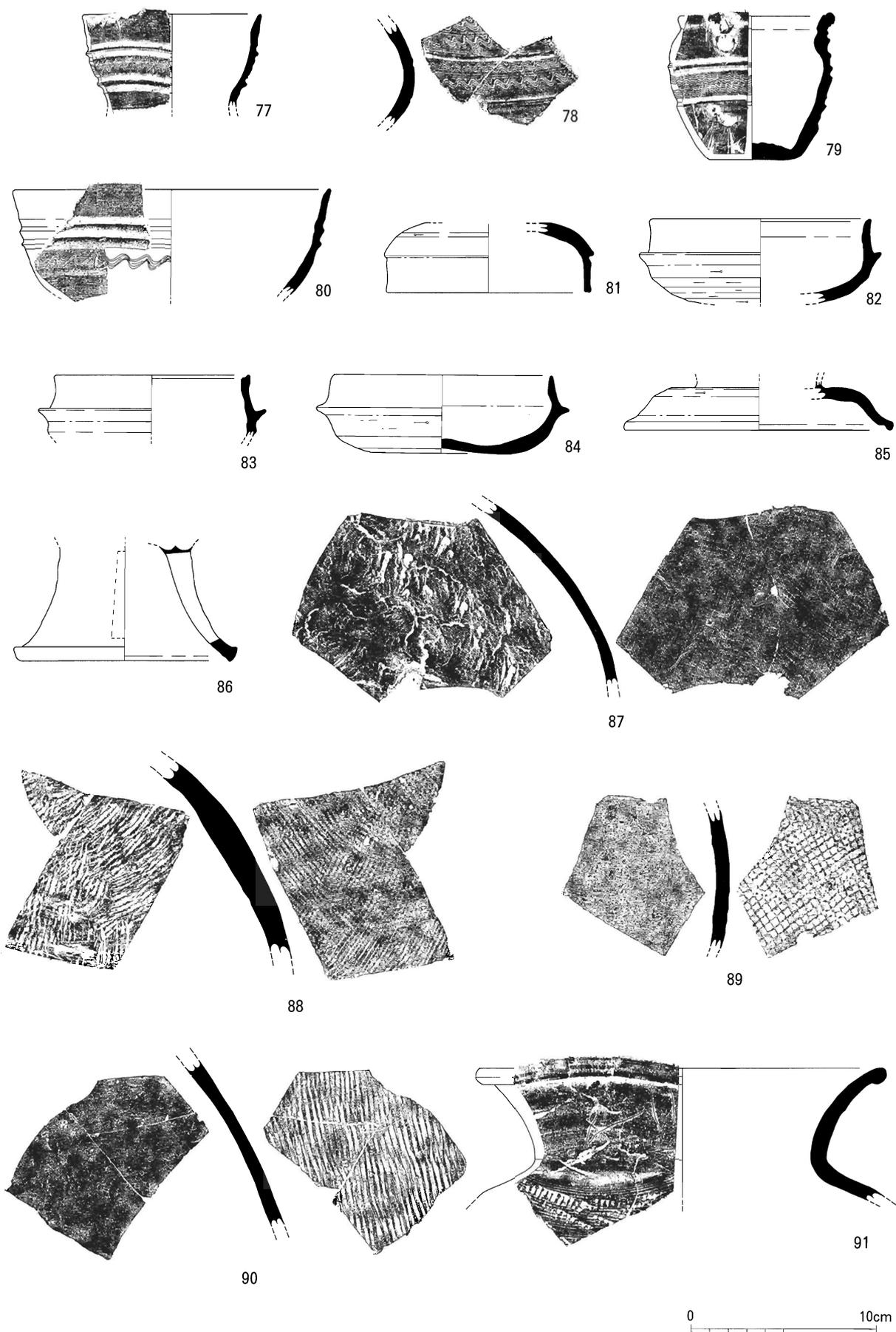
第70图 1 F区 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)



第71图 1 F区 出土遺物実測図 (7) (S=1/3)



第72図 1F区 出土遺物実測図(8) (S=1/3)



第73图 1 F区 出土遺物実測図 (9) 須恵器 (S=1/3)

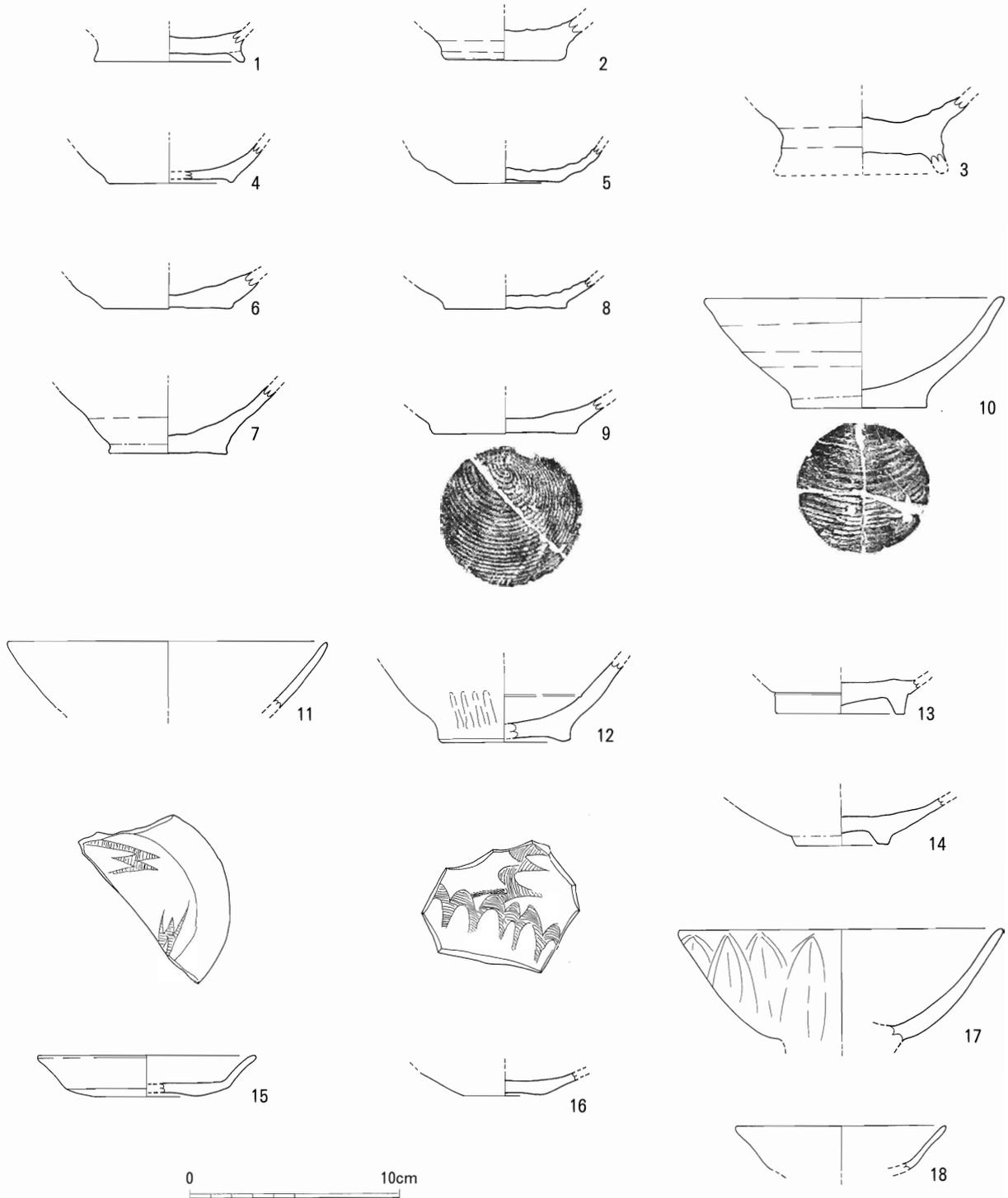
第6節 1区出土の中世遺物

1区の調査では、主に2層を中心に中世のものと考えられる遺物が出土した。土師器・磁器・陶器などがあるがほとんどが小片で、全容の把握できる個体は少ない。

主な傾向は次のとおり。

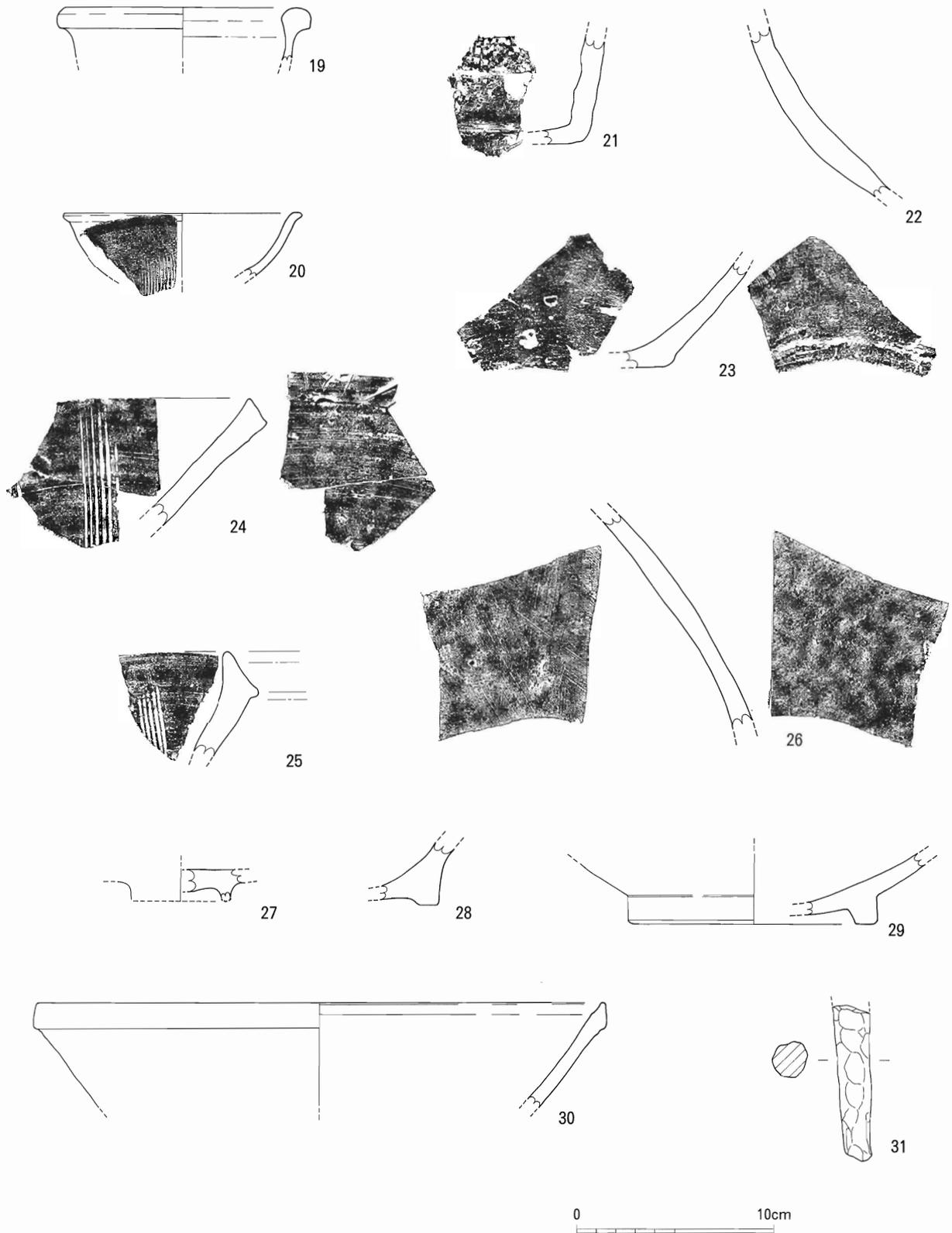
土師器は、体部が内湾気味に立ち上がるものがほとんどと考えられる。碗と考えられるものが一部に認められるが、坏が多数を占める。皿も存在すると考えられるが、小片のため把握できなかった。

磁器は白磁・青磁とも中世前半と考えられるものがほとんどで、後半のものは少ない。陶器は備前以外、産地の明らかでないものが多い。



第74図 1区出土 土師器・磁器実測図 (S=1/3)

第74図に掲載したのは土師器・磁器・陶器である。1・3は土師器・碗と考えられるものである。1は高台を伴い、底径が7.0cmのものである。4～10は土師器・坏である。10を除き体部～口縁部を失っているが、10と同様に内湾しながら立ち上がる形態のものと考えられる。いずれも器表面は風化が進んでおりはっきりとしないが、9・10では底部に糸切り痕が確認できる。11～14は白磁である。11は碗と考えられるものである。体部外面の下部は露体である。12は碗の底部である。外面



第75図 1区出土 陶器・瓦質土器実測図 (S=1/3)

は施釉されていない。13も椀。内面見込みの釉は環状にかきとられている。

15～17は青磁である。15・16は皿で、内面見込みには櫛描きの文様が施される。17は椀。外面には鎬蓮弁文が施される。18は陶器・皿である。朝鮮半島産と考えられる。

第75図に掲載したのは陶器・瓦質土器である。全形の分かるものはなく、以下の記述は多くの推測を含む。産地等もはっきりと分からないものが多い。19は壺などの口縁部にあたると考えられるもので、玉縁状に膨らむ。21は壺の底部。22は甕等の胴部になると考えられる。23は鉢と考えられるものである。24・25は擂鉢で備前である。26は甕類の胴部と判断されるが、詳細は不明。27～29は鉢類の底部と考えられる。30・31は瓦質土器で、30は鉢、31は足鍋の脚部である。

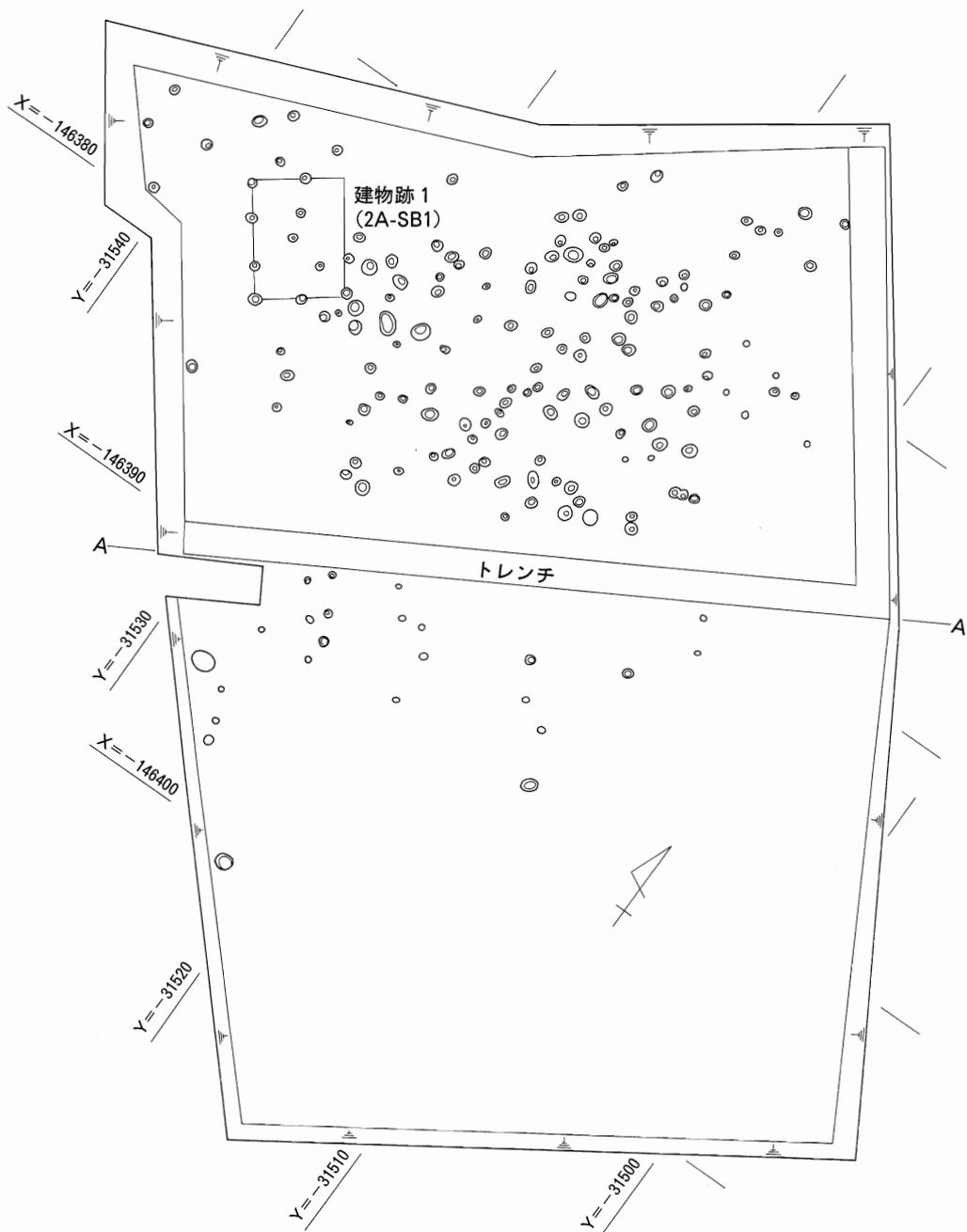
第6章 2区の調査

第1節 2A区の調査

概要

2A区は市道を挟んで1A区の反対側に設定した調査区で、旧来の地名浜寄側になる。調査前は1区とは対照的に宅地や畑地として利用されていた。

2A区における土層は第77図のとおりである。1層が基本1層、2層が基本2層、3層が基本3層、4～6層が基本4層に相当すると考えられ、2区における基本的な層序と異ならない。



第76図 2A区 遺構配置図 (S=1/300)

調査では2層～6層までを層ごとに掘り下げたが、これ以下の層については、1A区と同様に2A区の調査段階で遺構・遺物とも存在しないと判断したため調査を行っていない。しかし、実際には2C区などで明らかになっているように、それ以下の層でも遺物を包含していると考えられる。

遺構の検出は基本2～3層上面及び最終検出面で行い、その結果、最終検出面から建物跡1棟と多数のピットを確認した。ピットは北西側で多く検出されており、南東側に進むにつれてほとんど確認されなくなった。遺物は各層から出土しているが、ピットの検出された北西側で多く認められた。

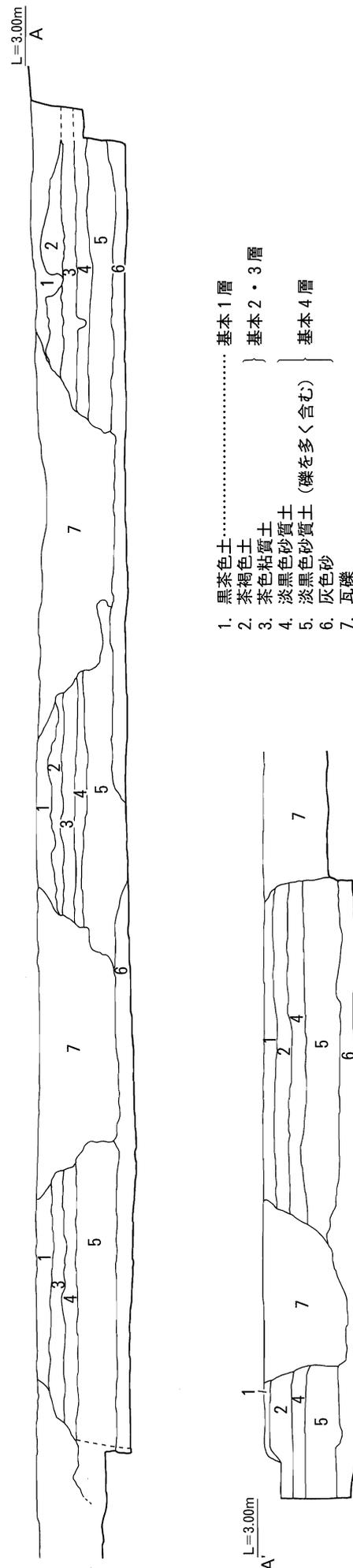
検出した遺構とそれに伴う遺物

建物跡1 (2A-SB1)

調査区の北西側、ピットが集中する付近に位置している。

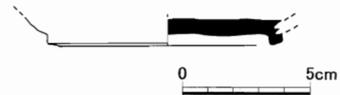
建物は、北側の柱穴が確認されていないものの、規模が2間(3.8m)×3間(4.8m)を測るものと考えられる。主軸はN-40°-Wにとる。これを構成するピットの大きさは径約50cmを測るが、深さは約20cmと浅いものであった。

結果的に最終検出面の上面で確認したが、これらのピットの埋土は、それよりも上層(第77図4層-基本4層の上面にあたる)に由来するものであることから、上面から掘り込まれているものと判断できる。全体的にピットの深さが浅いことと、北側でピットが確認されなかったのはそのためであると考えられる。



第77図 2A区 土層図 (S=1/80)

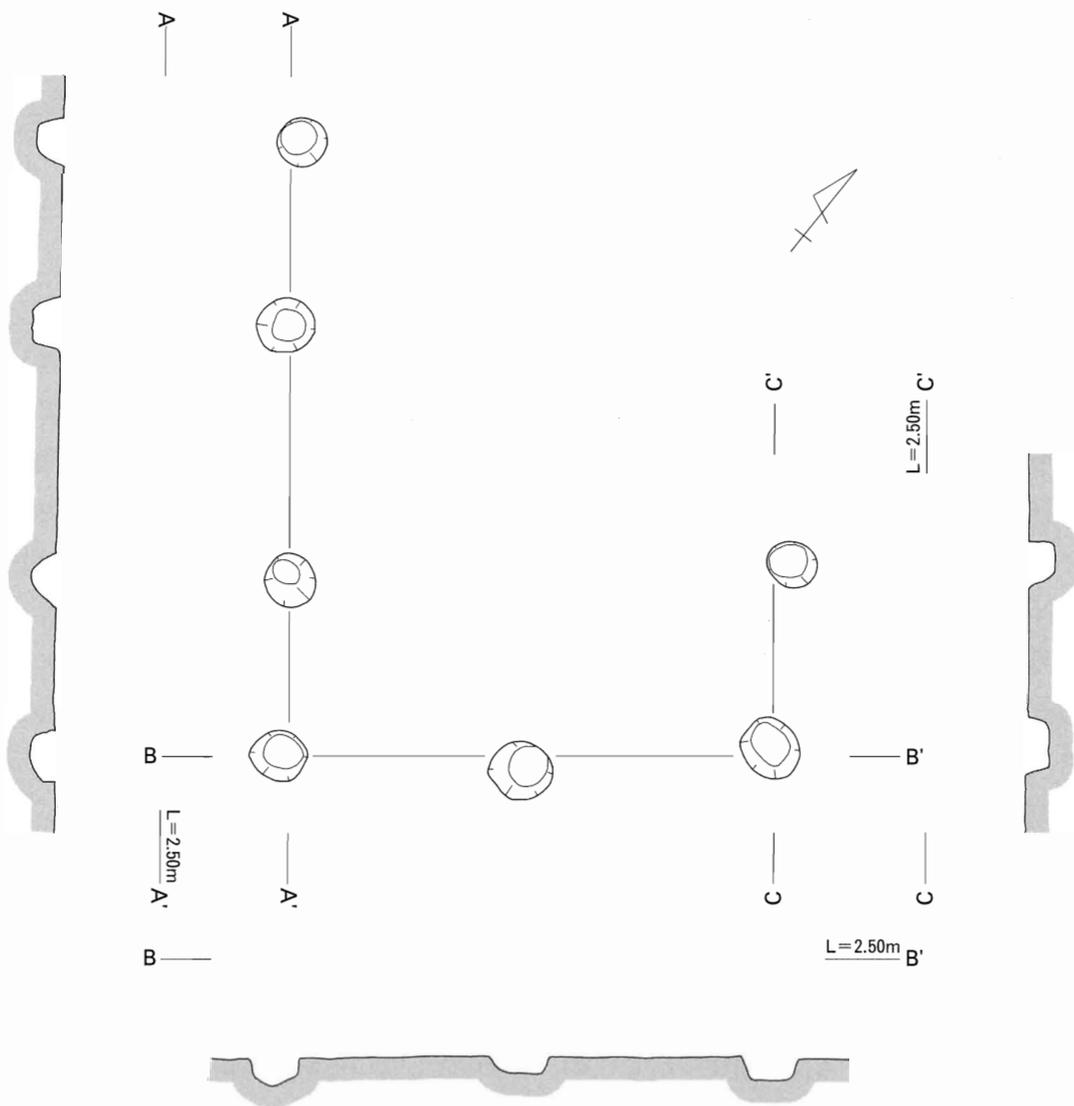
これに伴う遺物としては、ピット上面より出土した須恵器 1 点があげられる。須恵器は高台を伴う坏と考えられるものであるが、底部以外は失っており、詳細は明らかでない。底径は8.2cmを測る。



第78図 2 A区 建物跡 1 (2A-SB1)
出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構に伴わない遺物

2 A区からは弥生時代～江戸時代に至る多くの遺物が出土した。これらの遺物は基本 4 層からの出土がほとんどである。出土遺物のうち主なものを第80図～第86図に掲載した。基本的には時期ごと、種類ごとに掲載したが、一部これと異なる部分がある。



第79図 2 A区 建物跡 1 (2 A-S B 1) 実測図 (S=1/60)

第80図

1～6は弥生土器の壺または甕の一部と判断されるものであるが、小片であり詳細は明らかでない。1～3は平行線文や無軸羽状文が施されている。4・5はどちらも文様は認められないが、ともに1条の沈線を有している。6は櫛状工具によると考えられる波状文及び直線文が施されている。7は弥生土器・甕と考えられるものである。口縁端部を失うが、短く外反する器形になると考えられる。外面には7条の直線文と円形刺突文が施される。8～11は弥生土器・壺または甕の底部と考えられるものである。9はやや上げ底状となっている。12～19は弥生土器・壺と考えられるものである。12は口縁部が緩やかに外反するもので、端部中央には沈線が廻らされ、その上段には刻み目が施されている。13は口縁部のみの出土であるが、大きく外反する形態と考えられる。口縁端部は肥厚して平坦面となっており、そこに無軸羽状文の刻み目が施されている。また端部内面には竹管文が施される。14の口縁端部はやや肥厚し、頸部には有刻突帯が廻らされている。15は外方に開く口縁部を持つもので、端部には斜格子文が施され、頸部外面にはへら状工具によると考えられる沈線が廻らされている。16は口縁端部が上方にわずかに引き伸ばされ、つくりだされた面に斜格子状の文様が描かれている。17は口縁部が大きく開きながら立ち上がり、端部が外方に折り曲げられるものである。端部は平坦面を有し、そこに無軸羽状文の刻み目が施されている。また端部平坦面の一部では沈線が施されているのが観察できる。18は弥生土器・壺の頸部と考えられるものである。突帯状の凸部が2帯あり、そこに刻み目が施されている。19は弥生土器・壺の口縁部と考えられるものである。端部外面及び内面には波状文が施されている。

なお、これらはいずれも器表面が摩滅しており、洪水等何らかの水の影響を受けていると考えられるものである。

第81図

20～22は弥生土器・甕と考えられるものである。20は頸部屈曲部に有刻突帯が廻らされている。21は復元した口径が17.4cmを測るもので、端部はやや肥厚する。22は口縁部が強めに屈曲するもので、端部にはわずかながら平坦面を有し、そこに刻み目が入れている。23・24は土師器・甕と考えられるもので、どちらも複合口縁のものである。23は直線的に開く口縁部を持つもので、端部は丸い。24も直線的に開く口縁部を持つが、端部は平坦面となり複合部の稜も外方に鋭く突出している。25は土師器・壺と考えられるものである。複合口縁のものであるが、退化傾向を示す。26・27は土師器・甕と考えられるものである。どちらも器壁は薄く、強めに外反する口縁部を持つ。28は土師器・壺の口縁部と考えられるもので、口縁部は外反しながら立ち上がる。29～32は土師器・甕と考えられるものである。29の口縁部は直立気味に立ち上がり、端部が外方に折り曲げられる。30・32の口縁部は外反しながら立ち上がる。31は直線的に開く形態のものである。

第82図

33～44までいずれも土師器・甕と判断して掲載したが、小片であるため全形の分かるものがなく、口径・傾き等推測を多く含んでいる。33～35は短めの口縁部のもので、器壁はやや厚めである。35は外面に縦方向のハケメが観察できる。

39～43は口縁部が水平方向に曲げられている。44は復元した口径が37.6cmを測る比較的大きなものである。

第83図

45～47はほぼ全形の分かる個体で、壺・甕類である。45は非常につくりの粗いもので、全体が歪んでいる。46は口縁端部を失っているが、ほぼ完形に近いものである。外面には不定方向にハケメが観察できる。47は口径14.2cm、器高22.1cmを測るもので、外反しながら立ちあがる口縁部に球状の胴部を持つものである。48・49は小型品である。50～56は土師器・高坏である。50は坏部に段状の屈曲部を有し、口縁部は外反しながら立ちあがる。51は椀状の坏部のものである。内面にはハケメが観察できる。52はほぼ全形のわかるものである。口径15.5cmを測るが、器高は低い。脚端部は強く屈曲する。53～56は高坏の脚部。

第84図

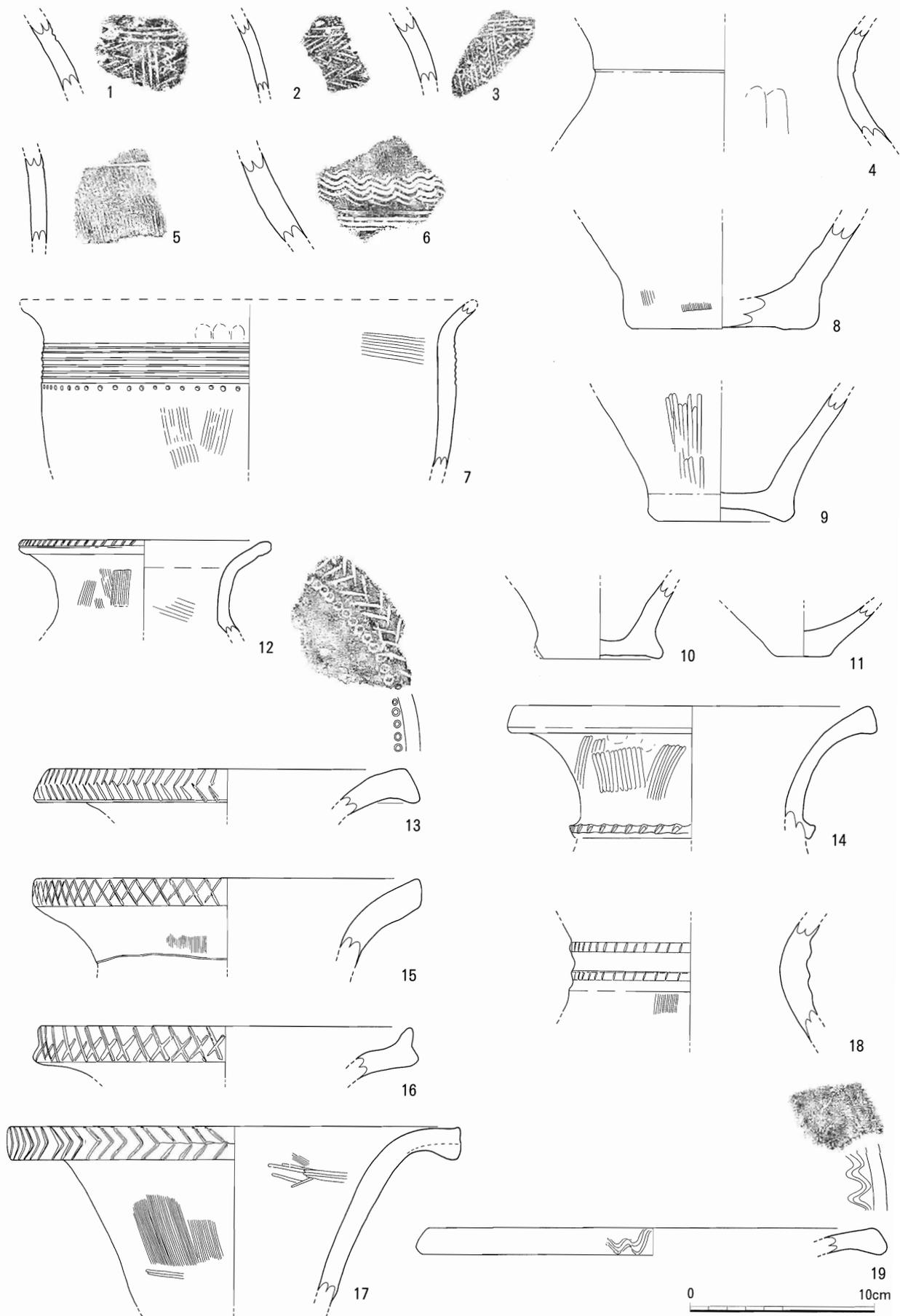
57は須恵器坏である。口縁端部と底部を失っている。58は坏蓋である。復元した口径が13.0cmを測る。57・58の形態の坏・蓋類はほとんど確認されていない。59～65は高台を持つ坏である。口縁部を失い形態のはっきりしないものを除けば、基本的に直線的に立ち上がる体部を持つものである。64・65はやや高い高台である。66～71、75～77は蓋である。66はボタン状のつまみを有するものである。この形態のものはあまり出土していない。68～71は輪状のつまみを有するものである。口径15cm前後のものが多いが、69のように器高が低くやや大きなものも見られる。出土した蓋の多くはこの形態のものである。75～77はかえりをもつ蓋である。いずれもつまみの部分は失っており、その形状は明らかでない。72～74は高台を伴わない坏と判断したものである。78は高坏の坏部の可能性が高いもの。79は坏の口縁部と判断できるものである。口縁部のみの出土であり推測の域を出ないが、体部が途中で屈曲し、端部が折り曲げられる形態のものと考えられる。80・81は壺の底部と考えられるものである。81は胴部に沈線がある。82は坏としているが、壺の底部になる可能性も高い。83は高坏である。口径10.6cm、底径6.6cm、器高6.4cmを測るもので、脚端部は下方に折り曲げられる。84も高坏の脚部である。

第85図

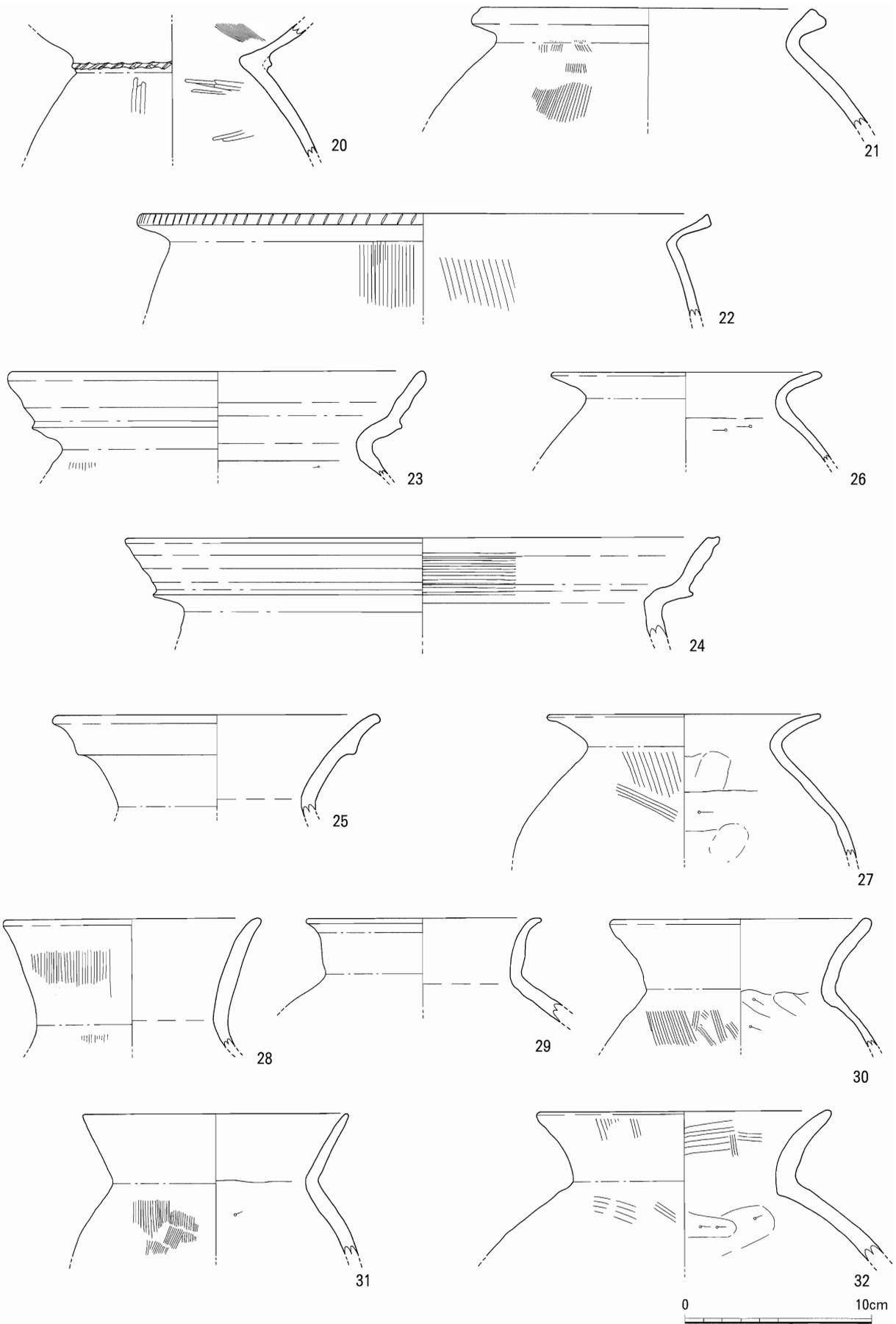
85・86は壺（長頸）の胴部と考えられるものであるが、口縁部・底部とも失っており、詳細は明らかでない。87も壺と考えられるものである。底部を失っており器高等は明らかでないが、復元した口径は9.8cmを測る。88～90は鉢または椀と考えられるものである。いずれも内湾しながら立ち上がる。88は口縁端部が平坦になるもので、復元した口径が10.5cmを測る。90は底部を失っているものの、器高が9.5cmのものと考えられる。92～94は甕の一部と考えられるものである。93は外面に沈線及び櫛描波状文が施されている。95は甗等の胴部と考えられるが、詳細は不明である。96は壺の肩部と考えられるが、多くを失っており詳細は不明。97は甕である。全体的に焼成が悪く、白っぽい色をしている。

第86図

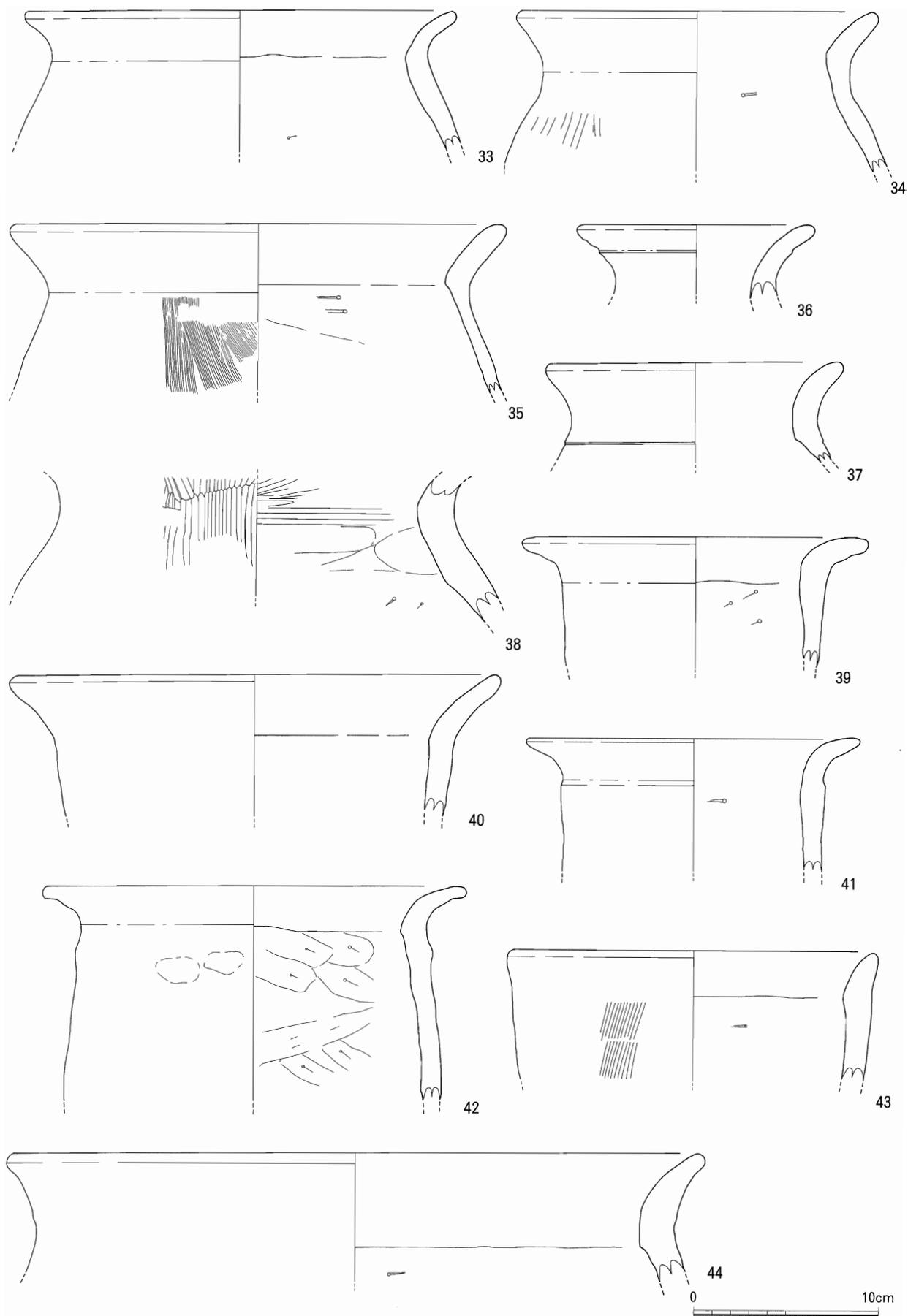
98は器台型土器（小型器台）である。脚部には円形透かしがある。99は台付鉢の脚部と考えられる。100は手づくね土器。101は移動式竈の脚部と考えられるが、多くを失っている。102は土師器坏で、内面には暗文が施されている。103は紡錘車で、石製のものである。



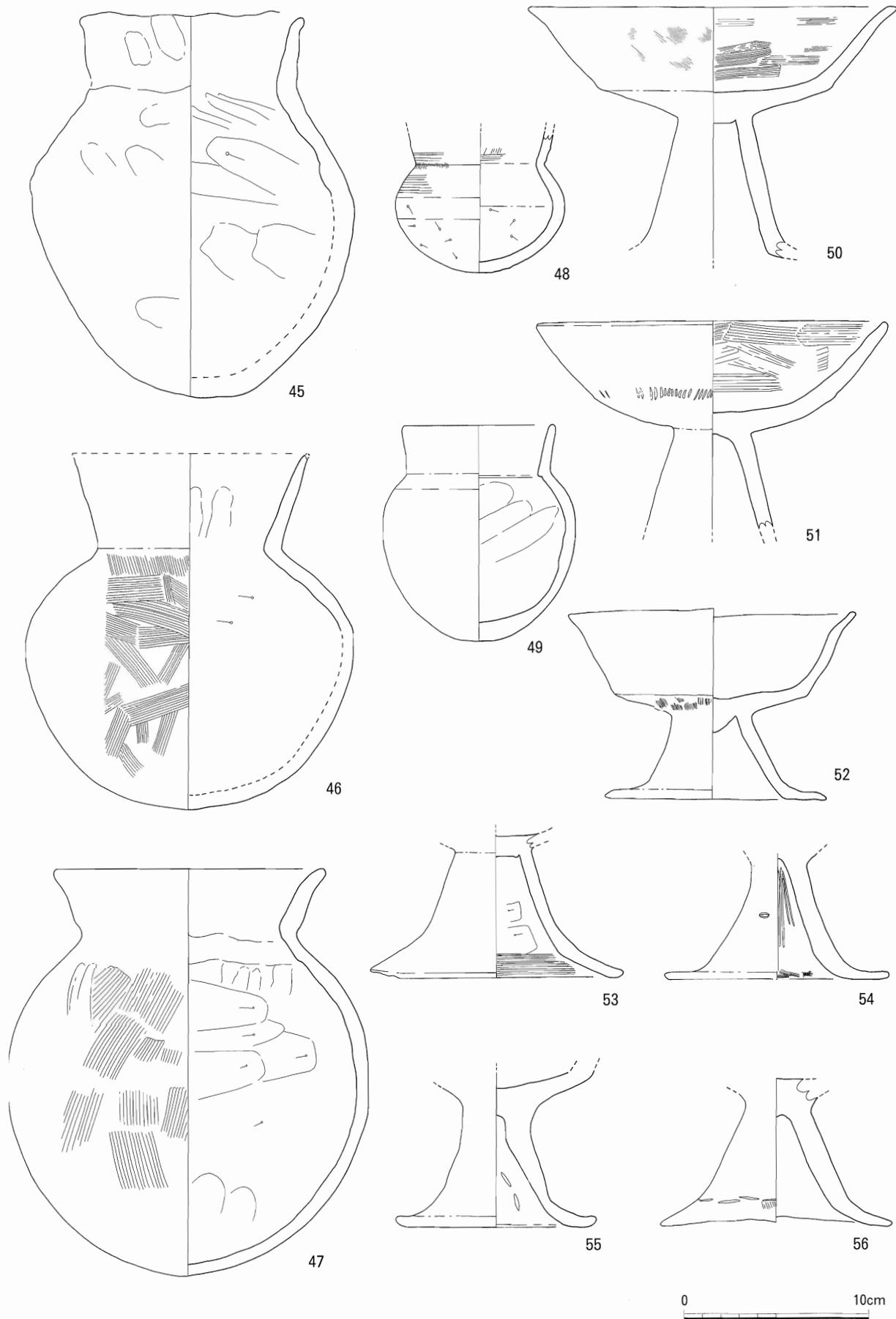
第80图 2 A区 出土遗物实测图 (1) (S=1/3)



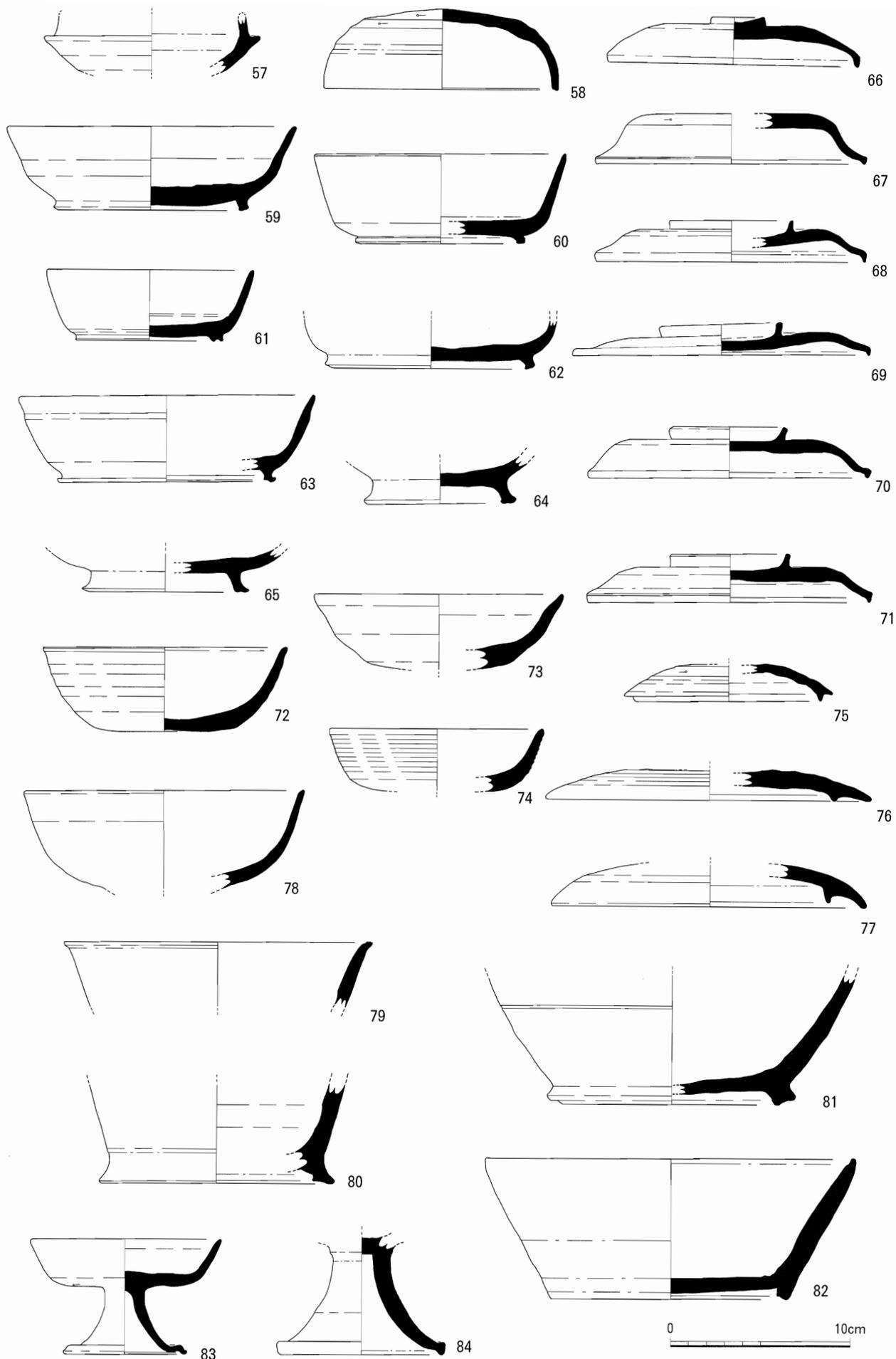
第81图 2 A区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



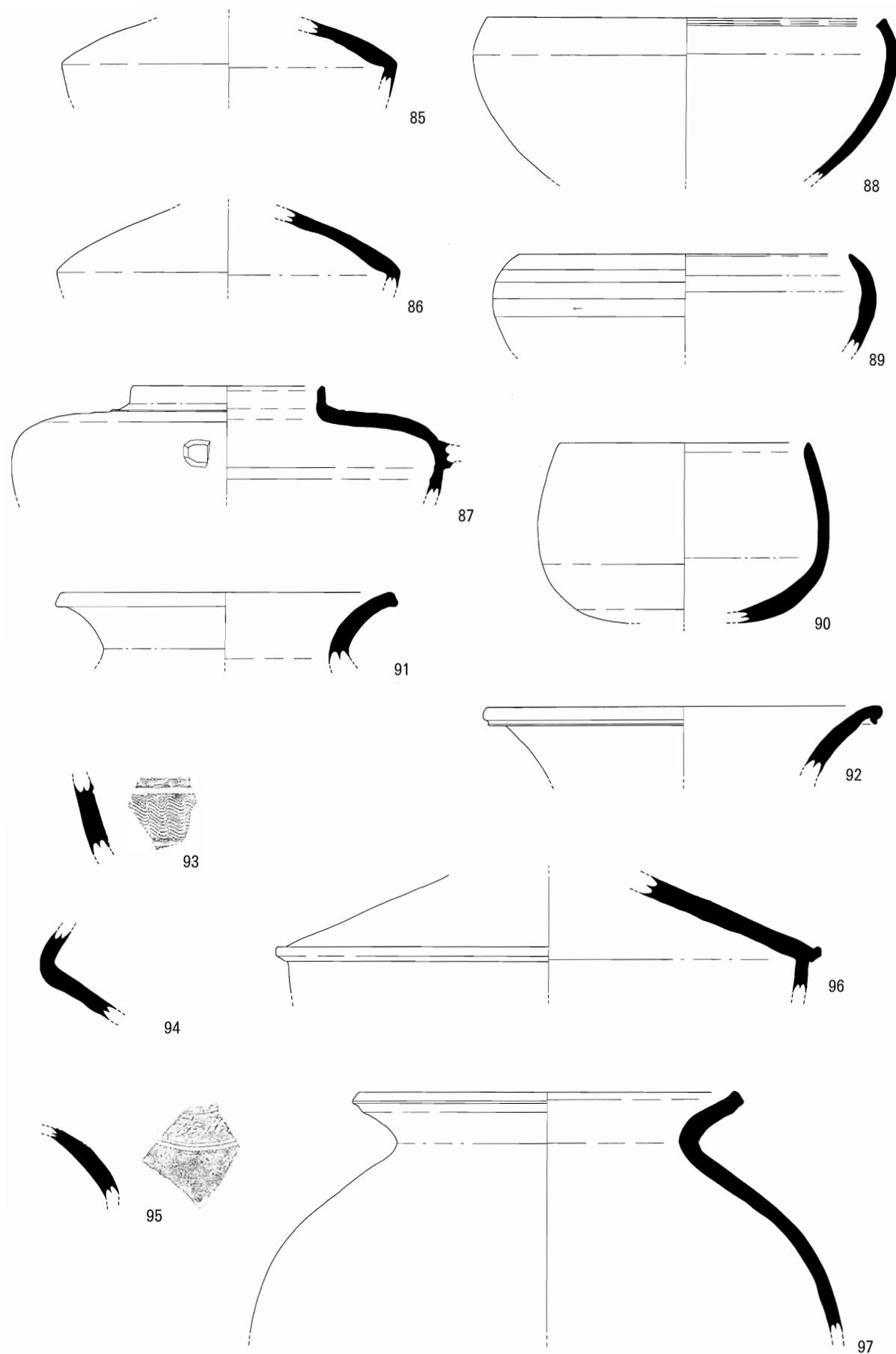
第82图 2A区 出土遺物実測図(3) (S=1/3)



第83图 2 A区 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)

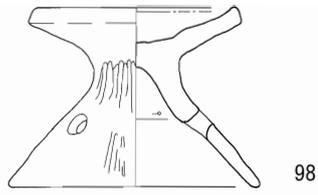


第84图 2 A区 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)

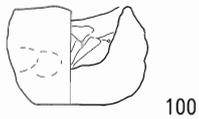


0 10cm

第85图 2 A区 出土遺物実測图 (6) (S=1/3)



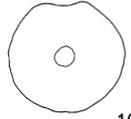
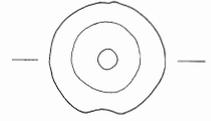
98



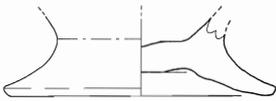
100



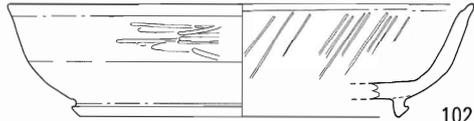
101



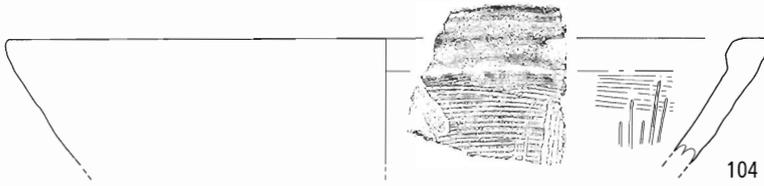
103



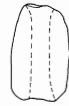
99



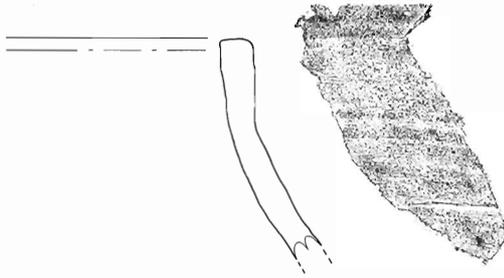
102



104



105



105



107



第86图 2A区 出土遺物実測図(7) (S=1/3)

第2節 2C区の調査

概要

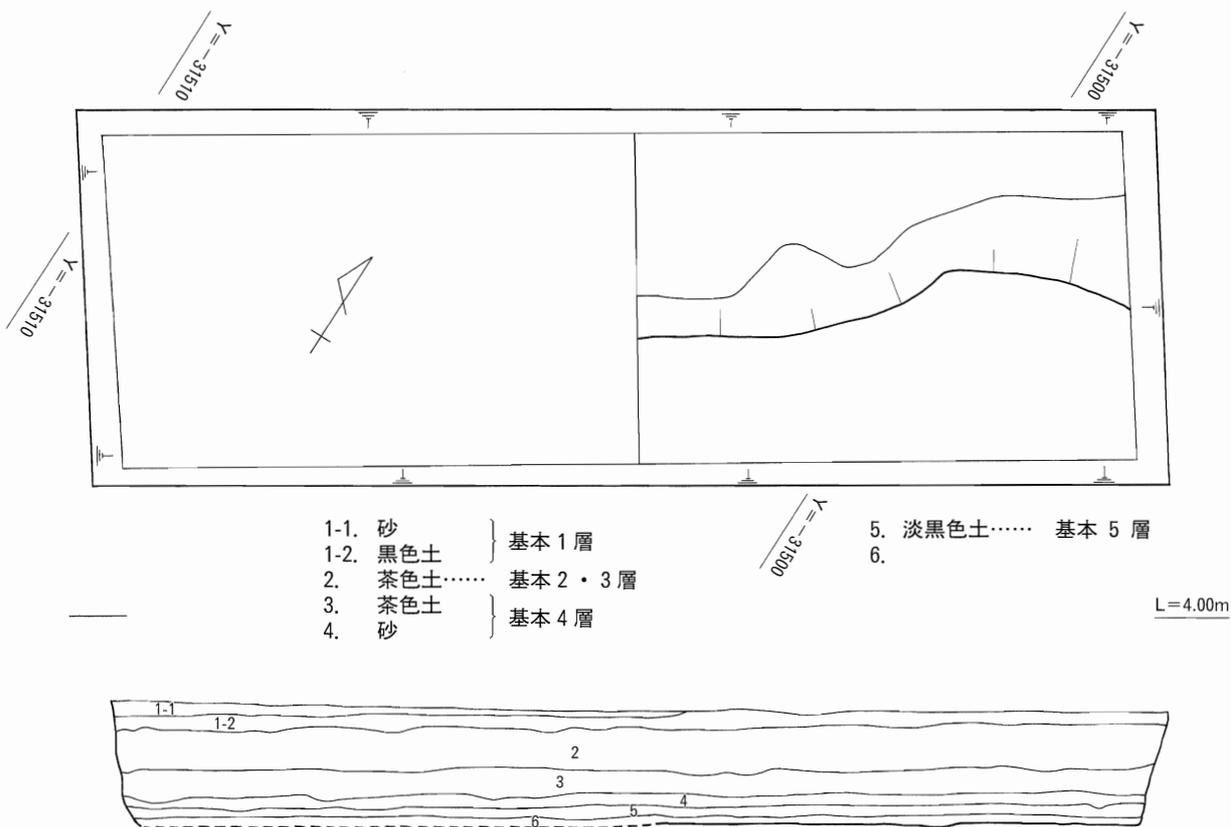
2C区は、先に報告した2A区の南側に隣接する調査区である。この調査区には市道や民家が隣接しており、安全上及び生活環境上の観点から該当箇所のすべてを調査することはできなかった。したがって調査を実施したのは以下に示したわずかな範囲にとどまるが、基本的な層位とそれに伴う遺物を確認できている。

検出遺構とそれに伴う遺物

顕著な遺構は検出されなかったが、基本7層は北西側にむけて傾斜している様子が窺えた。先に報告したとおり、隣接する2A区の調査においては、この調査区で実施した層までは調査を行っていないため続きは明らかでないものの、傾斜が続いていく可能性が高い。それより上の層については何も検出していないが、2A区の調査では2C区側になるにつれて遺構が確認されなくなる状況が認められており、あまり遺構の存在しない場所であったと判断できる。

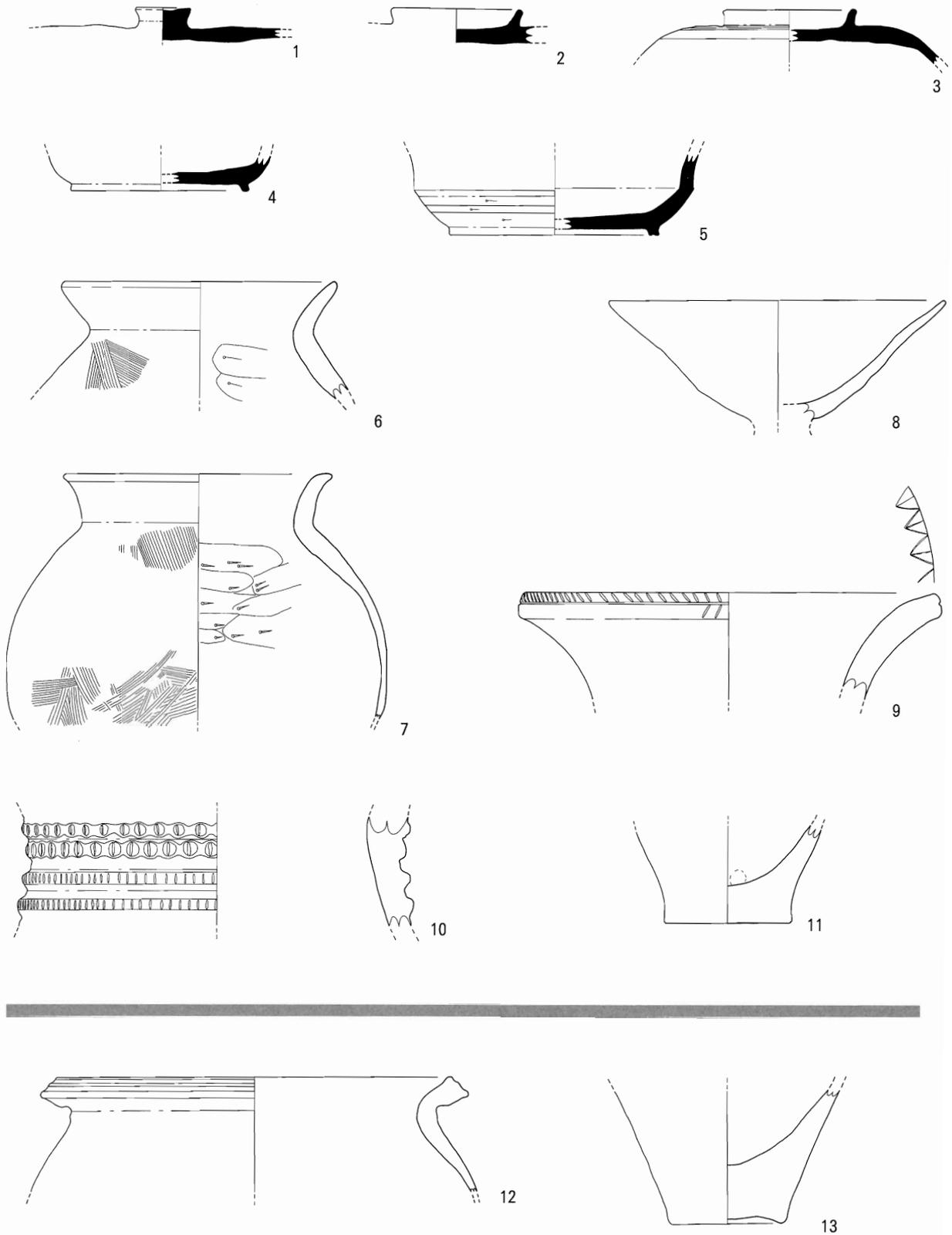
遺構に伴わない遺物

2C区からの出土遺物は第88図に掲載した。多くは2～4層（基本2～4層）からの出土で、数点ほど5層からの出土があった。2～4層出土のものは弥生土器・土師器・須恵器とさまざまなものがあるが、5層出土のものは弥生土器のみである。



第87図 2C区 実測図 (S=1/100)

1～3は須恵器の蓋である。1はボタン状のつまみを有するもので、表面には自然釉がかかる。
2・3は輪状のつまみを有するものである。いずれも端部は失っている。



第88図 2C区 出土遺物実測図 (S=1/3)

0 10cm

4・5は須恵器坏で、両個体とも高台を有する。4は体部がゆるやかに湾曲する形態のもの、5は体部途中で一度屈曲する形態のものである。

6・7は土師器甕。単純口縁のもので、7は口縁端部が外方にわずかに屈曲させられている。外面にはハケメが観察できる。8は高坏の坏部と考えられるもので、直線的に開いている。

9～11は弥生土器である。いずれも器表面は摩滅しており滑らかとなっている。9は壺の口縁部と考えられる破片である。厚めの器壁で、口縁端部外面には1条の沈線と刻み目が、また内面には山形文が施されている。10も壺と考えられるものである。頸部の破片と考えられ、4段の突帯が認められる。上二段の突帯にはやや大きめの刻み目（圧痕）が、また下二段には小さな刻み目が密に施されている。11は壺または甕の底部である。平底のもので、厚さは約2cmを測る。

12・13に掲載したものは5層出土の弥生土器である。5層出土の弥生土器と比べて器表面はざらざらとしており、水による作用を受けたとは考えにくいもので、本来の位置を保った個体と判断できる。

12は甕である。やや拡張した口縁端部に2条の凹線文を入れている。13は壺または甕の底部である。わずかに上げ底状で、厚さ2.8cmを測る。

第3節 2F区の調査

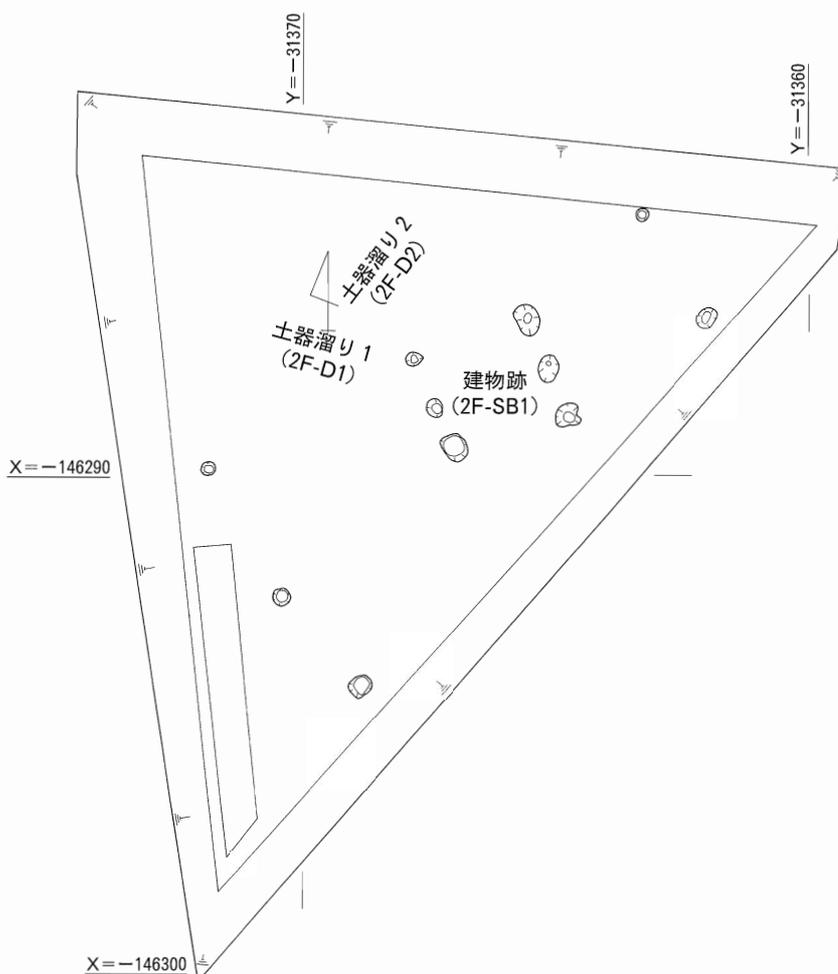
概要

2F区は今回の調査において設定した調査区のうち、最も西側にある調査区である。調査前は、畑として利用されていた。調査では、砂丘の南縁に位置するという立地条件のため壁面の崩壊等が十分想定されたことから、調査区境からかなりの控地をとった上で掘削を行った。したがって最終調査面の面積は実際の調査範囲よりもかなり小さくなっている。

2F区における土層は第90図のとおりである。先に述べたように上層には砂丘に由来すると判断できる砂がかなり堆積しており、この点が2区における基本土層と異なっている。しかし、これを除けば基本2層以下は同じと判断できるものである。

調査では基本5層と判断できた7層（黒色土層）まで掘り下げた。これより以下は砂が堆積している状況が窺えたが、平成16年度に調査を実施した2D区（別途報告）の状況およびボーリング調査のデータから遺物を含まないと判断したため、調査を実施していない。

その結果、7層（基本5層）において建物跡・土器溜り等を確認した。遺物はほとんどの層からの出土が見られた。



第89図 2F区 遺構配置図（5層）（S=1/150）

検出した遺構とそれに伴う遺物

建物跡 (2F-SB1)

調査区のほぼ中央付近に位置している。

建物は1間×2間と非常に小さなものである。主軸はN-24°-Wである。

結果として5層の上面で検出しているが、ピット内の埋土の状況等からは基本4層の段階のものと考えられ、その面から掘り込まれていると判断できる。

これを構成する柱穴は径が50cm前後のものと30cm前後のものとの大小2傾向のものが認められるが、小規模のものは、上面が確認できなかったためその規模になっているだけで、本来は同程度のものであろう。

これに伴う遺物は出土していない。

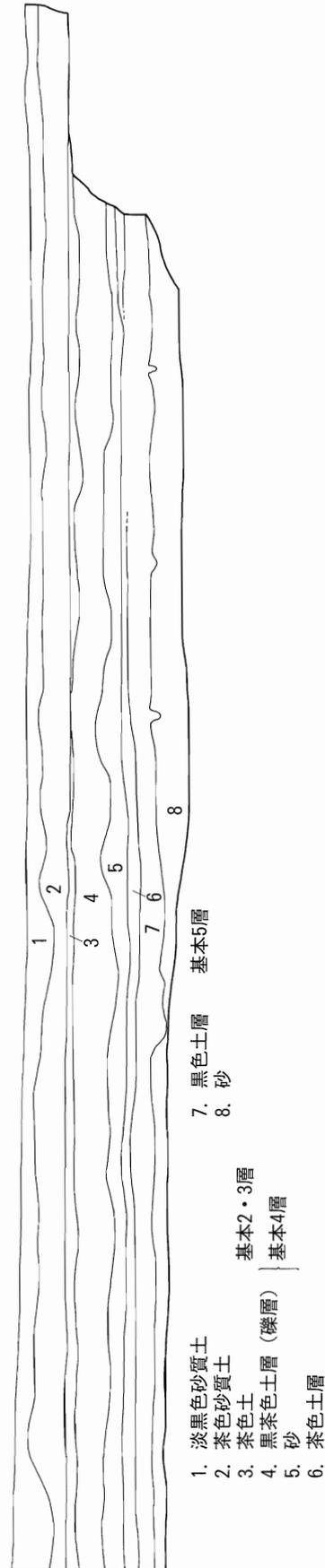
土器溜り1 (2F-D1)

調査区の中央付近で確認した。6層(基本5層)中よりの出土である。比較的まとまりをもって出土したことから、土器溜りとして一括して取り上げることにした。

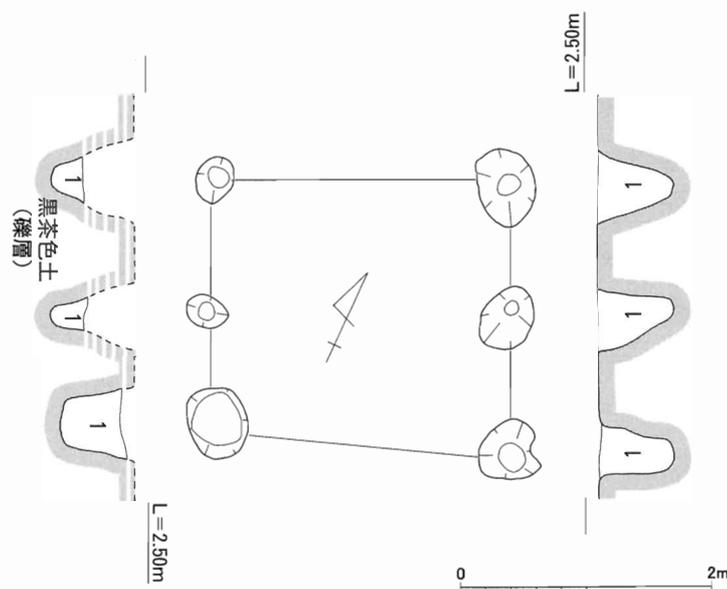
出土した遺物は第93図1~5のとおりで、全て土師器である。1は高坏の坏部である。直線気味に立ち上がるもので、外面に段は認められない。2は器台型土器と考えられるものである。受部から脚部にかけては穿孔されている。3は台付の鉢と考えられるもの。全体的に整った形状をしておらず、粗雑な観のある個体である。外面にはハケメが観察できる。4は鉢と考えられるものである。外面は底部を除いて全面にハケメが施されている。5は壺である。口縁部は外反気味に立ち上がり、口径は14.4cmを測る。胴部は中位で最大径になると考えられる。底部は失っている。

これらの土器は、古墳時代前期のものと考えられる。

L=4.50m



第90図 2F区 土層図 (S=1/80)



第91図 2F区 建物跡1 (2F-SB1) 実測図 (S=1/60)

土器溜り2 (2F-D2)

土器溜り1よりやや東側で確認したもので、それと同様7層中において検出している。長さ1.5mにわたって遺物がまとまって出土しており、それを一応のまとまりとして取り上げているが、土器溜り1とは距離的にも近く、両者を同じものとして扱うことも可能であろう。

出土した遺物は第93・94図に掲載したとおりである。

第93図6・7は壺(小型丸底壺)である。6はほぼ完形のもので、口径11.0cm、器高8.2cmを測る。口縁部は短く、直線的に開くもので、端部は丸い。7は口縁部を一部失っている。復元した口径は10.8cm、器高8.6cmのものである。外面には横方向のハケメが観察できる。8も壺である。完形のもので、口径8.8cm、器高9.9cmを測る。外面は一部にヘラミガキ、ハケメが観察できる。9は鉢と考えられる。口縁部及び胴部の一部を失っているが、復元の可能なものである。復元した口径が10.4cm、器高7.4cmを測るもので、口縁部は大きく開く。10は壺である。これも口縁部から胴部の一部を失っているが、完形に近いものである。短い口縁部を伴う形態のもので、口径7.4cm、器高7.3cmを測る。11は器台型土器である。鼓形のもので、受部の半分近くを失っているが、ほぼ形の分かるものである。復元した口径は17.5cm、脚部径は16.2cmを測るもので、筒部は約1.5cmと短くなっている。12も器台型土器と考えられるものである。13は甕。緩やかに外反する口縁部を持つ。14は低脚坏である。完形に復元できるもので、口径13.2cmを測る。ほかのものに比べ胎土に多くの砂粒を含む。15は高坏である。坏部は浅い椀状で内湾した後直線的に立ち上がり、端部は緩やかに外反する。口径は18.0cmを測る。16は壺である。胴部に対して大きく開く口縁部を持つもので、その長さも6.5cmと長い。全体的に縦長な印象を与えるものである。外面にはハケメが観察できる。

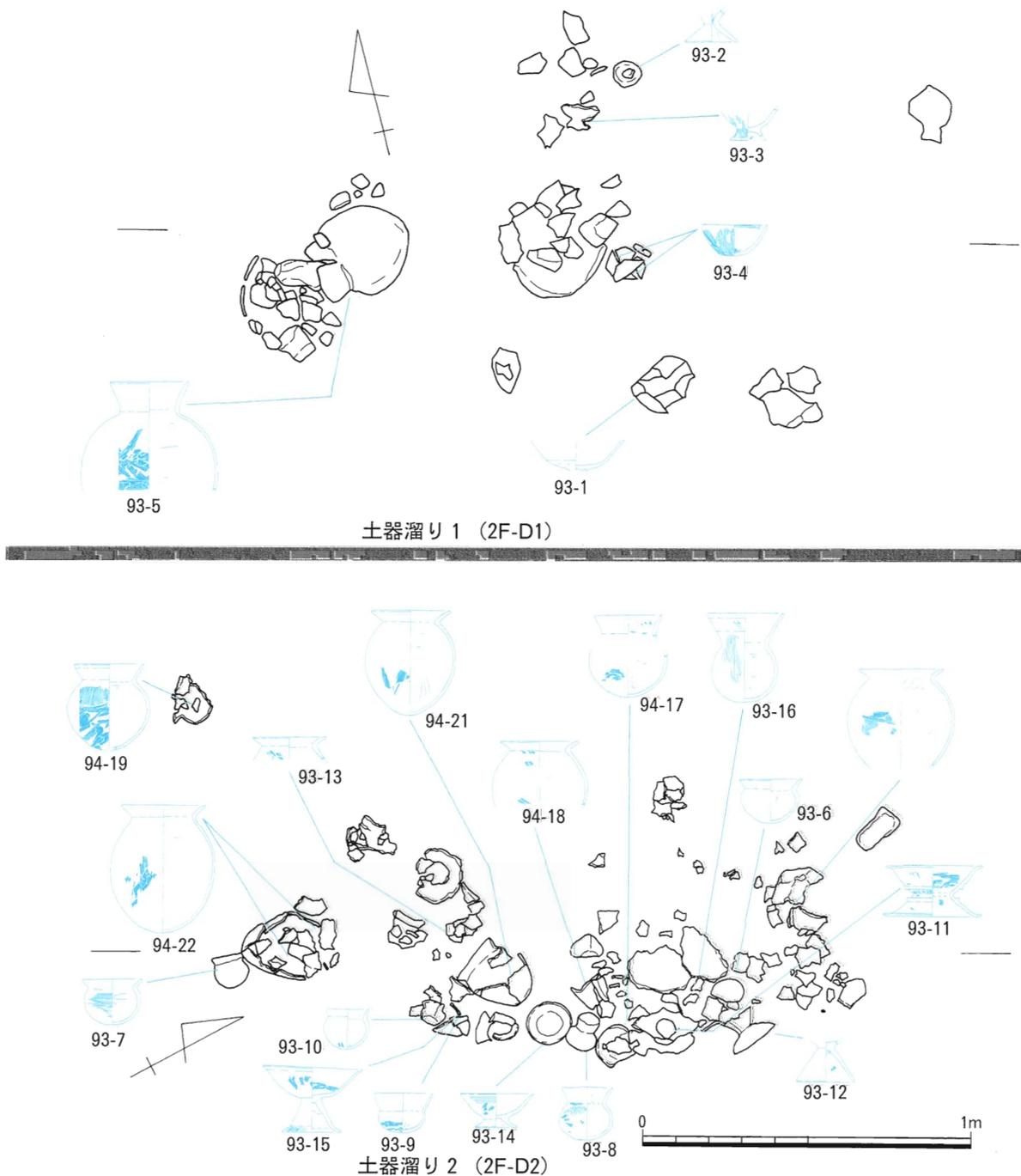
第94図17~22は単純口縁の甕である。17は接点が見つからなかったが、口縁部と胴部下半が出土している。口径11.8cmを測り、外方に直線的に立ち上がる。胴部は残っている部分の形状から判断して、球状になるものと考えられる。18は外方に伸びる口縁部に、球状の胴部を持つものである。

器壁の薄いもので、胎土には多くの砂粒を含む。19は約4割の残存であるが、口縁部から底部までほぼ形状の復元できるものである。口縁部は外方に直線的に立ち上がる。胴部は球状で中位よりやや上が最大径となる。20は外反気味の口縁部と球状の胴部を持つものである。器壁は3mm前後と非常に薄いつくりとなっている。21は外方に直線的に立ち上がる口縁部と、やや長胴の胴部を持つものである。22も21と同様の形態である。

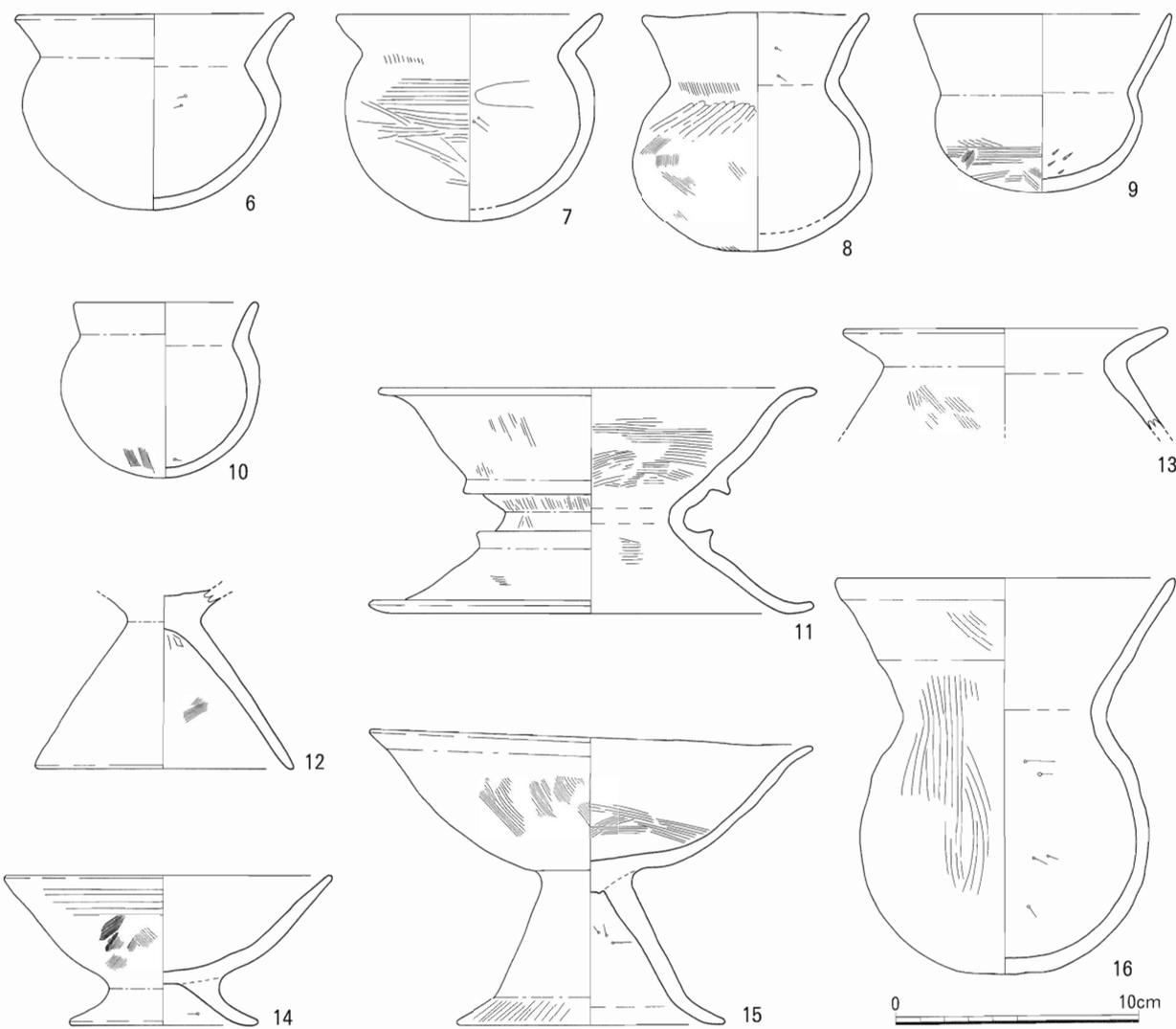
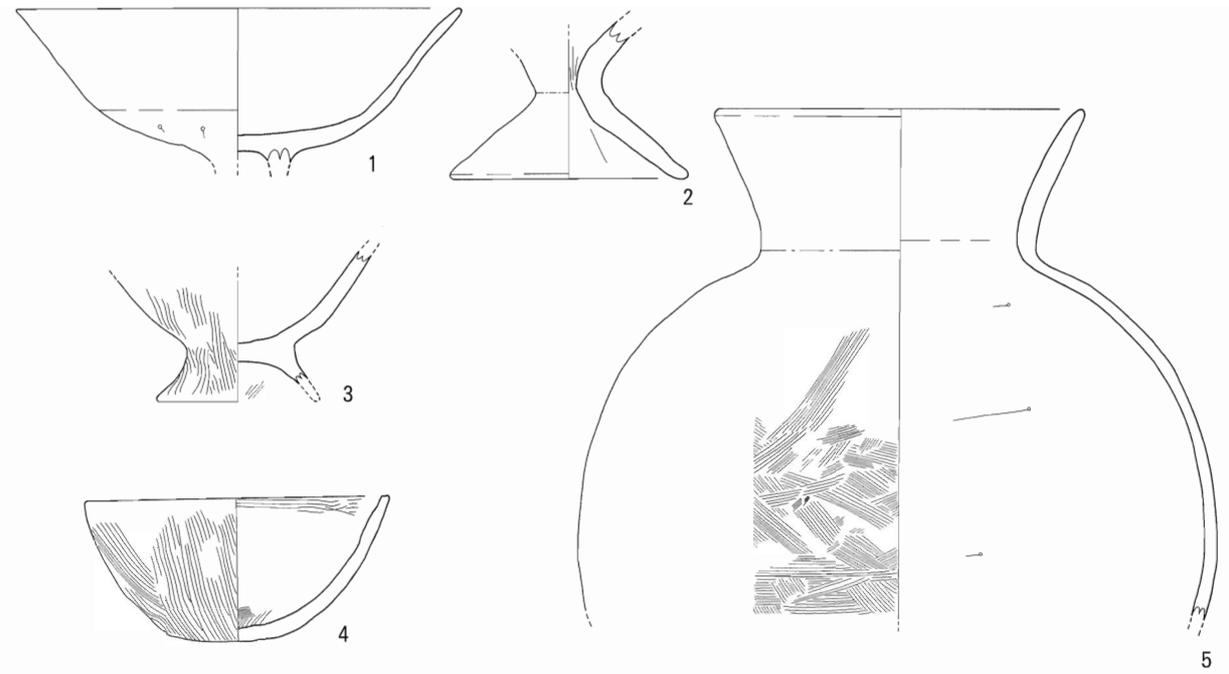
これらはいずれも古墳時代前期と考えられるものである。

遺構に伴わない遺物

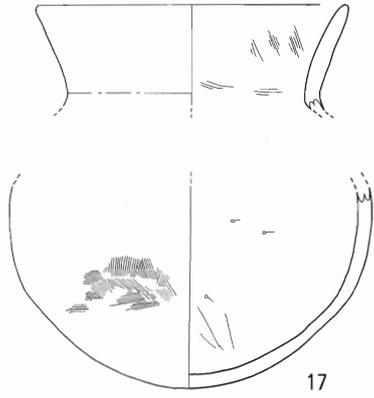
2F区からはほぼ各層にわたって遺物が出土した。出土した遺物は第95～96図のとおりで、基本土層ごとに掲載している。なお、基本1層出土の遺物については近世の磁器・陶器があるが掲載は



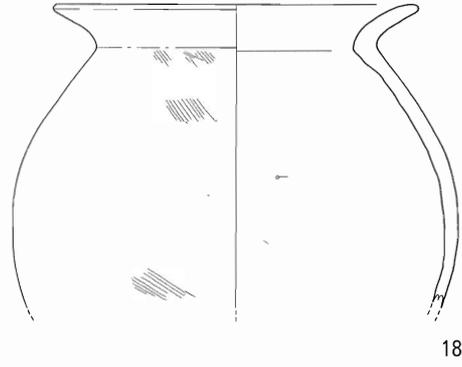
第92図 2F区 土器溜り 遺物出土状況図 (S=1/20)



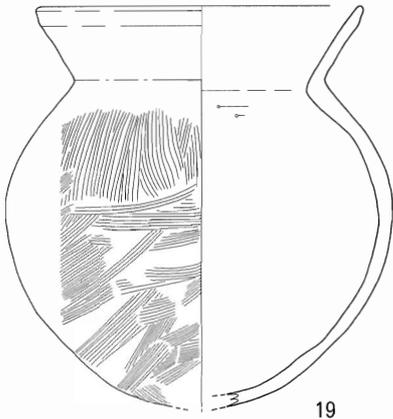
第93図 2F区 土器溜り(2F-D1, 2F-D2) 出土遺物実測図(S=1/3)



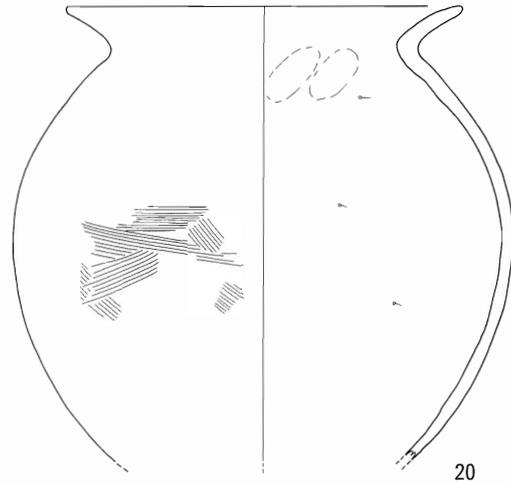
17



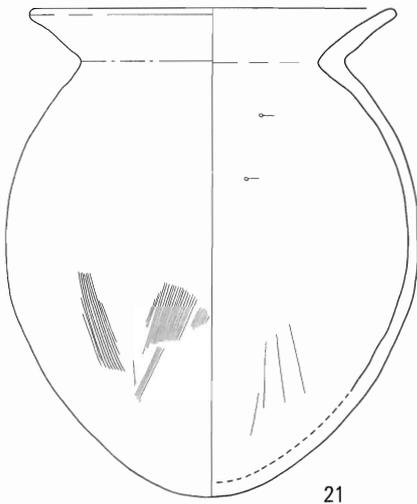
18



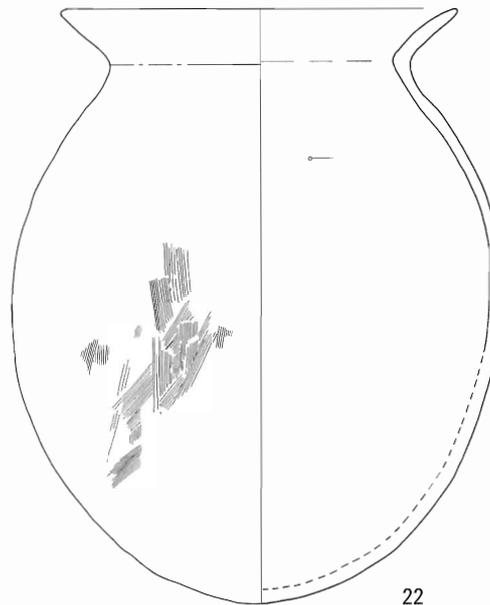
19



20



21



22

0 10cm

第94図 2F区 土器溜り(2F-D2)出土遺物実測図(S=1/3)

していない。

第95図

第95図1～5は2層及び3層（基本2・3層）出土遺物である。1・2は土錘である。1は長さ5.2cm・幅1.2cmを測るものである。この形態の土錘は、基本的に2・3層からの出土が多い傾向にある。3は須恵器・蓋である。復元した口径が15.0cmを測るもので、輪状つまみを有するものである。4は高台を伴う坏である。5は蓋と考えられるものである。端部は平坦状となる。

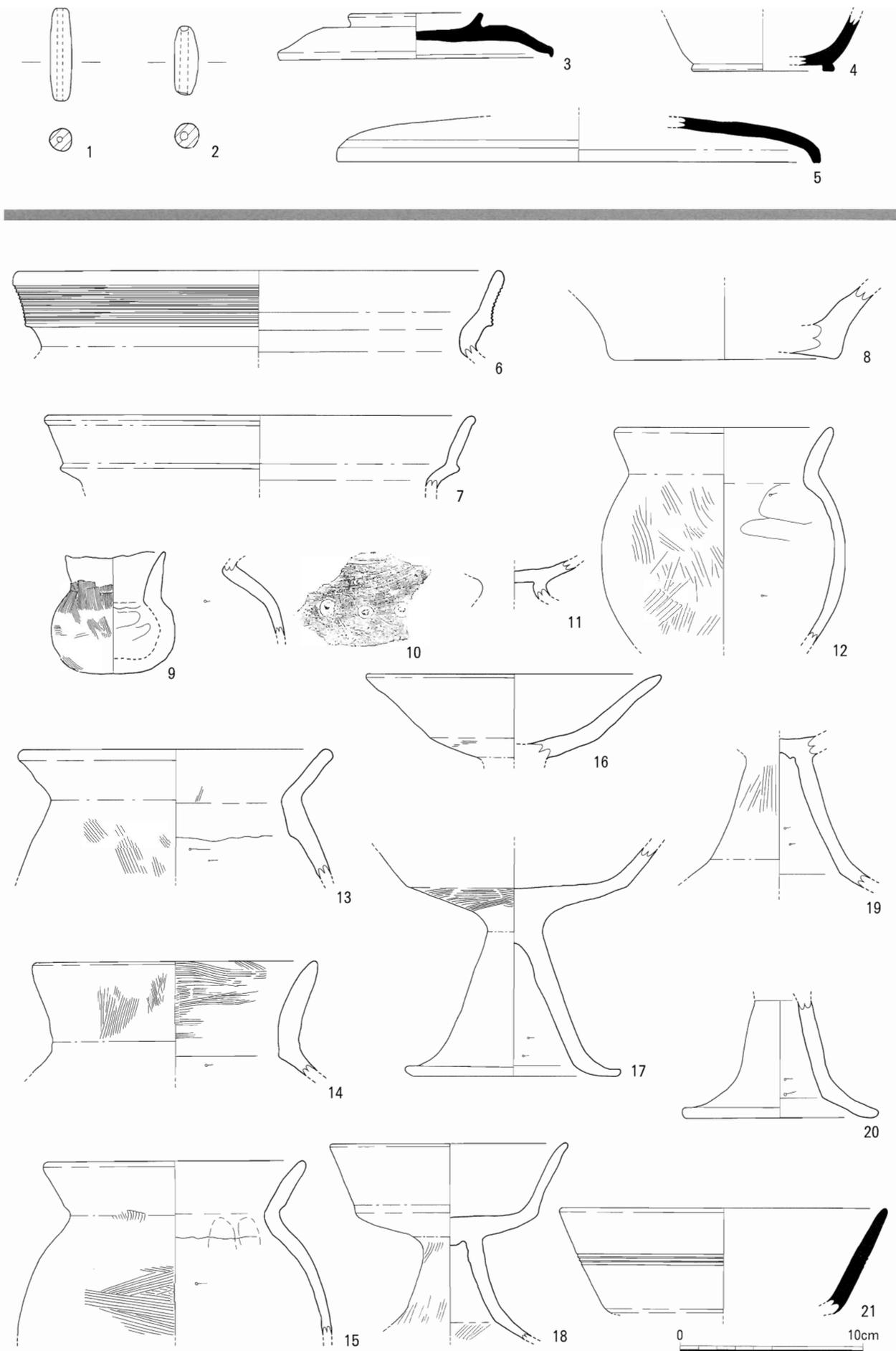
6～21は4層～6層（基本4層）からの出土遺物である。6は弥生土器・甕である。小片のため推測を含むが、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸みを持つものである。外面には擬凹線文が施されている。7は土師器・甕と考えられるもので、複合口縁である。口縁端部は丸く、稜は突出する。8は弥生土器壺または甕の底部と考えられるもの。9は壺型の手づくね土器である。10は甕の胴部と考えられる破片で、外面に竹管文状の文様が施される。11は小片のためはっきりとしないが低脚坏と考えられる。12は土師器・甕である。底部は失っているが口縁部は完存し、口径11.6cmを測る。外面にはハケメが顕著に観察できる。13～15も甕である。13・15は外方に立ち上がる口縁部を持つ。14はやや外反気味である。16～20は高坏である。16は高坏の坏部である。坏部は一度屈曲しその後直線的に立ち上がる。17は口縁部を失っている。坏部には稜が認められ、脚端部はやや強めに外方に屈曲する。18は脚端部を失っているが比較的残りの良いものである。坏部は強めに屈曲し段状となる。19・20は脚部である。端部近くが緩やかに外方に屈曲する。21は須恵器・坏である。小片のため口径等は推測を多く含むものである。外面には沈線が2条確認できる。

第96図

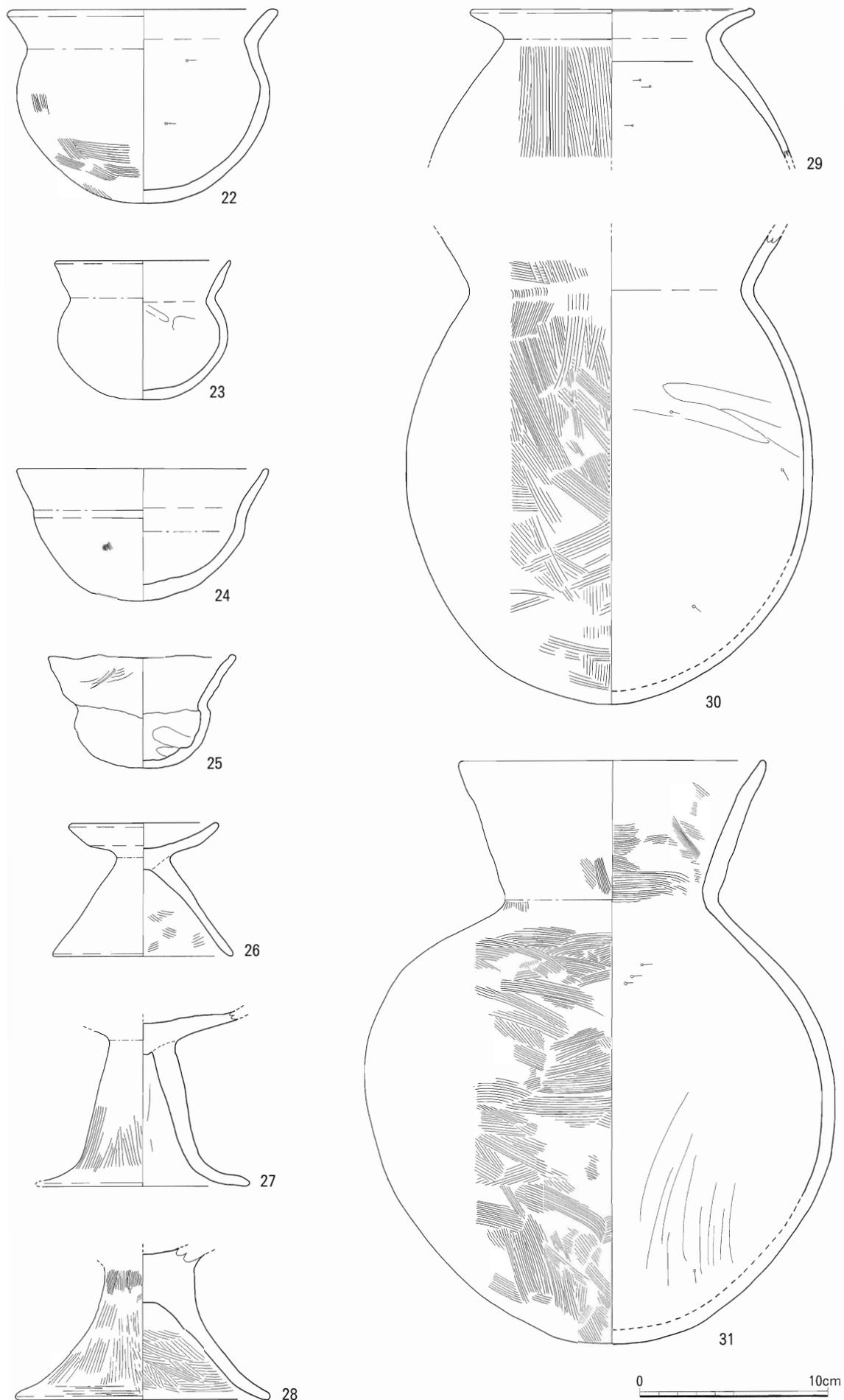
第96図は7層（基本5層）からの出土遺物である。22・23は壺（小型丸底壺）である。22は一部を失っているがほぼ完形のもので、口径13.8cm、器高10.4cmを測る。胎土には砂粒を多く含む。23は約半分を失っている。器表面は風化が進んでおり、調整等は明らかでない。24は鉢と考えられるもの。口径は13.0cmを測る。25も鉢と考えられるが小型のもので、手づくね成形である。26は器台型土器である。脚部を一部失っているが形態のわかるもので、口径7.6cm、底径9.4cm、器高7.2cmを測る。27・28は高坏と考えられるものである。いずれも坏部は失っている。27は脚部が端部近くで大きく曲がっている。28は外面・内面ともハケメが顕著に観察できる。29・30は甕である。29は端部内面にわずかな段を有している。体部外面には縦方向のハケメが観察できる。30は口縁端部を失っているものの、それ以外は比較的残っているものである。長胴気味で、体部外面には基本的に縦方向のハケメが施されている。31は壺である。口縁部及び胴部の一部を失っている。口縁部は外方に直線的に立ち上がるもので、復元した口径は16.2cmを測る。外面には横方向のハケメが施されている。

第97図

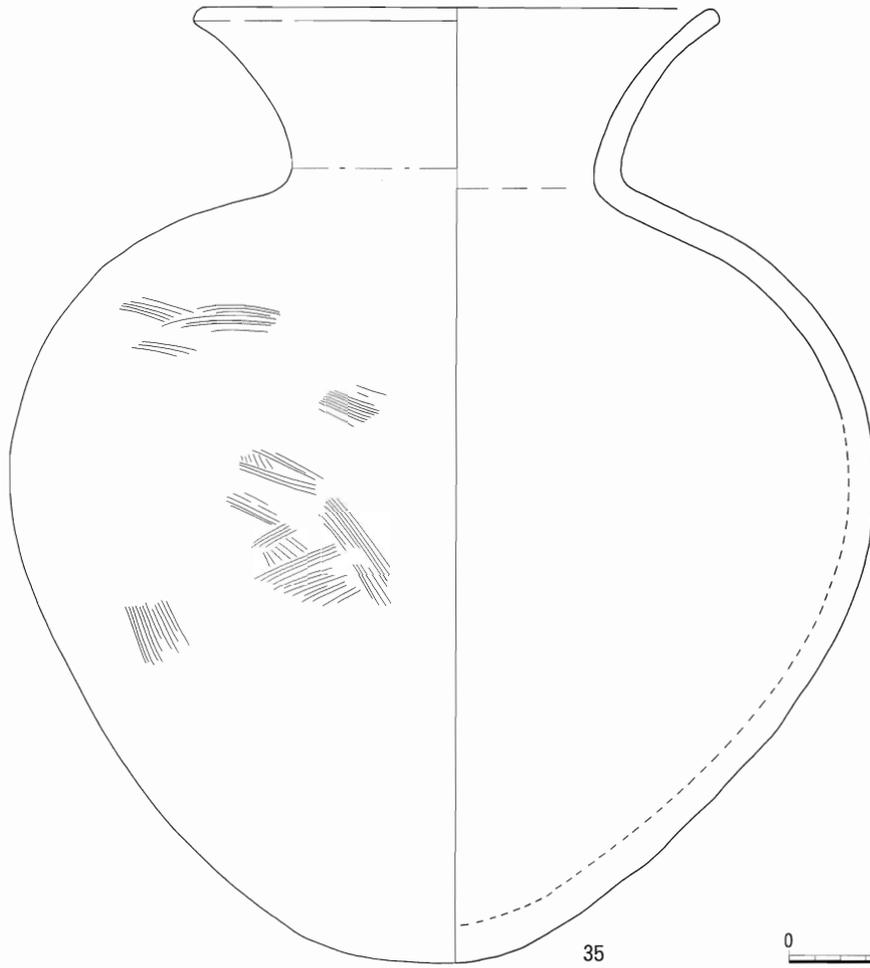
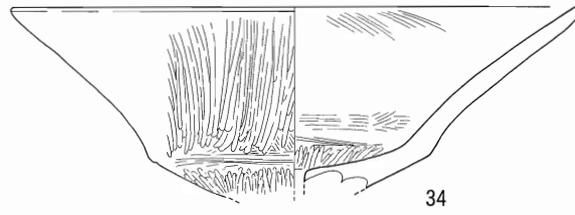
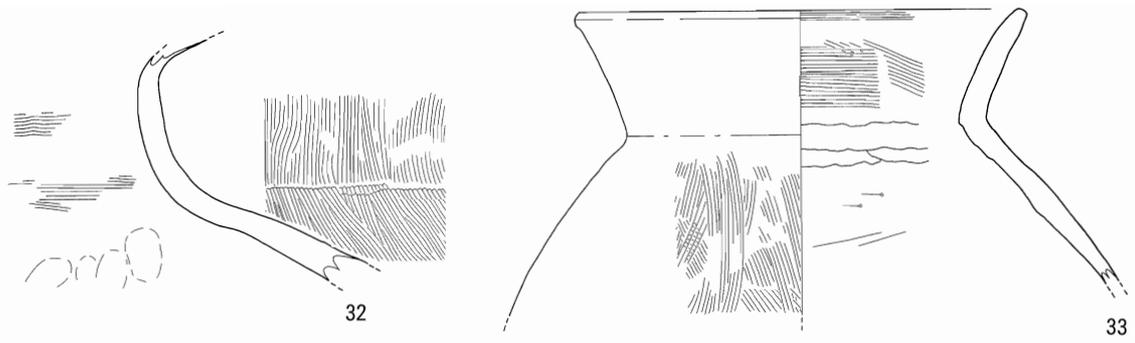
第97図も7層（基本5層）からの出土遺物である。32は壺と考えられるがほかのものとは異質な感じのするものである。形状からは口縁部が大きく外反すると考えられる。外面にはハケメが顕著に残っている。33は甕で、直線的に立ち上がる口縁部を持つ。34は高坏である。坏部のみ出土で、稜を持ち外反気味に立ち上がる。外面はヘラミガキが施されている。35は壺である。口縁部は外反しながら立ち上がり、径が20.0cmを測る。胴部は中位よりやや上で最大径となる。全体的に風化が進んでおり、調整がはっきりとしないが、外面の一部で横方向のハケメが観察できる。



第95图 2 F区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



第96图 2 F区 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



0 10cm

第97图 2 F区 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

第4節 2G区の調査

概要

2G区は、平成15・16年度に調査を行った2D区の、水路を挟んだ南側に位置する調査区である。一定の面積があったが、民家及び里道・水路に隣接していることもあり調査を行ったのは一部である。本調査区における層序は基本層序と異なる。

検出遺構とそれに伴う遺物

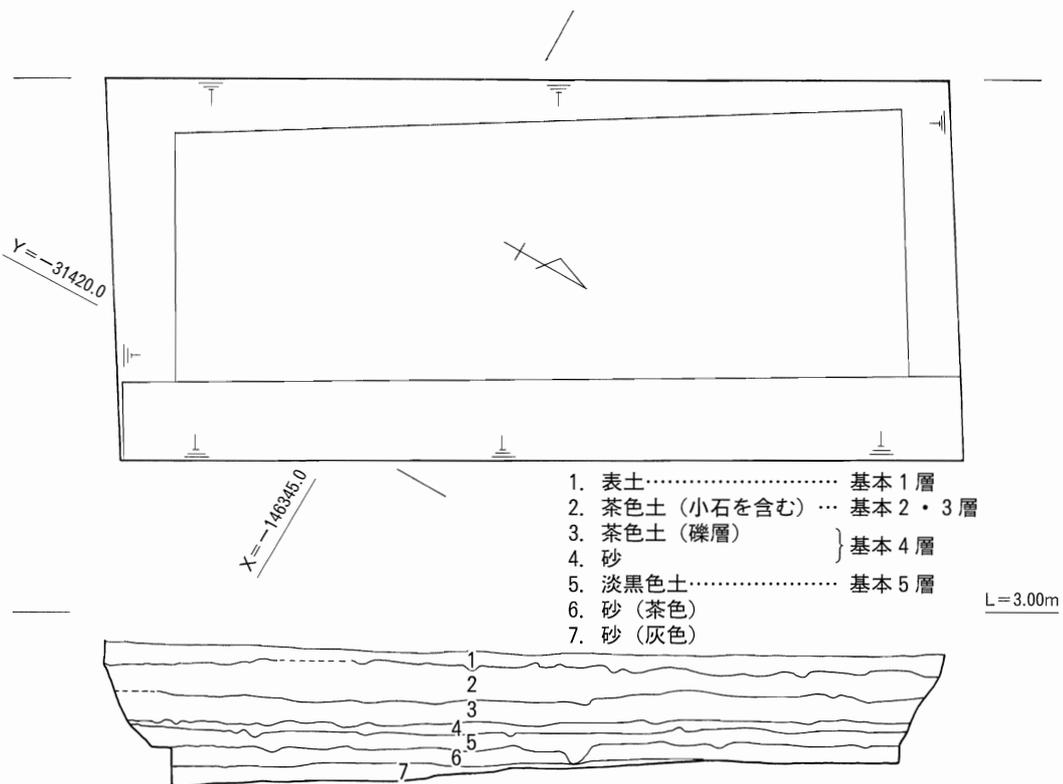
顕著な遺構は検出されていない。

遺構に伴わない遺物

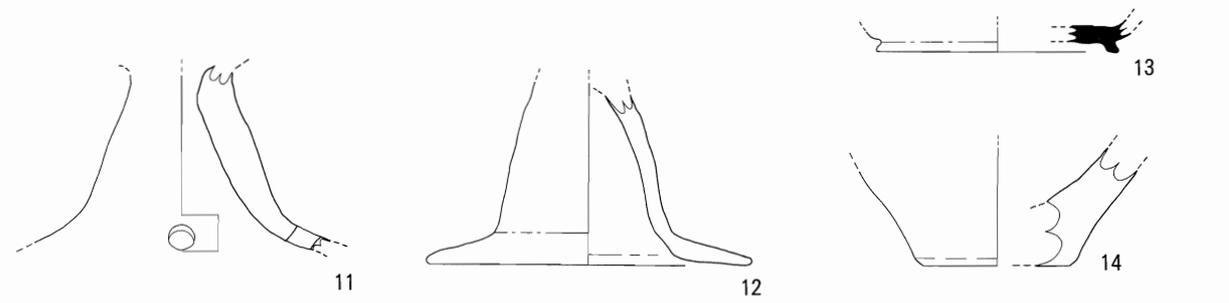
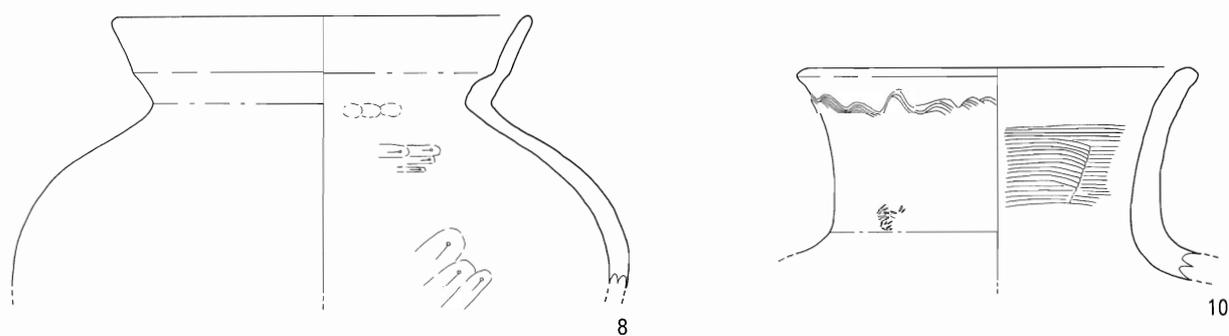
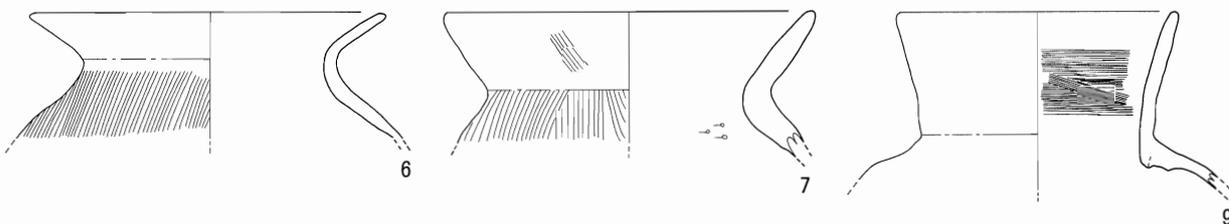
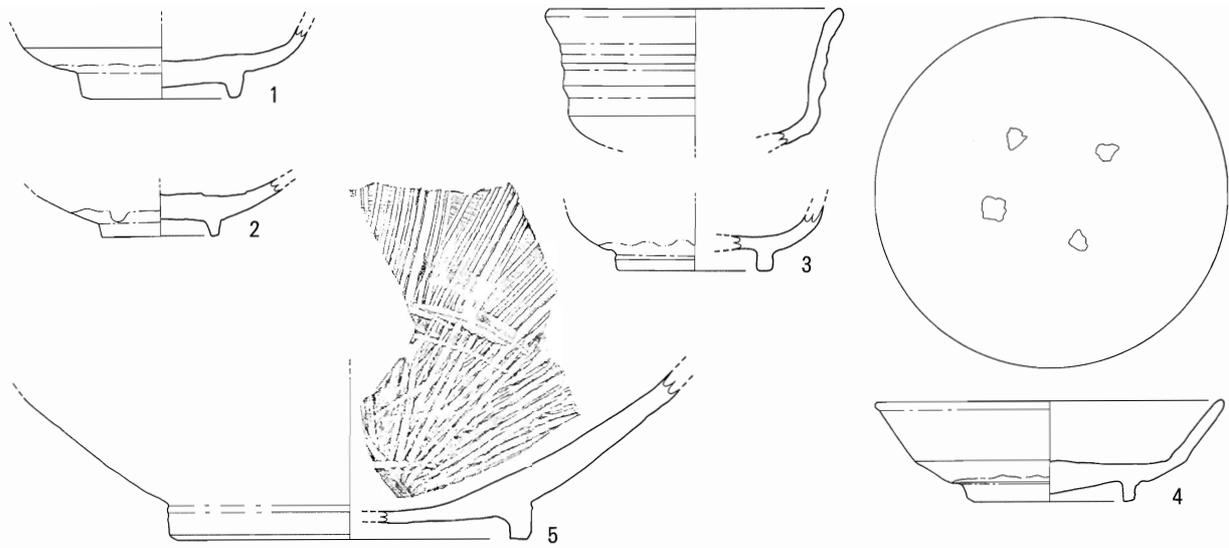
2G区からの出土遺物については第99・100図に掲載した。層ごとに取り上げており、以下基本層ごとに報告することとする。

第99図一1～5は基本1層からの出土遺物である。基本1層からの出土遺物については、主に器形の判明するものを掲載した。1は陶器皿と考えられる。高台部は無施釉で、内面には胎土目が残る。2は磁器皿と考えられる。高台部は無施釉で、内面見込みは蛇の目に釉剥ぎである。3は陶器香炉と考えられる。1と同様に高台部は無施釉。内面には胎土目が残る。4は陶器皿。二次的に比熱していると考えられる。内面には胎土目がある。5は陶器播鉢。

6～14は2～4層（基本2～4層）からの出土遺物である。6～8は土師器甕。6は器壁が薄く、口縁部は強く外反する。外面には縦方向のハケメが観察できる。7はやや厚めの器壁で、6に比べ緩やかに外反する口縁を持つ。外面は縦方向のハケメ。8は退化した複合口縁を持つ甕で、口縁部

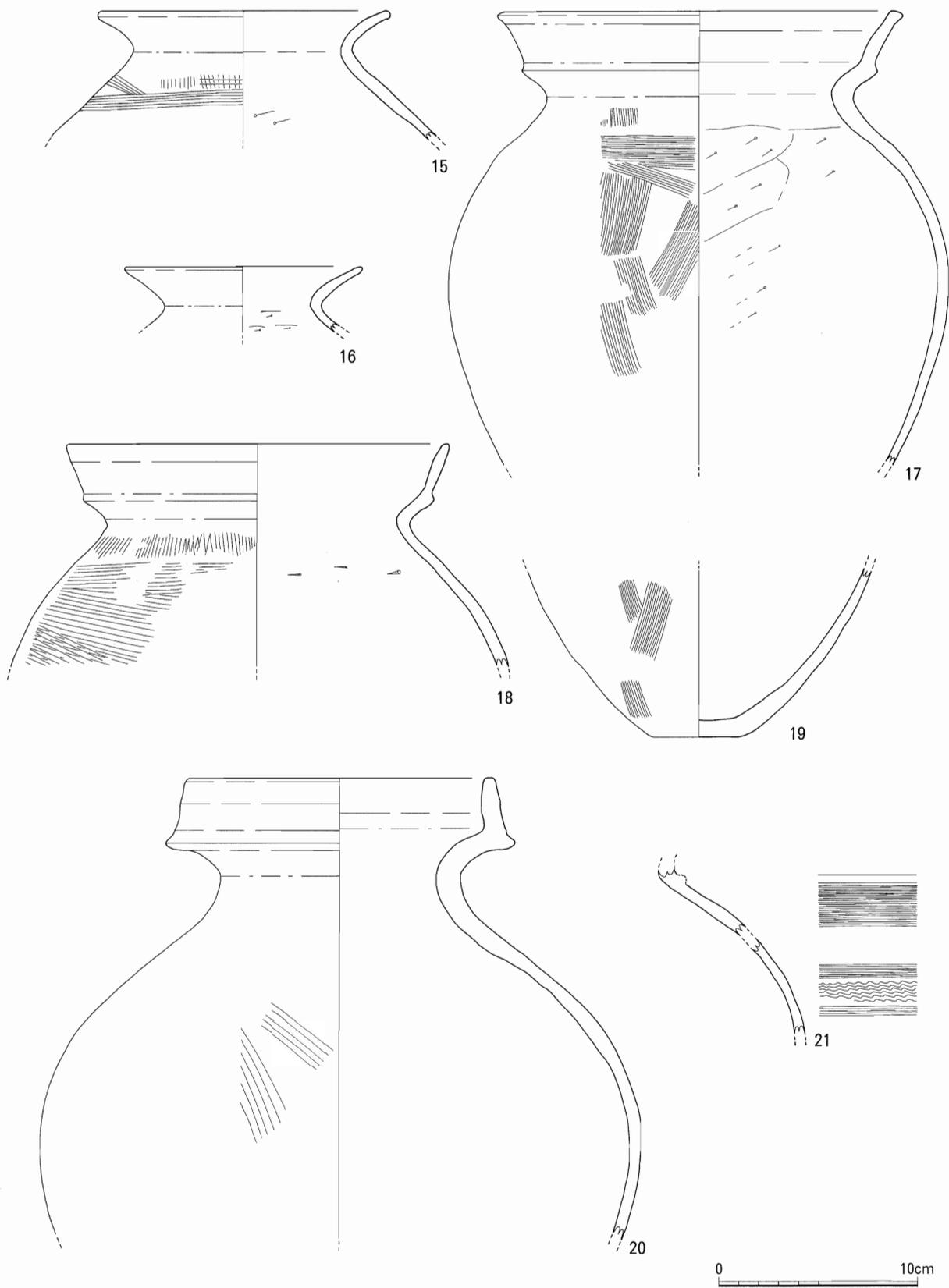


第98図 2G区 実測図 (S=1/100)



第99图 2 G区 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

外面はわずかに屈曲する程度である。9・10は土師器壺である。10はやや厚めの器壁を持ち、外面には簡易な波状文が描かれる。11・12は高坏。いずれも脚部のみ出土である。11は4方向の円形透かしを持つと考えられる。12は脚部が強く屈曲するものである。



第100図 2G区 出土遺物実測図(2) (S=1/3)

13は須恵器坏。低い高台を伴う。14は弥生土器壺の底部と考えられるもので、器表面は摩滅し胎土には砂粒を多く含むものである。

第100図に掲載したものは5層（基本5層）からの出土遺物である。15・16は単純口縁の土師器甕。両者とも口縁部が強く外反するもので、体部外面には横方向のハケメが観察できる。17・18は複合口縁の土師器甕。17は口縁部が外反し、端部には平坦面を有する。18は表面が摩滅気味であるが、横方向のハケメが観察できる。19は土師器甕底部と考えられるもので、若干の平底である。17と同一個体と思われるが、接点がなく復元できなかった。20は土師器壺。内傾する複合口縁を持つもので、胴部は中位で最大径となると考えられる。21は土師器壺または甕の胴部と考えられるもので、突帯を有し、平行線文・波状文が密に施文されている。

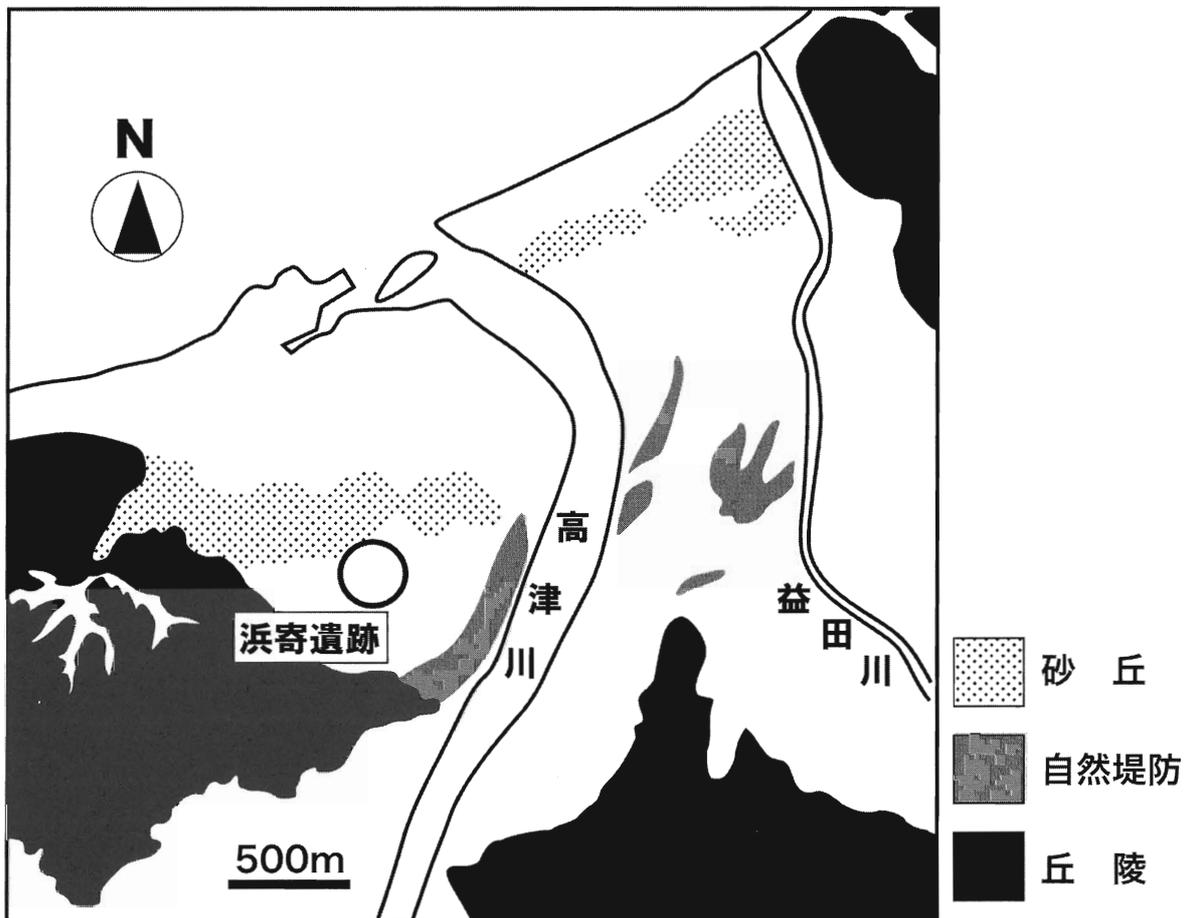
第7章 自然科学分析

第1節 立地環境について

三瓶自然館 中村唯史

浜寄・地方遺跡は、高津川の左岸に位置し、南側は丘陵、北側は砂丘に挟まれた場所にある。丘陵の先端から砂丘の先端に向かうような形で自然堤防が発達する。自然堤防の西側には低平な後背低地が広がり、今回の調査地点はその一角である（第101図）。このような地形条件から、本遺跡の古環境と堆積層の形成には高津川の影響が大きいと言える。

高津川は、起伏が大きい西中国山地を源流とする。島根県では江の川、斐伊川に次ぐ河川規模を有し、源流から河口までの地形勾配が大きい急流である。益田平野へ流れ出る地点では、浜寄・地方遺跡の南側の丘陵（柿本神社がのる）によって、流路の向きは北北東～北東に規制されている。そのため、本遺跡がある後背低地を定常的に流れる河道が形成される可能性は低く、当地は益田平野の形成開始から現在に至るまで後背低地という地形条件だったと判断され、堆積物の供給は大部分が高津川の氾濫時だったと考えられる。



第101図 調査地周辺の地形

益田平野は高津川と益田川の三角州性の堆積物によって構成される沖積平野である。旧自然堤防の微地形列をみると、高津川の営力が卓越していることがわかる。平野の前面には砂丘が発達する。周囲の丘陵は定高性が明瞭である。

浜寄・地方遺跡の堆積物は比較的細粒な砂～泥を主体としている。これは、氾濫流が堤防（自然堤防、人工堤防）を破壊したり、一部を乗り越えたりして後背低地に流れ込み、比較的弱い流れの条件下で堆積したものとみられる。その地層をみると、明るい色調の砂質土層または粘質土層と、有機質を含む暗色の層が互層している。前者は、氾濫流によってある程度厚く堆積した地層が残存したものである。その典型と言えるのが4層である。後者は、土壌化によって有機物が混入した地層である。特に、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物を包含する3層は、長期間にわたって土壌化を受けた層とみられる。

本遺跡の地形は、上記のように周りを丘陵などで取り囲まれている。そのため、自然堤防が発達することで閉塞的な環境になりやすく、乾湿を繰り返す湿地的な環境が継続したと推定でき、花粉分析からも同様の環境が指摘されている。このような環境であるため、居住地としての利用よりも水田等の耕作地としての利用が中心になったといえる。



写真1 高津川の源流

谷底平地の一角からわき出る泉が高津川の源流とされている。この地点のさらに上方では河川争奪地形がみられ、かつての源流域の水は錦川に流れている。

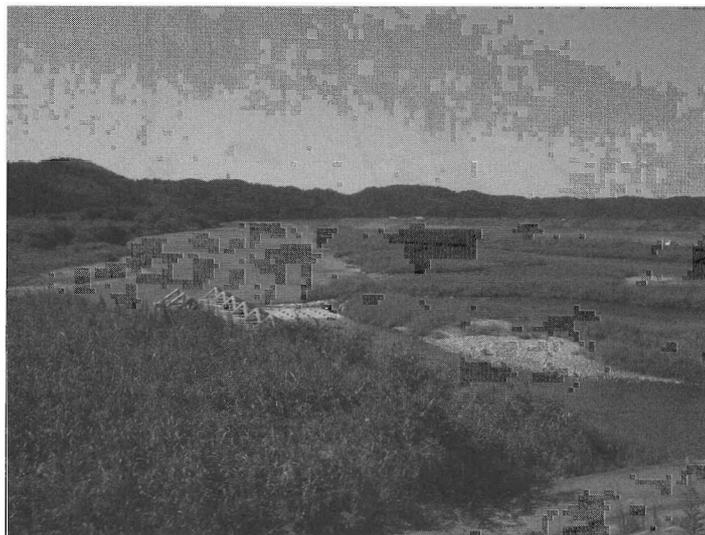


写真2 匹見川の合流点

安富盆地で匹見川が合流する。匹見川は本流に匹敵する流量を持ち、河川勾配が大きな急流である。

第2節 浜寄・地方遺跡発掘調査に伴うボーリングコア解析から復元される益田平野の古環境

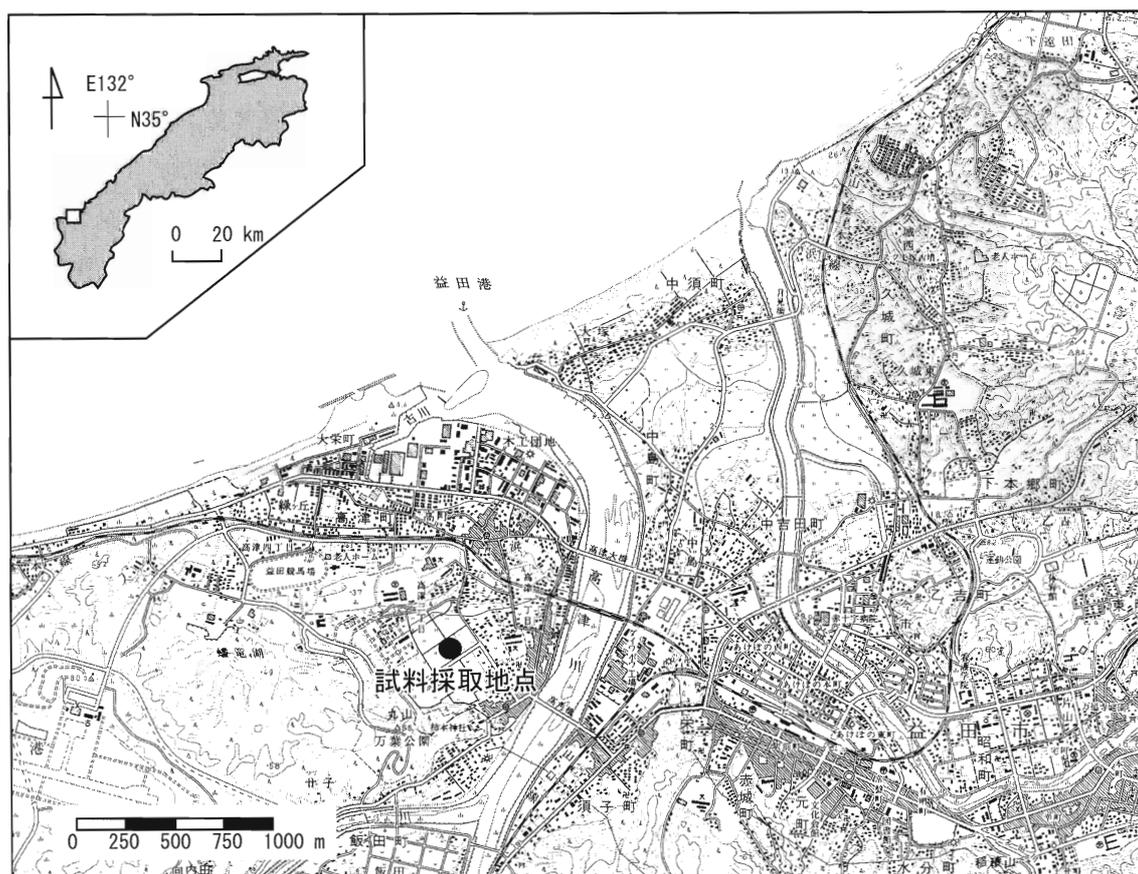
島根大学汽水域研究センター 山田 和 芳

1 はじめに

島根県西部、益田市高津町の浜寄・地方遺跡にて採取された全長20mにおよぶボーリングコアについて、層相観察および予察的な分析とともにCNS分析を行ない、堆積環境を推定した。そして、別途業務で行なわれた10層準における¹⁴C年代測定結果に基づいて、益田平野における完新世の地形発達過程について考察した。なお、本報告は、浜寄・地方遺跡において実施されたボーリング試料分析結果に、その後、追加された年代測定結果を考慮して再検討したものである。

2 益田平野の地形地質概要とコア採取位置

益田平野は、島根県西部では最大の平野で、高津川と益田川の沖積作用によって形成されている。平野前面にあたる北部は海洋部と直線的に接していて、両者は砂浜・砂丘で区切られている。また、平野の東西および南部は山地・丘陵部になっており境界は明瞭である。今回検討した浜寄・地方遺跡内BP No.1地点のボーリングコアは、平野西部の高津町地内の標高2.23mの地点で採取された(第102図)。採取地点は、益田平野西部の、高津川の河口から約1 km上流の左岸にあたる地域で、



第102図 HMY04-1コアの掘削地点

背後の基盤の丘陵地と前面の浜堤・砂丘に挟まれた小規模な埋没谷を埋めた低地帯になっていて、現在は水田利用されている。ボーリングコアは便宜的にHMY04-1コアと命名した。

3 コアの層相

肉眼観察および軟X線写真観察によってHMY04-1コアの柱状図を作成した(第103図)。HMY04-1コアの層相は、全層を通じて、細砂～砂質シルトが主体である。特徴的なこととして、多くの(腐食)植物片や炭化木片が認められる。以下にコアの層相について述べる。

深度20.00～19.61m：最下部に垂円～円礫を含む円磨された黄土～黄灰色を呈する細～中砂で構成される。

深度19.61～18.51m：いわゆるグライ土と呼ばれる、青灰～黄褐色シルト質粘土で構成される。

深度19.22および18.92m付近には、固結化したシルト岩であらわされるJ字形筒状の生痕が認められる。

深度18.51～17.00m：灰～暗灰褐色を呈するシルト質粘土。ところどころ細砂薄層を含む。また、腐食した植物片や炭化木片を多く含む。

深度17.00～13.30m：比較的淘汰の悪い灰～灰褐色細砂。二枚貝殻破片(種の同定不可能)や巻貝(ホソウミニナ、*Batillaria cumingii*)を多く含む。また、不明瞭な平行葉理、および明瞭に正級化した厚さ2cm程度の層理も認められる。ところどころ炭化木片を薄層として含む。

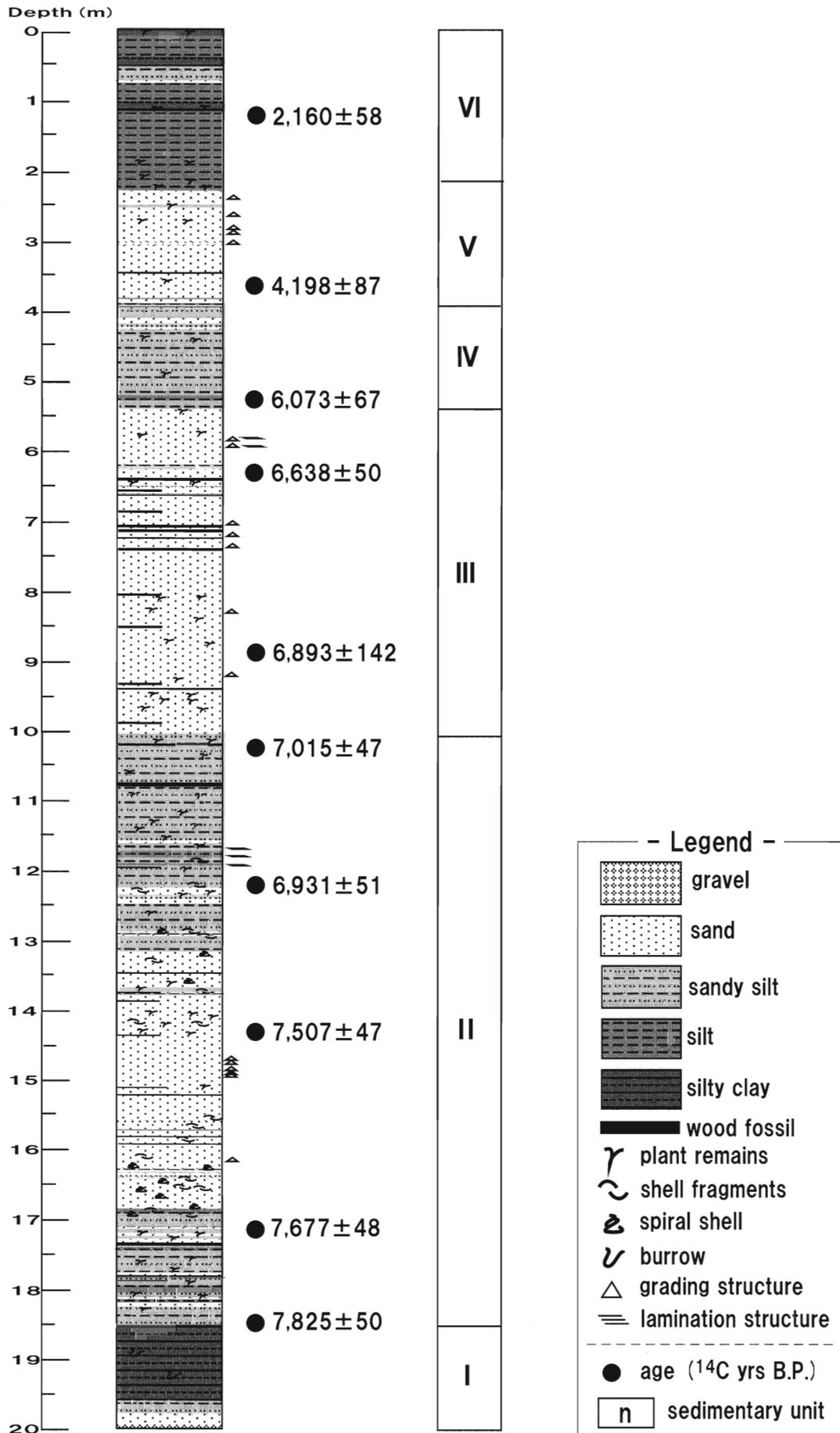
深度13.30～11.50m：下部の深度13.30～12.79mでは灰褐色シルト質細砂と灰色細砂の互層になっている。その細砂層中には、二枚貝殻破片や巻貝(ホソウミニナ、*Batillaria cumingii*)を多く含む。上部では、主に、暗灰～灰褐色を呈するシルト質細砂で構成される。とくに、12.00～11.67mにはやや不明瞭な平行葉理構造をもつシルト層が挟在する。また、全層準を通じて細砂薄層やサンドクラストも挟在する。ところどころ貝殻破片を含む。

深度11.50～10.06m：比較的淘汰の良い暗灰～灰色を呈する細砂が優占する砂質シルトで構成される。薄層やレンズ状に腐食した植物片や炭化木片を含む。深度10.80～10.77mは有機質土層である。深度10.23～10.19mには生痕が認められる。

深度10.06～5.34m：全体的に淘汰の悪い暗灰色を呈する細～中砂で構成される。下位の層準ほど中砂が支配的になる。深度9.18、8.30、7.35、7.23、7.06、5.95および5.82mには明瞭に正級化した厚さ2cm程度の層理を含む。また、弱い斜行葉理構造がそれぞれ深度6.80～6.60、6.00～5.70mに認められる。深度9.76～9.34、7.40～7.06mの層準には、炭化木片の濃集が認められる。下部には全体的に腐食した植物片を多く含み、上位には暗灰色シルト薄層やマッドクラストが認められる。最上位の深度5.38～5.34mでは灰色シルト～細砂互層になっている。

深度5.34～3.84m：不明瞭な平行もしくは斜行葉理をもつ暗灰色シルト、深度4.28および4.08mにはそれぞれ明灰色粘土薄層を挟在する。散在的に腐食した植物片濃集が認められる。最上位の深度3.97～3.84mでは、灰色シルト～細砂互層になっている。

深度3.84～2.18m：灰～暗灰色を呈する細～中砂。深度3.43～3.38、2.98、2.91、2.85、2.63、2.51および2.44mには明瞭に正級化した厚さ1～5cm程度の層理を含む。深度2.76m付近には3



第103図 HMY04-1コアの柱状図と堆積年代

cm角の花崗安山岩の円礫が混入している。下部は、淘汰の良い細砂で構成される。

深度2.18～1.88m：暗灰色を呈する有機質なシルト。全層にわたって腐食した植物片を含む。

深度1.88m以浅：主に暗灰～灰褐色を呈するシルト。深度1.14mにシルト質粘土薄層が、深度0.70mに細砂薄層がそれぞれ挟在する。深度0.08m以浅は、現生の植物根を含む表土である。

以上のような堆積層相から、本コアは6つの堆積ユニットに区分できる。各堆積ユニットの深度は以下のとおりである。ユニットⅠ：深度20.00～18.51m、ユニットⅡ：18.51～10.06m、ユニットⅢ：10.06～5.34m、ユニットⅣ：5.34～3.84m、ユニットⅤ：3.84～1.88m、ユニットⅥ：1.88m以浅（第103図）。

4 年代測定値

コア中に含まれる木片や植物片を用いて、10層準において¹⁴C年代測定を行なった結果を表1に示す。測定は、(財)九州環境管理協会に依頼して行なった。その結果、ユニットⅡの最下位で7,825±50年前、ユニットⅥで2160±58年前という値が得られ、その間の堆積物には年代値の逆転はほぼ認められない。以下に各堆積ユニットの推定堆積年代を示す。ユニットⅠ：7,800年前以前、ユニットⅡ：7,800～7,000年前、ユニットⅢ：7,000～6,000年前、ユニットⅣ：6,000～4,200年前、ユニットⅤ：4,200～2200年前、ユニットⅥ：2200年前以降（第103図）。なお、本報告では、¹⁴C年代をそのまま堆積年代値として用い、暦年代補正は行なっていない。

5 分析方法

5-1 試料分割

コアを縦方向に半載して、一方の半載試料の断面上に初磁化率測定用ポリカーボネートキュービック（夏原技研製：7cc）を連続的に並べ、試料が隙間なく均等に入り込むように押し込んで試料を詰めた。キュービック試料は、初磁化率測定（別の機会に報告）後、乾燥させて含水比を測定し、その後、一部を強熱減量（LOI；Loss of Ignition）測定用に分取し、残りを粉末化してCNS分析用にして、全窒素（TN）、全有機炭素（TOC）、全硫黄（TS）含有量の測定を行なった。また、コア半載後の試料分割で残った堆積物は、1cmごとに採取し、粒度分析用、花粉分析用試料として2種類に袋詰めし保管した。

表1 ¹⁴C年代測定結果

Depth (m)	Material	¹⁴ C age (yrs.B.P.)	Labo.Code
1.15	plant material	2,160± 58	UGAMS-R00722
3.67	plant material	4,198± 87	UGAMS-R00723
5.15	wood	6,073± 67	UGAMS-R00724
6.33	wood	6,638± 50	UGAMS-R00725
8.71	wood	6,893±142	UGAMS-R00726
10.19	wood	7,015± 47	UGAMS-R00727
12.17	plant material	6,931± 51	UGAMS-R00728
14.27	wood	7,507± 47	UGAMS-R00729
17.2	wood	7,677± 48	UGAMS-R00730
18.4	wood	7,825± 50	UGAMS-R00731

なお、それぞれの試料採取深度については、試料分割中に多少伸縮するため、コア採取時の記録に基づいて補正式を作成することで求めている。

5-2 含水比

含水比とは、乾燥試料重量に対する試料中に含まれる水分量を百分率で表したものである。キュービック試料の湿潤試料重量を測定した後、約60℃で48時間乾燥させて、乾燥試料重量を測定する。両者の重量差が水分量になり、乾燥試料重量と水分量が1：1の場合には、含水比が100%となる。分析には、すべてのキュービック試料（761試料）を用いた。

5-3 強熱減量

重量を測定した約5～7g軽く砕いた乾燥試料を、600℃・2時間電気炉中で強烈に熱して、冷却後再度重量を測定することで減量分を求めた。強熱による減量分の大部分は有機物であるため、堆積物中の有機物量を推定できる。今回は、全層により選択した173試料について分析を行なった。

5-4 CNS分析

メノウ乳鉢によって粉末・均一化した乾燥試料を約10mg秤量して、銀コンテナに入れて1N塩酸で無機態炭素を除去した後、錫コンテナで包み、FISONS社製CHNSコーダ（EA-1108型）により分析した。標準試料はBBOTを用いた。測定後、標準試料を用いて校正して、全窒素（TN）、全有機炭素（TOC）、全硫黄（TS）含有量を求めた。今回は、全層により選択した173試料について分析を行なった。

6 分析結果

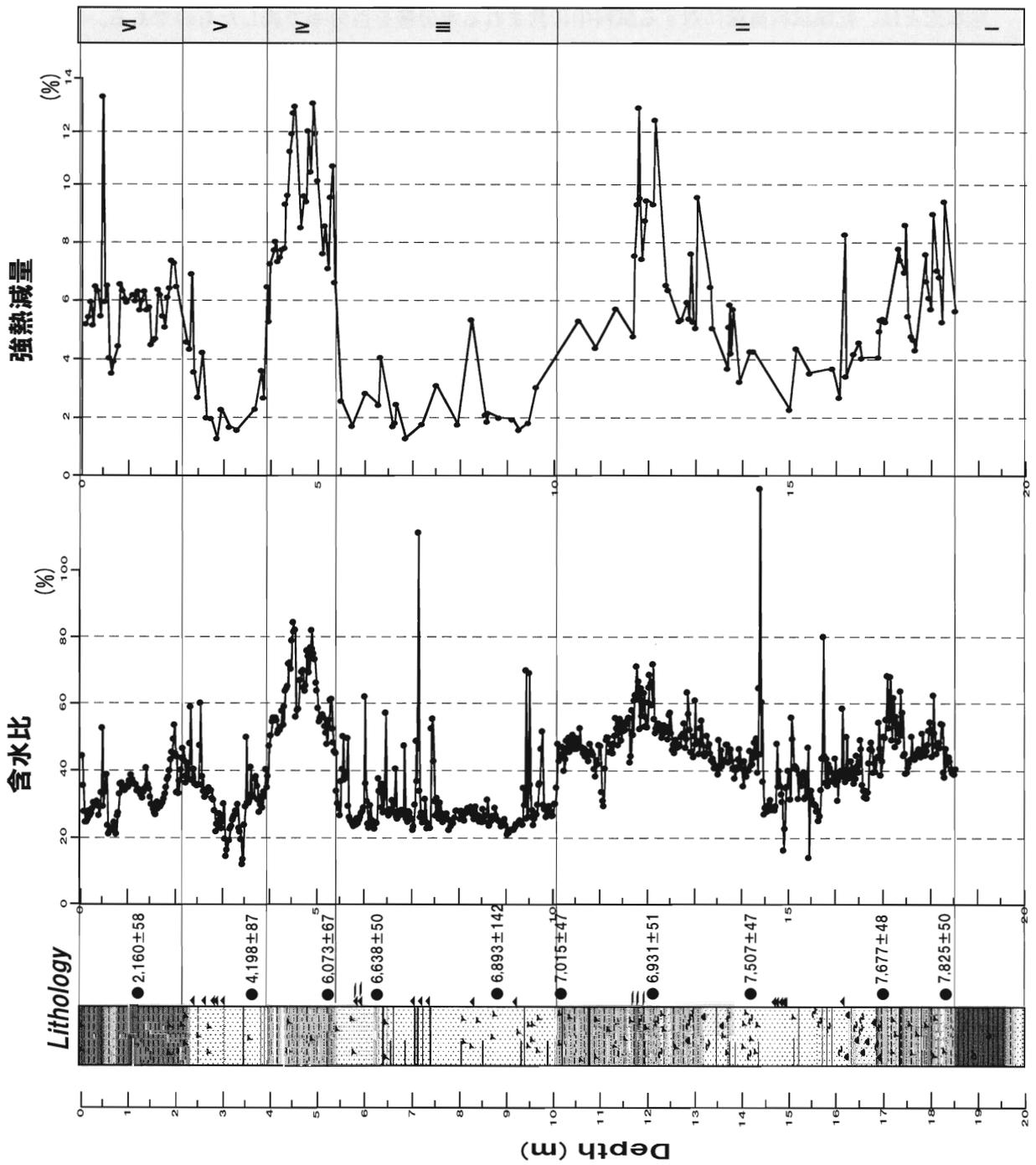
6-1 含水比（第104図）

スパイク状ピークを除けば、概ね20～80%の間で変動している。ユニットⅡの下位（深度18.51～17.00m）と上位（深度12.79～11.50m）で40～60%を示し、中位（深度17.00～12.79m）では前後と比べると減少し25～40%くらいの値を示す。ユニットⅢでは、20～30%くらいの安定した低い値を示し、深度7.5mより上位になると、スパイク的に増加する層準も含まれる。ユニットⅣは、最大87%にもなる50～87%の増加傾向を示していて、逆に、ユニットⅤでは最小10%にもなる安定した10～30%の減少傾向を示す。最上位のユニットⅥでは概ね20～40%の範囲で変動している。

コア柱状図と対比すると、シルトおよび砂質シルト層準では含水比は増加傾向を、逆に、細砂層では減少傾向を示していることがわかる。

6-2 強熱減量（第104図）

全層準を通じて、1～14%の間で変動している。ユニットⅡでは下位から上位に向かって、増→減→増という凹状の変動傾向をしている。とくに、深度12.79～11.50mで増大するピークをもつ。ユニットⅢでは、2%前後に減少して安定する。ユニットⅣでは、8～13%まで増加して、ユニットⅤで一旦1～2%に減少し、ユニットⅥで再び4～8%に増加する傾向が読み取れる。



第104図 HMY04-1コアにおける含水比、および強熱減量の鉛直方向変化

6-3 全有機炭素 (TOC)、全窒素 (TN)、全硫黄 (TS) 含有量 (第105図)

TOCとTN含有量の変化は、ほぼ類似した傾向を示す。ユニットIIでは、深度18.51~17.00mと深度12.79~11.50mでTOCとTNがそれぞれ2~4%、0.15~0.2%前後を、深度17.00~12.79mでは上下の層位と比べると減少し、それぞれ0.4~1.5%、0.1%前後を示す。ユニットIIIでは、それぞれ0.5%、0.08%くらいに減少して安定する。TNは深度6.7mよりさらに減少し0.02%くらいになる。ユニットIVでは、正の増大ピークとなっており、それぞれ2~5%、0.1~0.18%の値を示す。一方、ユニットVでは、両者ともほぼ0%の値を示す。最上位のユニットVIでは、TOCは深度0.50m付近のスパイクを除けば、1%前後と安定し、TNは若干変動するもののTOCと同じように深度0.50m付近のスパイクを除けば、0.05%前後を示す。

一方、TS含有量の変化は、TOCやTN含有量のそれと若干異なる傾向を示す。ユニットIIでは、深度18.51~16.00mと深度13.80~11.50mでは、含有量が1.0%を超える増加傾向を示す。前者の層位では最大2.3%程度の濃度をもつ。その間の深度16.00~13.80mでは0.5%前後の値を示す。ユニットIIIでは、概ね0.5%くらいの値で安定している。ユニットIVでは、全層準において極大を示す3.0%のピークをもつ平均2.0%の正の増大ピークとなっている。一方、ユニットVでは、0.3%前後の値を示し、上位で再び最大1.5%の小ピーク状なる。最上位のユニットVIでは、全層にわたり0%の値を示す。

また、堆積物中の有機物の起源特定に有効なC/N比(重量比)と、淡水性・海水性堆積物の識別や底質の酸化還元性の議論に有効なC/S比(重量比)を求めた結果(第105図)、C/N比はTOCやTN含有量と大まかに一致する変動傾向を示して、深度0.80mの異常に大きいスパイクを除くと、0~30の値で変動している。ユニットIIでは、6~20の値で変動し、ゆるい凹状の変動を示す。ユニットIIIでは、5程度の低い値で一定している。ユニットIVでは、20以上の正の増大ピークとなっている。一方、ユニットVではほぼ0の値を示し、ユニットVIで再び20前後の正の小ピーク状となる。一方、C/S比は、0~8の変動範囲をとり、どれとも類似しない変動をしている。ユニットIIでは、深度17.5、15.3、12.0mに極大ピークをもちながら1~4の範囲で増減している。ユニットIIIでは、上位に行くにつれ徐々に減少する傾向があり、2以下の値をもつ。ユニットIVでは、下位で1.8前後の正の増大ピークとなっていて、ユニットVでは、ほぼ0の値を示し、ユニットVIではTS含有量が0のため計算できていない。

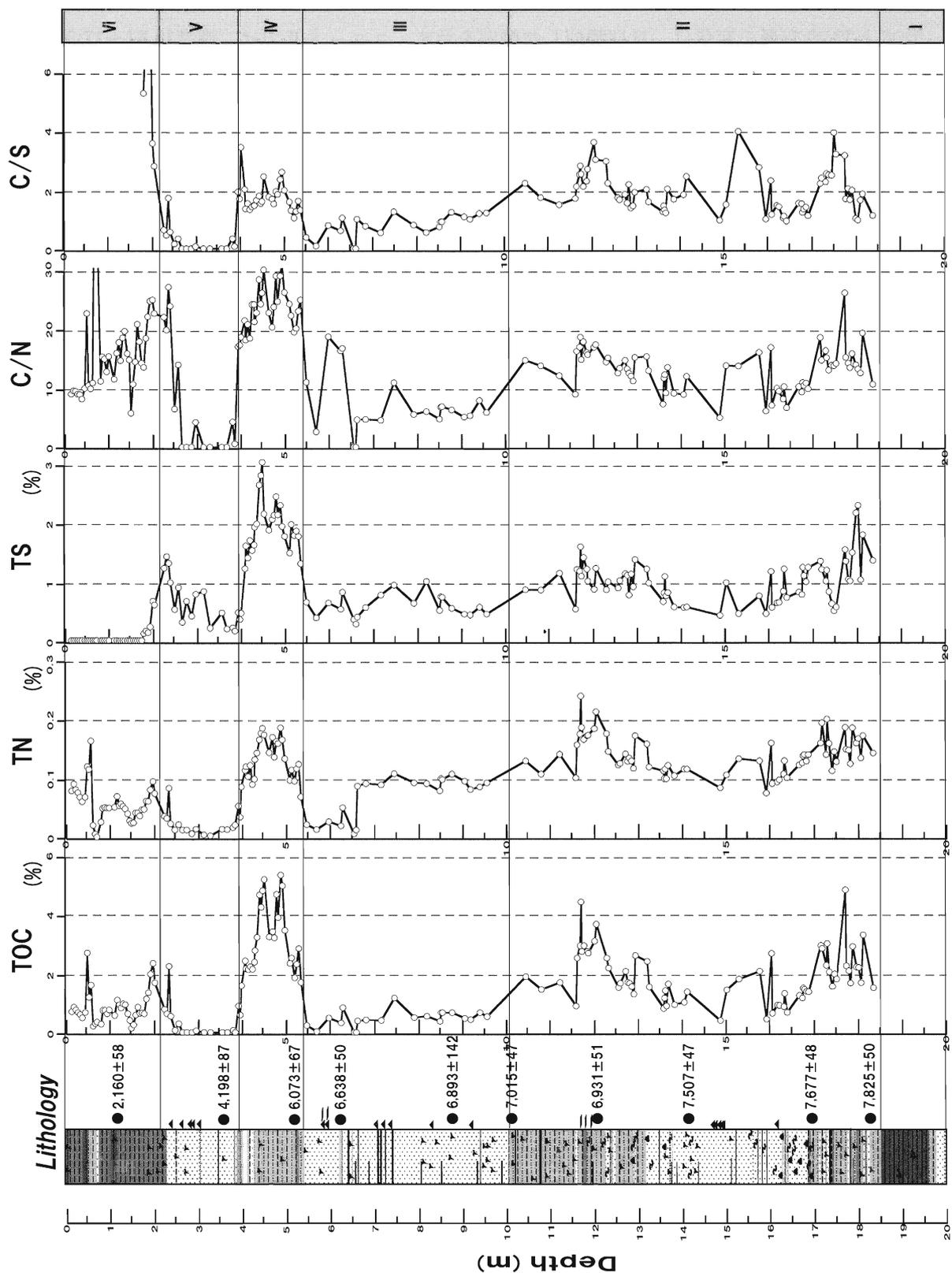
7 考察

7-1 分析結果に基づくHMY04-1コアの堆積環境

HMY04-1コアは、益田平野に広く堆積する沖積層であり、過去1万年間にあたる完新世以降の海水準変動や高津川や益田川の両河川によるデルタの発達過程を記録していると考えられる。今回の分析結果から、堆積層変化とそれぞれの分析値の鉛直変化には共通する特徴があることが明らかにされた。これをもとにそれぞれのユニットの堆積環境について考察する。

ユニットI：深度20.00~18.51m (7,800年前以前)

最下部層に相当するこのユニットでは、円礫を含む細~中砂層とそれを覆う青灰色シルト質粘土層で構成される。堆積層相から海生貝類や有孔虫、海浜性堆積物である証拠は一切見つかっていない。今回、試料採取が困難であったため、CNS分析を行なうことはできていないが、青灰色を示



第105図 HMY04-1コアにおける全有機炭素 (TOC), 全窒素 (TN), 全硫黄 (TS) 含有量, C/N比, およびC/S比の鉛直方向変化

す2価酸化鉄の存在から、おそらく最終氷期に形成された河川の下刻作用によって生じた小谷を埋めるように扇状地性および河川性堆積物が堆積し、その後、後背湿地のような過湿地環境になり、地下水系の非常に浅い湿地帯になっていたことが予想される。試料採取地点が、基盤岩が露出する丘陵地域の前面で、地形的障壁により高津川本流の影響を受けない低湿地になりやすい場所であることも、この解釈は支持される。また、林(2000)によると、益田平野浜寄地区の基盤岩の標高は約-20mということ報告されていて、今回の結果とも調和的である。本ユニットは一般的な沖積層の層序区分では、沖積基底礫層と下部砂層に対比される。

ユニットII a：深度18.51~17.00m (7,800~7,600年前)

下部層の下位に相当する。灰~暗灰褐色を呈するシルト質粘土で構成されており、この層準には、炭化木片や主にヨシと思われる分解途中の植物片も多く含まれる。このユニットでは、含水率や強熱減量値が増加することから、有機質で細粒な堆積物であることを示している。また、TOCが2~4%あり、C/N比が15程度の値を持つことから、陸上高等植物起源有機物が保存されている湿地や干潟性の堆積物であることが考えられる。さらに、特徴的なこととしてTS含有量が2.3%まで増加することである。三瓶(1997)によれば、淡水成泥質堆積物の硫黄濃度は0.3~5%以下である。しかしながら、今回のHMY04-1コアは全層を通じて砂質主体であることや、沖積層で堆積速度が大きいことから、粗粒な堆積粒子による希釈効果が働いていたと考えられる。今回のTS含有量の増加は、明らかに海水の影響があらわれているものと判断できる。したがって、ユニットII aが堆積した環境は、急激に海面上昇に伴って形成された塩性湿地、もしくは砂質干潟であったと考えられる。これは、おそらく完新世初期の海進過程の初期段階を示すもので、海面上昇に伴って、最終氷期中に形成された谷沿いに海水が進入し、いわゆる内湾(エスチュアリー)のような環境になっていたことが予想される。この層準の下位で、約7,800年前という年代が得られていることから、益田平野で最も最初に海進の影響が出始めたのは約7,800年前ということになる。また、下位のユニットIとは不整合関係になっている。

ユニットII b：深度17.00~12.79m (7,600~7,400年前)

比較的淘汰の悪い灰~灰褐色細砂で構成され、貝殻破片(や巻貝(ホソウミニナ、*Batillaria cumingii*))を多く含む。ホソウミニナは、現在の中地中海で見られる淡水の流入がある外海の干潟~内湾性貝種である。このユニットでは、TC、TN、TS含有量が少ない。それは、構成粒子がほとんど細粒砂質であるため、希釈効果が大きく働いていることを示す。しかしながら、ユニットII bでは、TSがスパイク状に1%を超えている。これは、引き続き海水の影響を受けていることを示している。また、C/S比が1程度を示すことから、堆積当時の汽水~内湾環境を示している。さらに、ところどころ炭化木片を薄層として含むことから、陸源から引き続き頻繁に土砂がデルタ性として水面下に供給されていることを示す。したがって、ユニットII bが堆積した環境は、さらに、前段階よりも引き続き海面が上昇して、それによって水深が増しながら、内湾~干潟環境を呈していたと考えられる。つまり、汎世界的な温暖化によって海進が進み、海水面の上昇にともなって水域が内陸部へ拡大している環境である。このサブユニットでは、デルタ性堆積物が短時間で堆積している。また、デルタ堆積物の層相変化が著しい。このことから、この時期(7,600~7,400年前)には、海面の上昇スピードよりは河川による土砂供給量が多かったため、デルタ堆積物の上方への累重堆積が生じている環境であったことが予想される。

ユニットⅡc：深度12.79～10.06m（7,400～7,000年前）

暗灰～灰褐色を呈するシルト質細砂で構成され、ところどころ貝殻破片を含む。このユニットでは、含水率や強熱減量値が増加することから、有機質で細粒な堆積物であることを示している。また、TOCが2.5～4.5%あり、C/N比が10～20の値を持つことから、陸上高等植物起源有機物が保存されている堆積物であることが考えられる。さらに、TS含有量が1.5%前後まで増加する。このサブユニットは、引き続き海の影響が残っていて、さらに堆積する粒子が細粒化して平行葉理構造も認められる。このことから、本サブユニットは、海面がさらに上昇して、水深が増したことで、結果として沖合に堆積環境が移動したプロデルタ（三角州底置面）の環境になったと考えられる。以上をまとめると、ユニットⅡは完新世初期にあたる海進初期のデルタ堆積物である。ユニットⅡでは、海水の侵入によって干潟環境になり、その後、プログレーショナルなデルタになるが、継続する海進にともなって、次第にプロデルタ環境に変化していったことが推定される。本ユニットは、後述するように、その後ユニットⅢのデルタフロント（三角州前置面）環境に変化していく。

ユニットⅢ：深度10.06～5.34m（7,000～6,000年前）

全体的に淘汰の悪い暗灰色を呈する細～中砂で構成される。一部上方細粒化構造、斜行葉理構造および炭化木片の濃集が認められる。下部には全体的に腐食した植物片を多く含み、上位には暗灰色シルト薄層やマッドクラストが認められる。含水比、強熱減量、TOC、TN、およびTSすべての分析値が少ない。これらの特徴と下位からの岩相変化に基づくと、ユニットⅢは、無機質で粗粒なデルタフロント堆積物である。海面の上昇スピードがある程度鈍化したことで、デルタが前進して、結果的にプロデルタからデルタフロントに堆積環境が転じていったことが予想される。本ユニットは、後述するように、その後ユニットⅣのデルタプレーン（三角州頂置面）環境に変化していく。

ユニットⅣ：深度5.34～3.97m（6,000～4,200年前）

暗灰色シルトで構成している。また、散在的に腐食した植物片濃集が認められる。含水比や強熱減量も急激に増加することから、同ユニットが他の層準よりも有機質なシルト質であることが示唆される。また、TOCが2～5.5%あり、C/N比が20程度の値を持つことから、陸上高等植物起源有機物が保存されている堆積物であることが考えられる。さらに、特徴的なこととしてTS含有量が3.0%まで増加することである。TS含有量の増加は、明らかに海水の影響があらわれているものと判断できる。この層準では、有機質なシルトが堆積する環境に変化することから、より陸側に近づいたデルタプレーンのような堆積場に転じている。さらに、TOC・TS含有量とも高いことから、その水域が、閉鎖的になっていたことが考えられる。一般に、日本における完新世の海面変化曲線は、6,500～5,000年間頃に最高海水準に達している（Umitsu, 1991）。山陰地方では、島根大学埋蔵文化財調査研究センター（1995）、中村ほか（1996）および高安（2004）などによって、¹⁴C年代で約5,000年前に現在よりも約1 mほど海面が高い最高海水準に達していたことが明らかにされている。今回の結果では、益田地方では、約6,000年前に最高海水準に達し、その後、海退に変化していることが読み取れる。また同時期に、強い沿岸流の営力によって内湾の出口付近に砂州が形成され、陸側に取り残された水域が潟湖（ラグーン）となって閉鎖的環境になったことが推定される。一般的な沖積層の層序区分ではユニットⅡからこのユニットⅣまでが、中部泥層に対比される。一般的には泥層とされるが、本研究対象地域は、主に砂質～砂質シルトである。これは、採取地点が内陸部に位置すること、基盤の丘陵部のすぐ前面であり、斜面から供給される碎屑量が多いため、

全体的に砂質になったということで説明できる。

ユニットV：深度3.97～1.88m（4,200～2,200年前）

灰～暗灰色を呈する細～中砂で構成され、ところどころ上方細粒化した厚さ1～5cm程度の級化層理を含んでいる。含水比、強熱減量、TOC、TN、およびTSすべての分析値が0に近い。これらは無機質で粗粒な河川性堆積物であることを示唆する。前ユニットから続く海退が進行して、完全に陸上環境に変化していることが考えられる。また、最上位の深度2.18～1.88mでは、暗灰色を呈する有機質なシルトで構成され、ヨシとおもわれる腐食した植物片を含んでいる。このような特徴があるユニット上位では、高津川の流路変化の最後段階において、後背湿地環境に転じている。また、TS含有量が再び増加していることから、ユニットの最終過程において、再度海面が上昇し塩性化が生じていた可能性がある。したがって、ユニットVの堆積した時代（4,200～2,200年前）には、陸化が始まる河川性の堆積環境に大きく変化している。これら堆積物は高津川、もしくは高津川に流れ込む支流の河川堆積物と後背湿地堆積物である。また、この時期の後半（約3,000年前）には、再度海面上昇が生じていた可能性がある。一般的な沖積層の層序区分では上部砂層に対比される。

ユニットVI：深度1.88m以浅（2,200年前以降）

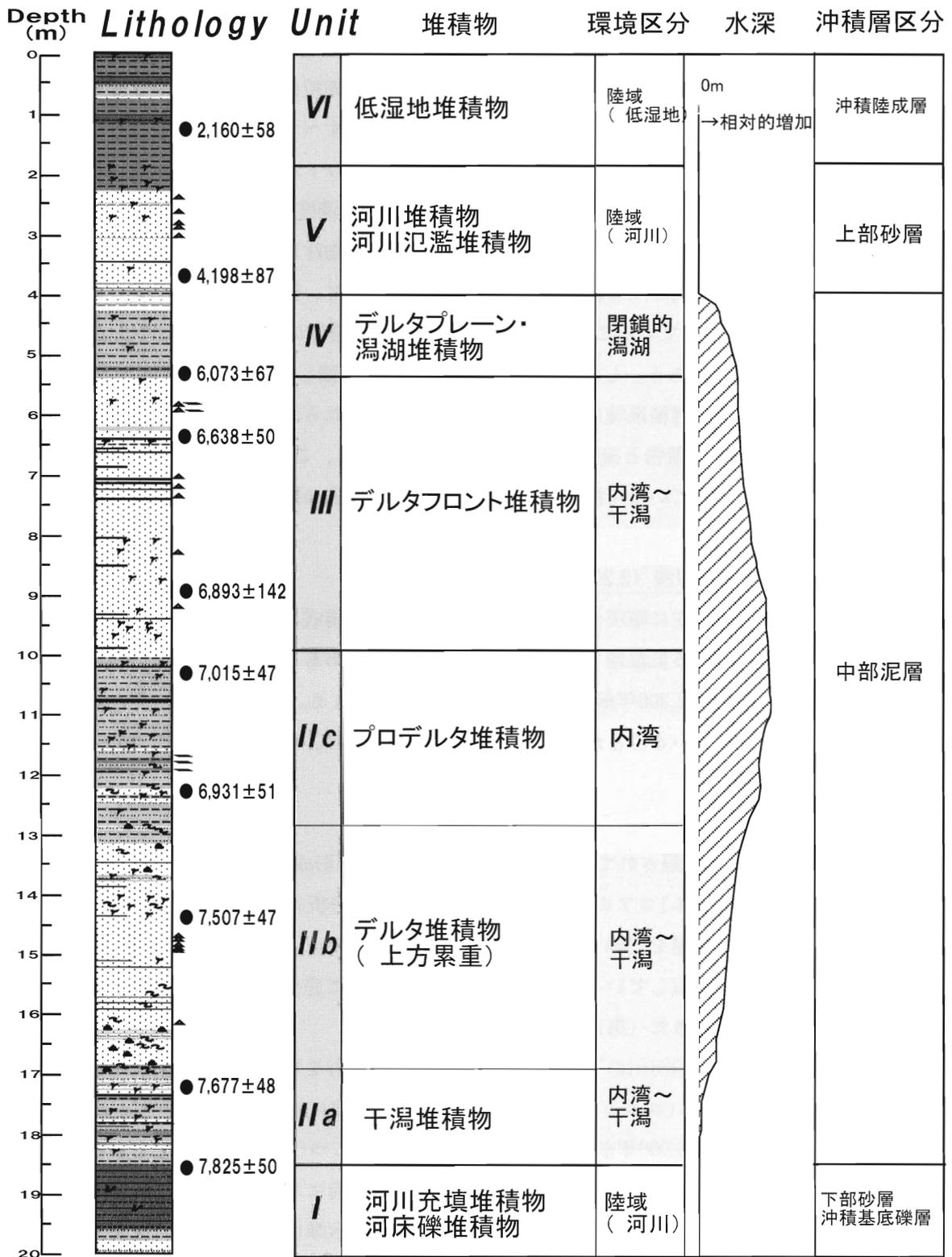
コア最上部に相当する。主に暗灰～灰褐色を呈するシルトで構成される。現在のコア採取地域の環境は、水田利用されている低湿地である。TS含有量が0%であることから、現在の環境と同じような陸上域の低湿地環境が2,200年前以降続いていたと考えられる。この時代の堆積物が、浜寄・地方遺跡の生活面となっていることが考えられる。ユニットVは、一般的な沖積層の層序区分では沖積陸成層に対比される。

6-2 HMY04-1コアに記録されている環境変化 —沖積層の形成に関連して—

全長20mにおよぶHMY04-1コアの層相変化および主にCNS分析を行なった結果、コアには完新世の一つの大きな海進・海退を記録していたことが明らかになった。これは他の日本各地の平野を構成する沖積層の特徴と類似している。今回のコア解析によって完新世の益田平野の古環境（地形形成）を推定することができた（第106図）。

益田平野は、最終氷期の旧河川の下刻作用によって生じた小谷を埋めるように扇状地性および河川性堆積物が堆積していた（ユニットI）ところに、7,800年前に始めて海進の証拠が認められ、付近は水没する。その後、6,000年前までは確実に海面は上昇しつづけ、水域が拡大する。それによって益田平野は内湾環境に変化した（ユニットII）。7,000年前になると、海面上昇は鈍化して内湾の埋積が始まる（ユニットIII）。そして、6,000年前に最高海水準に達して、その後海面は低下していく。このときに、現在平野北部に存在する浜堤の前身となる砂州が形成され、内湾環境から潟湖のような閉鎖的な環境に転じる。また、水域の埋積は引き続き進行している（ユニットIV）。4,200年前になると、ついに水域はすべて（少なくとも浜寄地区は）埋積され、河川環境に一変する。その後、約3,000年前に、再び海面の上昇が一時的に生じた（ユニットV）。最終的には、海面は現在のレベルに落ち着き、2,200年前以降から現在のような低湿地帯に変化していった（第106図）。

今回明らかにした益田平野における沖積層の堆積層相は、日本列島で一般的に認められる平野を形成する沖積層層序と概ね対比することができる。山陰地方を含めた西日本の日本海側のいくつか



第106図 HMY04-1コアの堆積ユニット区分とその推定堆積環境

の海岸平野では、海岸線の陸側に浜堤－砂丘が形成され、沖積層の形成過程においてしばしば潟湖が形成される特徴をもつ。そのような平野を称して浜堤平野と呼ぶことが多いが、今回の分析によって益田平野も例外ではなく、浜堤平野の一つであると考えられる。今回の検討では、地殻変動による地盤の昇降の影響を考慮していないが、今後これらも含めて考えていくべきである。

7 まとめ

益田平野で採取されたHMY04-1コア（全長20m）について、肉眼観察、軟X線写真観察、含水比、強熱減量、全有機炭素（TOC）、全窒素（TN）、全硫黄（TS）含有量の分析を行ない、益田平野の形成に関する鉛直方向の堆積環境の推定を行なった。その結果、以下の4点のことが明らかになった。

- ① 深度18.51m（7,800年前頃）から海進の影響があらわれ、6,000年前までは主に内湾環境になっていた。
- ② 深度5.34m（6,000年前頃）で縄文海進期の最高海水準になり、その後海退に転じる。水域の環境は、海退による砂州の形成によって内湾から潟湖の環境に変化する。
- ③ 深度3.97m（4,200年前頃）から陸化して河川による堆積環境に変化する。このころになると海面の低下と水域の埋積によって、陸地（平野）の拡大が生じ、浜寄地区では4,200年前に汀線が通過したことになる。
- ④ 深度約2m付近（約3,000年前）に、一時的な小海進があった可能性がある。
- ⑤ 深度1.88m（2,200年前頃）で、現在とほぼ変わらない低湿地の堆積環境になった。

引用文献

- 林 正久（2000）益田平野の古地理の変遷。中世今市船着場跡文化財調査報告書、益田市教育委員会、44-60.
- 中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳（1996）島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡、LAGUNA（汽水域研究）、3、9-11.
- 三瓶良和（1997）C・N・Sによる堆積環境評価、文部省科学研究費補助金「海痕湖堆積物からみた汽水域の環境変化－その地域性と一般性－」（代表：高安克己）平成8年度報告・資料集、247-252.
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター（1995）島根大学構内遺跡（橋縄手地区）発掘調査概報Ⅰ、44p.
- 高安克己（2004）地質コア分析結果と周辺の環境変遷に関する考察、「出雲大社境内遺跡」報告書、359-378.
- Umitsu, M. (1991) Holocene sea-level changes and coastal evolution in Japan. The Quaternary Research (第四紀研究)、30、187-196.

第3節 浜寄・地方遺跡発掘調査に伴う花粉分析 およびプラント・オパール分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

浜寄・地方遺跡は島根県西部の益田市高津町（高津川西岸）に位置する（第107図）。本報告は、浜寄・地方遺跡において実施された花粉分析結果およびプラント・オパール分析結果をまとめ直したものである。

試料について

各分析試料は、第108図に示す各地点で採取された。各地点の模式柱状図および試料採取層準を、第108図～第115図の各種ダイアグラム左側に示す。これらのうちB P No. 1を対象に、山田（2006）によりC N S分析の報告が行われている。

分析処理・検鏡方法

花粉分析処理は渡辺（1995）に、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じて600倍あるいは1000倍を用いて行った。

花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行った。また、イネ科花粉を中村（1974）に従い、イネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

プラント・オパール分析では、イネのほかイネ科主要分類群の機動細胞由来プラント・オパールについての同定、計数を、同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで行った。

分析結果

分析結果を第109図～第111図の花粉ダイアグラム、第112図～第116図のプラント・オパールダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。一方、木本花粉の含有量が少なく統計処理に耐えられないと判断した試料については、検出分類群を「*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、それぞれの分類群毎に累積百分率として示した。各花粉ダイアグラムには、後述の花粉帯（珥帯）が示してある。B P No. 1の花粉ダイアグラムには、同コアで行われたC N S分析による堆積ユニット（山田，2006）も示してある。

プラント・オパールダイアグラムでは、1 gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群毎にスペクトルで示した。

また、花粉分析処理残渣および花粉分析用プレパラートを用いて、そのほかの化石他について概

観した結果を、表1に微化石概査結果として示す。

花粉分帯

3地点の花粉分析結果を基にⅠ～Ⅷ帯の局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を下位から上位に向かって示す。

(1) Ⅷ帯 (BPNo.1 試料No.58～44)

スギ属、アカガシ亜属、ムクノキ属－エノキ属が卓越傾向にあり、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属を伴う。

(2) Ⅶ帯 (BPNo.1 試料No.43～38)

スギ属が卓越傾向にあり、アカガシ亜属を伴う。モミ属、ヒノキ属、クマシデ属－アサダ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属、ムクノキ属－エノキ属も低率ではあるが特徴的に出現する。

(3) Ⅵ帯 (BPNo.1 試料No.36～27)

スギ属、アカガシ亜属、ムクノキ属－エノキ属が卓越傾向にあり、モミ属、ニレ属－ケヤキ属を伴う。ヒノキ属、クマシデ属－アサダ属も低率ではあるが特徴的に出現する。

(4) Ⅴ帯 (1 B区No.4 地点試料No.14～4、BPNo.1試料No.26～17)

1 B区、1 C区でのⅤ帯からⅢ帯の花粉組成の変化は、BPNo.1の試料No.26～12で得られた花粉組成変化と良く似る。Ⅴ帯上限の標高におよそ2.7mの差があるが、現地表面でも調査地域西部が僅かに高く東部が低いように、この時期にはすでにこの傾向(地形)が形作られていたものと考えられる。

スギ属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。モミ属、マツ属(複維管束亜属)、ヒノキ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、ムクノキ属－エノキ属も低率ではあるが特徴的に出現する。1 B区では、これらの検出傾向からd～a亜帯に細分できた。

① d亜帯 (1 B区No.4 地点試料No.14)

木本花粉組成では、上位のc亜帯と大差なく、スギ属、アカガシ亜属が突出した出現率を示す。草本花粉でイネ科(40ミクロン未満)、カヤツリグサ科が高率を示す。

② c亜帯 (1 B区No.4 地点試料No.13～11)

木本花粉では下位のd亜帯と大差ないが、スギ属が減少傾向、アカガシ亜属が増加傾向を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン未満)のみが高率を示す。

③ b亜帯 (1 B区No.4 地点試料No.10～7)

木本花粉ではスギ属、アカガシ亜属が突出した出現率を示すほか、マツ属(複維管束亜属)が増加傾向を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン未満)が高率で安定した出現率を示すほか、ヨモギ属が急増する。

④ a亜帯 (1 B区No.4 地点試料No.6～4)

木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)、スギ属、アカガシ亜属が突出した出現率を示す。草本花粉ではヨモギ属が極めて高い出現率を示すほか、イネ科(40ミクロン未満)が高率で安定した出現率を示す。

(5) Ⅳ帯 (1 B区No.4 地点試料No.3、2、1 C区No.1 地点試料No.13、BPNo.1 試料No.16)

アカガシ亜属が卓越し、マツ属(複維管束亜属)、スギ属を伴う。モミ属、ヒノキ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、ムクノキ属－エノキ属も低率ではあるが特徴的に出現する。

(6) III帯（1 B区No.4 地点試料No.1、1 C区No.1 地点試料No.12~10、B P No.1 試料No.15~12）

スギ属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。モミ属、ニレ属ーケヤキ属も低率ではあるが特徴的に出現する。草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属が高率を示す。

(7) II帯（1 C区No.1 地点試料No.6）

スギ属、アカガシ亜属が卓越傾向にある。草本花粉ではアブラナ科、イネ科（40ミクロン以上）がやや高い出現率を示す。

(8) I帯（1 C区No.1 地点試料No.5~1、B P No.1 試料No.5~1）

マツ属（複維管束亜属）が卓越傾向にあり、スギ属を伴う。草本花粉では栽培に由来する可能性があるイネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科が高率を示し、ソバ属、キュウリ属も出現する。これらの検出傾向から、さらにc~a亜帯に細分した。

① c亜帯（1 C区No.1 地点試料No.5~3）

木本花粉では、マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科、アカザ科ーヒユ科が極めて高率を示し、増加傾向を示す。

② b亜帯（1 C区No.1 地点試料No.2、1、B P No.1 試料No.5）

木本花粉では、マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科が極めて高率を示す。

③ a亜帯（B P No.1 試料No.3、1）

スギ属が増加し、マツ属（複維管束亜属）が減少する。

植生変遷

花粉分析結果、さらに別途業務で行われていた¹⁴C年代測定結果を基に、各花粉帯毎に古植生、堆積環境について述べる。

また、年代については全て¹⁴C年代を用い、暦年較正年代を用いなかった。

(1) VIII帯期（およそ7800~7500yr.B.P.）

① 堆積時期

VIII帯下部でおよそ7800yr.B.P.、中部でおよそ7700yr.B.P.、VIII帯上位でおよそ7500yr.B.P.が得られており、およそ7800~7500yr.B.P.に堆積したと考えられる。

② 森林植生

花粉組成では、暖温帯林（照葉樹林）要素のアカガシ亜属がスギ属、ムクノキ属ーエノキ属と共に卓越する。一方で冷温帯林要素のブナ属、コナラ亜属の出現率は低率である。遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵、山地にかけては、カシ類を主要素とする照葉樹林が広く分布し、山地高所にはブナ、ミズナラを主要素とする冷温帯林も分布していたと考えられる。一方で、益田川、高津川流域の谷斜面や山間低地にはスギ林が分布し、自然堤防上にはムクノキ属ーエノキ属を主要素としニレ属ーケヤキ属を伴う自然堤防林が分布していたと考えられる。またモミ、アカマツ、ヒノキ類や先のスギなどの針葉樹種は照葉樹林に混淆していた可能性があるほか、温帯針葉樹林（いわゆる中間温帯林）として山地高所に分布していた可能性もある。

③ 調査地近辺の植生

調査地近辺の湿地にはヨシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科の草本が生育していたと考えら

れる。

(2) VII帯期 (およそ7500~7000yr.B.P.)

① 堆積時期

VII帯下位でおよそ7500yr.B.P.、VII帯上部でおよそ7000yr.B.P. が得られており、およそ7500~7000yr.B.P.に堆積したと考えられる。

② 森林植生

花粉組成では、ムクノキ属-エノキ属がVIII帯に比べ減少し、スギ属、ブナ属が増加する。ただし、スギ属、ブナ属を除いた種類には明瞭な増加傾向が現れないことから、スギ属、ブナ属の増加がムクノキ属-エノキ属の減少に伴う相対的な現象とは考えにくい。ムクノキ属-エノキ属の減少はその生態から気候変化などに伴う広域的な森林植生の変化とは考えにくく、比較的遺跡に近い自然堤防林の様相の変化に起因したと考えられる。一方で、ブナ属やスギ属の増加は冷涼化を示唆し、山地高所や谷筋を中心に分布した、それぞれを主要素とする森林が拡大したことが判る。ただし、遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵、山地にかけては、VIII帯期から引き続きカン類を主要素とする照葉樹林が広く分布していたと考えられる。

③ 調査地近辺の植生

調査地近辺の湿地には引き続きヨシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科の草本が生育していたと考えられる。

(3) VI帯期 (およそ7000yr.B.P.)

① 堆積時期

VI帯上部でおよそ7000yr.B.P. が得られている。

② 森林植生

花粉組成では、ムクノキ属-エノキ属が増加しスギ属がやや減少するなど、VIII帯の花粉組成に似る。ただし、最下部でブナ属の出現率が小ピークを成すなどの特徴的な現象が認められる。ムクノキ属-エノキ属の増加は、VII帯同様に比較的遺跡に近い自然堤防林の様相の変化に起因したと考えられる。一方で、ブナ属の減少傾向はゆるやかな温暖化を示唆し、山地高所に分布したブナ林が縮小したことが判る。ただし、遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵や山地にかけては、VIII、VII帯期から引き続きカン類を主要素とする照葉樹林が広く分布していたと考えられる。

③ 調査地近辺の植生

調査地近辺の湿地には引き続きヨシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科の草本が生育していたと考えられる。

(4) V帯期 (およそ6600~4200yr.B.P.)

① 堆積時期

V帯直下でおよそ6600yr.B.P.、V帯中部で6100yr.B.P.、V帯直上で4200yr.B.P.が得られており、およそ6600~4200yr.B.P.に堆積したと考えられる。

② 森林植生

花粉組成では再びムクノキ属-エノキ属が減少する。これに対応してスギ属が増加するほか、シイノキ属-マテバシイ属が微増する。また、ここでのスギ属やシイノキ属-マテバシイ属の増加は温暖化、多雨化の傾向を示唆する。谷斜面や山間低地はスギ林で被われ、遺跡周辺から益田平野周

囲の丘陵や山地にかけて広く分布した照葉樹林にはカシ類に加えシイ類やスギも目立つようになったと考えられる。またスギは平野部にも進出し、遺跡周辺の地下水位が高く滞水しない場所に生育していた可能性がある。

1) d 亜帯期

前述のように、調査地域西部の1B区ではV帯をd～a 亜帯に細分していた。以下では、V帯期の詳細な植生変遷について述べる。

① 森林植生

花粉組成の特徴から、カシ類を主要素とする照葉樹林が遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵、山地にかけて分布していたと考えられる。花粉組成で卓越するスギ属（スギ）ほかの針葉樹種は、照葉樹林内に混淆していた可能性がある。これらのうち特にスギは、湿地周辺で地下水位が高く滞水しない場所にも生育していた可能性がある。また、マツ属（複維管束亜属）がクロマツに由来し、海岸林として分布していた可能性もある。

② 調査地近辺の植生

草本花粉、胞子の割合が低く、抽水植物であるガマ属の花粉が検出され、湿生植物を含むカヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）花粉が卓越傾向にあることから、調査地近辺はこれらの草本が茂る沼沢湿地環境であったと考えられる。

2) c 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成の特徴はd 亜帯と比べスギ属、アカガシ亜属に若干の変化はあるが大差なく、周辺の森林植生の変化は読み取れない。

② 調査地近辺の植生

d 亜帯同様、草本花粉、胞子の割合が低く、抽水植物であるガマ属の花粉が検出され、湿生植物を含むイネ科（40ミクロン未満）花粉が卓越傾向にある。一部組成が異なるものの、d 亜帯期同様に、調査地近辺はこれらの草本が茂る沼沢湿地環境下であったと考えられる。

3) b 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成の特徴はd、c 亜帯と大差ないものの、マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示す。調査地点近辺で地下水位が低下し、スギに変わってアカマツが進入した可能性がある。また人間活動との関連が明らかでないものの、人間活動によって生じた荒れ地に二次植生としてアカマツが進入した可能性も否定できない。一方で周辺丘陵での森林植生に積極的な変化は読み取り難く、カシ類を主要素とする照葉樹林が遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵、山地にかけて分布していたと考えられる。

② 調査地近辺の植生

c 亜帯から一変し抽水植物であるガマ属花粉が検出されなくなる。一方で乾燥地に生育する種類の多いヨモギ属が急増し、草本花粉の割合も高くなる。試料採取地点は引き続き沼沢地内であったと考えられるが、周辺の沼沢湿地が急激に縮小したと考えられる。

4) a 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成では、さらにマツ属（複維管束亜属）が増加し、スギ属が減少する。b 亜帯期から引き続き、干上がった（地下水位が下がった）場所でスギに変わりアカマツが進入を続けた可能性がある。一方で周辺丘陵での森林植生に積極的な変化は読み取り難く、カシ類を主要素とする照葉樹林が遺跡周辺から益田平野周囲の丘陵、山地にかけて分布していたと考えられる。

② 調査地近辺の植生

草本花粉の割合が高く、特に乾燥地に生育する種類の多いヨモギ属の出現率が高い。試料採取地点は引き続き沼沢地内であったと考えられるが、周辺の沼沢湿地がさらに縮小したと考えられる。

(5) IV 帯期（およそ4200yr.B.P.～）

① 堆積時期

V 帯直上でおよそ4200yr.B.P.が得られており、およそ4200yr.B.P.以降に堆積したと考えられる。

② 森林植生

花粉組成ではアカガシ属が急増し、スギ属を含むその他の種類のほとんどが減少するなど、花粉組成が大きく変化する。BPNo. 1 地点でこの傾向は著しい。BPNo. 1 地点では分析試料が砂層に狭在する砂質シルト層であり、何らかの影響で調査地近辺に生育する植物由来の花粉が多く検出されたとも考えられる。

調査地近辺の丘陵上に分布する照葉樹林ではシイ類やスギが目立たなくなり、カシ類が主体となったと考えられる。一方で谷斜面や山間低地は引き続きスギ林で被われていたと考えられる。

③ 調査地近辺の植生

調査地近辺の湿地には引き続きヨシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科の草本が生育していたと考えられる。一方で調査地域西部の1 B区、1 C区では孢子の割合が増加傾向を示す。また草本花粉ではヨモギ属、イネ科（40ミクロン未満）が高率で安定して出現する。これらのことから、調査地域は西部から干上がり、試料採取地点も乾湿を繰り返し、紫外線の影響を受けやすい環境へと変化した可能性がある。また、イネ科（40ミクロン以上）が増加傾向を示し、近辺で稲作が始まった可能性が示唆される。しかし、上位のIII帯でイネ科（40ミクロン以上）花粉がさらに増加し、イネ科（40ミクロン未満）や、ヨモギ属が減少していることから、ここでのイネ科（40ミクロン以上）花粉は上位の耕作層から混入したものである可能性もある。

(6) III 帯期（～およそ2200yr.B.P.）

① 堆積時期

III帯とI帯の間でおよそ2200yr.B.P.が得られており、およそ2200yr.B.P.までに堆積したと考えられる。

② 森林植生

花粉組成では再びスギ属が卓越し、アカガシ亜属が減少傾向を、マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示す。卓越するスギは照葉樹林内に混淆していたほか、平野部にも進出し遺跡周辺の地下水位が高く滞水しない場所に生育していたと考えられる。また、増加傾向にあるマツ属（複維管束亜属）は、クロマツに由来し海岸林として分布していた可能性や、アカマツとして照葉樹林に混淆したり、アカマツ二次林として分布していた可能性もある。

③ 調査地近辺の植生

B P No. 1 地点は汀線近くにあり、オモダカ類、ガマ類や、ヨシなどのイネ科草本、カヤツリグサ科などの草本が生育していたと考えられる。やや離れた場所にはヨモギ類やイネ科の草本が草地を成していたと考えられる。一方、調査地域西部の1 B区、1 C区ではIV帯同様に孢子の割合が高く、草本花粉ではヨモギ属、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す傾向にある。したがってIV帯同様に、調査地点近辺は乾湿を繰り返し、紫外線の影響を受けやすい環境であり、稲作が行われていた可能性も示唆される。花粉化石の検出状況から、稲作の環境として、いわゆる「湿田」は考えにくい。調査地点で稲作が行われていたとすれば、「乾田」あるいは「陸稲」であった可能性が指摘される。またイネプラント・オパール¹の検出量が微量で、下位ではヨシ属プラント・オパールも検出される。したがって、稲作が成されていた期間が極めて短期間であったか、この層準でのイネプラント・オパール、イネ科（40ミクロン以上）花粉が、生物擾乱による上位からの混入である可能性も指摘できる。

(7) 7層直下層（基本5層）～6層（基本3層）堆積時期（およそ2200yr.B.P.～古墳時代）

① 堆積時期

B P No. 1 ではV帯とI帯の間でおよそ2200yr.B.P.の¹⁴C年代が得られている。1 B区、1 C区の発掘調査では上位の6層が弥生時代後期から古墳時代にかけて堆積したと考えられている。

② 基本5層上部堆積時期

調査地域西部の1 B区、1 C区では7層（洪水砂層：基本4層）に覆われ畦状遺構が検出され、基本5層上部が耕作層であることが分かった。この層準より上位の層準では複数の地点でプラント・オパール分析を実施しており、イネ起源のプラント・オパールの分布を図117のようにまとめることができる。畦状遺構が認められた1 B区の各地点、1 C区No. 1 地点では量が少ないもののイネプラント・オパールが検出され、水田耕作が行われていたことが示唆された。一方畦状遺構が検出されなかった1 C区No. 2 地点ではイネプラント・オパールは検出されず、耕作層が削平を受けていることが示唆された。

1 C区No. 1 地点の花粉分析結果では、この層準の花粉化石の含有量は極めて低く、孢子化石の割合が高い。前述のように、乾湿を繰り返し紫外線の影響を受けやすい環境下で堆積したと考えられる。また、基本5層下部までも酸化マンガンや、酸化鉄が認められ、基本4層（洪水砂層）に覆われた「田」は、「湿田」よりも「乾田」であった可能性がより高い。

③ 基本3層堆積時（弥生時代後期～古墳時代）

基本3層は暗～黒色を呈し、湿地堆積に伴う腐植の濃縮が認められる可能性があったが、表1～3に示した微化石概査結果のとおり腐植の濃縮は認められず、むしろ炭片の濃縮が認められた。このことは花粉化石の含有量が少なく、かつ孢子化石の割合が高いことから推定される「土壌化」の結果と一致する。またイネのプラント・オパール¹の検出量はさほど高くなく、上位に向かい増加傾向を示しており、生物擾乱による上位層からの混入の可能性が指摘される。さらにススキ属プラント・オパールが検出されることから、洪水砂層（基本4層）の堆積後一時的に、調査地点近辺が「荒れ地（草地?）」となった可能性が指摘される。

(8) II 帯期

① 森林植生

木本花粉組成では、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が僅かに減少し、アカガシ亜属が増加する。調査地近辺が一時的にでも沼沢地となったために、調査地近辺に分布したスギ、アカマツが減少し、相対的にカシ類が増加した可能性がある。

② 調査地近辺の植生

調査地域西部の1C区では草本花粉でサジオモダカ属、オモダカ属、ガマ属、キカシグサ属などの水生植物の花粉が微量であるが特徴的に検出される。したがって調査地近辺に、一時的に水が溜まった可能性が示唆される。一方孢子の割合が高く、草本花粉ではアブラナ科花粉が卓越傾向にあるなど乾燥傾向を示唆する要素も存在する。したがって、調査地点近辺は乾湿を繰り返すような環境であり、時として沼沢地に、時として湿地や完全に干上がる状態になったりしたと考えられる。イネ科（40ミクロン以上）花粉が検出され、イネプラント・オパールも僅かではあるが検出されことから、稲作が行われていた可能性も示唆されるが、花粉、プラント・オパールの検出量が少ないことから生物擾乱による上位からの混入である可能性が高く、この時期に稲作が行われていた可能性は低い。

(9) I 帯期（近世頃以降）

I 帯期は広域的な花粉組成の対比から、近世以降の植生を示すと考えられる。また、a 亜帯で認められるスギ属花粉の増加傾向は近代以降（特に戦後）のスギ植林に由来する可能性がある。以下では、各亜帯期毎に植生変遷について述べる。

1) c 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成では、マツ属（複維管束亜属）が卓越傾向にある。マツ属（複維管束亜属）は上位のa 亜帯でも連続して卓越傾向を示すことから、周辺の丘陵には現在認めら得るようにアカマツ林（里山：薪炭林）が分布していたと考えられる。また、アカガシ亜属は上位のb 亜帯に比べ高い出現率を示し、照葉樹林が残存していたことが分かる。

② 調査地近辺の植生

孢子化石の割合が減少傾向を示し、まず草本花粉が、やや遅れ木本花粉が増加する。圃場整備に伴う人工的な堆積物の可能性が示唆されていたが、花粉組成が連続的な変化を示すことから、自然に堆積した可能性が高いと考えられる。草本花粉ではアブラナ科の出現率が特に高く、イネ科（40ミクロン以上）ヤソバ属を伴う。また僅かではあるがイネプラント・オパールも検出されることから、調査地点近辺には田畑が広がっていたと考えられる。また藤田ほか（1991）の記載例に従えば、アブラナ科花粉はアブラナに由来する可能性が高い。調査地点近辺で耕作が行われ、イネ、アブラナやソバを栽培していたと考えられる。

2) b 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成では、マツ属（複維管束亜属）が卓越傾向にあり、アカガシ亜属花粉が低率になる。周辺の丘陵ではc 亜帯期に残存していた照葉樹林はほとんど認められなくなり、現在認められるようにアカマツ林（里山：薪炭林）が分布していたと考えられる。

② 調査地近辺の植生

草本花粉ではアブラナ科の出現率が特に高くイネ科（40ミクロン以上）を伴うことから、調査地点近辺には田畑が広がっていたと考えられる。c 亜帯期同様に調査地点近辺で耕作が行われ、イネやアブラナを栽培していたと考えられる。

3) a 亜帯期

① 森林植生

木本花粉組成では、マツ属（複維管束亜属）がやや減少し、スギ属が増加する。益田平野周囲では現在認められるように、アカマツ林（里山：薪炭林）が広く分布するほか、おそらくスギ植林が拡大していったと考えられる。

② 調査地近辺の植生

草本花粉ではb 亜帯から引き続きアブラナ科の出現率が特に高くイネ科（40ミクロン以上）やソバ属、キュウリ属を伴う。b 亜帯期同様に調査地点近辺には田畑が広がり、イネのほか、アブラナ、ソバ、キュウリを栽培していたと考えられる。

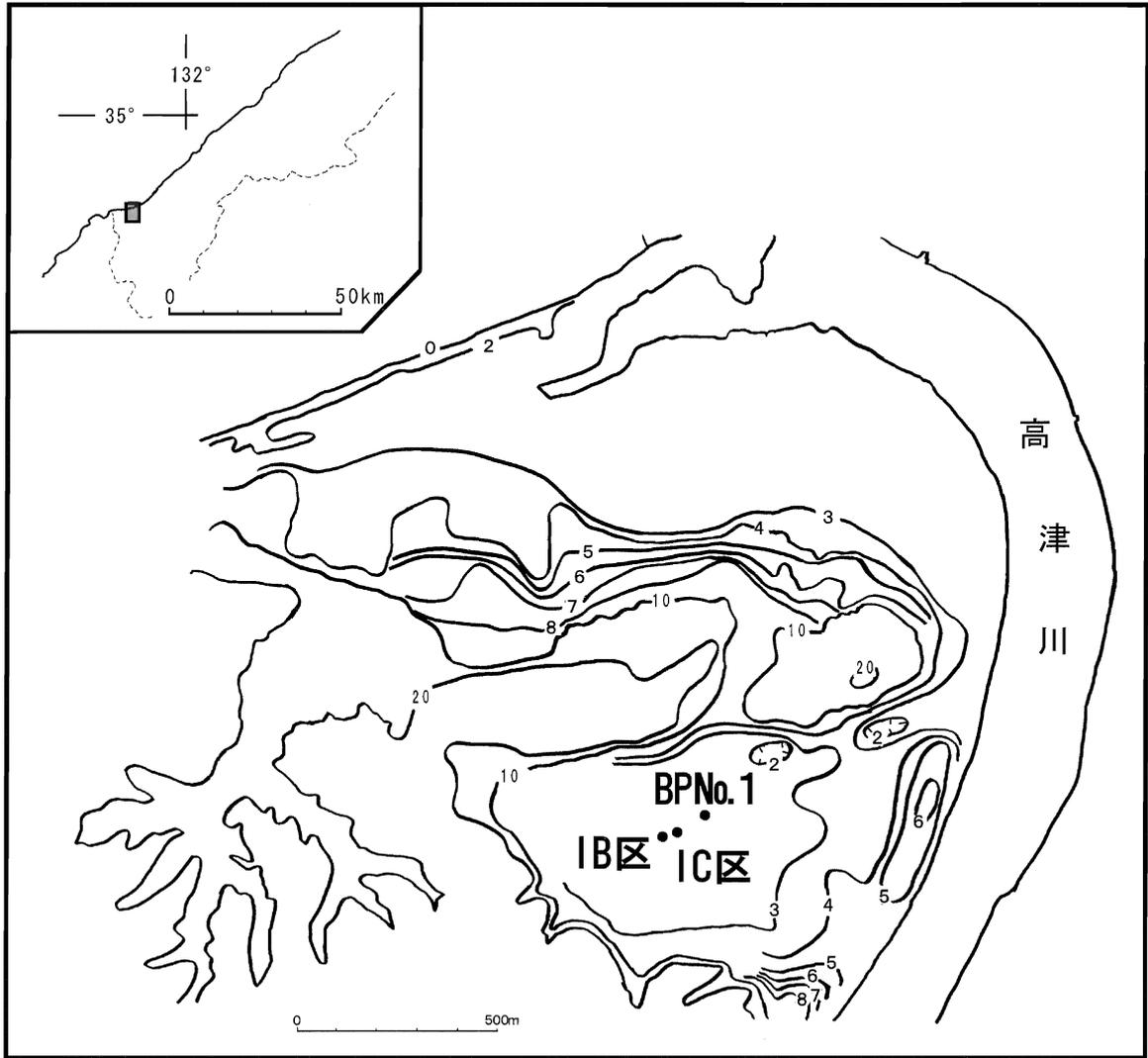
まとめ

浜寄・地方遺跡において実施された花粉分析、プラント・オパール分析結果を基に、各花粉帯毎に堆積時期、堆積環境、古植生を推定した。主な内容は、以下の事柄である。

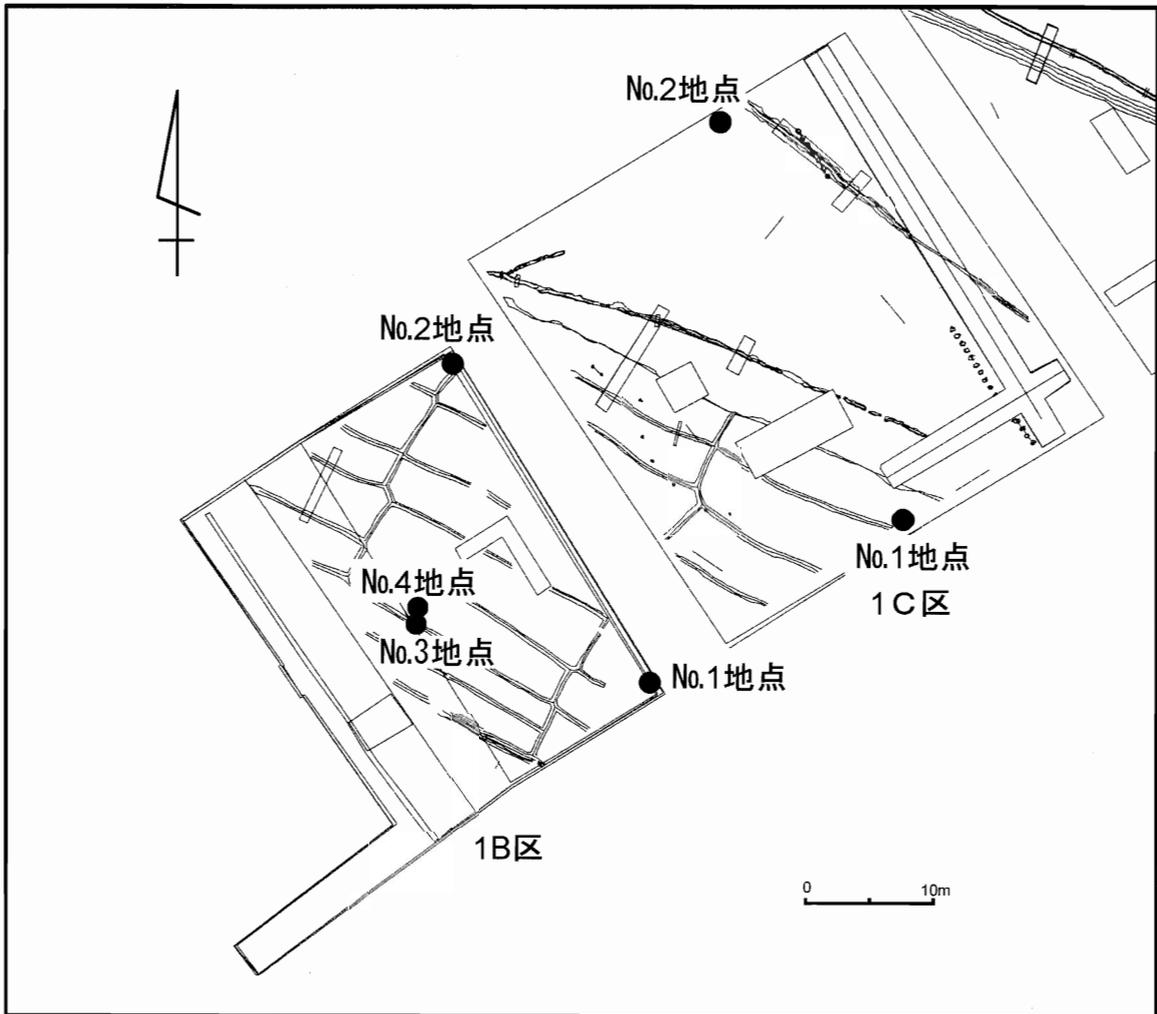
- (1) 本遺跡内の局地花粉帯として、Ⅷ～Ⅰ帯の8 粉帯を設定した。また、Ⅴ帯をd～a 亜帯に、Ⅰ帯をc～a 亜帯に細分した。
- (2) 調査地点近辺の堆積環境、古植生についての主な内容は以下の事柄である。
 - ① 8000yr.B.P.頃には、すでにスギ属、アカガシ亜属が卓越傾向にあったことが明らかになった。
 - ② Ⅶ帯期（およそ7500～7000yr.B.P.）には、それまでの温暖化傾向から一転した冷涼化が認められた。
 - ③ 調査地近辺の現地表面は東に緩く傾斜している。この傾向は、およそ6600年前頃以降続いていることが確認された。このため、東部のBPN0.1と西部の1B区、1C区で草本花粉組成の差が生じたと考えられる。
 - ④ 基本5 層上部からはイネ科（40ミクロン以上）花粉、およびイネプラント・オパールが顕著に認められ同層上面に認められた遺構が水田耕作に伴う遺構である可能性がより高くなった。また、花粉の検出傾向および現地での観察から「乾田」として耕作されていた可能性が示唆された。
 - ⑤ Ⅰ帯期での作物として、イネ、アブラナ、ソバのほか、キュウリ属が確認された。

引用文献

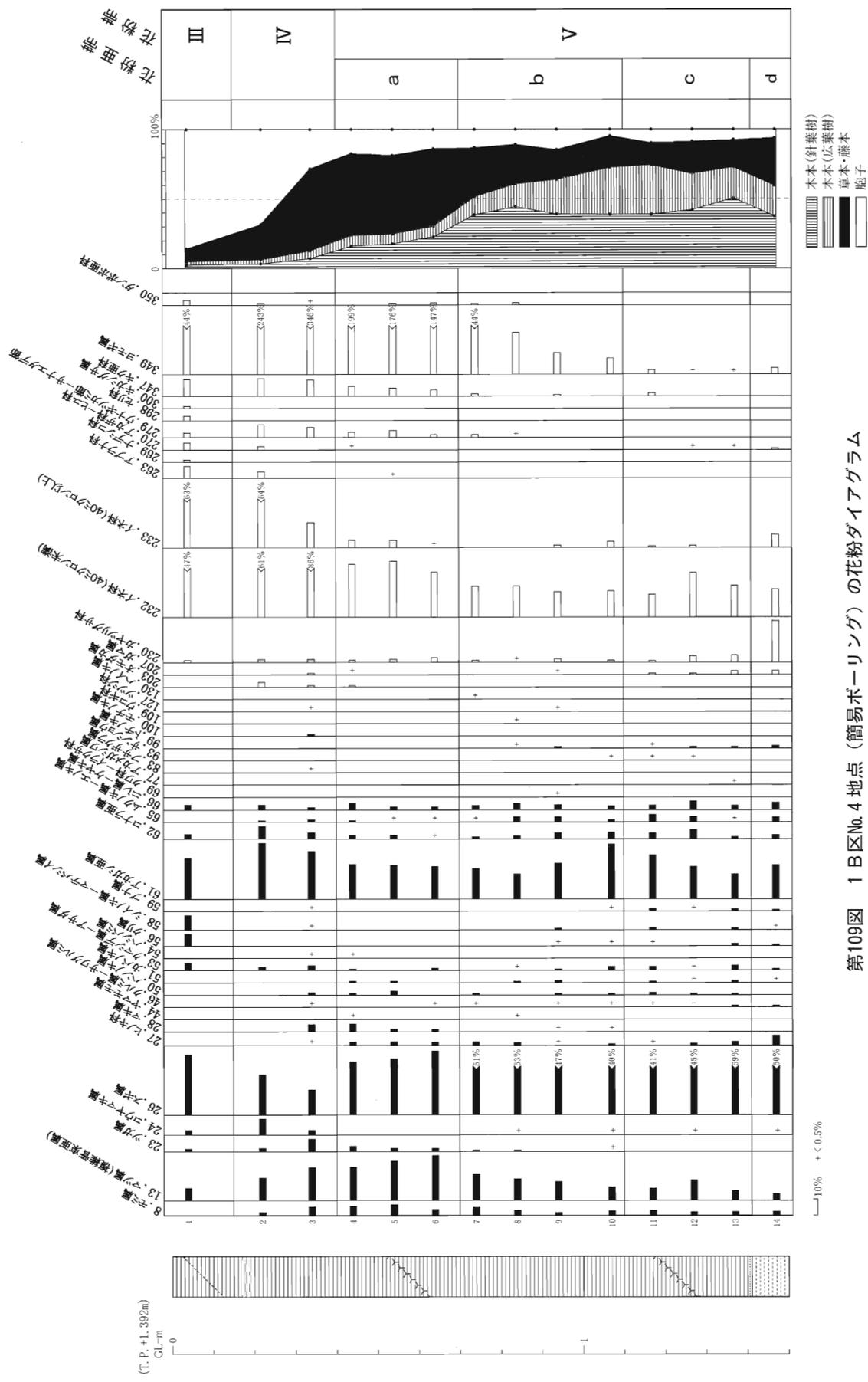
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として．第四紀研究，13,187-197.
- 藤田憲次・古谷正和・渡辺正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について．日本文化財科学会第8 回大会講演要旨，33-34.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84，85．ニュー・サイエンス社
- 山田和芳（2006）浜寄・地方遺跡発掘調査に伴うボーリングコア解析から復元される益田平野の古環境．浜寄・地方遺跡，p117～129

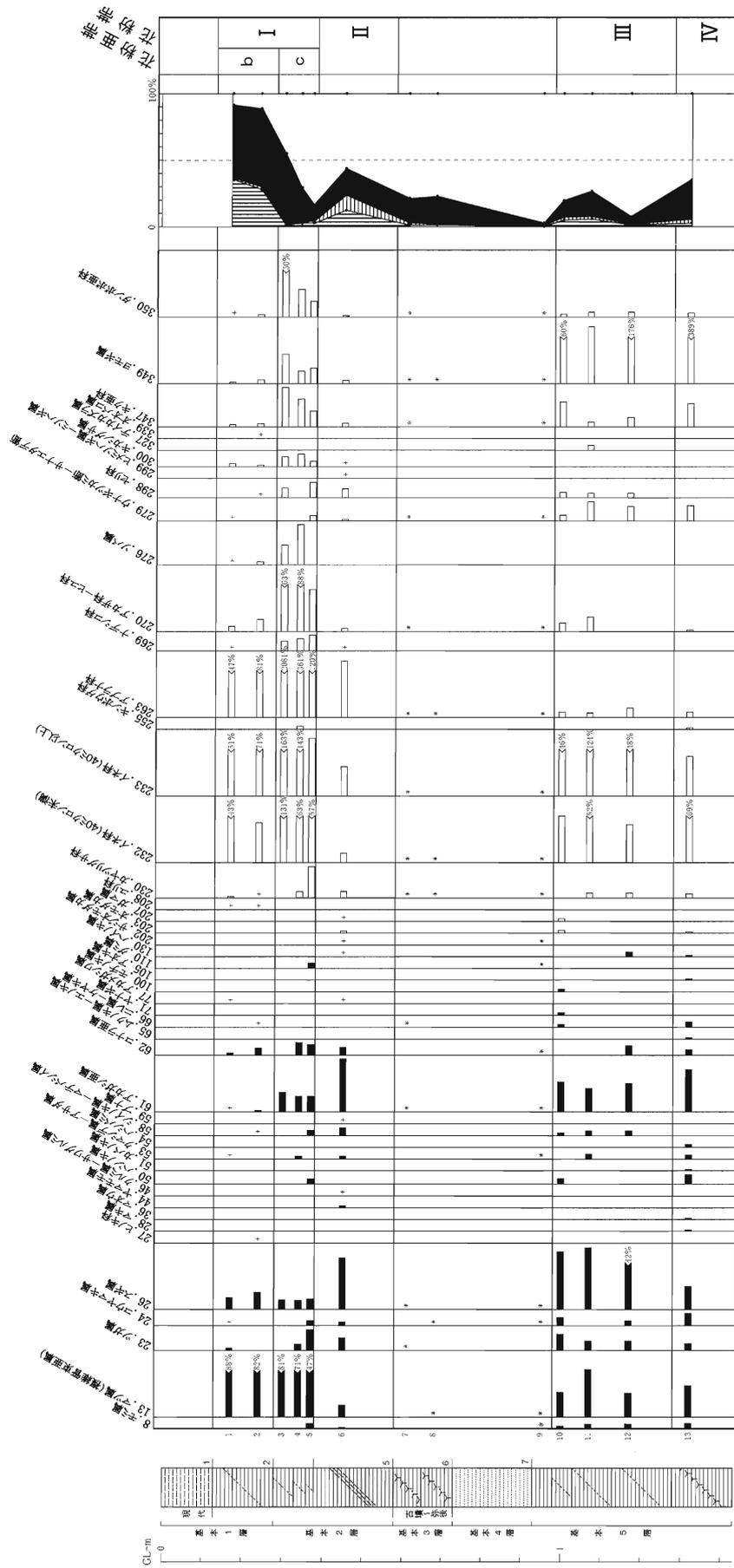


第107図 等高線図（調査区の配置）



第108図 試料採取地点 (1B区、1C区)

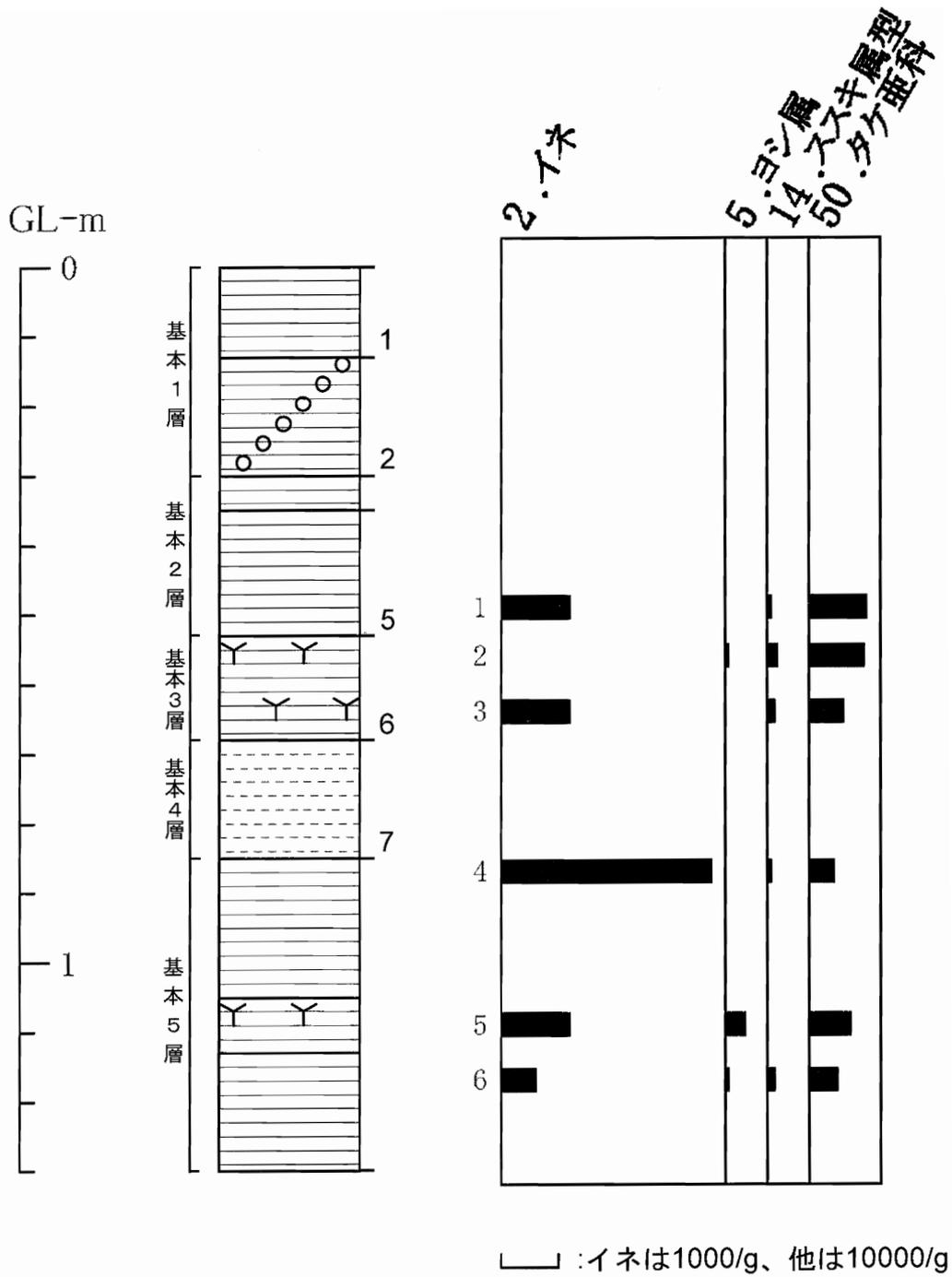




木本(針葉樹)
 木本(広葉樹)
 草本・藤本
 胞子

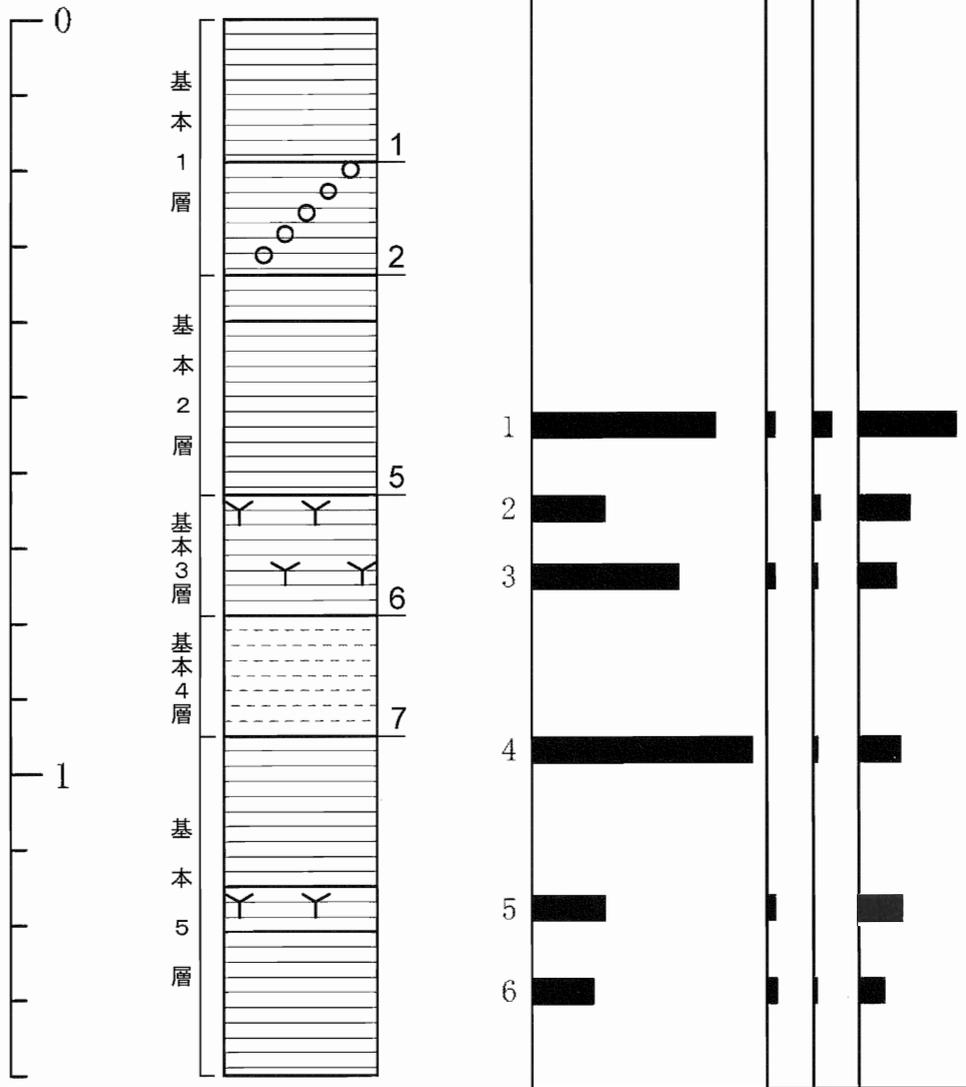
第110図 1 C区No. 1地点の花粉ダイアグラム

□ 1.0% + < 0.5%



第112図 1 B区No. 1 地点のプラント・オパールダイアグラム

(T. P. +2. 28m)
GL-m

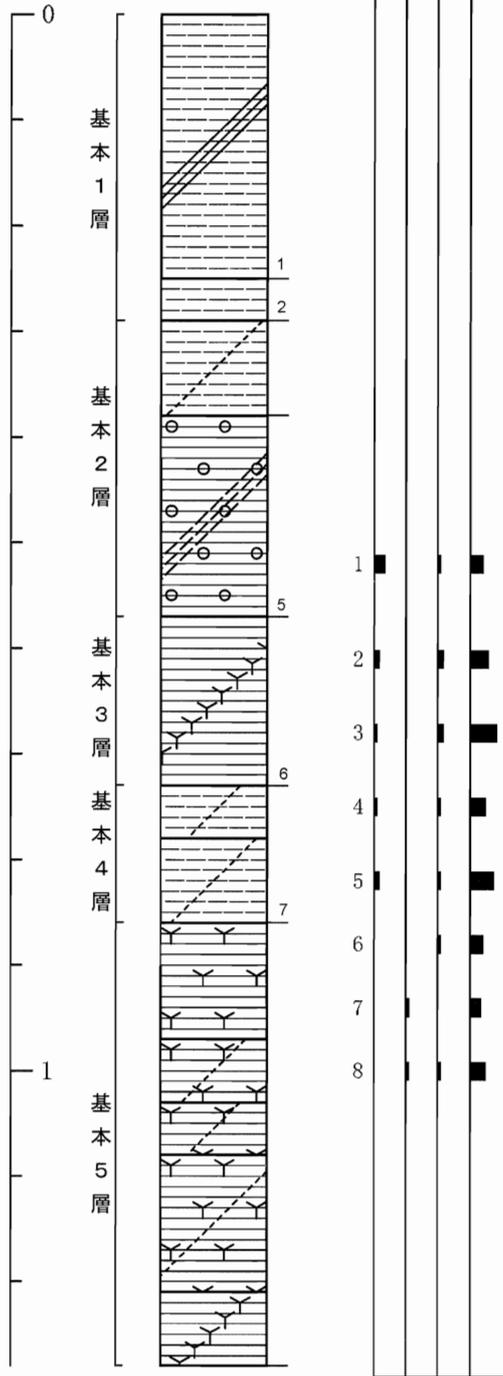


┌ : イネは1000/g、他は10000/g

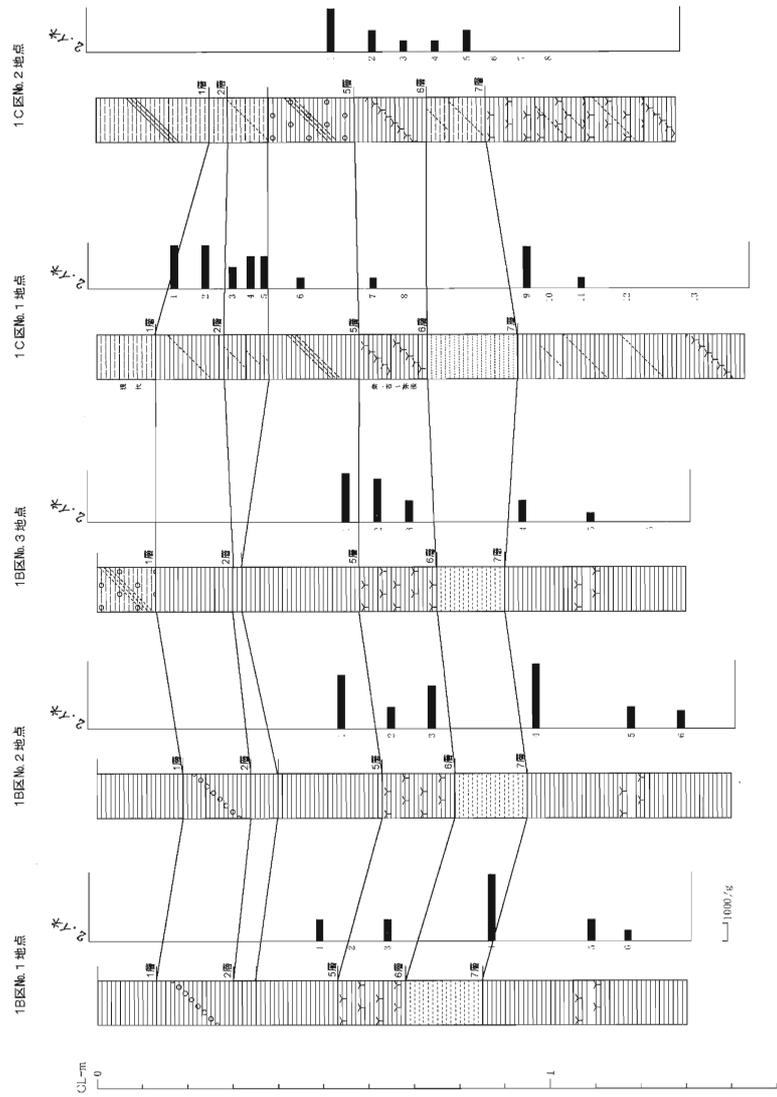
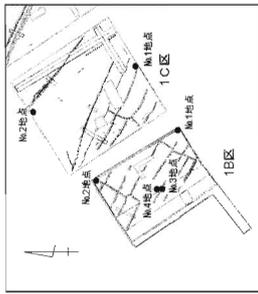
第113図 1B区No.2地点のプラント・オパールダイアグラム

(T. P. +2. 26m)

GL-m

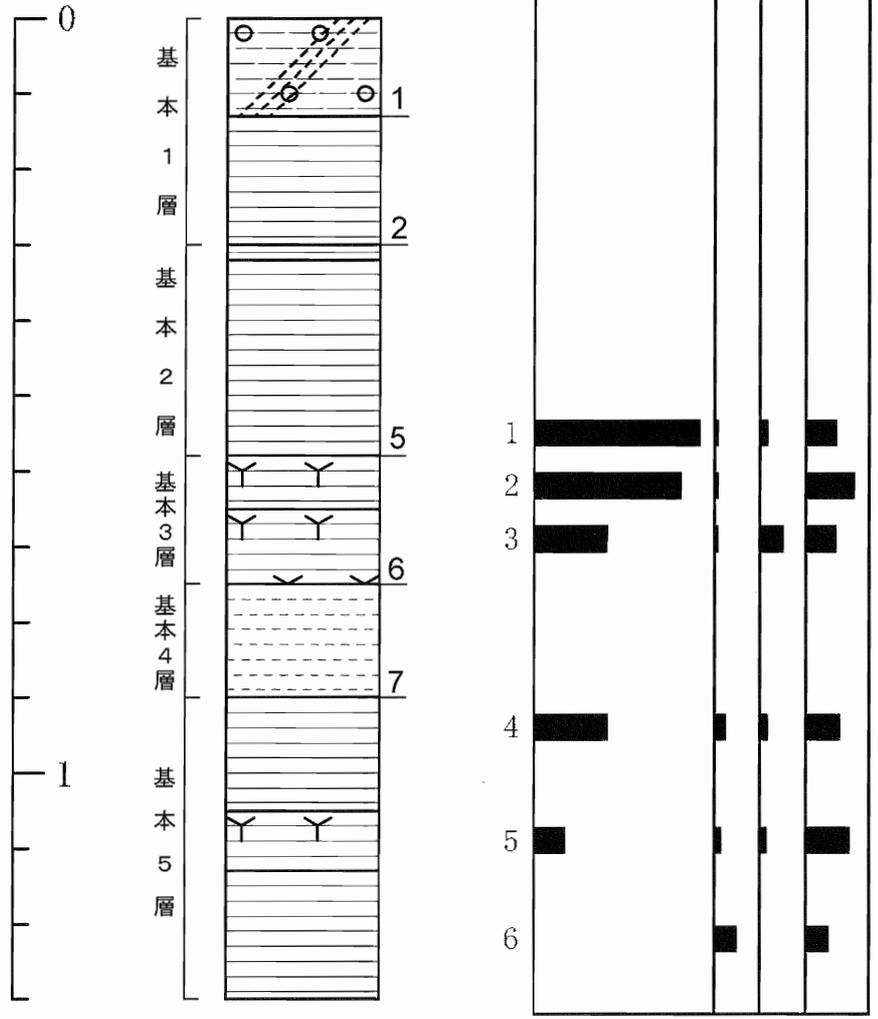


第116図 1 C区No. 2 地点のプラント・オパールダイアグラム



第117図 イネ起源プラント・オパールの分布

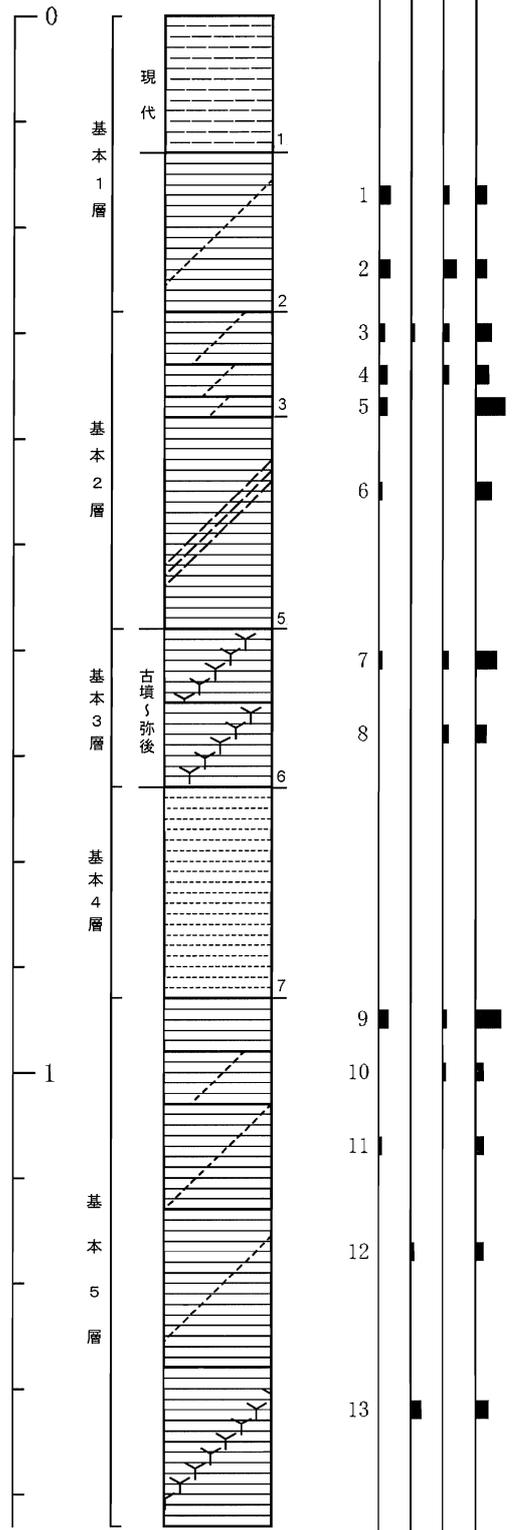
(T. P. +2. 25m)
GL-m



┌ :イネは1000/g、他は10000/g

第114図 1 B区No. 3 地点のプラント・オパールダイアグラム

GL-m

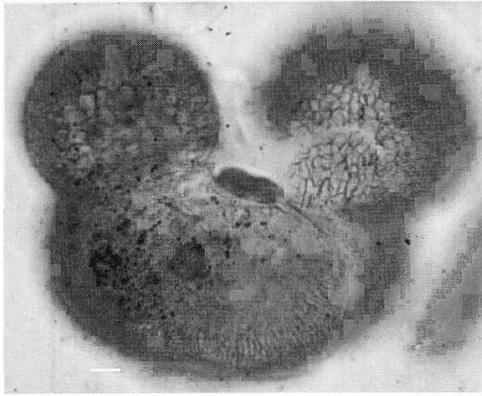


第115図 1C区No.1地点のプラント・オパールダイアグラム

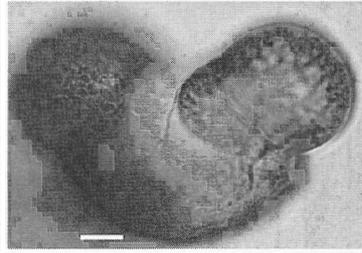
表 1 微化石概査結果

I B区No.4地点										I C区No.1地点										
試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール
1	△	△×	△×	△×	○	○	1	◎	△×	△×	△	○	○	1	◎	△×	△×	△×	○	○
2	○	△×	△×	×	◎	◎	2	◎	△×	△×	×	◎	◎	2	◎	△×	△×	△×	○	○
3	◎	△×	△×	×	◎	◎	3	◎	△×	△×	×	◎	◎	3	△	△×	△×	×	○	◎
4	◎	△×	△×	×	◎	◎	4	△	△×	△×	×	◎	◎	4	△	△×	△×	×	○	◎
5	◎	△×	△×	×	◎	◎	5	◎	△×	△×	×	◎	◎	5	△	△×	△×	×	○	◎
6	◎	△×	△×	△×	◎	◎	6	◎	△×	△×	△×	◎	◎	6	△	△×	△×	×	○	◎
7	◎	△×	△×	×	◎	◎	7	◎	△×	△×	×	◎	◎	7	△×	△	△×	×	○	◎
8	◎	△	△×	×	◎	○	8	◎	△	△×	×	◎	○	8	△×	△×	△×	×	○	◎
9	◎	△	△	×	○	○	9	△	△	△×	×	○	○	9	△	△×	△×	×	○	◎
10	◎	△	△	×	○	◎	10	△	△	△×	×	○	◎	10	△	△×	△×	×	◎	◎
11	◎	△	△	×	○	○	11	◎	△	△	×	○	○	11	△	△×	△×	×	◎	◎
12	◎	○	△	△×	△	△	12	◎	○	△	△×	△	△	12	△	△×	△×	×	◎	◎
13	◎	△×	△	△×	△	△	13	◎	△×	△	△×	△	△	13	△	△×	△×	×	◎	◎
14	◎	△×	△	×	△	△		◎	△×	△	×	△	△		△×	△×	△	×	◎	◎
BPNo.1微化石概査結果																				
試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラト・ボパール
1	◎	△	○	△×	△	△	32	◎	△×	○	△×	×	×	32	◎	△×	○	△×	×	×
2	○	△	△×	×	△	○	33	○	△×	○	×	△	△	33	○	△×	○	△	△	△
3	○	△	△×	△×	△	○	34	◎	△×	○	△×	△	△×	34	◎	△×	○	△	△×	△×
4	△	△×	△×	×	△	○	35	◎	△×	○	×	△	△	35	◎	△×	○	△	△×	△
5	◎	△×	△×	△	○	○	36	◎	△×	○	△	○	○	36	◎	△×	○	○	△	△
6	△×	△×	△×	×	△	△	37	◎	△×	○	×	△	△	37	◎	△×	○	○	△×	△
7	△×	△×	△×	×	△	△	38	◎	△×	○	×	△	△	38	◎	△×	○	○	△×	△
8	△×	△×	△×	×	○	△	39	◎	△×	○	×	△	△	39	◎	△×	○	○	△×	△
9	△×	△×	△×	×	△	△	40	◎	△×	○	×	△	△	40	◎	△×	○	○	△×	△
10	△	△×	△×	×	○	△	41	◎	△×	○	×	△	△	41	◎	△×	○	○	△×	△
11	△	△×	△×	×	△	△	42	◎	△×	○	×	△	△	42	◎	△×	○	○	△×	△
12	△	△	△×	×	△	△	43	◎	△×	○	×	△	△	43	◎	△×	○	○	△×	△
13	◎	○	△×	×	△	△	44	◎	△×	○	×	△	△	44	◎	△×	○	△×	×	△
14	○	△	△×	×	△	△×	45	◎	△×	○	×	△	△×	45	◎	△×	○	×	△×	×
15	○	△	△×	×	△×	△×	46	◎	△×	○	×	△×	△	46	◎	△×	○	×	△×	△
16	◎	△×	○	×	△	△×	47	◎	△×	○	×	△	△	47	◎	△×	○	×	△×	△
17	◎	△×	○	△×	△	△	48	◎	△×	○	△	△	△	48	◎	△×	○	×	△×	△
18	◎	△×	○	△×	△	△	49	◎	△×	○	△	△	△	49	◎	△×	○	○	△×	△
19	◎	△×	○	◎	△	△	50	◎	△×	○	△	△	△	50	◎	△×	○	○	△	○
20	◎	△×	○	◎	◎	○	51	◎	△×	○	△	△	△	51	◎	△×	○	△×	△	△
21	◎	△×	○	◎	◎	○	52	◎	△×	○	△	△	△	52	◎	△×	○	△×	△	△
22	◎	△×	○	◎	◎	○	53	◎	△×	○	△	△	△	53	◎	△×	○	△×	△	△
23	◎	△×	○	○	◎	△	54	◎	△×	○	△	△	△	54	◎	△×	○	△	△	△
24	○	△×	○	△×	◎	△×	55	◎	△×	○	△×	△	△	55	◎	△×	○	△	△	○
25	◎	△×	○	△×	◎	△×	56	◎	△×	○	△×	△	△	56	◎	△×	○	△	△	○
26	◎	△×	○	×	◎	△×	57	◎	△×	○	△×	△	△	57	◎	△×	○	△	△	○
27	◎	△×	○	×	△×	△×	58	○	△×	○	△×	△	△	58	○	△×	○	△	△	△
28	◎	△×	○	△×	△×	△×	59	△×	△×	○	△×	△	△	59	△×	△×	△×	△×	○	△×
29	◎	△×	○	×	×	△×	60	△×	△×	○	△×	△	△	60	△×	△×	△×	×	△	×
30	◎	△×	○	△×	△×	△	61	△×	△×	○	△×	△	△	61	△×	△×	△×	×	△	×
31	◎	△×	○	△×	×	△×	62	△×	△×	○	△×	△	△	62	△×	△×	△×	×	△	×

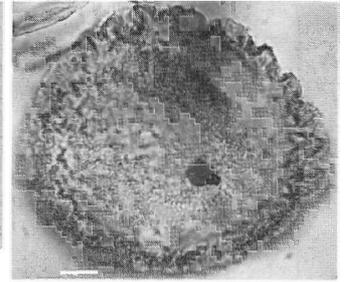
凡例 ◎：十分な数量が検出できる △：非常に少ない
 △×：極めてまれに検出できる ○：少ないが検出できる
 ×：検出できない



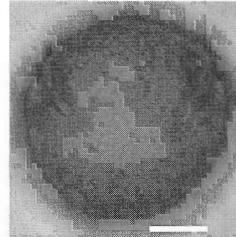
モミ属



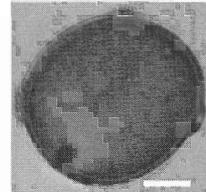
マツ属 (複維管束亜属)



ツガ属



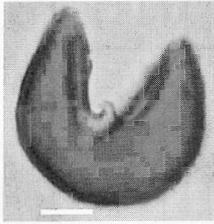
ブナ属



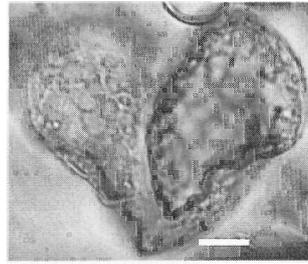
クマシデ属-アサダ属



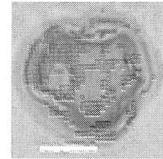
ハンノキ属



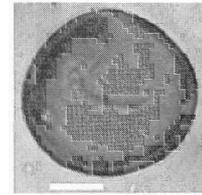
スギ属



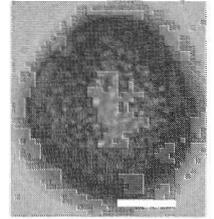
マキ属



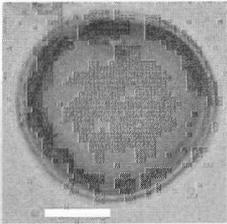
アカガシ亜属



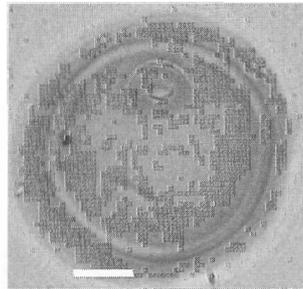
ムクノキ属-エノキ属



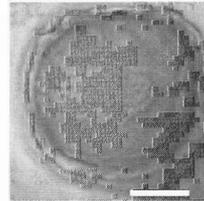
コナラ亜属



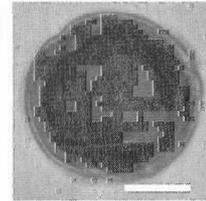
イネ科 (40 ミクロン未満)



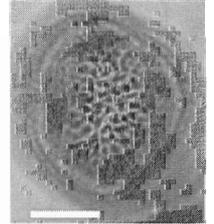
イネ科 (40 ミクロン以上)



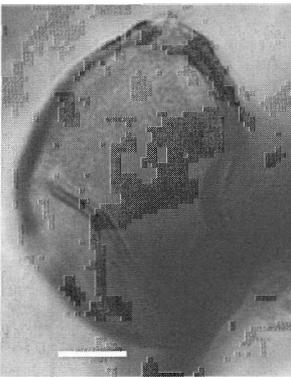
ニレ属-ケヤキ属



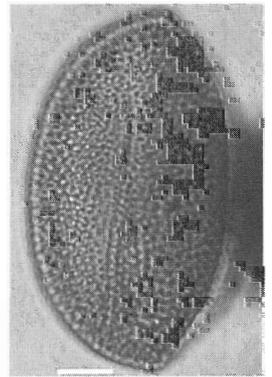
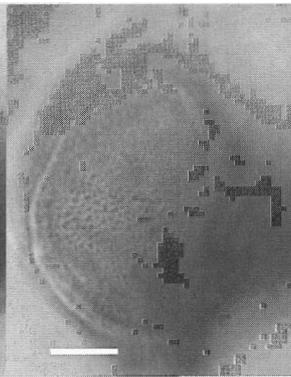
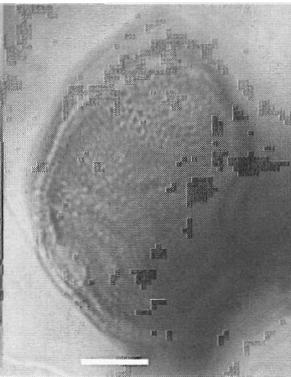
アカメガシ属



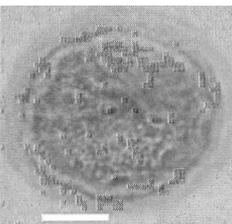
アブラナ科



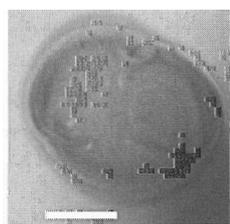
キュウリ属



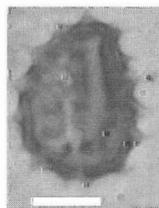
ソバ属



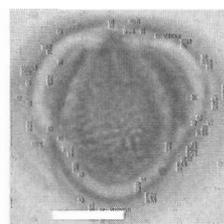
アカザ科-ヒユ科



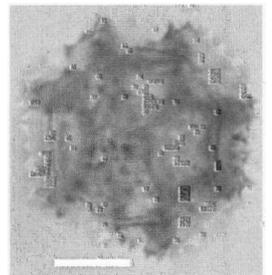
ギシギシ属



キク亜科



ヨモギ属



タンポポ亜科

スケールバーは全て 0.01 mm

検出花粉化石

第3表 1A区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
10-1		弥生土器	(底部)					(6.0) 不整形		外：ナデ (指頭痕) 内：ナデ (強い)	1～3mm程度の小石を含む	良好	橙～ にぶい黄 橙	底部外面剥離
10-2		土師器	坏			(13.2)				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む		橙	
10-3	21	土師器	甕			(13.2)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄褐	
10-4	21	土師器	甕			13.6				外：ヨコナデ、ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	器表面はやや摩滅している
10-5	21	土師器	甕			(16.0)				外：風化により不明瞭 内：ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
10-6	21		土製支脚									良好	にぶい黄 橙	上支部分のみ
10-7	21		土製支脚			現存最大長 10			二又の支脚			良好	にぶい黄 橙	傾きは不明
10-8	21	須恵器?	合子			(10.2)	2.7			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	軟	灰白	
10-9	21	土師器	壺 または鉢					13.0	胴部外面に沈線 (2条)	外：ヨコナデ? 内：ヨコナデ?	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄橙	表面は赤色顔料塗彩
11-10		土師器	甕			(15.6)	29.2		球状の胴部	外：ヨコナデ?、ハケメ 内：ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 暗赤褐	
11-11	21	土師器	甕			(21.4)	29.1		球状の胴部	外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：ヘラケズリ	1～4mm程度の砂粒を多く含む	良	黄	
12-12		須恵器	坏		3層	(11.6)	3.3	(9.0)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	軟	灰	
12-13		須恵器	坏		2～3層					外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
12-14	23	須恵器	坏蓋			(14.9)	3.1		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰～灰白	
12-15	22	須恵器	坏蓋			14.5	3.0		輪状つまみ	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良好	淡灰	
12-16	22	須恵器	坏		3層			10.6	高台を伴う	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
12-17	22	須恵器	坏		2～3層			9.3	高台を伴う	外：回転ナデ後、ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
12-18		須恵器	坏		3層			(9.8)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
12-19	22	須恵器	坏 (皿?)		3層			(13.0)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
12-20	23	須恵器	坏			(14.2)	4.5	10.2	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰～灰白	
12-21		須恵器	坏		2～3層	(15.2)	4.5	(10.8)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
12-22		須恵器	坏			(15.4)	4.1			外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	青灰	
12-23	22	須恵器	坏			(18.4)			体部は下位で屈曲 口縁部は外反	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
12-24		須恵器	碗?			(18.4)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mm程度の白色砂を含む	良好	灰～灰白	
12-25	22	須恵器	碗?			(19.6)			体部に沈線 (2条)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	青灰	
12-26		須恵器	高坏		3層					外：回転ナデ、カキメ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
12-27	23	須恵器	高坏		3層	(16.6)	8.3	9.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	淡灰	
12-28		須恵器	甕			(17.8)			口縁端部は平坦面となる	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
12-29	22	須恵器	甕						篩状工具による波 状文 沈線 (4条)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
12-30	22	須恵器	甕						ヘラ掻き波状紋 沈線 (3条以上)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
12-31		須恵器	壺?					(17.2)	高台を伴う	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
12-32		須恵器	壺?							外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外：褐灰 内：にぶい 赤褐	大きさについては推定

第4表 1B区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
16-1	23	弥生土器	壺		4層	(11.6)	29.8			外: ナデ、ハケメ、ヘラミガキ 内: ナデかミガキ?	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙~ におい黄澄	
16-2	23	土師器	甕		3層	(15.4)			複合口縁	外: ヨコナデ? 内: ヨコナデ?、ヘラケズリ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄	
16-3	23	土師器	甕			(14.8)			複合口縁	外: ヨコナデ? 内: ヨコナデ?、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙	
16-4	23	土師器	高坏							外: ハケメ 内: ナデ?	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	淡黄	
16-5	23	土師器	高坏		3層					外: 風化により不明瞭 内: 風化により不明瞭	ほとんど砂粒を含まない	良好	淡黄	

第5表 1C区 土器溜り 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
22-1		土師器	壺	D1		(7.0)				外: ヨコナデ? 風化により不明瞭 内: ヘラケズリ、ヨコナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
22-2	24	須恵器	甕	D1						外: タタキ (格子目状) 内: 当て具痕、一部ナデ	密	良好	青灰	傾きは推測
22-3		土師器	甕	D2		(15.8)			口縁外面にわずかに稜線が観察できる	外: ヨコナデ、ハケメ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
22-4	24	土師器	甕	D2		(16.6)			退化した複合口縁	外: ヨコナデ、ハケメ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
22-5	24	土師器	甕	D2		(15.0)			複合口縁で端部には平坦面 無軸羽状文	外: ヨコナデ? 内: ヨコナデ?、ヘラケズリ	ほとんど砂粒を含まない	良好	橙	
22-6	24	土師器	壺	D5		(22.0)			複合口縁で端部には平坦面	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄~ 明黄褐	

第6表 1C区 溝状遺構2 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
25-1	23	弥生土器	器台	SD2					外面には縦凹線紋(9条?)	外: ナデ 内: ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	灰黄	
25-2	23	弥生土器	甕	SD2						外: ヨコナデ、ハケメ 内: ヨコナデ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄~ 灰黄	

第7表 1C区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
26-1		土師器	甕		3層	(18.2)			複合口縁で端部には平坦面	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	淡黄	
26-2		土師器	甕		3層	(16.0)				外: ヨコナデ 内: ヨコナデ、ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	灰黄	
26-3		土師器	甕			17.2				外: ヨコナデ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	明褐	
26-4		土師器	甕?			(17.8)				外: ヨコナデ、ナデ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄~ 暗灰黄	
26-5		土師器	壺		2~3層					外: ナデ 内: 粗いナデか未調整		良好	橙	
26-6	24	土師器	壺			12.6	13.9			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
26-7		土師器	高坏			(18.2)				外: ヨコナデ 内: ヨコナデ、ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
26-8	24	土師器	高坏		3層	15.0	12.0	12.0		外: 風化により不明瞭 内: 風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む		橙	
26-9		土師器	高坏			(16.0)				外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
26-10	24	須恵器	坏蓋		3層				口縁端部に段を有する	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良好	青灰	
26-11	24	須恵器	坏蓋		3層	(13.8)			口縁端部に段を有する	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良好	青灰	
26-12	24	須恵器	甕		3層				扁平な球状 中位には櫛状工具による波状文	外: 回転ナデ、ヘラケズリ 内: 回転ナデ	密	良好	灰白~ 青灰	
26-13	24	須恵器	甕		3層	(23.6)			口縁部に突帯	外: 回転ナデ、タタキ(格子目状) 内: 回転ナデ、一部タタキをナデ消し	密	良好	青灰	

26-14	須恵器	蓋	2層	(12.6)	2.9		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白	
26-15	須恵器	蓋		15.0	2.1		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	青灰	

第8表 1D区 建物跡1 (1D-D1) 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
32-1	25	土師器	壺	D1		17.4			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙～灰白		
33-2		土師器	壺	D1					外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙	傾き等は推定	
33-3	25	土師器	甕	D1		15.0	23.4		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	やや軟	灰白		
33-4		土師器	壺	D1		(13.0)			外：ヘラミガキ、ハケメ 内：ヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	接点はなし	
33-5	25	土師器	壺	D1		10.0		複合口縁	外：ナデ？ 内：ナデ？	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
33-6	25	土師器	高坏	D1			13.6	脚部は大きく開く	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	良好	赤		
33-7	25	土師器	壺	D1				球状の胴部	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	やや軟	浅黄橙		

第9表 1D区 建物跡1 (1D-D1) 下層 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
34-1	25	弥生土器	甕	D1		(18.0)		複合口縁 口縁部外面に擬凹線文 (14条～15条)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	灰黄		

第10表 1D区 土器溜り2 (1D-D2) 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
37-1	27	土師器	甕	D2		(14.6)			外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	2～3mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙		
37-2	27	土師器	甕	D2		(13.6)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ？	砂粒をほとんど含まない	良好	橙		
37-3	27	土師器	甕	D2		(17.4)			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙		
37-4	27	土師器	甕	D2		(16.6)			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む 5mmの小石あり	良好	橙		
37-5	27	土師器	甕	D2		(15.8)			外：ハケメ 内：ハケメ、ヘラケズリ	砂粒をほとんど含まない	良好	橙		
37-6	27	土師器	甕	D2		(15.6)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒をほとんど含まない	良好	橙		
37-7	26	土師器	甕	D2		(11.6)	10.8		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙		
37-8		土師器	甕？	D2		11.4			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	やや軟	橙		
37-9	26	土師器	甕	D2		(14.2)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙		
37-10		土師器	甕	D2		(18.4)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙		
38-11		土師器	高坏	D2		(17.0)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙～黄橙		
38-12		土師器	高坏	D2		17.6			外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙		
38-13		土師器	高坏	D2		(18.4)	(10.6)		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良子	橙	坏部と脚部は接点はなし	
38-14	26	土師器	高坏	D2			(10.5)		外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙		
38-15	26	土師器	高坏	D2			11.8		外：ヨコナデ？ 内：ハケメ？	1mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい橙		
38-16	26	土師器	高坏	D2			10.2		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒をわずかに含む	軟	橙		
38-17		土師器	高坏	D2			11.6		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm程度の砂粒をわずかに含む	やや軟	橙～浅黄橙		
38-18	26	土師器	椀	D2		(16.2)	7.7		外：ヨコナデ？ 内：ナデ？	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙		

38-19		土師器	碗	D 2		15.0	5.5			外：風化により不明瞭(ナデ?) 内：ナデ?	1 mm以下の砂粒をわずかに含む	やや軟	黄橙～浅黄橙	
38-20	26	土師器	碗	D 2		12.2				外：風化により不明瞭(ナデ?) 内：ナデ?	1 mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙～浅黄橙	
38-21	26	土師器	碗	D 2		13.2～14.7	5.4			外：ヨコナデ? 内：ヨコナデ?	砂粒をほとんど含まない	良好	橙	

第11表 1D区 土器溜り3 (1D-D8) 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
40-1		土師器	甕	D 8		(23.0)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
40-2		土師器	壺	D 8						外：ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	傾きは推定
40-3	27	須恵器	甕	D 8						外：タタキ (平行)、一部カキメ 内：当て具痕	密	良好	灰～青灰	傾きは推定 平行タタキ
40-4	27	須恵器	甕	D 8						外：タタキ (平行) 内：一部ナデ	密	良好	青灰	傾きは推定 平行タタキ
40-5	27	須恵器	甕	D 8						外：タタキ (平行)、一部ナデ 内：当て具痕、一部ナデ	密 1 mm程度の砂粒を含む	良好	灰～青灰	傾きは推定 平行タタキ

第12表 1D区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
41-1		弥生土器	甕		3層				口縁端部に刻み目	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 1 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙～浅黄橙	
41-2		弥生土器	甕?		3層				頸部に有刻突帯	外：ナデ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良		傾き等は推定
41-3	28	弥生土器	甕?		3層				頸部に有刻貼付突帯	外：ナデ 内：ハケメ、ヘラケズリ?	1 mm程度の砂粒を含む	良好		径、傾きは推定
41-4	28	弥生土器	甕?		3層				頸部に有刻貼付突帯	外：ナデ? 内：ナデ、ヘラケズリ?	1 mm程度の砂粒を含む	良好		径、傾きは推定
41-5		弥生土器	甕		3層	(16.2)			複合口縁 口縁部外面に擬凹線文 (11条)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1～2 mm程度の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙	
41-6		弥生土器	甕		3層	(20.2)			複合口縁 口縁部外面に擬凹線文	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
41-7	28	弥生土器	甕		3層	(17.6)			複合口縁 口縁部外面に擬凹線文 肩部に波状文	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙	
41-8	28	弥生土器	甕		3層	(19.4)			複合口縁 口縁部外面に擬凹線文 肩部に刺突文	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
41-9		土師器	甕		3層	15.0			複合口縁	外：風化により不明瞭(ヨコナデ?) 内：風化により不明瞭(ヨコナデ?)	1 mm以下の砂粒を含む	良好	黄灰	
41-10	28	土師器	甕		3層	22.8			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙	
41-11	28	土師器	甕		3層	16.4			複合口縁 肩部に平行線文と波状文	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
41-12	30	土師器	甕		3層	(20.8)			複合口縁 口縁端部に平坦面	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	灰白～黄灰	同一個体か? 底部傾き推定
41-13		弥生土器	壺 または 甕		3層				羽状文 沈線文	外：ナデ? 内：ナデ?	1 mm程度の砂粒を含む	良	浅黄橙	傾きは推定
41-14		弥生土器	甕		3層				二枚貝による刺突文	外： 内：ヘラケズリ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	傾きは推定
41-15		弥生土器	(底部)		3層			4.0	平底	外：ハケメ 内：ナデ	1～2 mm程度の砂粒 (石英) を多く含む	良	浅黄橙	
41-16		弥生土器	(底部)		3層			6.4	平底	外：ナデ 内：ナデ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	表面風化
41-17		弥生土器	(底部)		3層			9.0		外：ナデ 内：ナデ	1～3 mm程度の砂粒 (石英) を多く含む	良好	橙	
42-18	28	土師器	甕		3層	(17.6)				外：ヨコナデ、ハケメ、 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	灰白～にぶい黄橙	口縁部内面に赤色顔料塗彩
42-19	28	土師器	甕		3層	(14.6)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
42-20		土師器	甕		3層	(16.0)				外：ヨコナデ 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	
42-21	28	土師器	甕		3層	(16.1)				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2 mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙～浅黄橙	
42-22		土師器	甕		3層	(14.8)				外：ヨコナデ 内：風化により不明瞭	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	

42-23		土師器	甕		3層	(13.0)			口縁端部に沈線(1条)	外:風化により不明瞭 内:ヨコナデ?、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
42-24	28	土師器	壺		3層	(19.0)				外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙		
42-25	28	土師器	壺		3層	(18.2)				外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む	良	橙		
42-26		土師器	壺		3層	(17.6)				外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~3mm程度の砂粒を多く含む	やや軟	橙		
42-27	30	土師器	壺		3層	(21.0)			複合口縁 頸部に有軸羽状文 肩部に波状文(6条)	外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙~ 灰白		
42-28	29	土師器	甕		3層					外:タタキ 内:風化により不明瞭	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい赤 褐~橙	傾きは推定	
42-29	29	土師器	甕		3層					外:タタキ 内:ナデ?	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙	傾きは推定	
42-30	29	土師器	壺		3層	(19.0)			複合口縁 口縁端部に竹管文 口縁部内面に波状文	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙		
42-31	29	土師器	壺		3層	(16.2)			口縁部外面に斜格 子目状の三角文	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	1~4mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙~ 灰白		
42-32	29	土師器	壺		3層				頸部に突帯	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	傾きは推定	
43-33		土師器	器台?		3層				脚部に円形スカン (4方向) 中央に穿孔	外:風化により不明瞭 内:ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	橙		
43-34		土師器	高坏?		3層		(9.4)		脚部に円形スカン (4方向)	外:ヘラミガキ 内:ハケメ	1~2mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙~ 浅黄橙	内面の一部に 赤色顔料塗彩	
43-35	29	土師器	器台?		3層		(9.6)		脚部に円形スカン (4方向) 中央に穿孔	外:風化により不明瞭 内:ハケメ、ナデ?	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	灰白		
43-36	30	土師器	高坏		3層		10.2		脚部に円形スカン (4方向)	外:ヘラミガキ、ハケメ 内:ヘラケズリ、ハケメ、ナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	橙~ 浅黄橙		
43-37	29	土師器	高坏		3層				脚部に円形スカン (4方向)	外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄 橙		
43-38	30	土師器	器台		3層	(10.8)			脚部に円形スカン (4方向) 中央に穿孔	外:ヨコナデ、ナデ、 ヘラミガキ 内:ナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	表面に赤色顔 料塗彩	
43-39	29	土師器	器台 (鼓形)		3層		(17.8)			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	脚部	
43-40		土師器	器台 (鼓形)		3層		(20.4)			外:風化により不明瞭、 一部ハケメ 内:ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
43-41	29	土師器	器台 (鼓形)		3層		(21.2)			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
43-42		土師器	器台?		3層	(3.6)	(4.1)	6.6		外:ハケメ、ヨコナデ、 一部未調整 内:ナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	灰白~ 浅黄橙		
43-43	30	土師器	低脚坏		3層			6.0		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
43-44	31	土師器	台付鉢		3層	(13.8)	8.4	6.4		外:ハケメ、ナデ 内:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙		
43-45		土師器	高坏		3層	20.2				外:ヘラミガキ 内:風化により不明瞭	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
43-46		土師器	高坏		3層					外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙		
43-47		土師器	高坏		3層					外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む	良	橙		
43-48	30	土師器	高坏		3層			(12.5)		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	ほとんど砂粒を含まない	良	明赤褐		
43-49		土師器	高坏		3層					外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙		
43-50	29	土師器	高坏		3層					外:風化により不明瞭 内:ヘラケズリ、ナデ?	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙		
43-51		土師器	高坏		3層			(10.9)		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	ほとんど砂粒を含まない	良	淡橙		
43-52	29	土師器	(底部)		3層				底部穿孔	外:ナデ 内:ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
43-53		土師器	壺		3層	7.8			複合口縁	外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙		
43-54	31	土師器	土鉢		3層	現存長 3.8	最大幅 3.3	孔径 0.8				1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
43-55	31	土師器			3層	3.4	4.4	3.4		外:風化により不明瞭 内:指頭痕	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形	
44-56		土師器	甕		3層	(23.2)				外:ナデ? 内:ナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良	灰黄褐		

44-57		土師器	甕		3層	(23.6)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	5mm大の小石を含む	良	淡黄		
44-58	31	土師器	鉢?		3層	(16.2)	(7.0)			外：ナデ? 内：丁寧なナデ	2～3mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙～浅黄		
44-59	31	土師器	碗?		3層	12.4	7.0			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	やや軟	橙		
44-60		土師器	竈		3層					外：ナデ? 内：ナデ?指頭痕	砂粒をほとんど含まない	良	橙		
44-61		土師器	竈		3層					外：ハケメ、粗いナデ 内：ナデ、指頭痕	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄		
44-62			製塩土器?		3層		4.2			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	砂粒を多く含む	不良か	淡褐～橙 ～暗黄褐		
44-63		須恵器	坏蓋		3層	(13.8)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白		
44-64		須恵器	坏		3層					外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良好	淡灰		
44-65		須恵器	坏		3層	(12.2)			口縁部は内傾気味に立ち上がる	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰～灰白		
44-66		須恵器	坏		3層	(13.8)			口縁部は内傾気味に立ち上がる	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰～灰白		
44-67		須恵器	坏		3層		(7.8)		高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白		
44-68		須恵器	坏		3層		(8.4)		高台を伴う	外：回転ナデ 内：ナデ	密	良好	灰白		
44-69		須恵器	甕		3層	(18.8)			口縁部は丸くふくらむ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰		
44-70		須恵器	甕		3層	(18.4)			口縁部外面に刺突文 口縁部に沈線	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	暗青灰		
44-71		須恵器	坏		3層		7.4		高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白		
44-72		須恵器	坏		3層		(6.4)		高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰		
44-73	31	石器	石包丁		3層	現存長 (5.9)	最大幅 最大厚 0.4		刃部研磨						先端部はか欠損

第13表 1F区 土器溜り2 (1F-D2) 出土遺物観察表

挿図 番号	写真 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
48-1	32	土師器	甕	D2		(14.4)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
48-2	32	土師器	甕	D2		(14.8)				外：ヨコナデ、一部風化 により不明瞭 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙～灰黄褐	
48-3	32	土師器	甕	D2		(15.8)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
48-4		土師器	甕	D2		(16.4)				外：ハケメ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～ 灰白	
48-5	32	土師器	甕	D2		(16.8)				外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～灰黄	
48-6	32	土師器	甕	D2		(20.2)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
48-7	32	土師器	甕	D2		(17.8)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
48-8	32	土師器	甕	D2		(15.0)				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～ 浅黄橙	
48-9		土師器	甕	D2						外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～ 浅黄橙	傾きは推定
48-10	34	土師器	甕	D2		19.2				外：風化により不明瞭 内：ナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
48-11		土師器	甕	D2						外：ハケメ 内：風化により不明瞭	1～5mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
49-12	34	土師器	壺	D2		10.2				外：風化により不明瞭 内：表面剥離により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	
49-13		土師器	甕?	D2		9.2				外：風化により不明瞭 内：ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	やや軟	黄橙～ 浅黄橙	
49-14		土師器	壺	D2		10.2	13.7			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 浅黄橙	
49-15	34	土師器	甕	D2		(11.2)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ にぶい橙	

49-16	34	土師器	甕	D 2	(14.6)	14.2			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙～にぶい赤褐	
49-17		土師器	壺?	D 2	9.6				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～5mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	内面に赤色顔料
49-18		土師器	壺	D 2					外：風化により不明瞭 内：ナデ、ヘラケズリ	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙～浅黄	
49-19		土師器	甕	D 2	9.4				外：風化により不明瞭 内：ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～灰白	手づくね成形か?
49-20		土師器	甕	D 2	(16.6)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白	
49-21		土師器	壺	D 2	10.8			退化した複合口縁か?	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	赤色顔料
49-22	34	土師器	壺	D 2	10.6			退化した複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
49-23	34	土師器	壺	D 2	15.4			退化した複合口縁	外：ヨコナデ? 内：ヨコナデ?、ヘラケズリ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
49-24	32	土師器	甕?	D 2	(12.0)			退化した複合口縁	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	
49-25	32	土師器	壺	D 2	(12.0)			退化した複合口縁	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
49-26	34	土師器	壺	D 2	(21.4)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	灰白	
50-27	33	土師器	高坏	D 2	18.6				外：ヨコナデ、ナデ 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	
50-28	33	土師器	高坏	D 2	(21.2)				外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～灰白	
50-29	33	土師器	高坏	D 2	17.8				外：風化により不明瞭 内：ナデ、ハケメ	1～3mm程度の砂粒を含む(8mmの小石あり)	良好	浅黄橙	
50-30	33	土師器	高坏	D 2	(18.2)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
50-31	33	土師器	高坏	D 2	17.8				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
50-32	33	土師器	高坏	D 2	(17.6)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	砂粒をほとんど含まない	良好	浅黄橙	
50-33	33	土師器	高坏	D 2	20.0				外：ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	
50-34		土師器	高坏	D 2	23.2				外：ヨコナデ 内：ナデ	1～4mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
50-35	33	土師器	高坏	D 2	(16.6)				外：ヨコナデ、ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
50-36		土師器	高坏	D 2	(17.8)				外：風化により不明瞭 内：ナデ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
50-37		土師器	高坏	D 2	17.2				外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙～にぶい黄橙	
50-38	33	土師器	高坏	D 2	18.6				外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
50-39		土師器	高坏	D 2	16.6				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
50-40	35	土師器	高坏	D 2	(19.2)	(12.4～12.8)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
50-41	35	土師器	高坏	D 2		12.2			外：ナデ?、ハケメ? 内：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
50-42	35	土師器	高坏	D 2	9.7				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	
51-43	35	土師器	高坏	D 2		9.8	脚部に円形スキャン(4方向)		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	
51-44		土師器	高坏	D 2		12.0			外：風化により不明瞭 内：ナデ?、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	
51-45		土師器	高坏	D 2		9.8			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
51-46	35	土師器	高坏	D 2		11.2			外：ナデ? 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙	
51-47		土師器	高坏	D 2		9.2			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	
51-48		土師器	高坏	D 2		(10.6)			外：風化により不明瞭 内：ハケメ、ケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	底部は大きく歪む
51-49	35	土師器	高坏	D 2		8.6			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙～黄灰	

51-50	35	土師器	高坏	D 2				13.6		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙	
51-51	35	土師器	高坏	D 2				10.8		外：ヨコナデ、ナデ？ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
51-52		土師器	高坏	D 2				11.8		外：ナデ？ 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	50-36と同一個体の可能性
51-53		土師器	高坏	D 2				13.7		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
51-54		土師器	高坏	D 2						外：ナデ？ 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
51-55		土師器	高坏	D 2						外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙～浅黄橙	
51-56		土師器	低脚坏？	D 2				7.2		外：ナデ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	明赤褐	
51-57	34	土師器	鉢	D 2		14.0	14.2		底部に直径8 mmの穿孔	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
51-58	36	土師器	鉢？	D 2		(9.2)	8.1			外：ナデ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
51-59		土師器	碗？	D 2		14.3				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい赤褐	
52-60	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		(8.0)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ？、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	手づくね成形に近い
52-61	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		6.8				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2 mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	手づくね成形に近い
52-62	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		(6.8)	8.0			外：ナデ？ 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形に近い
52-63		土師器	壺 (小型壺)	D 2		(8.0)	7.2			外：風化により不明瞭 内：ナデ？	1～4 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	手づくね成形に近い
52-64	36	土師器	壺？ (小型壺)	D 2		(7.6)	8.3			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ、ハケメ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	手づくね成形に近い
52-65		土師器	壺 (小型壺)	D 2		(8.8)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ？	1 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	手づくね成形に近い
52-66	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		7.0	8.0			外：ナデ？、ハケメ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	手づくね成形に近い
52-67		土師器	壺 (小型壺)	D 2		6.8				外：ハケメ 内：ナデ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	手づくね成形に近い
52-68	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		6.6	7.5			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形に近い
52-69		土師器	壺 (小型壺)	D 2						外：ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	手づくね成形に近い
52-70		土師器	壺 (小型壺)	D 2		(7.2)	5.5			外：ナデ 内：ナデ	ほとんど砂粒を含まない	良好	にぶい黄橙	手づくね成形に近い
52-71		土師器	壺 (小型壺)	D 2						外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	手づくね成形に近い
52-72		土師器	壺 (小型壺)	D 2						外：ナデ？ 内：未調整？	1～2 mm程度の砂粒を含む	良	黄橙	手づくね成形に近い
52-73		土師器	壺 (小型壺)	D 2						外：風化により不明瞭 内：ナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～にぶい黄橙	手づくね成形に近い
52-74		土師器	壺 (小型壺)	D 2						外：ヨコナデ 内：ナデ、粗いケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良	淡黄	手づくね成形に近い
52-75	36	土師器	壺 (小型壺)	D 2		6.0	8.8			外：風化により不明瞭 内：ナデ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形に近い
52-76	37	土師器	壺 (小型壺)	D 2		6.1	7.6			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～灰白	手づくね成形に近い
52-77	37	土師器	壺 (小型壺)	D 2		(5.4)	6.5			外：風化により不明瞭 内：ナデ？、ハケメ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	手づくね成形
52-78	37	土師器	壺 (小型壺)	D 2		(4.7)	6.1			外：風化により不明瞭 内：ナデ、ハケメ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	手づくね成形外面に一部赤色顔料
52-79		土師器	壺 (小型壺)	D 2		5.4	7.0			外：風化により不明瞭 内：ナデ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形
52-80		土師器		D 2						外：ナデ 内：ナデ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形
52-81	37	土師器		D 2		4.8	3.2			外：風化により不明瞭 内：ナデ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形
52-82	37	土師器		D 2		4.6	5.4			外：ハケメ 内：ナデ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～にぶい褐	手づくね成形
52-83		土師器		D 2						外：ナデ、底部はハケメ 内：ナデ、一部未調整	1 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	淡黄	手づくね成形

52-84	37	土師器		D 2		(3.6)	4.7			外：ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1 mm程度 の砂粒を 含む	良好	灰黄褐	手づくね成形
52-85	37	土師器		D 2		6.4	4.7	3.6		外：ナデ、粗いケズリ 内：ナデ	1 mm以下 の砂粒を 含む	良好	にぶい黄 橙～黄灰	手づくね成形
52-86		土師器		D 2		2.5	3.3			外：ナデ 内：ナデ	0.5～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	にぶい黄 橙	手づくね成形
52-87	37	土師器	壺 (小型壺)	D 2		(5.4)	8.5		複合口縁	外：ヨコナデ、胴部は風 化により不明瞭 内：ヨコナデ、ナデ	1 mm以下 の砂粒を 含む	良好	灰白～ にぶい黄 橙	手づくね成形
52-88		土師器		D 2			7.6			外：ナデ 内：ナデ	1 mm程度 の砂粒を 含む	良好	浅黄橙	手づくね成形
52-89	37	土師器		D 2			7.7			外：粗いナデ、ハケメ、 指頭痕 内：粗いナデ	1 mm程度 の砂粒を 含む	良好	淡黄	手づくね成形
52-90		土師器	壺 (小型壺)	D 2		4.2	6.1			外：ナデ 内：ナデ、一部未調整	1 mm程度 の砂粒を 含む	良好	橙	手づくね成形
52-91	37	土師器		D 2		(8.6)	(3.7)			外：ナデ 内：ナデ	1 mm以下 の砂粒を 含む	良好	にぶい黄 橙～黄灰	手づくね成形
53-92	47	土師器	壺	D 2	3層					外：ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1～4 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	浅黄橙～ 灰白	

第14表 1 F区 土器溜り3 (1 F-D 3) 出土遺物観察表

挿図 番号	写真 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
55-1	38	土師器	甕	D 3		(20.2)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、 ヘラケズリ	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ にぶい赤 褐	
55-2	39	土師器	甕	D 3		16.8				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ、ヘラ ケズリ	1～4 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ 浅黄橙	同一個体か
55-3		土師器	甕	D 3						外：ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ	1～4 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ 浅黄橙	
55-4	39	土師器	甕	D 3		16.4				外：ヨコナデ、一部風化 により不明瞭 内：ヨコナデ?、ヘラケズリ	1～3 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙	
55-5	38	土師器	甕	D 3		(14.9)				外：風化により不明瞭 内：ナデ?、ヘラケズリ?	1～3 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ にぶい黄 橙	
55-6	38	土師器	甕	D 3		(15.8)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラ ケズリ、ヘラケズリ後ナデ	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む (6 mmの 小石あり)	良好	にぶい橙	
55-7	39	土師器	壺	D 3		11.8				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	黄橙～ 灰白	
55-8	39	土師器	甕	D 3		9.2	16.1			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズ リ、ナデ (指頭痕)	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良	橙～ 黄橙	
55-9		土師器	壺か甕 (底部)	D 3						外：風化により不明瞭 内：強いナデ (指頭痕)	1 mm以下 の砂粒 を少量 含む	良好	橙～ 黄橙	
56-10	39	土師器	壺?	D 3		20.4				外：ヨコナデ?、ハケメ? 内：ヘラケズリ	1 mm程度 の砂粒 を 含む	良好	浅黄橙	器表面は全体的に摩滅
56-11	39	土師器	壺	D 3		(20.0)	38.5		複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ハ ケメ、ヘラケズリ	1～4 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ 浅黄橙	
56-12	39	土師器	壺	D 3		(18.4)	36.9		退化した複合口縁	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2 mm 程度の 砂粒を 多く 含む	良好	橙～ 浅黄橙	
57-13	47	土師器	壺	D 3		27.0	(63.5)		複合口縁 口縁端部は平坦面	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	浅黄橙～ 灰白	同一個体か
			壺	D 3						外：ナデ?、ハケメ 内：板状工具によるナデ			橙～ 浅黄橙	
58-14	40	土師器	高坏	D 3		(18.0)	14.6	12.2		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙	
58-15	40	土師器	高坏	D 3		18.3	13.0	11.4		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	黄橙	
58-16	40	土師器	高坏	D 3		18.6	13.1	11.4		外：風化により不明瞭 内：ナデ?、ヘラケズリ、 ハケメ、一部未調整	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ 浅黄橙～ 黄灰	
58-17	38	土師器	高坏	D 3		(17.2)				外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～4 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙	
58-18	38	土師器	高坏	D 3		20.8				外：ハケメ 内：ヨコナデ?、ナデ、 ハケメ	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙	
58-19	40	土師器	高坏	D 3		(16.0)	12.5	10.2		外：風化により不明瞭 内：ヘラケズリ	1 mm以下 の砂粒 を少量 含む	良好	橙～ 黄橙	
58-20		土師器	高坏	D 3		(20.6)				外：ハケメ 内：風化により不明瞭	1～2 mm 程度の 砂粒を 含む	良好	橙～ 浅黄橙	
58-21	38	土師器	高坏	D 3		17.6				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1 mm程度 の砂粒 をわず かに 含む	良好	橙～ 浅黄橙	
58-22	40	土師器	高坏	D 3		17.2	12.4	10.0		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ、 ヘラケズリ	1 mm以下 の砂粒 をわず かに 含む	良好	橙～ 浅黄橙	

58-23	38	土師器	高坏	D 3		(18.4)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ハケメ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい橙	
58-24	41	土師器	高坏	D 3		(15.3)	12.4	10.0		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
58-25	40	土師器	高坏	D 3		(15.4)				外：風化により不明瞭(一部ナデ?) 内：風化により不明瞭(一部ナデ?)	1 mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙～浅黄橙	
59-26	41	土師器	高坏	D 3				11.2	脚端部に沈線(1条)	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～灰白	
59-27	41	土師器	高坏	D 3				11.8		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙	
59-28		土師器	高坏	D 3				(10.4)		外：ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
59-29	41	土師器	高坏	D 3				13.4		外：ヨコナデ、ナデ? 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
59-30	41	土師器	高坏	D 3				13.4		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
59-31	41	土師器	高坏	D 3				(11.8)		外：風化により不明瞭 内：ヨコナデ?、ナデ、ヘラケズリ?	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～黄橙	
59-32	41	土師器	高坏	D 3				12.0		外：風化により不明瞭 内：ナデ、ヘラケズリ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
59-33	41	土師器	高坏	D 3				9.8		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
59-34		土師器	鉢	D 3		13.2	8.8			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～にぶい橙	
59-35	42	土師器	鉢	D 3		11.8	8.8			外：ヨコナデ?、ハケメ 内：ヨコナデ?、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	やや軟	黄橙～浅黄橙	
59-36		土師器	壺	D 3						外：ハケメ 内：ナデ(指頭痕)、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
59-37	42	土師器	壺(小型壺)	D 3		8.6	12.2			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3 mm程度の砂粒を含む	良	黄橙～浅黄橙	
59-38		土師器	壺(小型壺)	D 3						外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ(指頭痕)	1 mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～にぶい黄橙	
59-39	42	土師器	壺(小型壺)	D 3		7.2	9.2			外：風化により不明瞭 内：ナデ?、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒を含む	良	橙	
59-40		土師器	壺(小型壺)	D 3						外：ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～2 mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙～浅黄橙	
59-41		土師器	壺(小型壺)	D 3		(10.0)				外：ハケメ 内：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	傾きは推定
59-42	42	土師器	壺(小型壺)	D 3		(7.2)	8.2			外：風化により不明瞭 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
60-43	42	土師器	壺(小型壺)	D 3		7.7	9.3			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形に近い
60-44		土師器		D 3						外：ナデ 内：粗いナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	手づくね成形
60-45	42	土師器		D 3		(3.6)				外：風化により不明瞭 内：ナデ?、ハケメ?	1～3 mm程度の砂粒を含む	良	橙～黄橙	手づくね成形
60-46	42	土師器		D 3		4.0	4.4			外：風化により不明瞭 内：ナデ	1 mm程度の砂粒を含む	良好	橙	手づくね成形
60-47	42	土師器		D 3		3.6	3.9			外：ナデ? 内：ナデ、指頭痕	1 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙～灰白	手づくね成形
60-48	38	土師器		D 3		7.8				外：ナデ 内：ナデ	1 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙	手づくね成形
60-49	38	土師器	(底部)	D 3				3.6		外：ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	橙～灰白	
60-50	38	須恵器	甕	D 3						外：タタキ 内：ナデ	密	良好	暗青灰～青灰	傾きは推定
60-51	38	須恵器	甕	D 3						外：タタキ 内：ナデ	密	良好	明青灰～青灰	傾きは推定

第15表 1 F区 土器溜り4 (1 F-D 4) 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
62-1		土師器	壺	D 4		22.0			複合口縁	外：ヨコナデ? 内：ヨコナデ	1 mm以下の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
62-2	44	土師器	甕	D 4		(15.0)				外：ヨコナデ?、ハケメ? 内：ヘラケズリ?	1 mm以下の砂粒を含む	良	明赤褐～橙	器表面は全体的に風化が進む
62-3	43	土師器	壺(小型壺)	D 4						外：ナデ? 内：ナデ、ヘラケズリ	1 mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙～灰白	

62-4	43	土師器	壺 (小型壺)	D 4					外：風化により不明瞭(一部ハケメ) 内：風化により不明瞭(一部ハケメ)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	橙	器表面は全体的に風化が進む
62-5	43	土師器	壺 (小型壺)	D 4		(8.4)	9.3		外：ヨコナデ、胴部は風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	橙	器表面は全体的に風化が進む
62-6	43	土師器	碗	D 4		(15.6)	6.5		外：ハケメ 内：ナデ?	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙～ にぶい橙	
62-7	43	土師器	碗	D 4		(13.8)	6.1		外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい橙 ～浅黄橙	外面には赤色顔料
62-8		土師器	碗	D 4		13.2			外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ?	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙～ 灰白	
62-9	43	土師器	鉢	D 4		7.9	5.2		外：ナデ(指頭痕) 内：ナデ(指頭痕)	ほとんど砂粒を含まない	良	橙	手づくね成形
62-10	43	土師器	高坏	D 4				10.8	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1mm以下の砂粒を含む	良	橙	
62-11	44	須恵器	甕	D 4					外：タタキ 内：当て具痕	密			傾きは推定

第16表 1 F区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
65-1		弥生土器	甕		3層				頸部に有刻突帯	外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	灰白	傾きは推定
65-2	44	弥生土器	甕		3層				頸部に有刻突帯	外：風化により不明瞭 内：ナデ、一部ハケメ	1～4mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 浅黄橙	傾きは推定
65-3		弥生土器	甕		3層				肩部に刺突文	外：ヨコナデ 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を多く含む	やや軟	橙	傾きは推定
65-4	44	弥生土器	甕		3層				頸部に有刻突帯	外：ナデ?、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 灰白	傾きは推定
65-5	44	弥生土器	甕?		3層				頸部に有刻突帯	外：ハケメ、ヘラミガキ 内：ナデ、ハケメ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙	
65-6	44	弥生土器	甕		3層	(13.4)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を多く含む	やや軟	灰白	
65-7	44	弥生土器	器合 (鼓形)		3層				擬凹線文	外：ナデ 内：ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	灰白	傾きは推定
65-8		土師器	甕		3層	(18.6)			複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙～ 灰白	
65-9	45	土師器	甕		3層	(16.2)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
65-10	45	土師器	甕		3層	(17.4)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	灰黄褐	
65-11	45	土師器	甕		3層	(16.6)			複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙～ 浅黄橙	
65-12	45	土師器	甕		3層	(16.8)			複合口縁 口縁端部は平坦面	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい橙 ～灰黄褐	
65-13	45	土師器	甕		3層	(16.6)			複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
65-14	48	土師器	甕		3層	20.8			複合口縁 肩部に刺突文	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙～ にぶい黄橙	
66-15		土師器	甕		3層	(18.8)			複合口縁	外：ヨコナデ、ナデ後ヨコナデ(指頭痕) 内：ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
66-16	45	土師器	甕		3層	(26.8)			複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ?、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	灰白	
66-17	45	土師器	壺		3層	(11.4)			複合口縁 波状文(2条?)	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
66-18	48	土師器	壺		3層	(15.4)	17.5		複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ? 内：ヨコナデ、ナデ(指頭痕)	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 浅黄橙	
67-19	45	土師器	壺		3層	(21.2)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙～ 黄橙	
67-20	45	土師器	壺		3層	(23.8)			複合口縁 口縁端部は平坦面を有する	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙～ にぶい黄橙	
67-21	48	土師器	壺		3層	(27.4)	(47～48)		有軸羽状文 ヘラ描き沈線	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
68-22		土師器	甕		3層	(15.0)			口縁端部外面に沈線?(1条)	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙～ 浅黄橙	
68-23		土師器	甕		3層	(15.4)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	
68-24	48	土師器	甕		3層	15.8				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	

68-25		土師器	甕	3層	(17.4)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ?	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄橙	
68-26		土師器	甕	3層			肩部に刺突文	外:ハケメ 内:ナデ?、ヘラケズリ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙~ にぶい黄 橙	傾き、径とも に推定	
68-27	45	土師器	甕	3層	(14.0)			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	ほとんど砂粒 を含まない	良好	橙~ にぶい黄 橙		
68-28		土師器	甕	3層	(17.4)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ、 ヘラケズリ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	橙~ 浅黄橙		
68-29	45	土師器	甕	3層	(18.2)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、 ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	黄灰~灰 白		
68-30		土師器	甕	3層	17.4			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、一部風化 により不明瞭	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	橙		
68-31	45	土師器	甕	3層	(17.2)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ?、ハケメ、 ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	明赤褐		
68-32	45	土師器	甕	3層	(18.4)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙~ にぶい赤 褐		
68-33		土師器	甕	3層	(14.6)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ、ハケメ、 ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙~ 浅黄橙		
68-34	45	土師器	甕	3層	(11.6)			外:風化により不明瞭 内:ナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙		
68-35		土師器	甕	3層	15.4			外:ヨコナデ、ハケメ? 内:ヨコナデ、ヘラケズ リ、ナデ(指頭痕)	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	にぶい橙 ~にぶい 黄橙		
69-36		土師器	甕	3層	23.6			外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~3mm程度の砂 粒を含む(5mm程度の 小石もわずかにあり)	良好	黄橙~ 浅黄橙		
69-37		土師器	壺	3層	15.4		口縁端部は平坦面	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	にぶい橙 ~にぶい 黄橙		
69-38	45 48	土師器	甕	3層	(15.6)			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ、 ヘラケズリ、ナデ(指頭痕)	1~3mm程度 の砂粒を含む。	良好	橙		
69-39	48	土師器	甕	3層	(13.6)			外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	浅黄橙~ 淡橙		
69-40	45	土師器	甕	3層	(17.2)	(35.7)		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、 ヘラケズリ	1~4mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙	接点は認めら れない	
70-41	46	土師器	高坏	3層	(16.8)			外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	浅黄橙~ にぶい黄 橙		
70-42	46	土師器	高坏	3層	18.4			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	1~3mm程度 の砂粒を含む	良好	橙		
70-43	46	土師器	高坏	3層	17.2			外:ヨコナデ?、ハケメ? 内:剥離により不明瞭	ほとんど砂粒 を含まない	良好	橙~ にぶい橙		
70-44	46	土師器	高坏	3層	(21.2)			外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ(指 頭痕)	1mm以下の砂 粒を含む	良好	にぶい赤 褐		
70-45	46	土師器	高坏	3層	15.4			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、一部風化 により不明瞭	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい橙 ~橙		
70-46		土師器	高坏	3層	(20.4)			外:ハケメ 内:風化により不明瞭	1mm以下の砂 粒を含む	良好	橙		
70-47	49	土師器	高坏	3層	(16.8)	13.3	11.0	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ヨコナデ、ナデ、ヘ ラケズリ、一部未調整	ほとんど砂粒 を含まない	良好	橙~ 浅黄橙		
70-48	49	土師器	高坏	3層			8.8	外:ヨコナデ、ハケメ? 内:ヨコナデ、ナデ、 ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	黄橙~ 浅黄橙		
70-49	49	土師器	高坏	3層			12.0	脚端部に沈線状の 窪み(1条)	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	赤褐~ 浅黄橙	
70-50	49	土師器	高坏	3層			11.8		外:ナデ 内:ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	浅黄橙~ 灰白	
70-51	49	土師器	鉢	3層			7.0		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~2mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	浅黄橙	内面に赤色顔 料が残る
70-52	49	土師器	鉢	3層			6.0		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1~2mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	褐灰~灰	
70-53	49	土師器	低脚坏	3層			6.0		外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	にぶい黄 橙~灰黄	
70-54		土師器	器台 (鼓形)	3層	(20.0)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	ほとんど砂粒 を含まない	良好	橙~ にぶい黄 橙	外面に赤色顔 料?
71-55		土師器	器台 (鼓形)	3層	(21.4)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	灰白	
71-56	49	土師器	器台 (鼓形)	3層	(17.0)	11.2	(16.4)		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ、 ヘラケズリ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	浅黄橙	
71-57	49	土師器	器台	3層			(9.2)	脚部に円形スカシ (4方向)	外:ナデ 内:ナデ	密	良好	にぶい黄 橙~黄灰	
71-58		土師器	高坏?	3層				脚部に円形スカシ (5方向)	外:ハケメ 内:ハケメ、一部未調整	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	良好	浅黄橙	

71-59		土師器	壺?	3層				頸部に沈線(2条)	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙	傾きは推定
71-60	50	土師器	壺 (小型壺)	3層	7.0	9.0			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ後粗いナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙~灰白	
71-61		土師器	壺	3層	11.0				外:ヨコナデ、丁寧なナデ 内:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙~灰黄	外面に赤色顔料?
71-62		土師器	壺	3層	13.0				外:ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ 内:ナデ?	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙	
71-63	50	土師器	鉢	3層	(9.0)	8.9			外:ヨコナデ、ハケメ? 内:ナデ、ハケメ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
71-64	50	土師器	鉢	3層	9.6	7.3			外:ヨコナデ、ナデ? 内:ハケメ	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙~浅黄橙	
71-65	50	土師器	鉢	3層	12.0	9.3			外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙	
71-66	50	土師器	椀	3層	(13.2)	5.9			外:風化により不明瞭 内:ナデ?	密	良好	淡橙~淡黄	
71-67	50	土師器	椀	3層	(10.4)				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ	密	良	橙~にぶい黄橙	
71-68		土師器	(底部)	3層				底部中央穿孔	外:ナデ? 内:粗いケズリ?(未調整か)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい橙	
71-69		土師器	椀	3層	13.8	(5.7)			外:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙~浅黄橙	外面に赤色顔料?
71-70		土師器	(底部)	3層			(2.6)	わずかな平底?	外:ナデ 内:ナデ、指頭痕	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙~灰白	
71-71		土師器	(底部)	3層				底部中央穿孔	外:粗いナデ 内:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	
71-72		土師器	甌	3層				中央に3カ所穿孔	外:粗いナデ(ケズリ痕?あり) 内:粗いケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	灰白	
71-73		土師器	(底部)	3層			5.4		外:ナデ 内:ヘラケズリ	1~3mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙~灰白	
71-74		土師器	(底部)	3層			(6.6)		外:ナデ 内:ナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙~にぶい黄橙	
72-75	51	土師器	壺	3層	(17.2)			口縁外面に斜格子状の線刻	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ	1~4mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙~灰褐	
72-76	51	土師器	壺	3層	(16.0)	(29.0)		頸部に突帯	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
73-77	51	須恵器	直口壺	3層	(9.5)			口縁外部に波状文(5~6条)突帯(2条)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	青灰	
73-78	51	須恵器	瓦泉	3層				波状文(4条×2段)沈線(1条)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰	
73-79	51	須恵器	把手付鉢?	3層	7.8	7.7		中位に波状文及び沈線	外:回転ナデ、ミガキ? 内:回転ナデ	密	良好	青灰	
73-80	51	須恵器	高坏	3層	(16.8)			波状文(5条)突帯(2条)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰~青灰	
73-81		須恵器	坏蓋	3層	(10.8)				外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密 1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	オリーブ灰	
73-82	51	須恵器	坏	3層	(11.8)				外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	普通	外:青灰 内:灰褐	
73-83	51	須恵器	坏	3層	(10.4)				外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	青灰	
73-84	51	須恵器	坏	3層	(11.6)	4.2			外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	密	良好	青灰	
73-85	51	須恵器	蓋	2層	(14.2)				外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰	
73-86	51	須恵器	高坏	3層			(11.2)	スカン(4方向)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	暗青灰	
73-87	52	須恵器	甕	3層					外:ナデ 内:ナデ	密	良好	暗青灰	傾きは推定
73-88	52	須恵器	甕	3層					外:タタキ 内:当て具痕?	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰	傾きは推定
73-89	52	須恵器	甕?	3層					外:タタキ 内:ナデ?	密	良好	灰	傾きは推定
73-90	52	須恵器	甕	3層					外:タタキ 内:ナデ	密	良好	青灰	傾きは推定
73-91	51	須恵器	甕	3層	(21.6)			刺突文	外:回転ナデ、カキメ 内:回転ナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	灰白	

第17表 1区出土 土師質土器・磁器・陶器・瓦質土器観察表

挿図 番号	写真 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
74-1		土師器	碗					7.0	糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
74-2		土師器	碗							外： 内：				
74-3		土師器	碗							外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
74-4		土師器	坏		2～3層			5.8	糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
74-5		土師器	坏		2層			5.4	糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
74-6		土師器	坏		2層			6.1		外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
74-7		土師器	坏		2層			5.6	糸切り？	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
74-8		土師器	坏					5.8	糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰黄褐	
74-9		土師器	坏		2層			6.8	糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	淡黄	
74-10		土師器	坏		3層	14.4～ 15.2			糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	にぶい黄 橙	やや歪みあり
74-11		白磁	碗		2～3層	(15.4)								白磁碗Ⅶ類？
74-12	53	白磁	碗		3層			(5.6～ 6.4)	施釉 体部下半は露体					白磁碗Ⅳ類
74-13	53	白磁	碗		2層			5.4～ 6.0	内面見込み環状に 釉はぎ 露体					白磁碗Ⅶ類
74-14		白磁	碗		2層				内面見込み環状に 釉はぎ 露体					白磁碗Ⅶ類
74-15	53	青磁	皿		2層	(10.4)	2.0	(5.0)	底部露体					同安窯系
74-16	53	青磁	皿		2～3層			3.7	内面にヘラ・櫛描 き文様、施釉					同安窯系？
74-17	53	青磁	碗			(15.6)			外面には鑄連弁文 施釉					龍泉窯系
74-18		陶器	皿		3層									朝鮮王朝？
75-19		陶器	壺		2層	(12.0)			鉄釉	外： 内：				中国製？
75-20		陶器	鉢		2層	(12.2)			内面に楯目 鉄釉	外： 内：				
75-21	54	陶器	甕		2層					外：粗いナデ 内：				備前？
75-22	54	陶器	甕？		2層					外： 内：ヨコナデ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	にぶい赤 褐	傾き、天地と も推定
75-23	54	陶器	鉢？		2～3層					外：粗いナデ？ 内：ナデ？	小石を含む			内面に使用痕 あり
75-24	54	陶器	播鉢		2～3層				内面に楯目（6条）	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	褐灰	備前
75-25	54	陶器	播鉢		3層					外：粗いナデ 内：				備前
75-26	54	陶器	壺 または 甕		2層					外：ナデ 内：ハケメ？	白色系の砂粒 を含む	良	灰黄褐～ 暗褐	
75-27		陶器	碗？					5.0 前後	鉄釉	外： 内：				
75-28	54	陶器	鉢？		2～3層					外：ヨコナデ？ 内：	1～2mm程度 の砂粒を含む			
75-29	54	陶器	鉢？		2～3層			(12.2)		外：ナデ 内：ナデ	精良	良好	にぶい黄 橙	
75-30	54	瓦質土器？	鉢		2層	(28.8)				外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	淡灰	
75-31		瓦質土器	足鍋		2層	現存長 8.0	最大幅 2.0			指頭痕		良好	浅黄橙	

第18表 2A区 建物跡1 (2A-SB1) 出土遺物観察表

挿図 番号	写真 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
78-1	58	須恵器	坏	SB1			8.2	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰		

第19表 2A区 出土遺物観察表

挿図 番号	写真 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
80-1		弥生土器	壺?		3層			縦方向の直線文 無軸羽状文	外：ナデ? 内：ナデ?	1~3mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	橙	径、傾きとも に推定	
80-2		弥生土器	壺?					直線文(2条) 無軸羽状文	外：ナデ 内：ナデ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	橙	径、傾きとも に推定	
80-3		弥生土器	壺?					直線文 無軸羽状文	外：ナデ? 内：ナデ?	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	明赤褐	径、傾きとも に推定	
80-4		弥生土器	壺?					外面に段	外：ナデ 内：ナデ?	1mm程度の砂 粒を多く含む	良好	橙		
80-5		弥生土器	甕?					へら描きによる直 線文(1条)	外：ハケメ 内：ハケメ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	径、傾きとも に推定	
80-6		弥生土器	壺?					櫛状工具による波状文 櫛状工具による直線文	外：ナデ? 内：風化により不明瞭	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	淡黄	傾きは推定	
80-7		弥生土器	甕					直線文(7条) 円形刺突文	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ、ハケ メ後ナデ	2mm程度の砂 粒を含む	良好	にぶい黄 橙	径、傾きとも に推定	
80-8	55	弥生土器	(底部)		3層		9.8	底部は高台状	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙		
80-9		弥生土器	(底部)				(7.0)	底部上げ底	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	褐~ にぶい黄 橙		
80-10		弥生土器	(底部)				(6.4)	底部は楕円形	外：ナデ 内：ナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙		
80-11		弥生土器	(底部)				2.8		外：ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	灰黄~ 黄灰		
80-12		弥生土器	壺		3層	(13.2)		口縁端部に沈線状 の窪みを有し、そ の上側に刻み目	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	橙		
80-13		弥生土器	壺			(19.2)		口縁部内面に竹管文 口縁部外面に無軸 羽状文状の刻み目	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	2mm程度の砂 粒を含む	良好	橙~黄橙		
80-14	55	弥生土器	壺			(19.0)		頸部に有刻突帯	外：ナデ(指頭痕)、 ミガキ 内：ナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	褐		
80-15		弥生土器	壺			(20.6)		口縁部に斜格子文 頸部にへら状工具 による沈線?	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	橙		
80-16		弥生土器	壺			(20.0)		口縁部に斜格子文	外：ナデ 内：ナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙		
80-17	55	弥生土器	壺		3層	(24.4)		口縁部外面に無軸 羽状文状の刻み目	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、へらミガキ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙~ にぶい黄 橙	口縁部下部は 貼り付け	
80-18	55	弥生土器	壺					頸部に2本の有刻 突帯	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	淡黄	径、傾きとも に推定	
80-19		弥生土器	壺					口縁内面上部に波 状文 口縁部に波状文	外：ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	にぶい黄 橙	径、傾きとも に推定	
81-20		弥生土器	甕					有刻突帯(刺突?)	外：ナデ、ミガキ 内：ナデ、ハケメ、ミガキ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	橙~ にぶい黄 橙	傾きは推定 天地逆の可能 性大	
81-21		弥生土器	甕		3層	(17.4)		口縁端部に平坦面	外：ナデ 内：ナデ、ハケメ	1~3mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙		
81-22		弥生土器	甕			(30.4)		口縁端部の平坦面 に刻み目	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	橙		
81-23		土師器	甕			(21.8)		複合口縁	外：ヨコナデ、一部ハケメ 内：ヨコナデ、へらケズリ	1mm程度の砂 粒を多く含む	良好	浅黄橙		
81-24	55	土師器	甕			(31.6)		複合口縁	外：ヨコナデ 内：ナデ、ハケメ	1~2mm程度 の砂粒をわず かに含む	良好	にぶい黄 橙		
81-25	55	土師器	壺			(17.0)		複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙		
81-26	55	土師器	甕		3層	(14.5)			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、へらケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
81-27	55	土師器	甕		3層	(14.8)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、へらケズリ	1~3mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
81-28	55	土師器	壺			(13.4)			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙		
81-29		土師器	甕			(12.0)			外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、へらケズリ	1~3mm程度 の砂粒をわず かに含む	良好	橙		

81-30		土師器	甗		14.0				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい橙	
81-31		土師器	甗	3層	(14.0)				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	明黄橙	
81-32	55	土師器	甗	3層	(15.4)				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ、 ヘラケズリ	1~4mm程度 の砂粒を含む	良好	黄橙	
82-33	56	土師器	甗	3層	(23.8)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-34	56	土師器	甗	3層	(19.4)				外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-35	56	土師器	甗		(26.4)				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~6mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-36		土師器	甗	3層				口縁外部に沈線	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	1~4mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-37		土師器	壺	3層	(16.0)			頸部に沈線(1条)	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	3mm程度の小 石を含む	良好	橙	
82-38		土師器	甗	3層					外:ハケメ 内:ハケメ、ナデ、 ヘラケズリ	1~3mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙	傾きは推定
82-39		土師器	甗	3層	(18.4)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-40		土師器	甗	3層	(25.6)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ?	1~9mmの小 石を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-41		土師器	甗	3層	(17.9)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?ヘラケズリ?	1~4mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
82-42	56	土師器	甗	3層	(23.4)				外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
82-43		土師器	甗?	3層	(17.8)				外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
82-44		土師器	甗	3層	(37.6)				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mmの砂 粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
83-45	56	土師器	壺		(11.8)	20.4			外:ナデ(粗い) 内:ナデ(粗い)、ヘラ ケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	黄~黄橙	全体的に粗雑 なつくり
83-46	56	土師器	甗		(12.2)	19.3			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	黄橙	
83-47	57	土師器	甗		(14.2)	22.1			外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、ヘ ラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	淡黄	
83-48	57	土師器	壺						外:ハケメ、ヘラケズリ 内:ナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度 の砂粒を含む	良好	橙	
83-49	57	土師器	壺	3層	(8.0)	11.6			外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm以下の砂 粒をわずかに 含む	やや軟	橙	
83-50		土師器	高坏		19.7				外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	にぶい黄 橙~橙	
83-51	57	土師器	高坏	3層	19.0				外:ヨコナデ、ナデ 内:ハケメ、ナデ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	にぶい黄 橙	
83-52	57	土師器	高坏	3層	15.5	10.3	11.9		外:ナデ、ハケメ 内:ナデ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙	
83-53	57	土師器	高坏	3層			13.6		外:ヨコナデ? 内:ヘラケズリ、ハケメ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙	
83-54		土師器	高坏	3層			(12.0)		外:ナデ 内:ナデ、ハケメ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	灰	1ヶ所のみ痕あ り
83-55		土師器	高坏	3層			10.8		外:ナデ 内:ナデ	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙~ 赤橙	
83-56	57	土師器	高坏	3層			12.5		外:ナデ 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂 粒をわずかに 含む	良好	橙	
84-57		須恵器	坏	3層				口縁は内傾気味に 立ち上がる	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰	径、傾きとも に推定
84-58		須恵器	蓋	3層	(13.0)	4.4			外:回転ナデ、ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	良好	灰白	
84-59	58	須恵器	坏	3層	(15.8)	4.7	10.8	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰	
84-60		須恵器	坏	3層	(13.8)	5.0	(8.6)	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-61		須恵器	坏	3層	(11.4)	3.9	(7.0)	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	密	軟	橙	
84-62		須恵器	坏				(10.6)	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良好	灰	
84-63		須恵器	坏	3層	(16.2)	4.8	(11.6)	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	

84-64		須恵器	坏	3層			(7.0)	高台を伴う	外：回転ナデ、ナデ 内：ナデ	密	良好	灰	
84-65		須恵器	坏	3層			(7.8)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：ナデ	密 3mm程度の 小石をわず かに含む	良好	灰	
84-66	58	須恵器	蓋	3層	(13.8)	2.6		ボタン状つまみ	外：回転ナデ、ナデ、ヘ ラケズリ 内：回転ナデ、ナデ	3~5mm程度 の砂粒をわず かに含む	良好	灰	
84-67		須恵器	蓋?	3層	(14.8)	(2.8)			外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰黄	皿の可能性あり
84-68		須恵器	蓋	3層	(14.8)	2.3		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	自然釉がかかる
84-69	58	須恵器	蓋	3層	(16.6)	1.8		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
84-70	58	須恵器	蓋	3層	(15.6)	3.0		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-71		須恵器	蓋	3層	(15.6)	2.7		輪状つまみ	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-72		須恵器	坏	3層	(13.4)	4.7			外：回転ナデ 内：回転ナデ、回転ナデ 後ナデ	密	良好	灰	
84-73		須恵器	坏?	3層	(13.6)				外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	高坏の可能性あり
84-74		須恵器	坏	3層	(11.8)				外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
84-75		須恵器	蓋	3層	(10.2)				外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-76		須恵器	蓋	3層	(13.8)				外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	軟	灰白	
84-77		須恵器	蓋		(17.2)				外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-78		須恵器	高坏?		(15.4)				外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-79		須恵器	坏	3層	(16.8)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
84-80		須恵器	壺?	3層			(12.2)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
84-81		須恵器	壺	3層			(5.7)	高台を伴う	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
84-82	58	須恵器	壺?	3層			(13.0)		外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ、ヘラ痕	密	良好	黄灰~灰	
84-83	58	須恵器	高坏	3層	(10.6)	6.4	6.6		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
84-84		須恵器	高坏				(8.8)		外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	やや軟	灰白	
85-85		須恵器	壺?	3層					外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-86		須恵器	壺?	3層					外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-87		須恵器	壺	3層	(9.8)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定 外部に蓋痕
85-88		須恵器	鉢	3層	(10.5)				外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-89		須恵器	鉢	3層	(17.4)				外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良好	灰	
85-90		須恵器	鉢	3層	(13.0)				外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
85-91		須恵器	壺	3層	(17.2)				外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	
85-92		須恵器	甕	3層	(20.4)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-93		須恵器	甕					波状紋 沈線 (1条以上)	外： 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-94		須恵器	甕?						外：回転ナデ、カキメ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-95		須恵器	壺?					刺突文 沈線 (3条)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-96		須恵器	壺?	3層					外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定
85-97	58	須恵器	甕		(19.6)				外：回転ナデ、タタキ 内：回転ナデ、タタキ	密	軟	灰白	

86-98	57	土師器	器台	3層	7.8	7.1	9.6	脚部に円形スカシ(3方向)	外:ナデ、ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙	
86-99		土師器	低脚坏	3層			(10.0)		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
86-100		土師器			4.4	4.0	2.6		外:粗いナデ、指頭圧痕 内:	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい黄橙	手づくね成形
86-101		土師器	カマド	3層					外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙~橙	傾きは推定
86-102		土師器	坏		(18.4)	4.5	(12.2)	内面には暗文	外:ナデ、ミガキ 内:ナデ、ミガキ	1mm以下の砂粒を含む	良好	明赤褐	
86-103		土師器	紡錘車	3層	最大高 2.2	径(上) 2.8	径(下) 4.6		外: 内:	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
86-104		瓦質土器	罽鉢		(30.0)			内面には罽目	外:粗いナデ 内:ナデ、ハケメ	1~2mm程度の砂粒を含む	普通	灰	
86-105		陶器	甕					口縁端部は約1.2cmの平坦面	外:ケズリ後粗いナデ 内:ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好	灰	径、傾きともに推定
86-106		土師器	土鍾	3層	現存長 3.9	最大幅 2.3	最大径 0.7		外: 内:		良好	黄橙	
86-107		土師器	坏				(5.6)	糸切り	外:回転ナデ 内:回転ナデ	精良	良好	灰白~浅黄橙	

第20表 2C区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
88-1	59	須恵器	蓋		2層				ボタン状つまみ 外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻			
88-2	59	須恵器	蓋		2層				輪状つまみ 外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻			
88-3	59	須恵器	蓋		3層				輪状つまみ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	堅緻			
88-4	59	須恵器	坏		3層		(9.0)	高台を伴う	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻			
88-5	59	須恵器	坏		3層		(10.7)	体部は途中で屈曲	外:回転ナデ、ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	堅緻			
88-6	60	土師器	甕		3層	13.8			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	3mm程度の砂粒を含む	良好			
88-7	60	土師器	甕		3層	13.4			外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良好			
88-8		土師器	高坏		3層	17.4			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	2mm程度の砂粒を含む	良好			
88-9	59	弥生土器	壺		3層			口縁内部に山形文 口縁端部に沈線、刻目	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良好	淡黄	径は推定	
88-10	59	弥生土器	壺?甕?		3層			有刻突帯(4条)	外:ナデ 内:風化により不明瞭	1~2mm程度の砂粒を含む	良好			
88-11		弥生土器	(底部)		3層		(6.4)		外:風化により不明瞭 内:風化により不明瞭	2mm程度の砂粒を含む	良好			
88-12	59	弥生土器	甕		5層	(22.6)		口縁部に凹線(2条)	外:ナデ 内:風化により不明瞭	3mm程度の砂粒を多く含む	良好			
88-13	60	弥生土器	(底部)		5層		5.6		外:ナデ? 内:ナデ?	3mm程度の砂粒を含む	良好			

第21表 2F区 土器溜り1・2(2F-D1, 2F-D2) 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
93-1		土師器	高坏	D1	6層	17.5			外:ヨコナデ、一部ヘラケズリ 内:ヨコナデ	2~3mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	坏部のみ	
93-2	61	土師器	器台(小型)	D1	6層		8.8	受部から脚部にかけて穿孔	外:風化により不明瞭 内:	1~3mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	脚部のみ	
93-3	61	土師器	鉢(台付)	D1	6層		(6.4)		外:ハケメ 内:ナデ?、一部にハケメ	1mm程度の砂粒を多量に含む	良好	橙		
93-4	61	土師器	鉢	D1	6層	11.4	5.6		外:ハケメ 内:ハケメ後ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良	橙		
93-5	61	土師器	壺	D1	6層	14.4		口縁部は外反気味に立ち上がる	外:ハケメ、ナデ? 内:ヘラケズリ、ナデ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙		
93-6		土師器	壺	D2	6層	11.0	8.2		外:ヨコナデ、ハケメ? 内:ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙	ほぼ完形	
93-7	61	土師器	壺	D2	6層	(10.8)	8.6		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	良	橙		

93-8	62	土師器	壺	D2	6層	8.8	9.9			外：ハケメ後ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ 内：ヘラケズリ後ナデ、一部風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙	
93-9	61	土師器	鉢	D2	6層	10.4	7.4			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙	
93-10		土師器	壺	D2	6層	7.4	7.3			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙	
93-11	62	土師器	器台(鼓形)	D2	6層	(17.5)	9.4	16.2		外：ハケメ、ヨコナデ 内：ハケメ、ナデ、ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙	
93-12		土師器	器台	D2	6層			10.4		外：風化により不明瞭 内：ナデ(一部ハケメあり)、ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙	
93-13		土師器	甕	D2	6層	13.0				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良好	橙	
93-14	62	土師器	低脚坏	D2	6層	13.2	6.2	6.8		外：ハケメ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ハケメ	2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
93-15	62	土師器	高坏	D2	6層	18.0	12.3	9.8		外：ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内：ハケメ、ナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
93-16	62	土師器	壺	D2	6層	(13.8)	16.5			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ(一部ハケメあり)、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
94-17		土師器	壺	D2	6層	(11.8)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ(一部ハケメあり)、ヘラケズリ、ナデ	3～5mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
94-18		土師器	甕	D2	6層	(14.0)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヘラケズリ?	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	良好	橙	
94-19		土師器	甕	D2	6層	(12.4)				外：ハケメ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラケズリ後ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
94-20		土師器	甕	D2	6層	(15.2)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕	1mm程度の砂粒を含む	やや軟	にぶい黄橙	
94-21	61	土師器	甕	D2	6層	(14.0)	19.4			外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ? 内：ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙	
94-22	61	土師器	甕	D2	6層	(15.2)	23.7			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ後ナデ?	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	

第22表 2F区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
95-1		土師器	紡錘形土鍾		2層	現存長 5.15	最大幅 1.2	最大厚 1.2		外： 内：	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	黄灰	
95-2		土師器	紡錘形土鍾		3層	現存長 3.8	最大幅 1.35	最大厚 1.45		外： 内：	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	やや軟	橙	
95-3		須恵器	蓋		3層	15.0	2.5		輪状つまみ	外：回転ナデ、回転ナデ後ナデ 内：回転ナデ、回転ナデ後ナデ	密	良好	灰	
95-4		須恵器	坏		3層			(6.8)	高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、回転ナデ後ナデ	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	灰	
95-5		須恵器	蓋		3層	(25.8)				外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、回転ナデ後ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰	
95-6	65	土師器	壺		4層	(26.0)			複合口縁 口縁の外面に擬凹線文(11条)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ?	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙	
95-7	65	土師器	壺		4層	(23.0)			複合口縁	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1mm以下の細かい砂粒を含む	良好	浅黄橙	
95-8		弥生土器(底部)	壺?		4層			(12.0)		外：ナデ? 内：風化により不明瞭	2～3mmの砂粒を多量に含む	良好	にぶい黄橙	
95-9	63	土師器			4層	5.3	6.7			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙	手づくね成形
95-10	65	土師器	甕		4層				肩部に直径約8mmの竹管文	外：ナデ? 内：ヘラケズリ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	傾きは推定
95-11	65	土師器	低脚坏		4層					外：ナデ? 内：風化により不明瞭(ナデ?)	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良好	にぶい黄橙	
95-12	63	土師器	甕		4層	11.6				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ	3～5mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	
95-13	65	土師器	甕		4層	(16.4)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	密 1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	橙	
95-14	65	土師器	甕		4層	(15.2)				外：ヨコナデ(一部ハケメあり) 内：ハケメ、ヘラケズリ	2～3mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	浅黄橙	
95-15	65	土師器	甕		4層	(14.0)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ(指頭圧痕)、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
95-16	65	土師器	高坏		4層	(16.0)				外：ヨコナデ(一部ハケメあり) 内：ヨコナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙	

95-17	63	土師器	高坏	4層			11.0		外：ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
95-18	63	土師器	高坏	4層	12.7				外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：ナデ（一部ハケメあり）、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	やや軟	橙	
95-19		土師器	高坏	4層					外：ハケメ、フジ目か？ 内：ヘラケズリ、ヨコナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙	
95-20	63	土師器	高坏	4層			9.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	密 1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	黄橙	
95-21		須恵器	坏	4層	17.6			外面に沈線（3条）	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰黄	
96-22	64	土師器	壺	5層	13.8	10.4			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良好	浅黄橙	
96-23		土師器	壺	5層	(9.2)	7.5			外：風化により不明瞭 内：風化により不明瞭（一部ヘラケズリか？）	1mm程度の砂粒を少量含む	やや軟	橙	
96-24		土師器	鉢	5層	13.0	7.2			外：ヨコナデ、ハケメ？ 内：風化により不明瞭	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	浅黄橙	
96-25		土師器		5層	9.6	6.1			外：ナデ 内：ナデ、強いナデ、指頭圧痕	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙	手づくね成形
96-26		土師器	器台（小型）	5層	7.6	7.2	9.4		外：風化により不明瞭 内：ナデ、ハケメ	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良好	黄橙	
96-27		土師器	高坏	5層			(10.4)		外：ハケメ、（一部風化により不明瞭） 内：ヘラケズリ、ナデ	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	橙	
96-28	63	土師器	高坏	5層			13.0		外：ハケメ 内：ハケメ、ナデ	3～5mm程度の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙	
96-29		土師器	甕	5層	(14.8)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	やや軟	浅黄橙	
96-30	64	土師器	壺	5層					外：ハケメ、ナデ 内：ハケメ、ナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む（2～3mmのもの数個含む）	良好	橙	
96-31	64	土師器	壺	5層	(16.2)	31.5			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	黄橙	
97-32	64	土師器	壺	6層					外：ナデ、ハケメ 内：ナデ（指頭痕）、ケメ	密 1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい赤褐	傾きは推定
97-33	64	土師器	壺	6層	17.2				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	黄橙	
97-34	63	土師器	高坏	6層	22.0				外：ヘラミガキ、ハケメ 内：ヘラミガキ、ハケメ	1～3mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	橙	
97-35	64	土師器	壺	6層	20.0	38.0			外：ヨコナデ、ハケメ 内：風化により不明瞭	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	良好	橙	

第23表 2G区 出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
99-1		陶器	皿	SK01	1層			3.1	高台及び高台内面は露本			良好	灰白	内面見込みには目跡
99-2		磁器	碗		1層			(4.6)	内面見込みは環状に軸はぎ			良好	白	
99-3		陶器	香炉？	T-1	1層	(11.6)		(6.0)				良好		
99-4		陶器	皿	T-1	1層	13.8	4.0	6.5	高台及び高台内面は露本			良好		
99-5		陶器	甕鉢					(13.6)				良好		
99-6		土師器	甕			(14.2)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	黄灰		
99-7		土師器	甕		3層	(14.6)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	黄灰		
99-8	60	土師器	甕		3層	16.4			退化した複合口縁 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙		
99-9	60	土師器	壺		3層	11.1			外：ヨコナデ 内：ハケメ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良好	橙		
99-10		土師器	壺	T-1		(16.3)			口縁部外面上方に波状文 外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	灰白		
99-11		土師器	高坏		2層				坏部から脚部は貫孔？ 円形スキャン(4方向) 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙		
99-12		土師器	高坏		3層			12.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	黄橙		
99-13		須恵器	坏					9.6	高台を伴う 外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白		

99-14		弥生土器	(底部)		3層			(6.8)		外：ナデ？ 内：ナデ？	1～2mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	にぶい黄 橙	
100-15	59	土師器	甕		5層	(14.6)				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度 の砂粒を含む	良好	にぶい黄 橙	
100-16		土師器	甕		5層	(11.8)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂 粒を多く含む	良好	にぶい黄 橙	
100-17	59	土師器	甕		5層	(19.2)			複合口縁 口縁端部は6mm程 度の平坦面	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂 粒を含む	良好	浅黄橙	
100-18	59	土師器	壺		5層	19.2			複合口縁	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	1～3mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	浅黄橙	
100-19		土師器	(底部)		5層			(4.4)		外：ハケメ 内：風化により不明瞭	1～2mm程度 の砂粒を多く 含む	良好	淡黄橙～ 橙	
100-20	60	土師器	壺		5層	15.2			口縁端部は平坦面	外：ヨコナデ一部ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ？	1～2mm程度 の砂粒を含む	良好	淡黄～ 浅黄	
100-21	60	土師器	壺？		5層				突帯文 波状文及び平行線 文	外：ハケメ 内：風化により不明瞭	密 1mm程度 の砂粒を含む	良好	橙	径、傾きとも に推定

第8章 まとめ

平成14年度から開始した浜寄・地方遺跡の調査においては、これまでに報告してきたとおり水田跡をはじめ多くの遺構・遺物を確認することができた。以下、主に1区を中心に今回の調査で明らかになった点をまとめ、若干の考察を行いたい。

1. 1区における各層の状況について

1区の調査では、基本2層・基本3層・基本5層の3面において遺構・遺物の検出を行い、その結果多数の遺物や建物跡、土器溜りなどを確認することができた。ここではそれらを基に、それぞれの層におけるおよその年代及び様相を検討することとしたい。

基本2層

基本2層は、奈良・平安時代～中世前半と判断される遺物を比較的多く含んでおり、そうした時期に形成された層と考えられる。しかしながら今回の調査では、いずれの調査区からも顕著な遺構は確認されておらず、建物などの存在を想定することはできなかった。

この層は、地質学的には氾濫流由来の層であり、付近一帯が幾度となく冠水する状況で形成されたと考えられている。⁽¹⁾ したがって、当時の環境は湿地であった可能性が高く、居住域には適さなかったと考えられることから、それが結果として表れているのであろう。

但し、今回の調査で水路跡の可能性の考えられるものが確認されており、水田耕作等への利用、つまり生産域として利用されていたことは十分考えられる。

基本3層

基本3層は、弥生時代中期後半代の遺物を一定量含むことから、そうした時期から形成され始めたと判断できる層である。ただ、遺物の多数を占めるのは古墳時代であることから、3層の中心となるのは古墳時代のことと考えられる。

この層では建物跡などが確認されており、居住域等として利用されていたことを窺わせる結果を得ることができた。調査時に実施した花粉分析の結果からは、この層が荒地状となっていた可能性が指摘されており、基本3層の時代には湿地状ではなく安定的な地盤となっていたと考えられる。⁽²⁾ 建物と考えられるもののうち、時期の推測が出来るものは弥生時代後期のものと古墳時代前期のものであり、少なくともこの時期には建物が存在しうるだけの条件が地形的に整っていたものと推測される。

ところで、3層からは1C・1D・1F区において、古墳時代中期頃と考えられる土器溜りが少なくとも5箇所確認されている。それらは手づくね土器が多数あることや10～20cm大の礫を伴うなどの特徴があり、祭祀的行為の跡であることを窺わせている。

中期になってこのような土器溜りが集中的に見られるのには何らかの理由があると考えられるが、これらの調査区において古墳時代中期以降の遺物が急激に減少する傾向にあることと無関係ではないであろう。プラント・オパールや地質学的検討の結果などをもとにすれば、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて比較的安定していたこの付近が、乾湿を繰り返すような場所へと変化していったと考えられることから、そうした地形の変化に関わる祭祀である可能性も考えられよう。

基本5層

基本5層は、これに直接伴う遺物が出土していないため、時期についてははっきりとしない。したがって傍証から推測するしかないが、ここでは基本4層及び基本3層の年代から検討することとする。

先に述べたように、基本5層は洪水に由来すると考えられる基本4層に覆われ、さらにその上に基本3層が堆積している。基本3層の年代については、弥生時代中期のものが出土する遺物の中で最も古い時期を示しており、そこから弥生時代中期以降と考えられる層である。これから判断すれば基本5層は弥生時代中期以前と考えることが可能であろう。こうした推測は¹⁴C年代で得られた結果とも矛盾はない。

基本5層上面では、水田跡や溝状遺構、畦畔状遺構などが確認されており、生産域として利用されていたことを窺わせている。プラント・オパール分析や花粉分析の結果からも水田耕作が行われていたと推測できる結果を得ており、それはほぼ間違いないものと考えられる。

ところで、基本5層の上面に造られ砂層に覆われていた水田跡と、これと平行に伸び伴う可能性の高い畦畔状遺構については、中期またはそれ以前と判断して問題はないと考えられるが、同じく基本5層上面から検出された溝状遺構については若干検討の余地があろう。溝状遺構は全部で3条が確認されているが、これらを詳しく見ると、1C区溝状遺構2から弥生時代後期と考えられる遺物が出土し、その軸も水田跡とは明らかに異なっている点、1F区溝状遺構が同じく1F区で検出され水田跡に伴うと判断される畦畔状遺構を切り明らかにこれよりも後出することを示している点、そしてさらに、これらの埋土が3層に類似しており、3層の段階に存在していた可能性が高い点など、水田跡には直接伴わない可能性の方が高いと考えられる状況がある。

したがって、これらは同時期に存在したのではなく、時期を違えて存在していたものと考えられる。

2. 各時代の様相について

ここでは、今回の調査で得られた情報をもとに各時代の様相について概観したい。

縄文時代

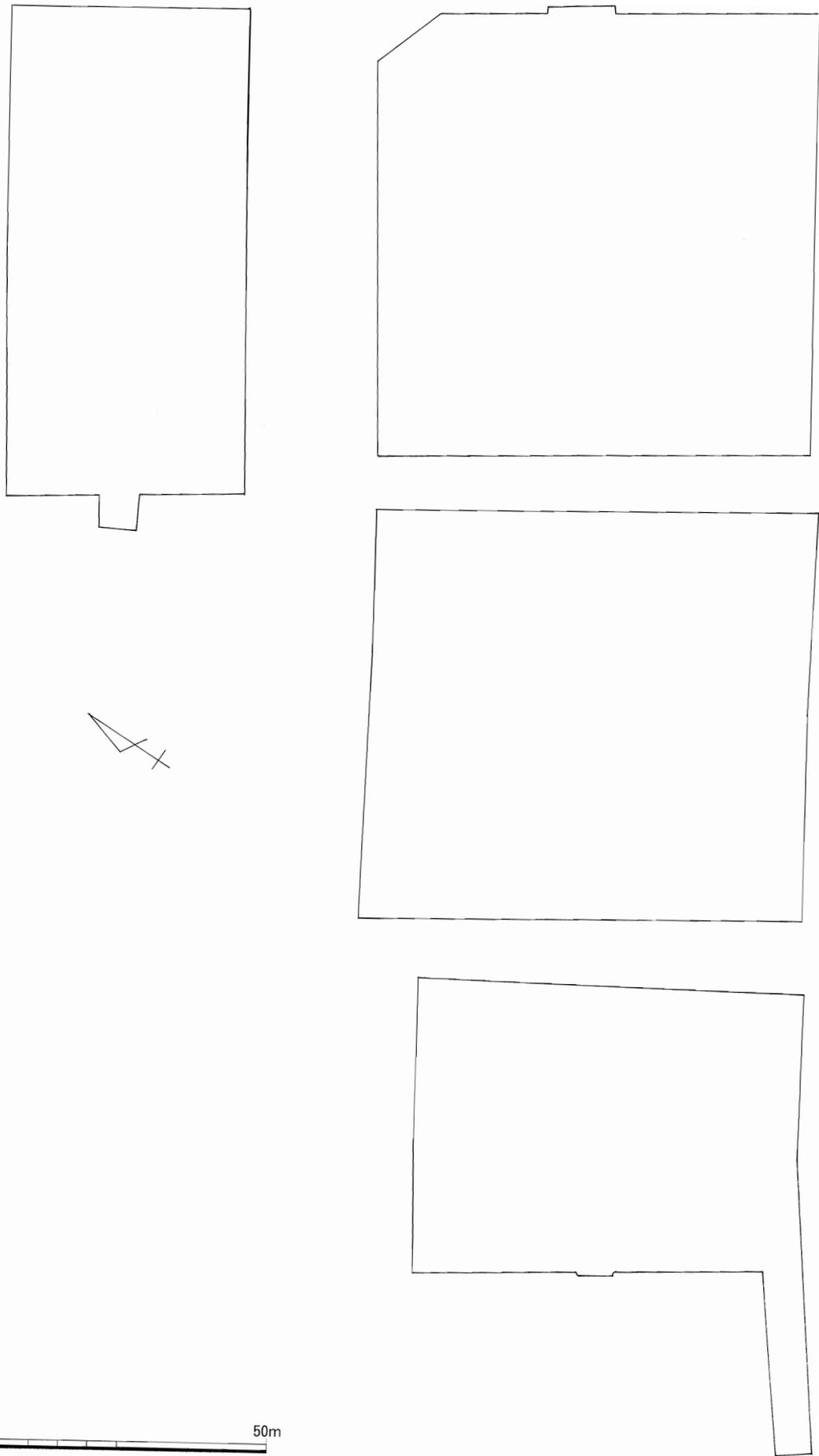
今回調査を行った範囲からは縄文時代のものと考えられる遺構・遺物は確認されていない。平成13年度に実施された益田市教育委員会調査区においても1点ほど出土している以外、ほかには出土していない。こうした状況は、第7章において提示されているように、今回調査した付近（特に1区）が内湾～干潟であったという環境が大きく影響しているものと考えられる。周辺においても縄文時代の遺跡は確認されておらず、現状では人々の活動の痕跡を窺うことはできない。

弥生時代

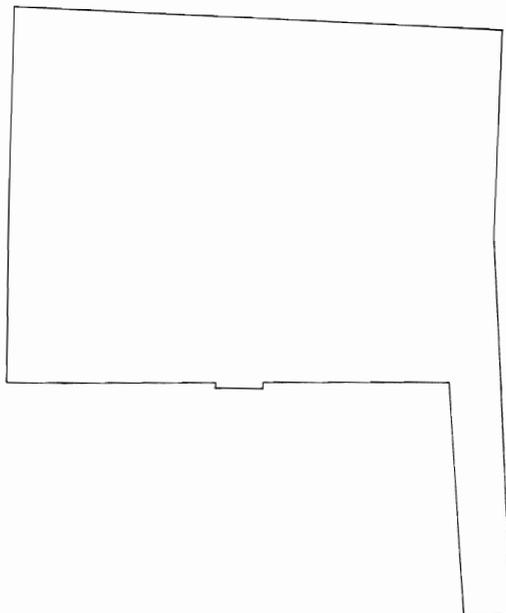
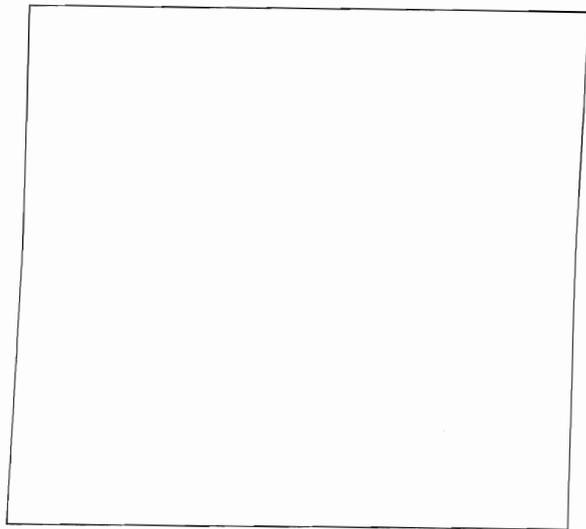
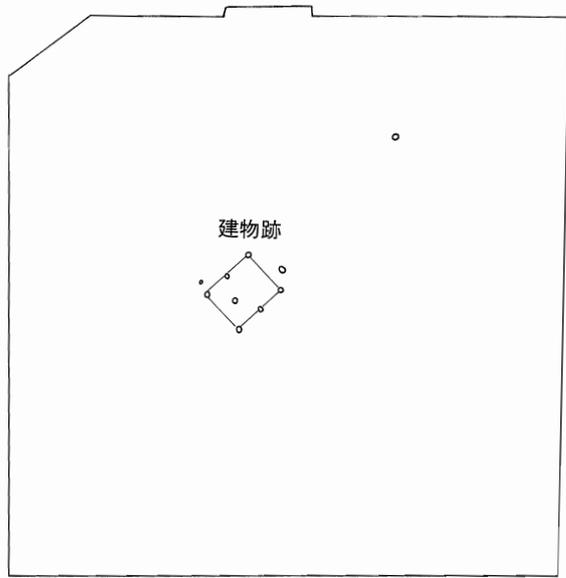
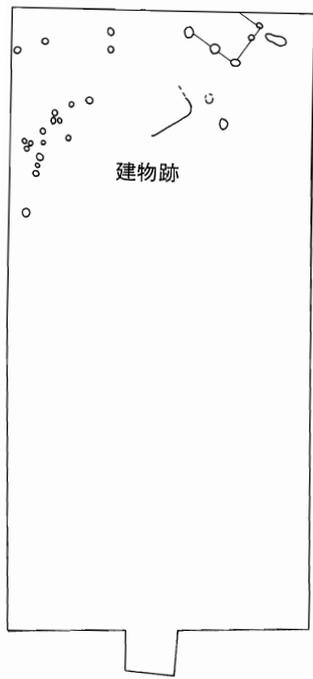
弥生時代になると水田跡をはじめ数多くの遺物が出土しており、人々の活動の痕跡が縄文時代よりも積極的に認められるようになる。

地形の形成からみると、少なくとも弥生時代には現在と同じように低湿地となっていると考えられており、人々が生活する環境（水田耕作を行うのに適した環境）が整いつつあったことが窺われる。

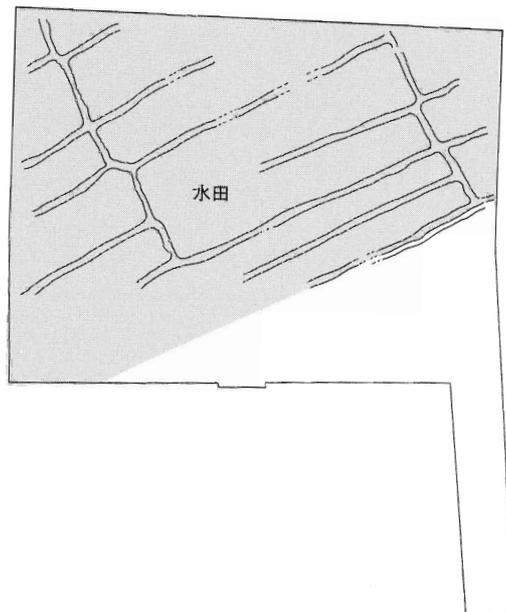
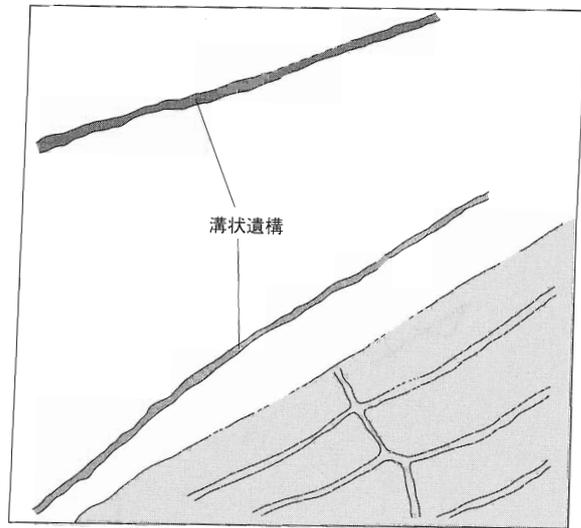
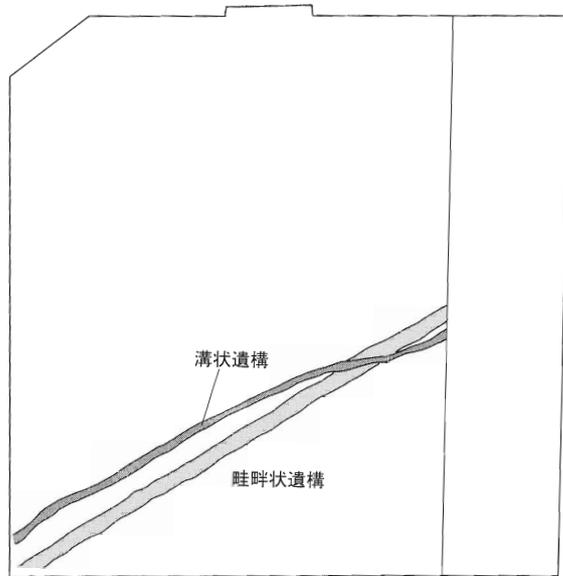
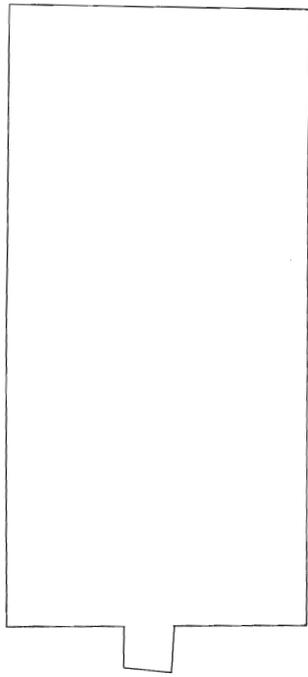
量的にはそれほど多くないが、前期と考えられる土器が出土していることからすると、弥生時代



第118図 1区(1B, 1C, 1D, 1F) 2層遺構状況図 (S=1/1,000)



第119図 1区(1B, 1C, 1D, 1F) 3層中・4層上面検出遺構 (S=1/1,000)



第120図 1区(1B, 1C, 1D, 1F) 5層上面検出遺構 (S=1/1,000)

でも早い時期から浜寄・地方周辺に人々が生活し始めたものと判断できる。前期と考えられる土器は、いずれも洪水によると考えられる堆積層の中からの出土であるため不確定な部分も多いが、付近に集落が存在するのは確実であろう。以後、出土量はそれほど多くないものの後期に至るまでの遺物が出土しており、この時代を通じて集落が形成されていたものと考えられる。今回の調査では建物跡はその可能性のあるもの1基が確認されたのみであるが、周辺のどこかに存在することは確実であると判断でき、その場所として微高地となる遺跡北側や南東側を指摘しておきたい。

周辺には弥生時代の遺跡としてサガリ遺跡、松ヶ丘遺跡などが存在しており、これらを含めて高津地域における弥生時代の集落の様相の解明が今後の課題であろう。

古墳時代

古墳時代の遺物は多量に出土しており、全体の約8割を占めている。特に前期から中期にかけての土器類が圧倒的に多く、この時代に飛躍的に発展をとげたことを窺わせている。益田平野周辺では多くの古墳が築造されているが、この基盤となる集落の存在はこれまで明らかでなく、またこの時期の遺物の様相についても明らかでなかったことからすると貴重な資料が蓄積されたと言える。この時期の遺構としては建物跡1棟が確認されたのみであるが、遺物の量からすれば少なく、弥生時代同様周辺に集落域があると考えられる。

しかしながら、古墳時代後期になると1区・2区ともに遺物が急激に減少する傾向にあり、なんらかの変化があったことを窺わせている。こうした集落の消長がどのような背景によるものなのか、今後検討していかなければならないであろう。

ところで、今回の調査で明らかになったことから派生する課題として、益田平野における古墳の分布を挙げておく。益田市における古墳の分布状況を見ると、主に益田平野の東側～南側にかけての益田川流域に存在していることが分かる。それより西側にあたる高津側流域では、やや上流にさかのぼった白上古墳しか確認されておらず、古墳の空白域となっている。

今回の調査では古墳時代前期～中期にかけての多量の遺物が出土し、この付近に規模の大きな集落の存在が想定されるが、こうした状況から判断すると検討の余地の残るものと考えられる。近年高津地域では初めての横穴墓が確認され、この地域にほかにも古墳が存在することが考えられるようになってきている。現時点ではそれ以外は明らかになっていないが、古墳時代以降数mにもわたって砂に覆われている現状からは、それらに埋もれてしまっている可能性も考えられよう。

奈良・平安時代

奈良時代～平安時代にかけての遺物は、基本的に2区側を中心に出土している。また、この時代のものと判断される建物も2A区において検出されており、こちら側で集落が展開した状況を示している。こうした状況は1区側に水田が営まれ2区側に集落域が存在する現在の状況とほぼ一致していると言え、現在の土地利用の初現を探る上で興味深い事実と言える。

ところで周辺では、奈良時代から平安時代にかけての遺跡として大溢遺跡・サガリ遺跡などが知られているが、これらはほぼ同時期のものであることが調査の結果明らかとなっている。益田市周辺ではこの時期の遺跡がほとんど知られておらず、また文献的資料もほとんど残っていないため、この時代の実態についてはほとんど明らかとなっていない。今回の調査によりこの地域における資料の蓄積がわずかではあるが進んだことは、今後の研究を進めていく上での貴重な成果と言えるであろう。

鎌倉・室町時代

鎌倉時代～室町時代の遺物はわずかではあるが出土している。今回の調査では建物跡等は確認されなかったが、出土遺物からは中世前期が多い傾向が窺え、その時期の集落が周辺に存在するものと考えられる。

近年の調査からは、平安時代末期～鎌倉時代にかけて益田平野周辺の開発が積極的に行われたことが明らかとなりつつあり、浜寄・地方遺跡においても一定量の遺物が確認されたことは、この付近でも同様の状況があったことを示唆するものと考えられる。

この地域は平安時代末に成立した長野荘域にあたるが、これについても資料が少なく実態については明らかでない。それらを含めての今後の解明が期待される。

註

(1)中村唯史氏ご教示（なお、本報告書第7章参照）

(2)本報告書第7章参照

(3)調査段階では4層から出土した第16図-1も参考に、水田跡の年代（つまり5層上面の年代）を弥生時代前期にまでさかのぼる可能性があるとしたが、現状では中期かそれ以前のものである可能性があるとして訂正しておく。

(4)益田市教育委員会『益田道路関連浜寄代替地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 浜寄遺跡』2002

(5)益田市教育委員会『研石横穴』1997

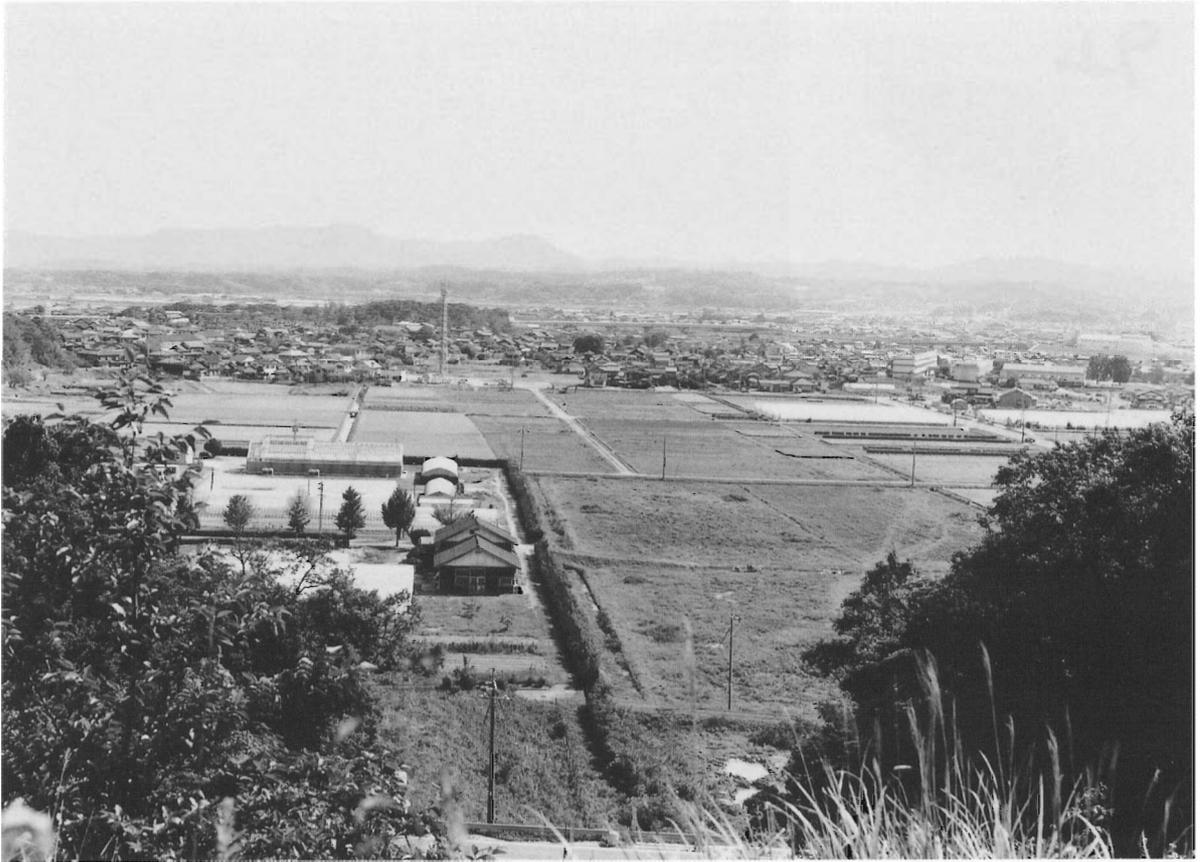
圖 版



浜寄・地方遺跡遠景（上空南から）



浜寄・地方遺跡遠景（上空東から）



浜寄・地方遺跡 調査前の風景



浜寄・地方遺跡遠景（上空西から）

1区
調査前の状況



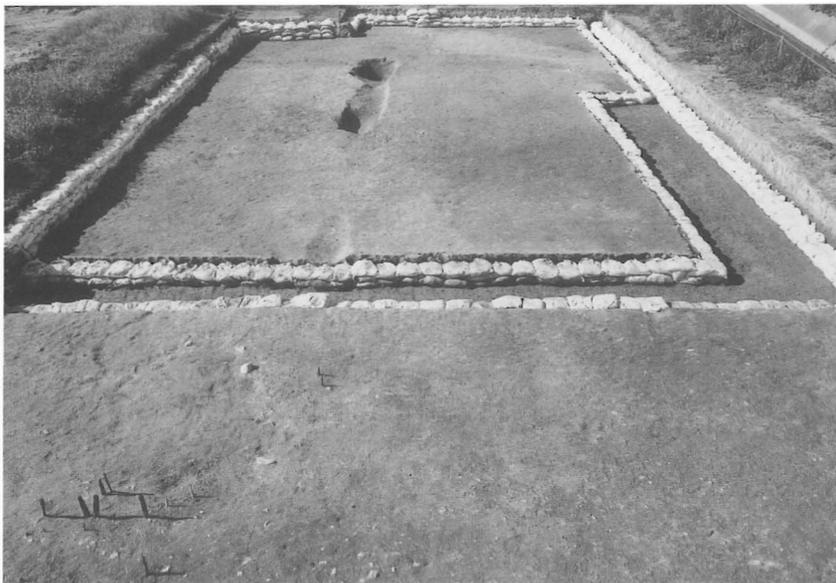
1区
調査前の状況



1A区
トレンチ



図版 4



1 A区
調査後



1 B区
トレンチ

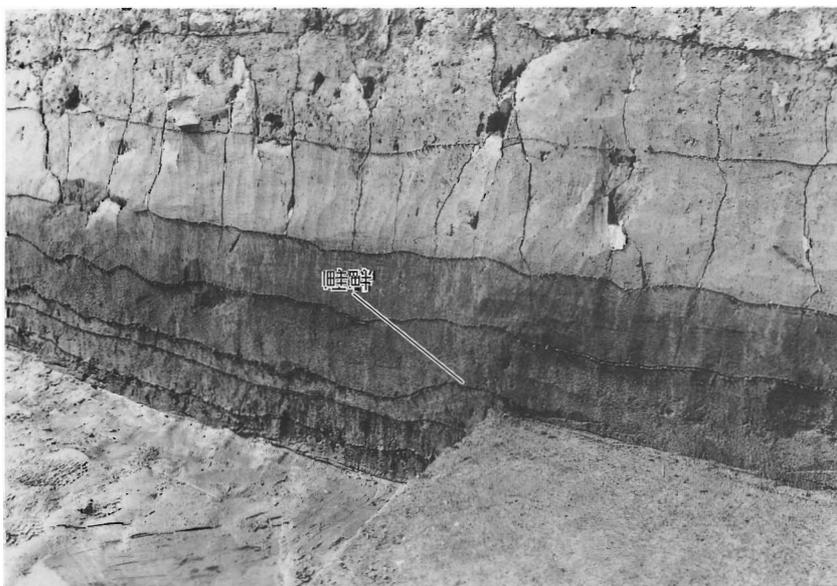


1 B区
トレンチ内 (4層)
遺物出土状況

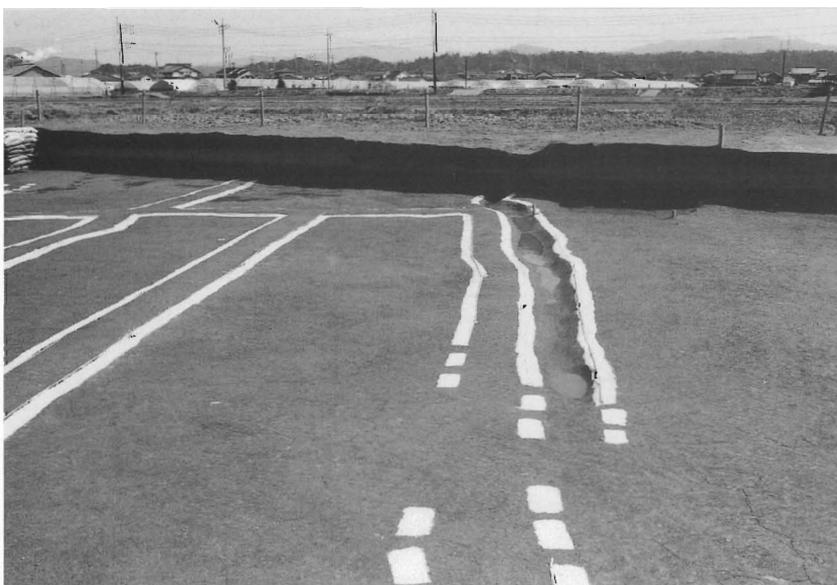
1 B区
土層



1 B区
土層
(畦畔)

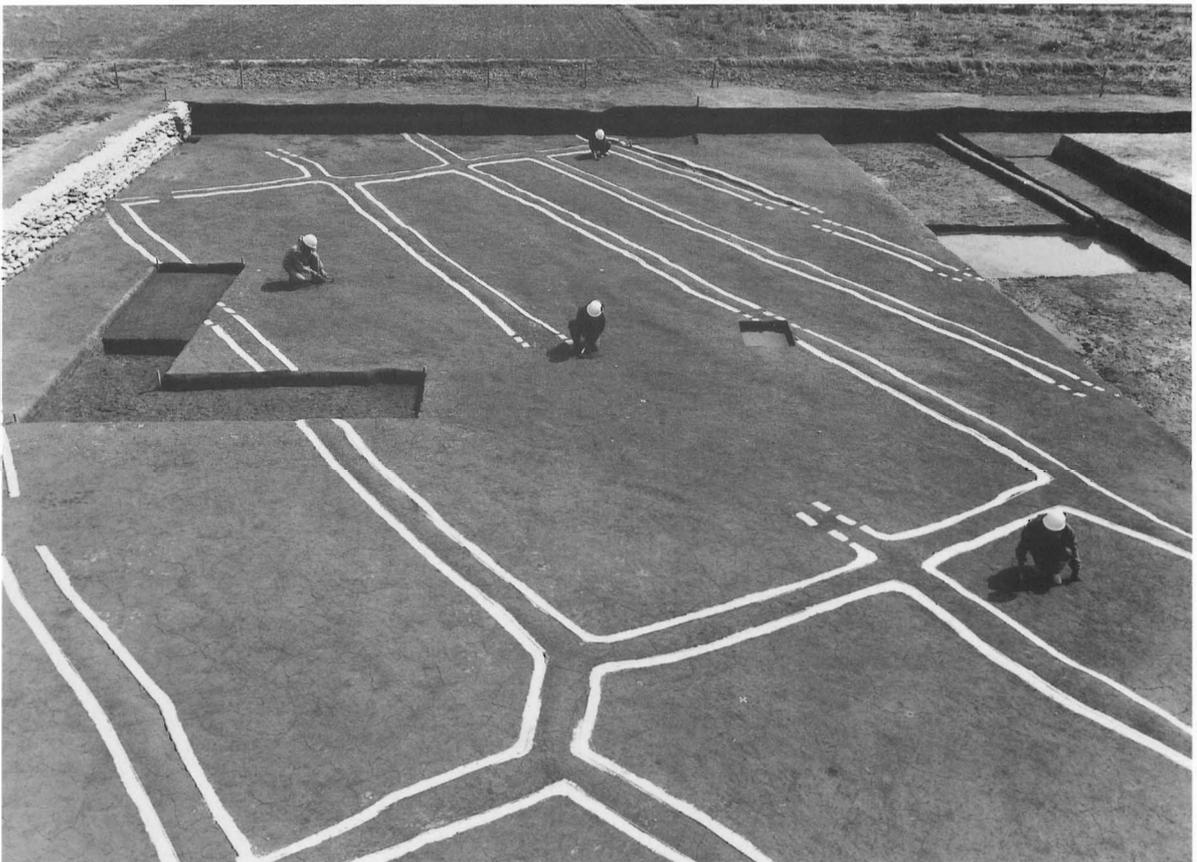


1 B区
水田跡 溝



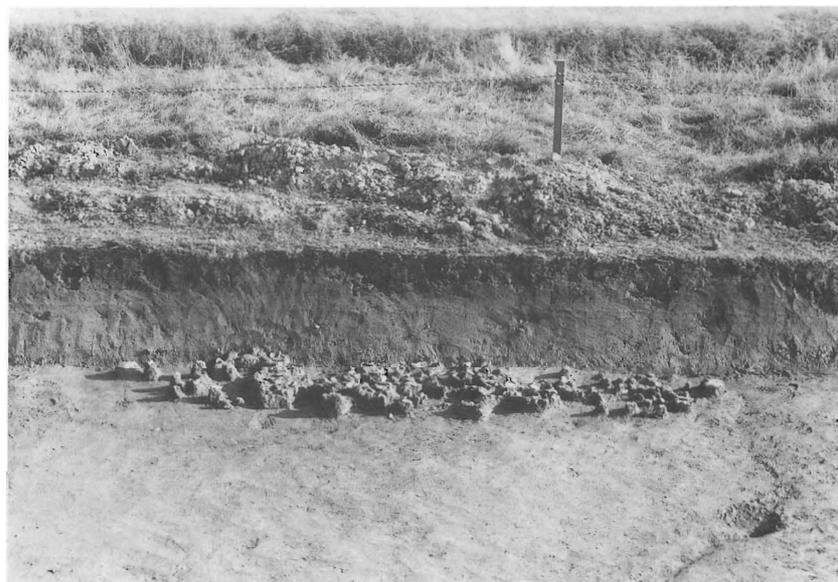


1 B区 水田跡 畦畔検出状況



1 B区 水田跡

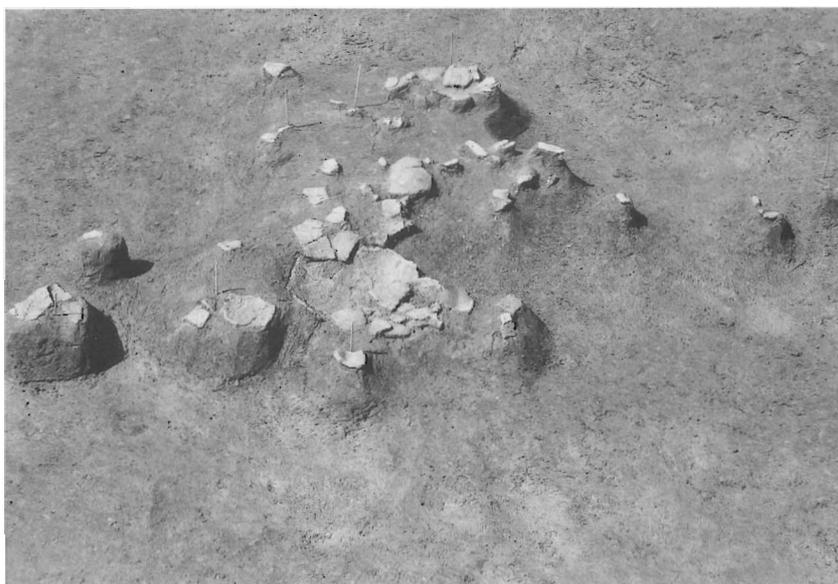
1 C 区
土器溜り 1
(1 C-D 1)



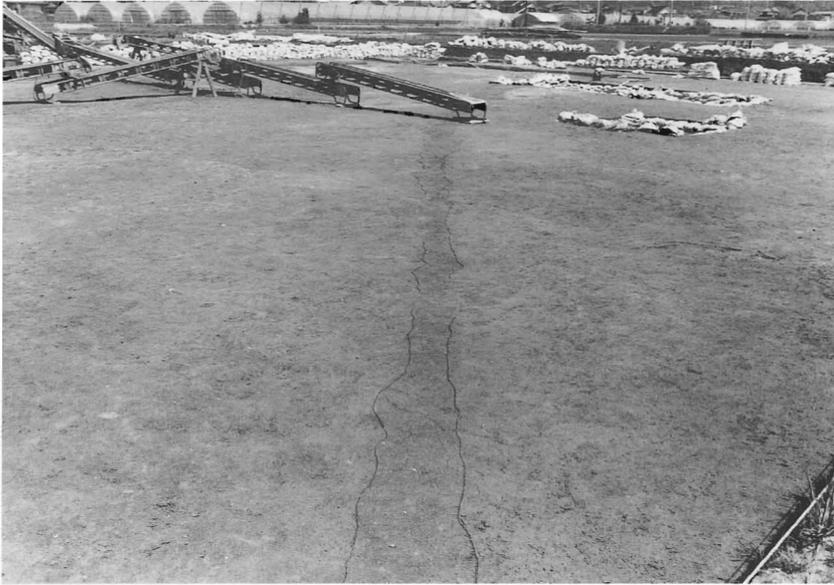
1 C 区
土器溜り 2
(1 C-D 2)



1 C 区
土器溜り 3
(1 C-D 5)



図版 8



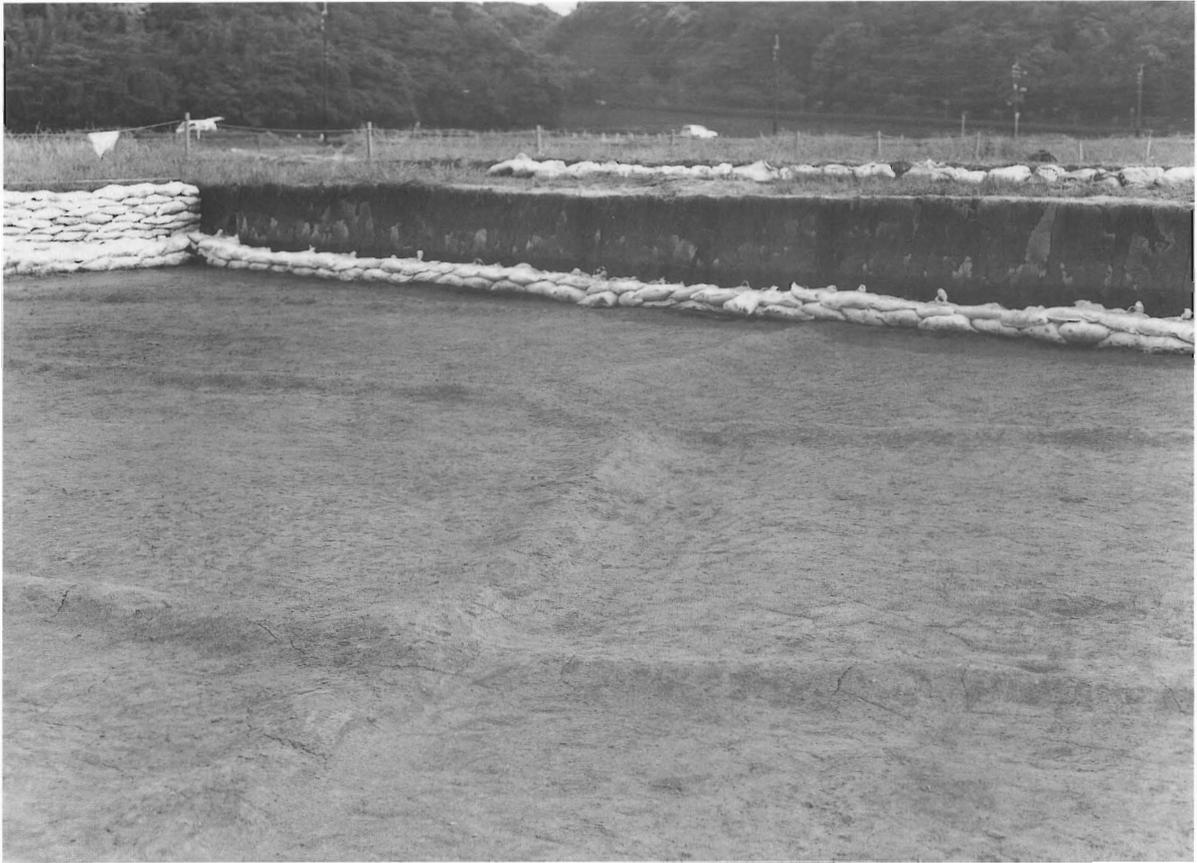
1 C区
溝状遺構 1
検出状況



1 C区
溝状遺構 2
水路跡? 検出状況



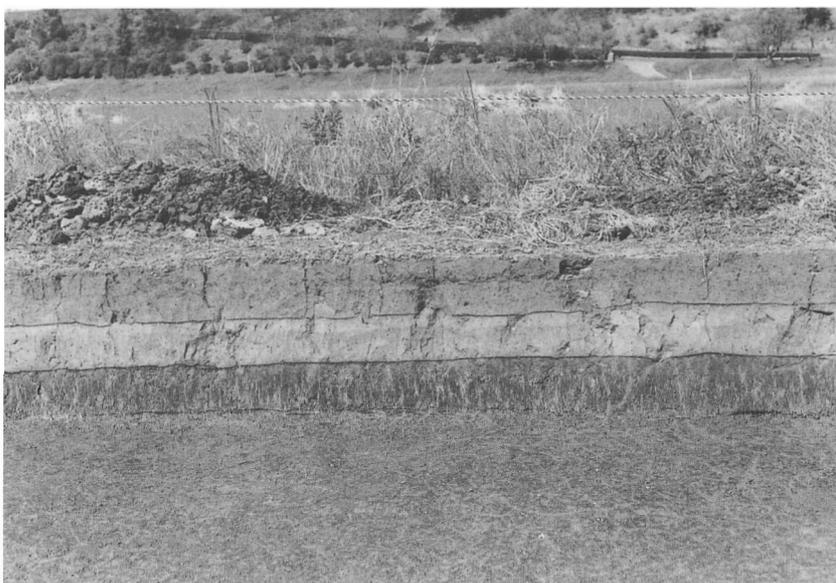
1 C区
溝状遺構 1
調査後及び水田跡



1 C区 水田跡 畦畔検出状況



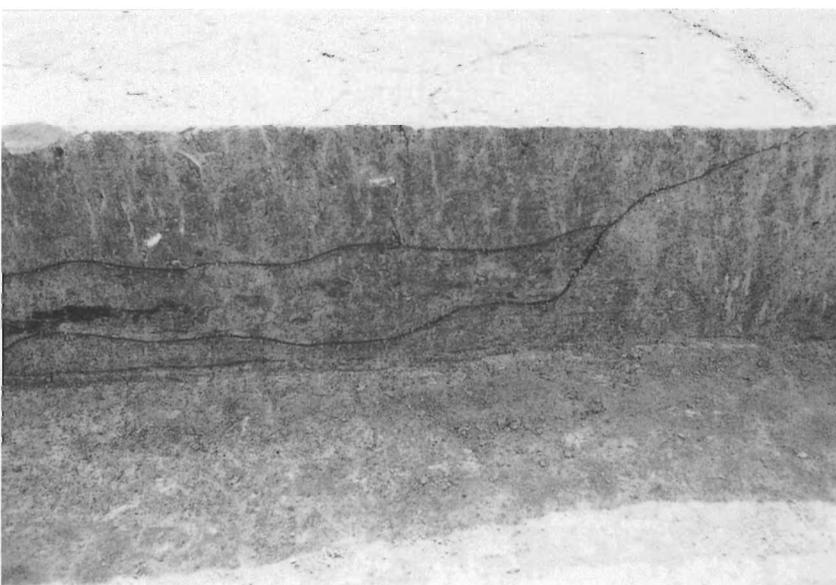
1 C区 溝状遺構 2



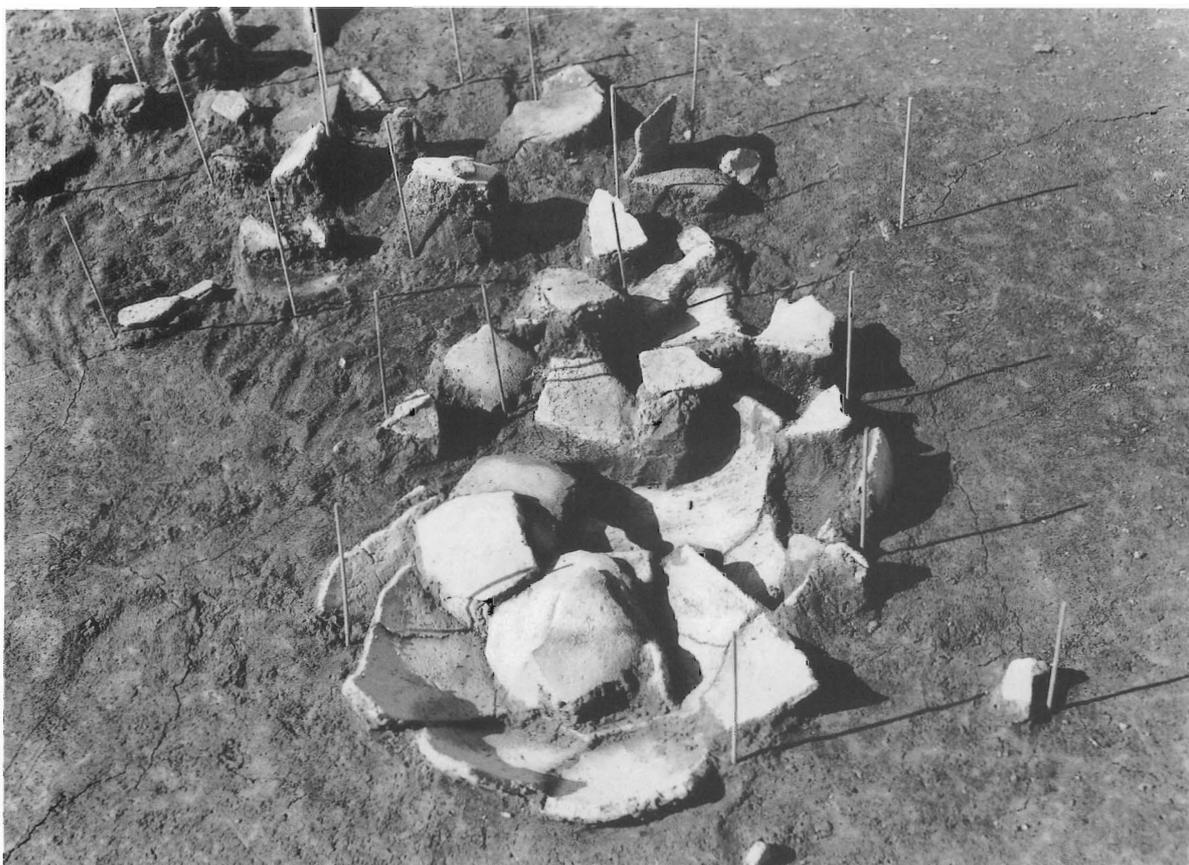
1 D区
土層
基本土層
(1・2・3層)



1 D区
建物跡 1
(1 D-D 1)
遺物出土状況(1)



1 D区
建物跡 1
(1 D-D 1)
土層



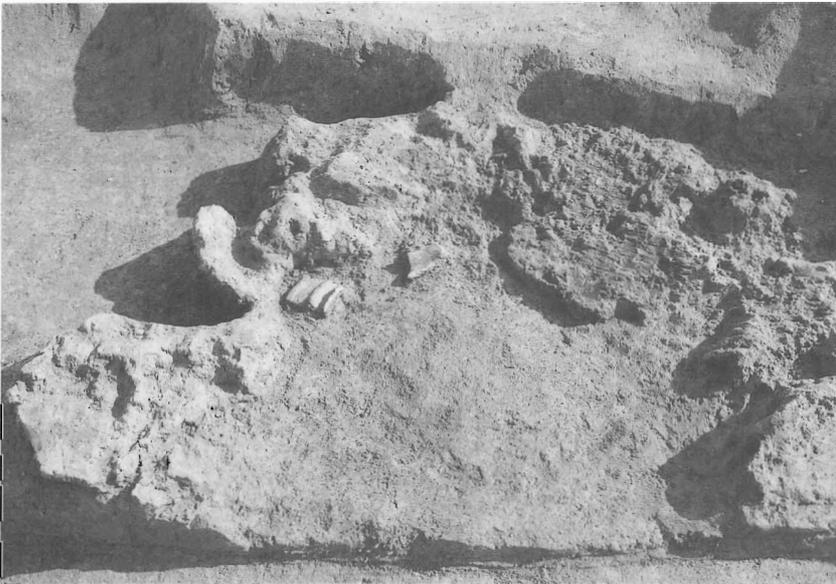
1 D区 建物跡 1 (1 D-D 1) 遺物出土状況(2)



1 D区 建物跡 1 (1 D-D 1) 遺物出土状況(3)



1 D区
建物跡 1
(1 D-D 1)
遺物出土状況(4)



1 D区
建物跡 1
(1 D-D 1)
遺物出土状況(5)



1 D区
土器溜り 3
(1 D-D 8)
遺物出土状況

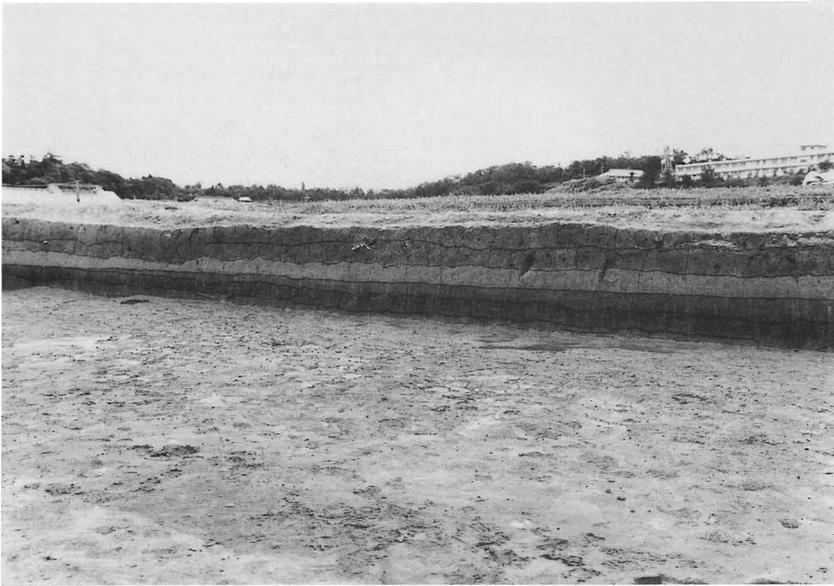


1D区 土器溜り2 (1D-D2) 遺物出土状況

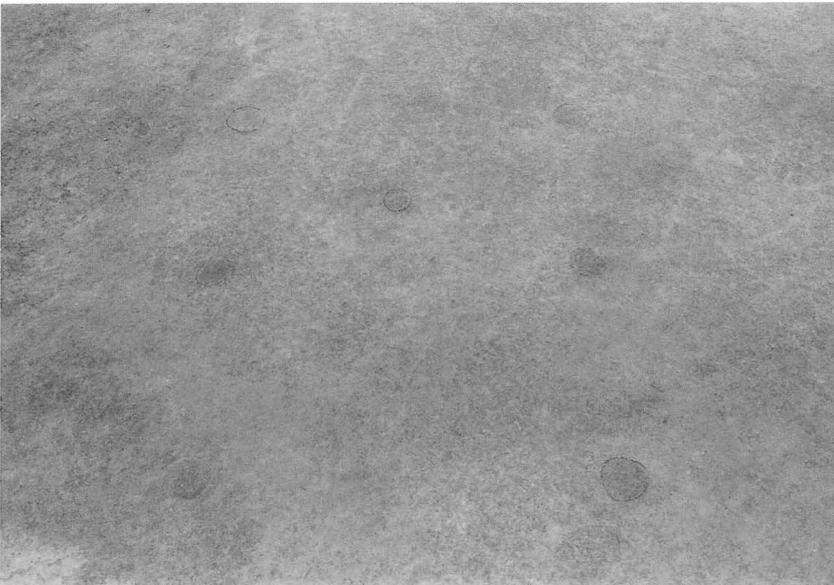


1F区 調査後

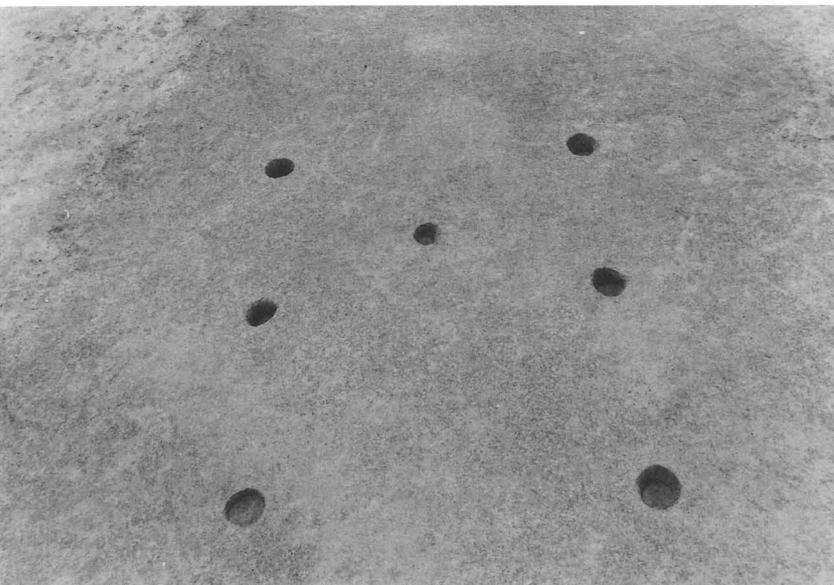
図版14



1 F区
土層



1 F区
建物跡



1 F区
建物跡

1 F区
遺物出土状況



1 F区
土器溜り 2
(1 F-D 3)
遺物出土状況



1 F区
土器溜り 3
(1 F-D 4)
遺物出土状況



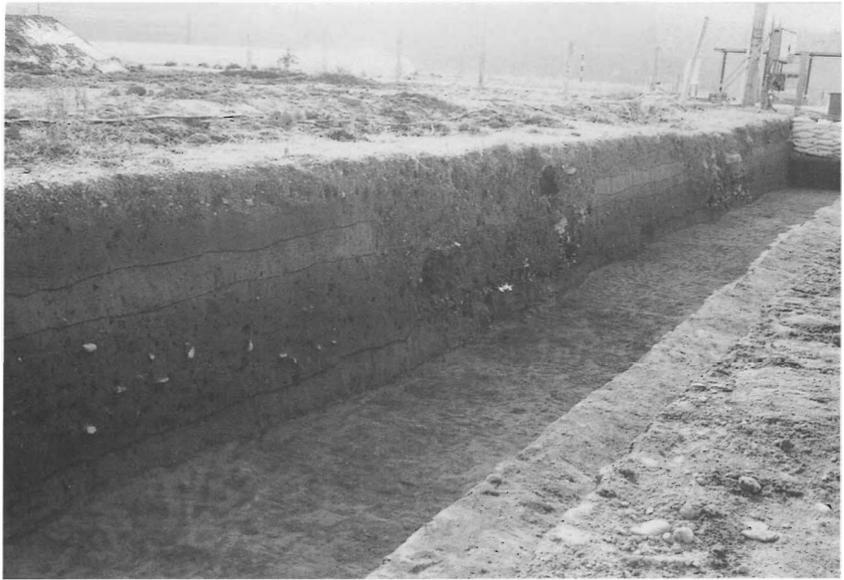


1 F区 土器溜り1 (1 F-D 2) 遺物出土状況



1 F区 土器溜り1 (1 F-D 2) 遺物出土状況

2 A区
土層



2 A区
遺物出土状況



2 A区
建物跡ピット
遺物出土状況





2 A区
遺構検出状況



2 A区
調査後



2 A区
建物跡



2 C区 調査後



2 G区 調査後



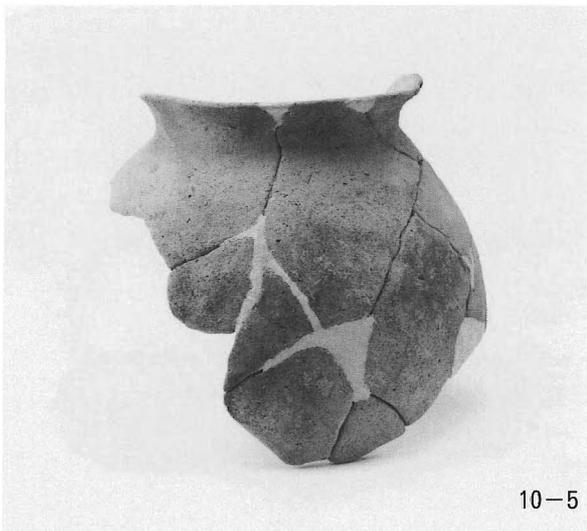
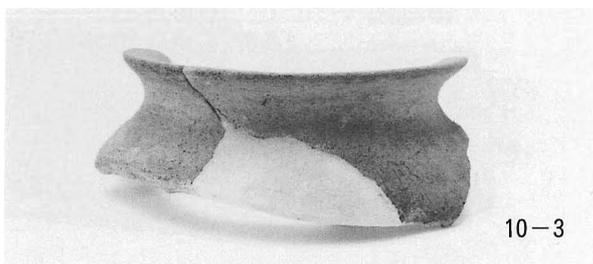
2 F区
土層



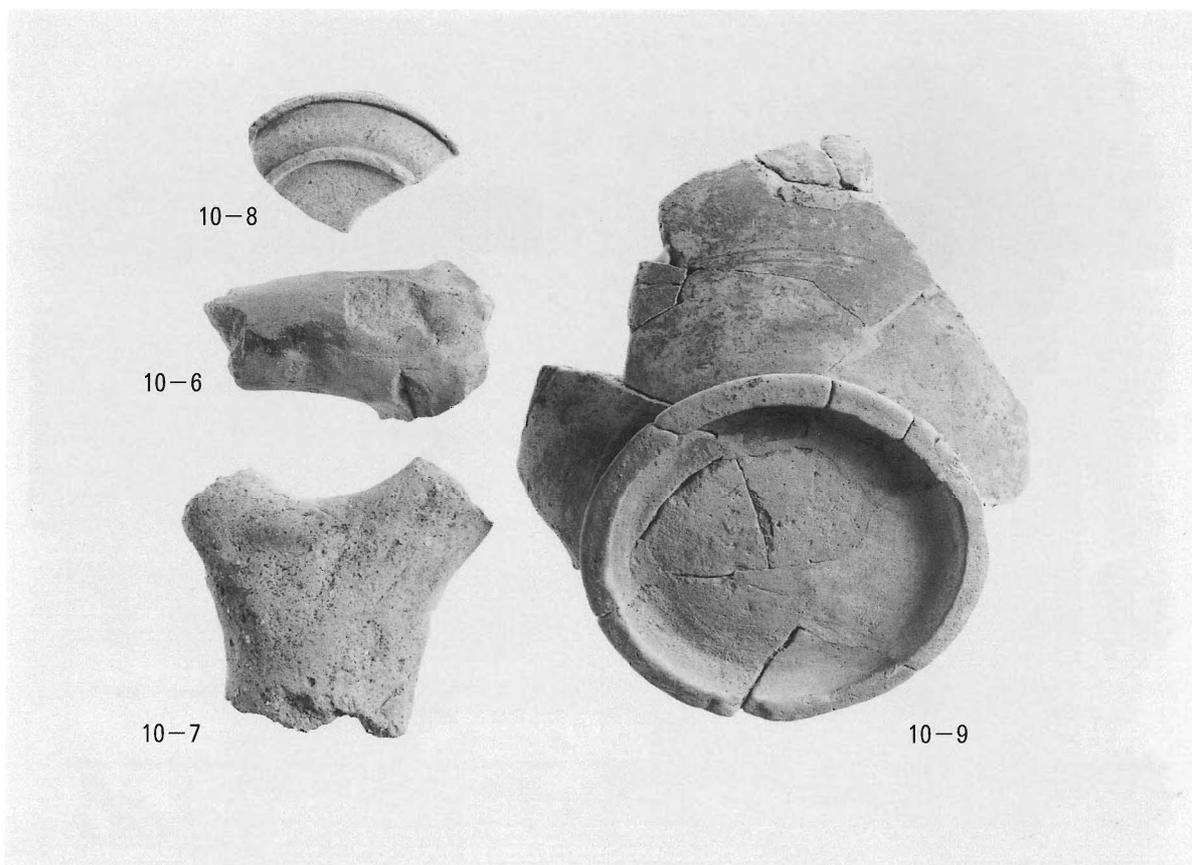
2 F区
土器溜り



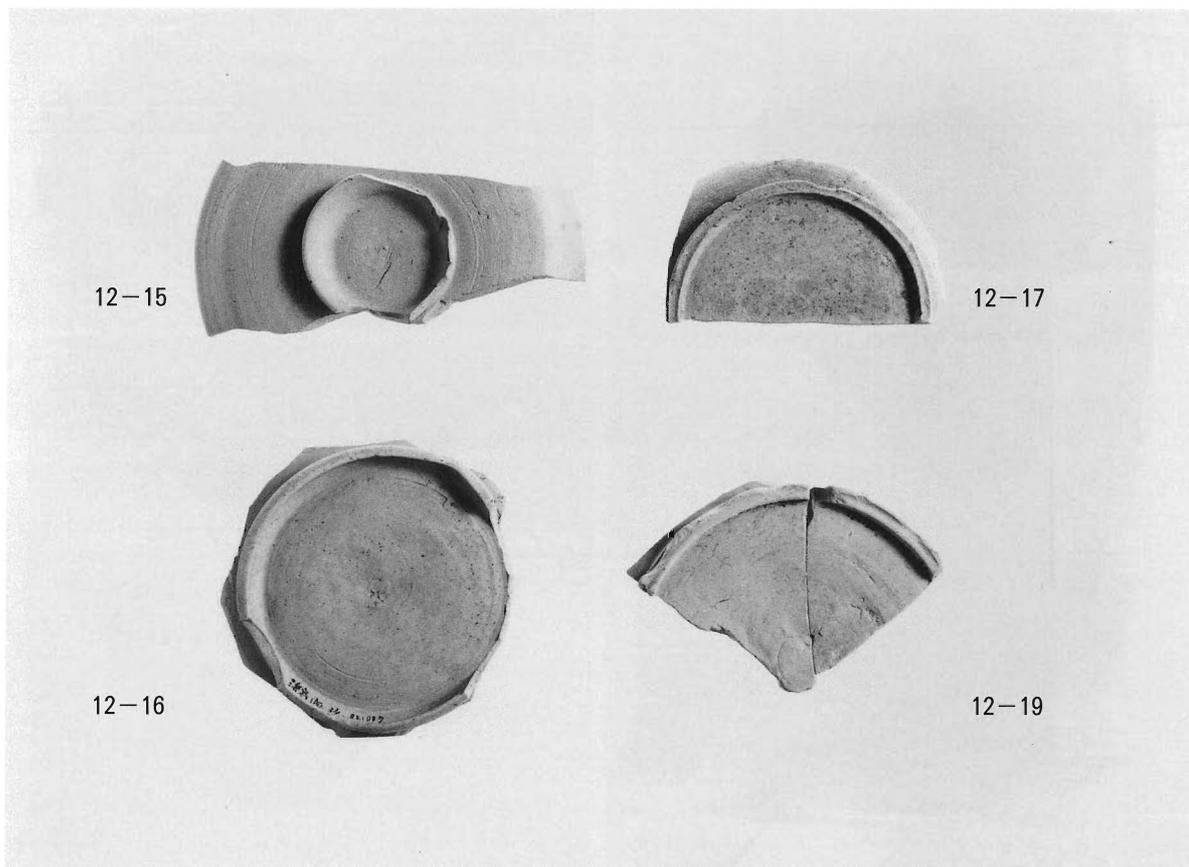
2 F区
土器溜り



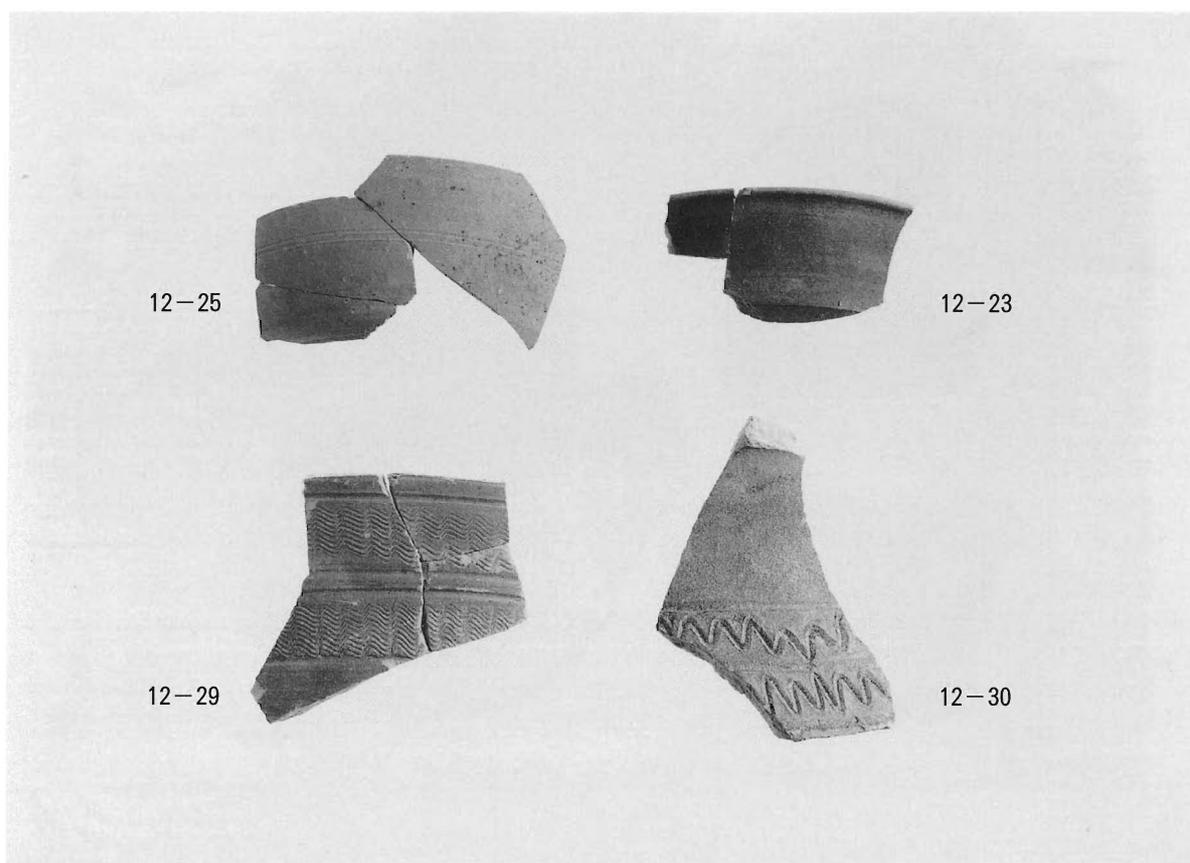
1 A区 出土遺物(1)



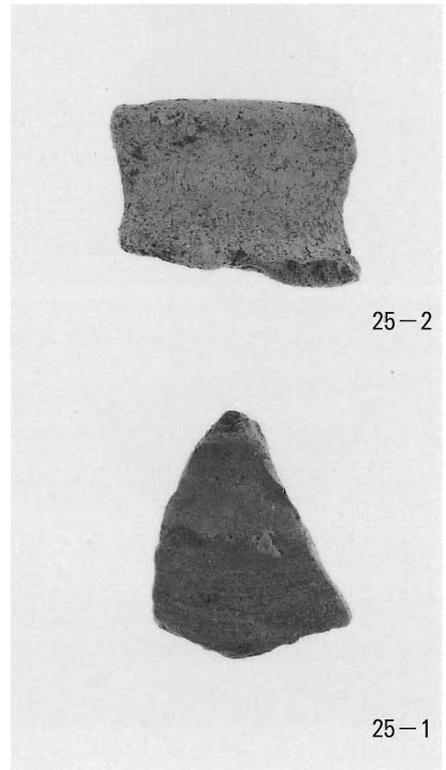
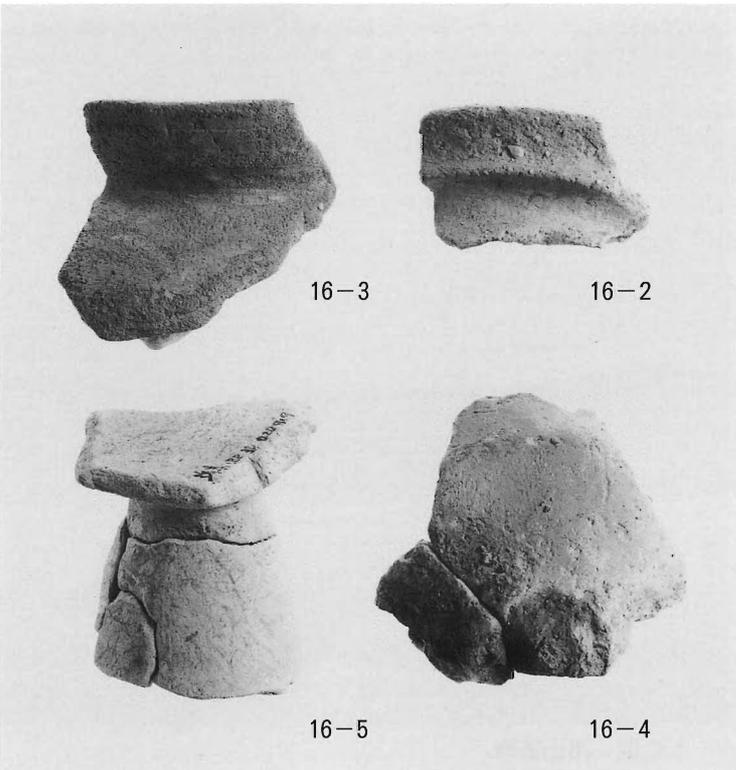
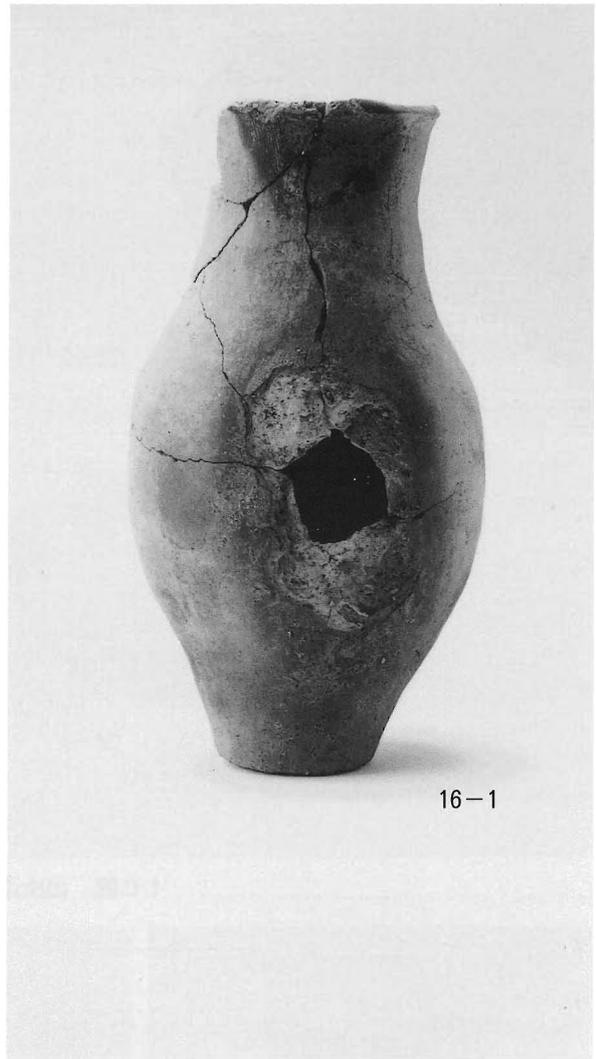
1 A区 出土遺物(2)



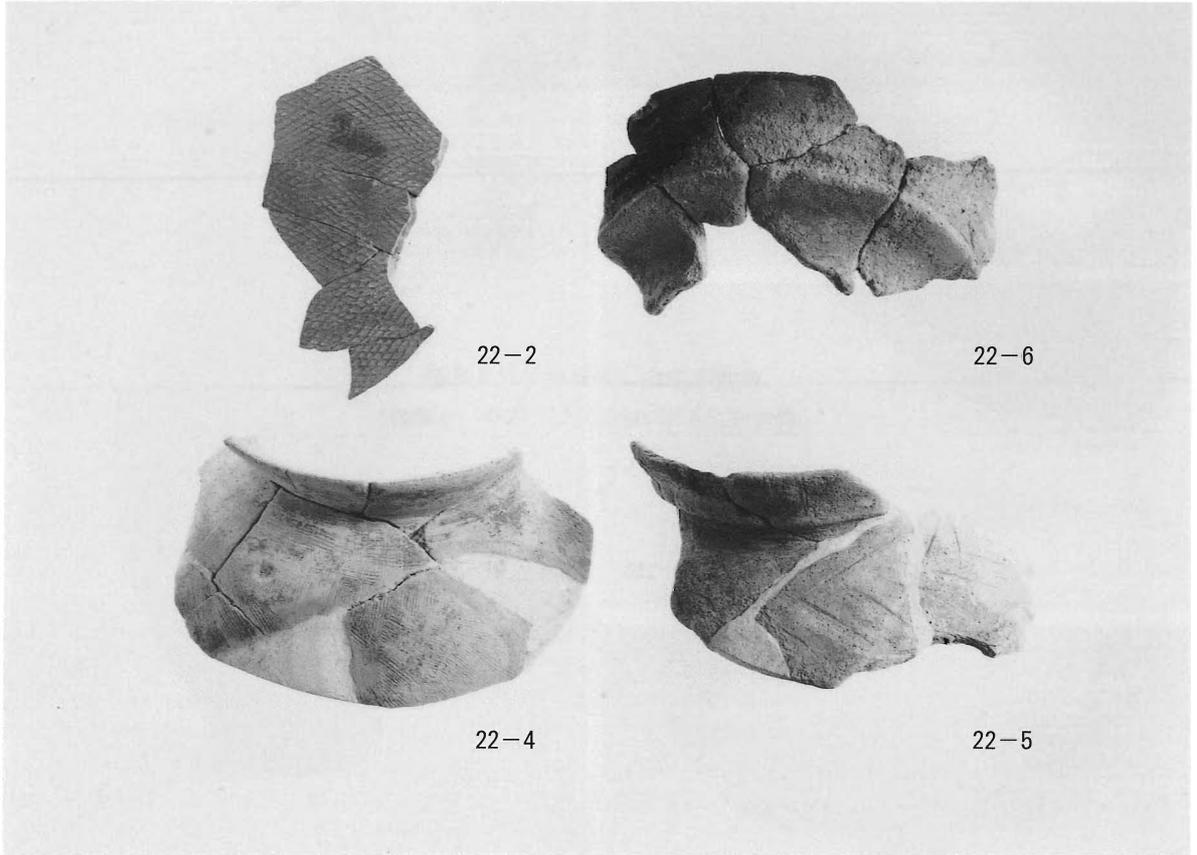
1 A区 出土遺物(3)



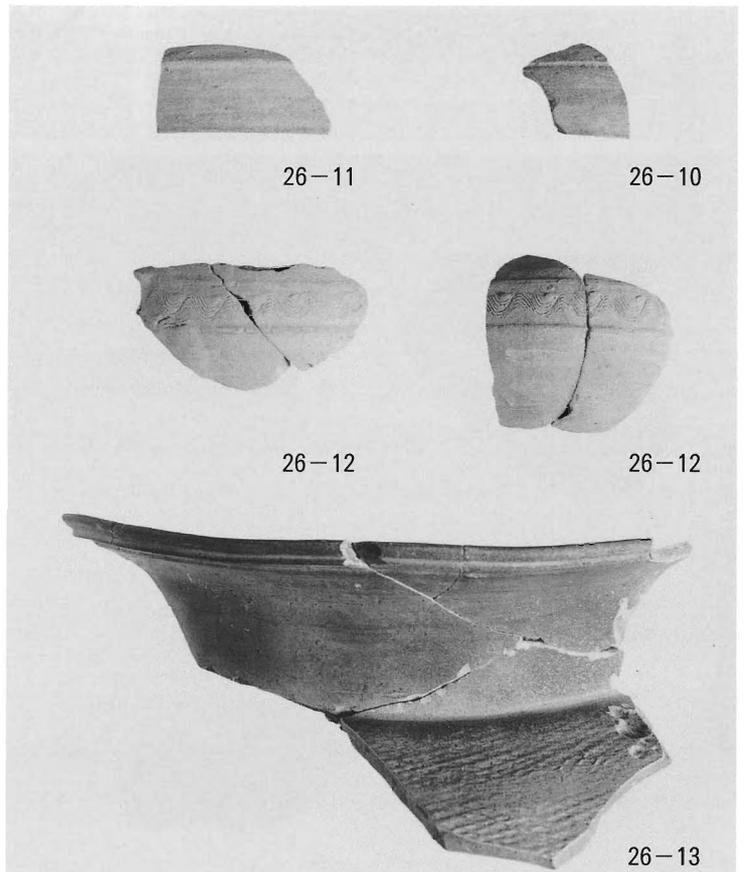
1 A区 出土遺物(4) 須恵器



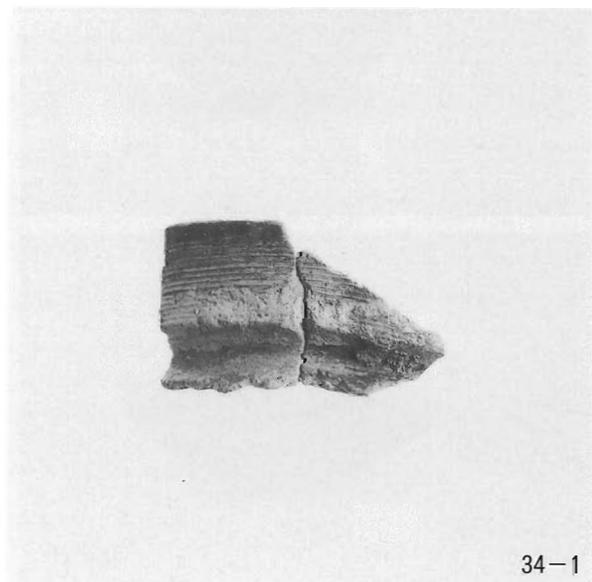
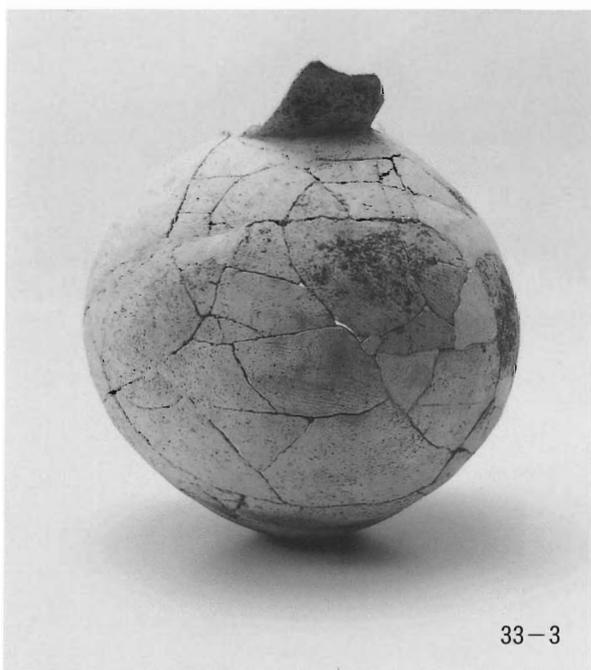
1 A区, 1 B区, 1 C区 出土遺物



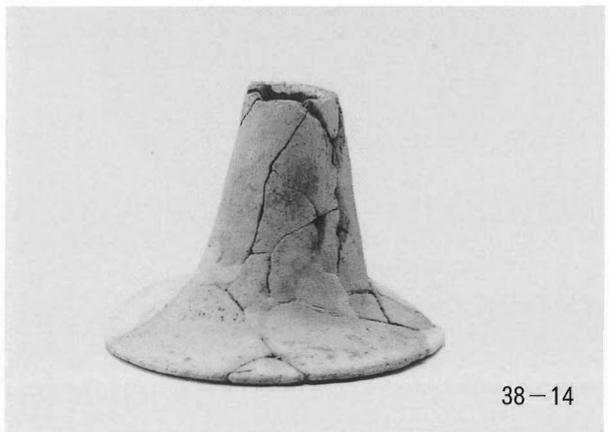
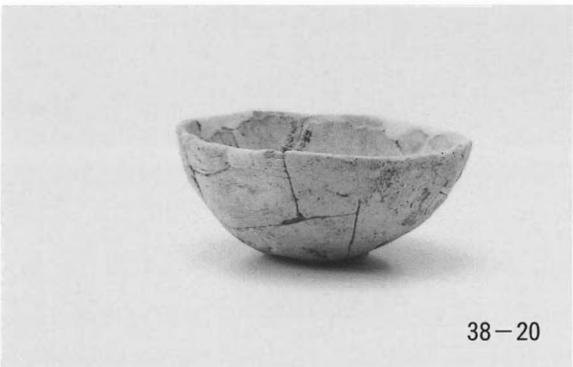
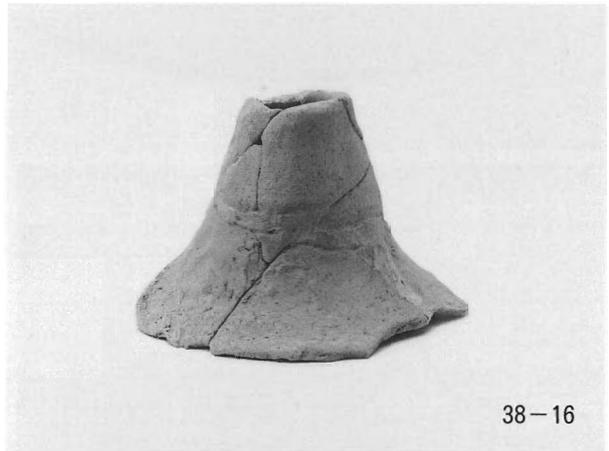
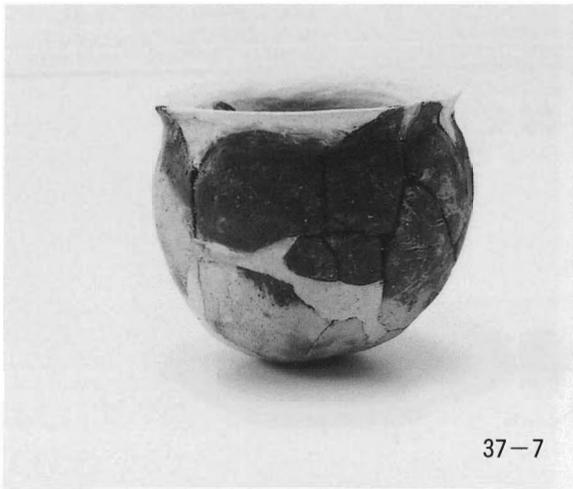
1 C区 出土遺物 (土器溜り)



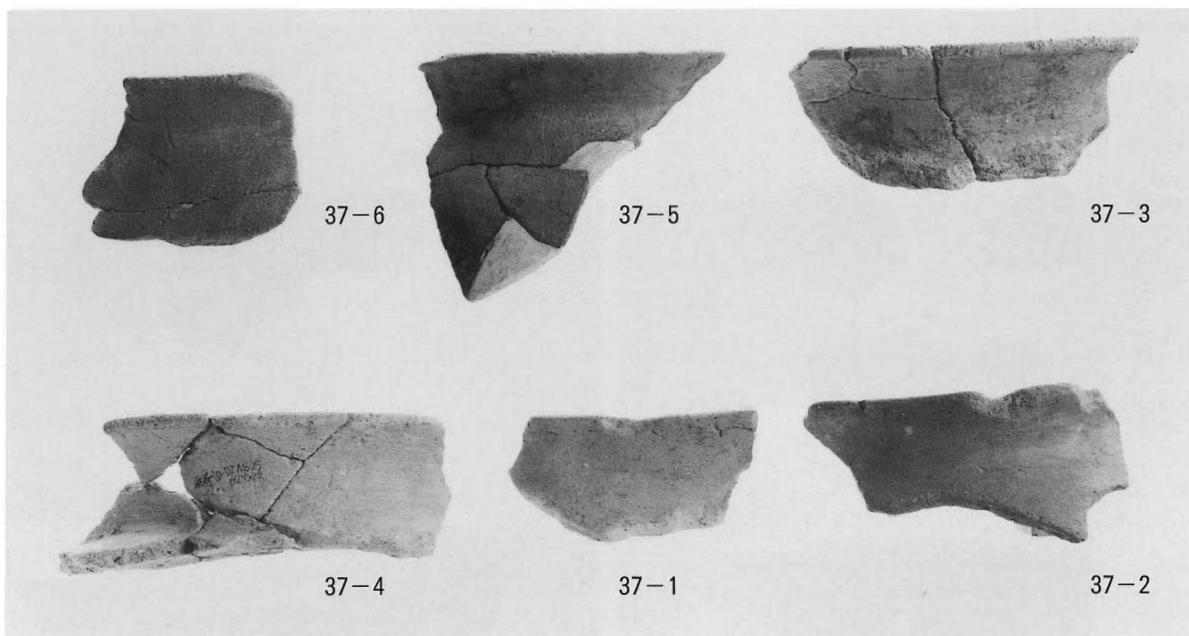
1 C区 出土遺物



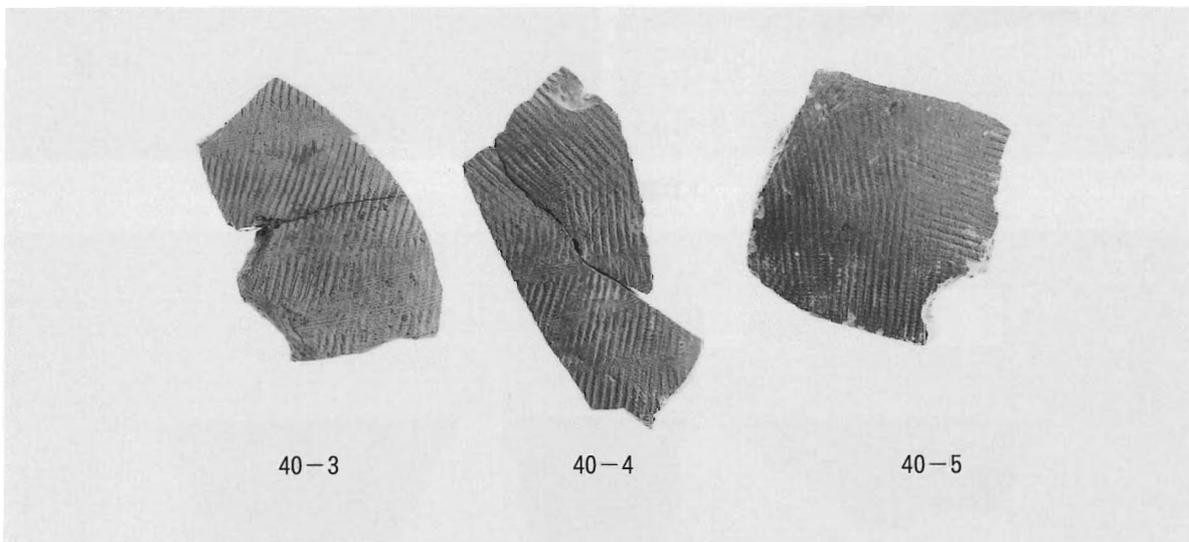
1D区 建物跡1・2 出土遺物



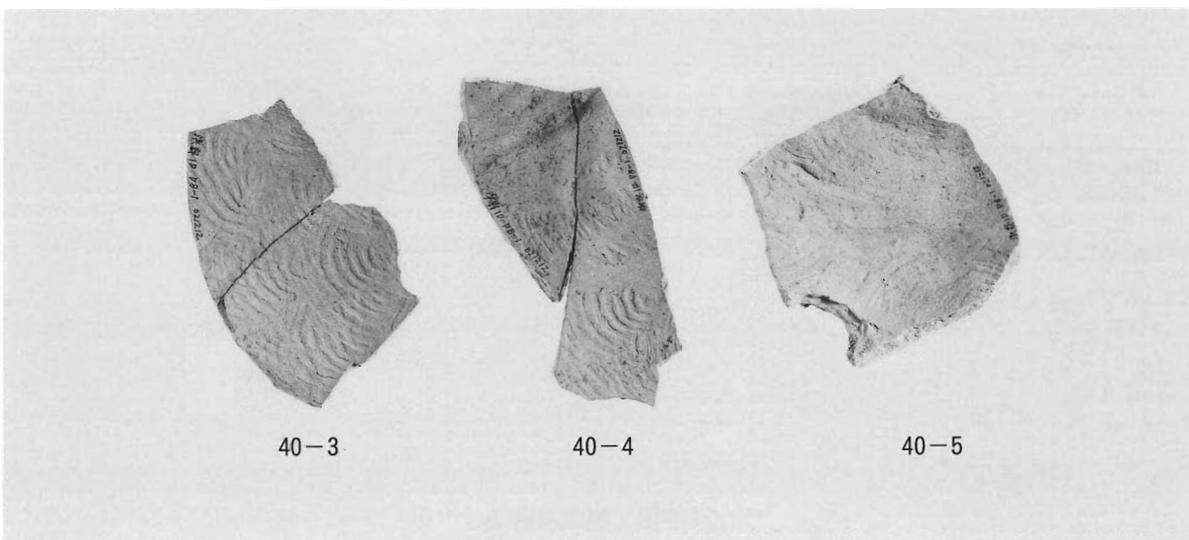
1D区 土器溜り2 (1D-D2) 出土遺物(1)



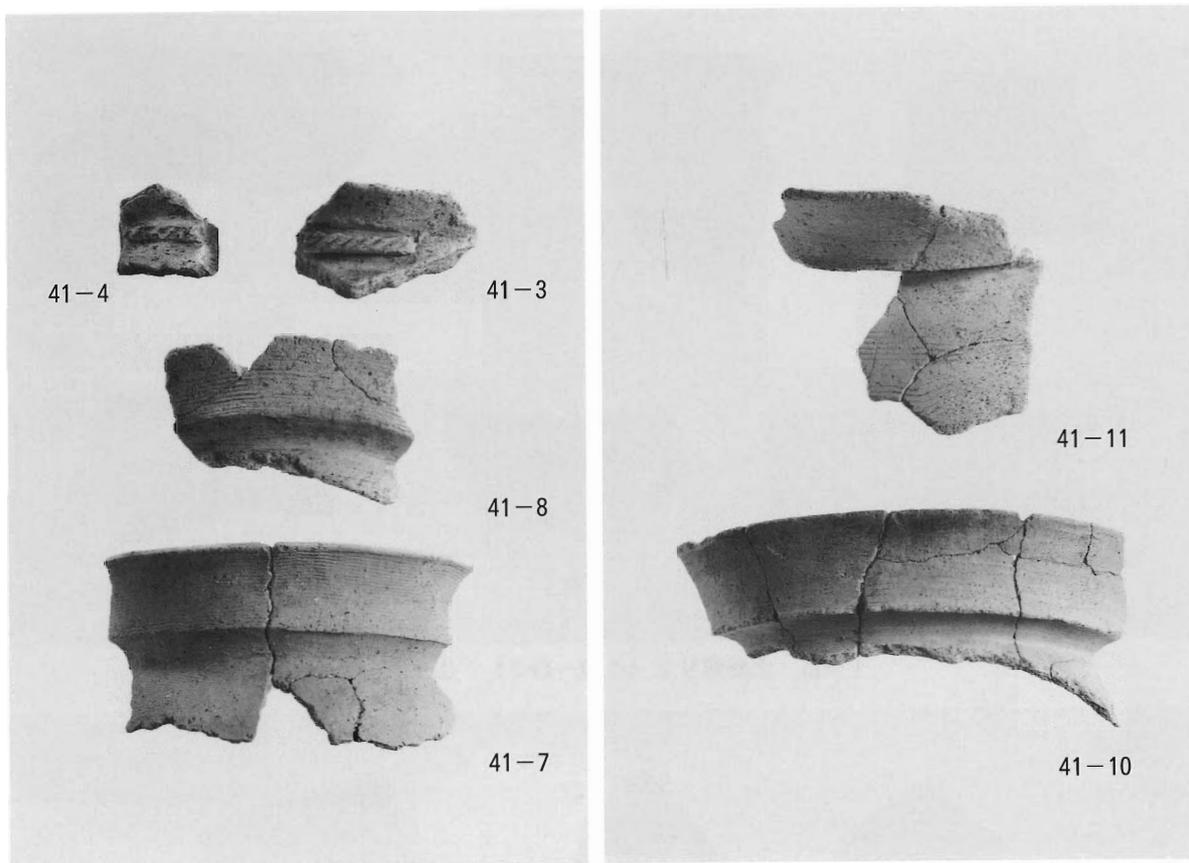
1 D区 土器溜り2 (1 D-D 2) 出土遺物(2)



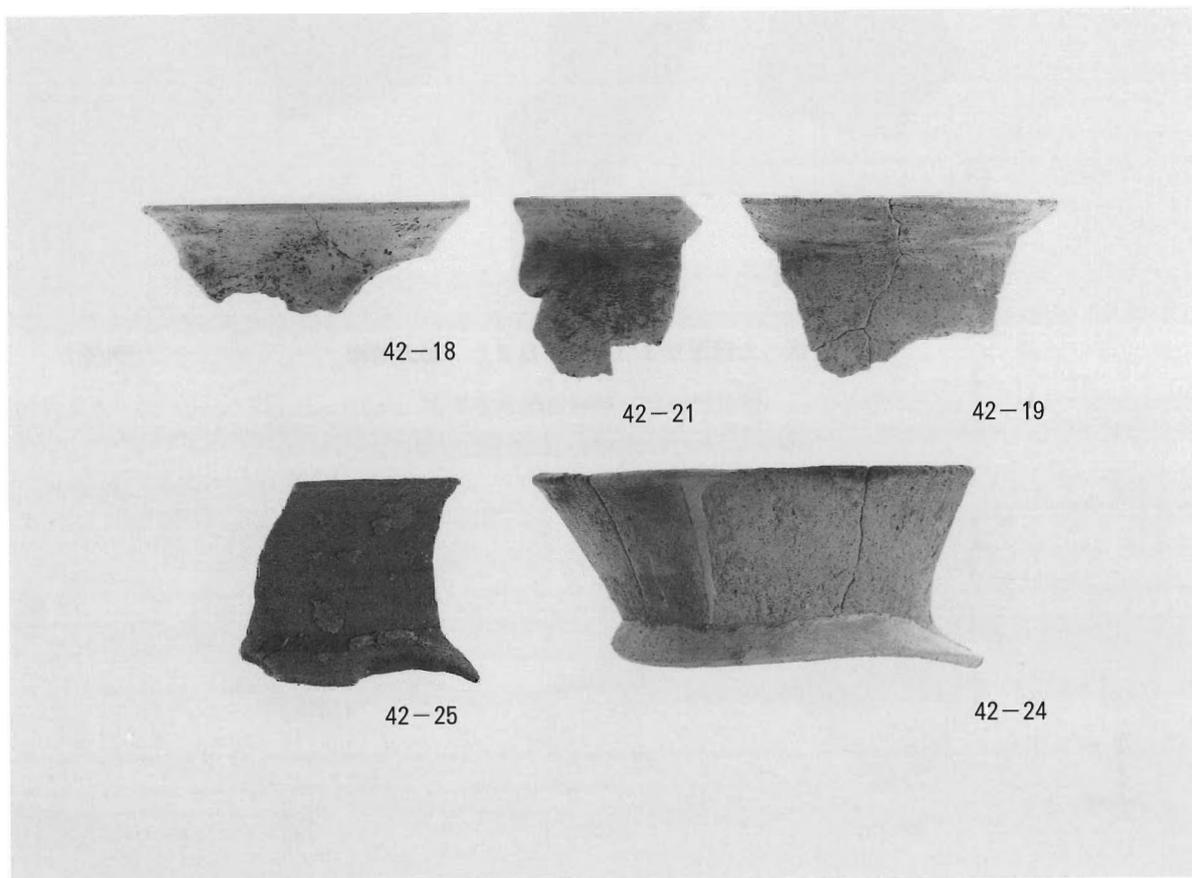
1 D区 土器溜り3 (1 D-D 8) 出土遺物 (外面)



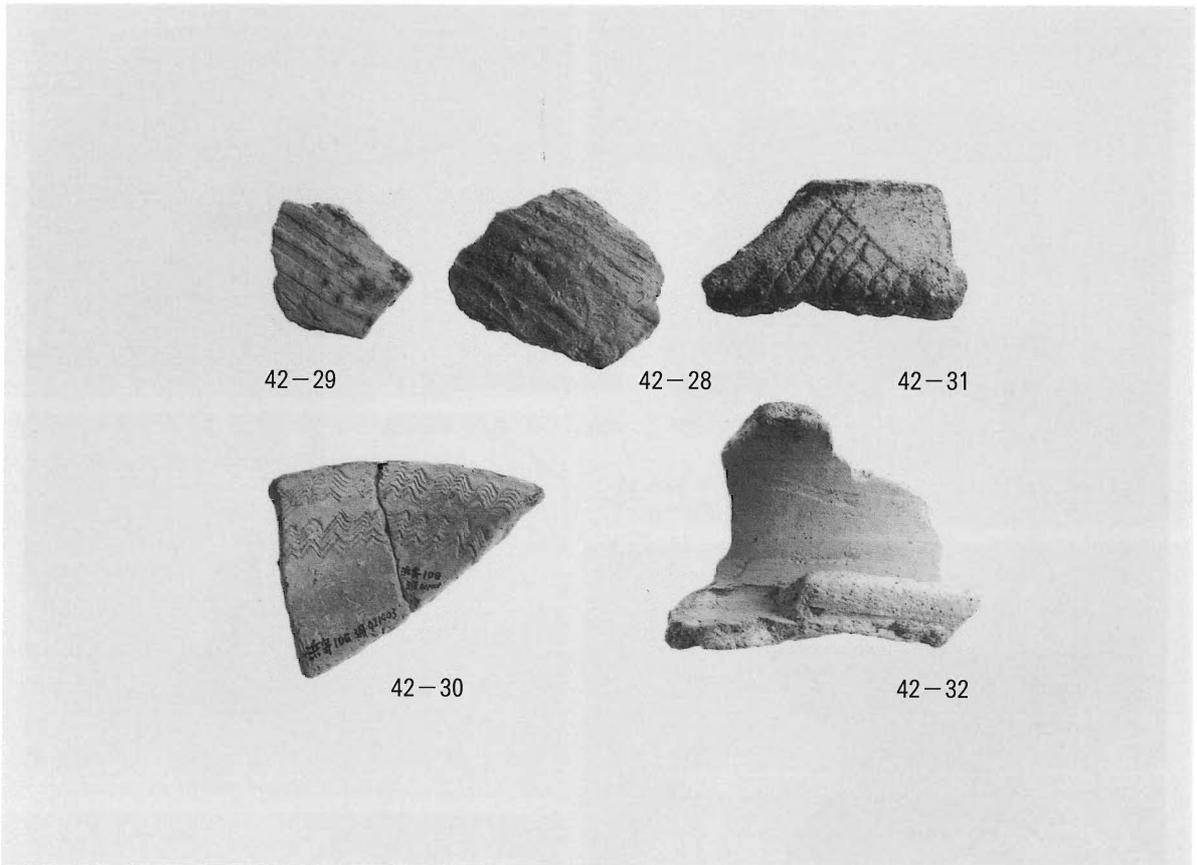
1 D区 土器溜り3 (1 D-D 8) 出土遺物 (内面)



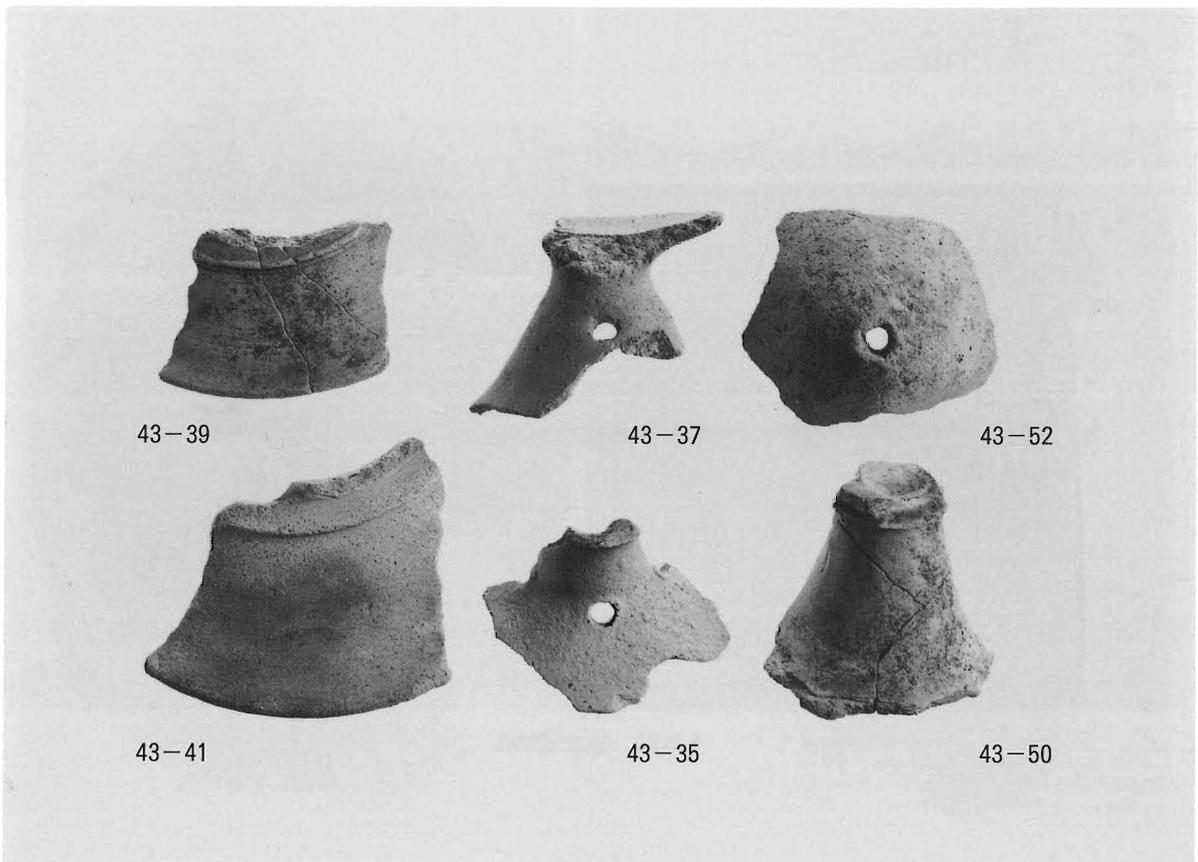
1 D区 出土遺物(1)



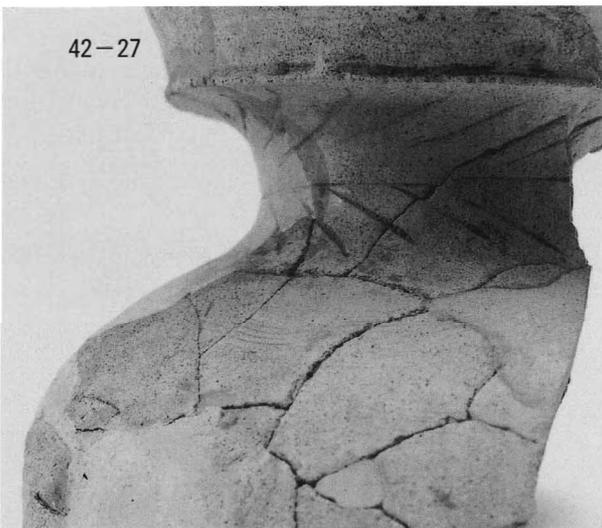
1 D区 出土遺物(2)



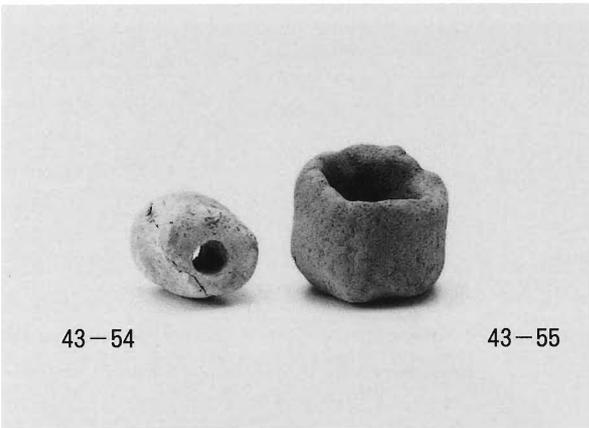
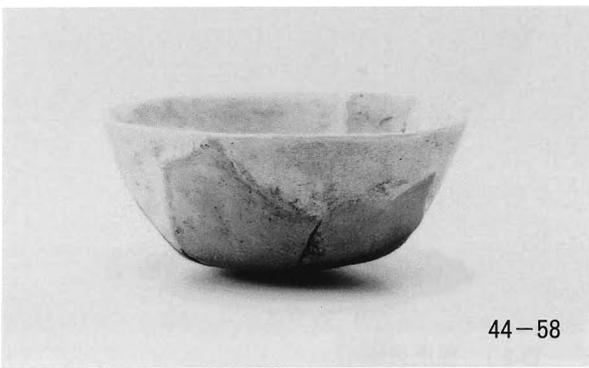
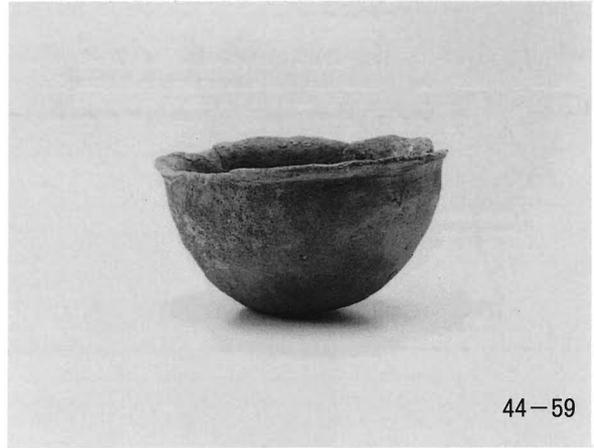
1 D区 出土遺物(3)



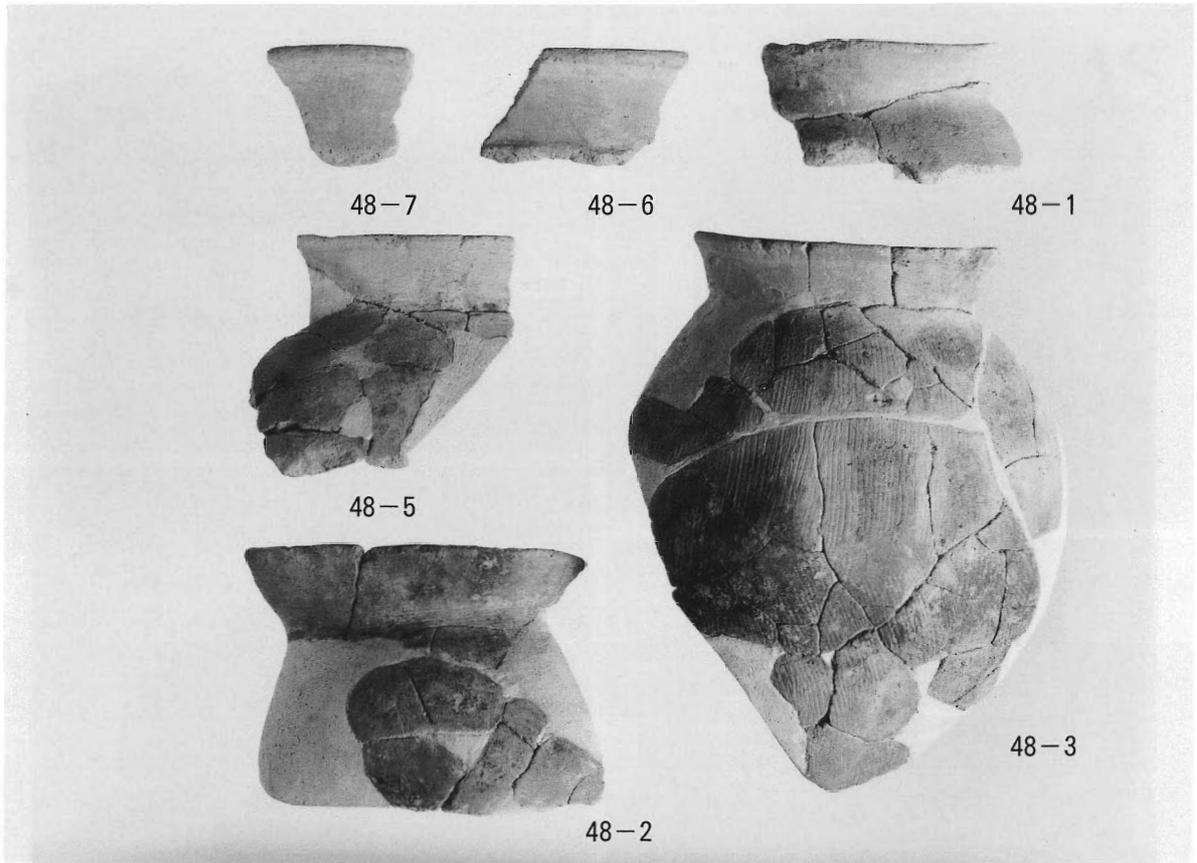
1 D区 出土遺物(4)



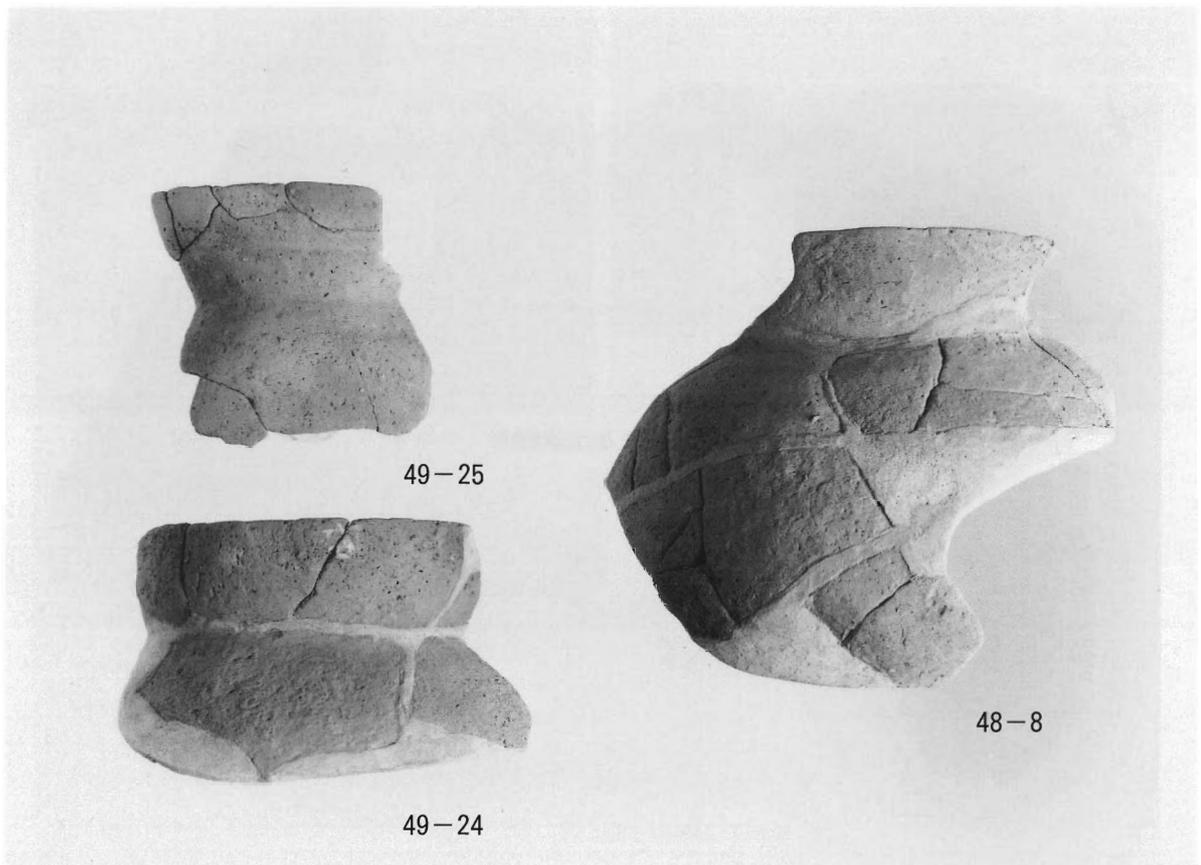
1 D区 出土遺物(5)



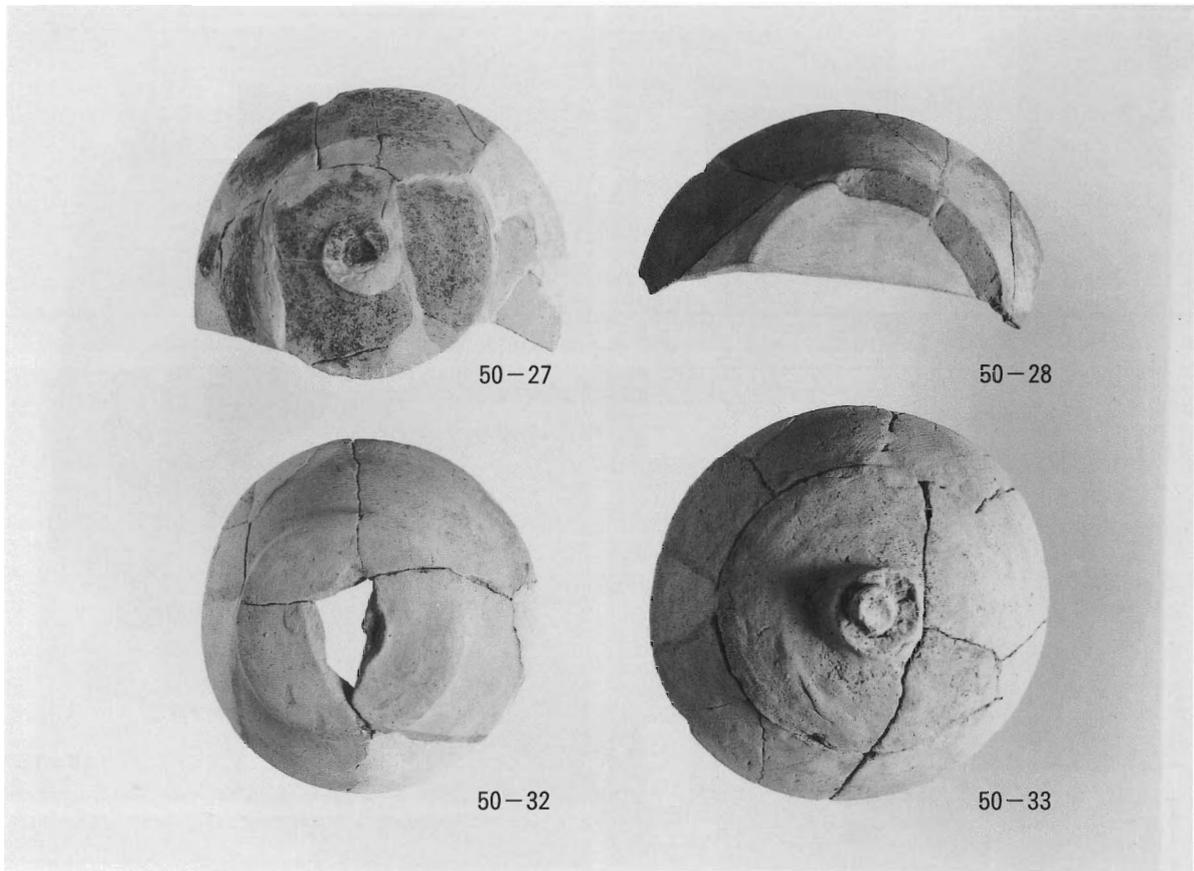
1 D区 出土遺物(6)



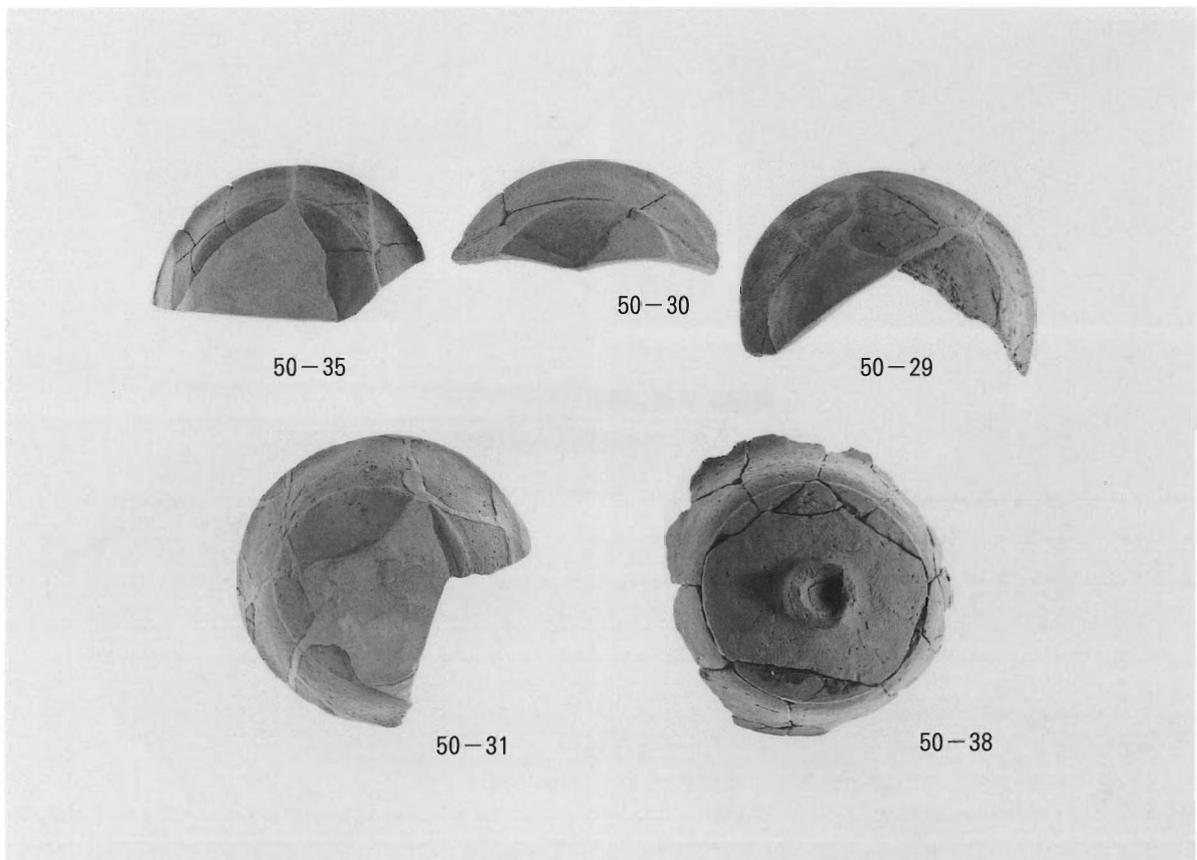
1 F区 土器溜り2 (1 F-D 2) 出土遺物(1)



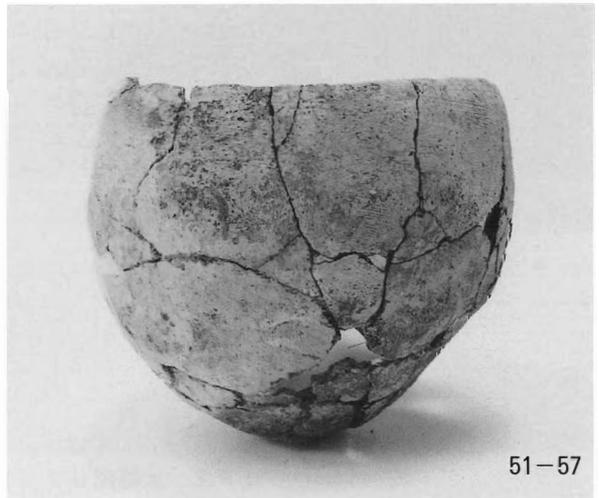
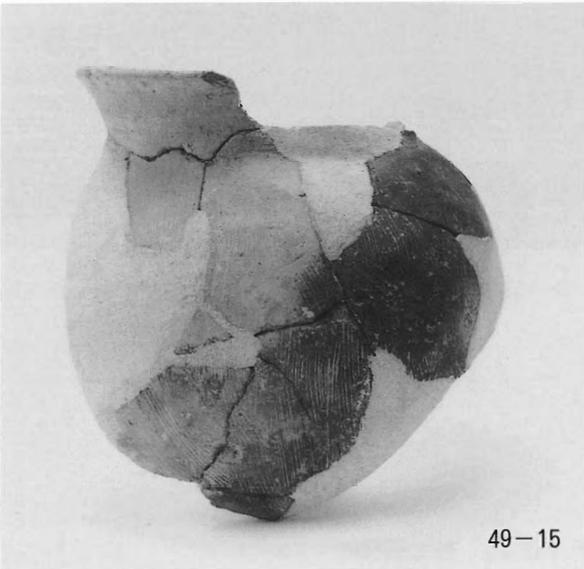
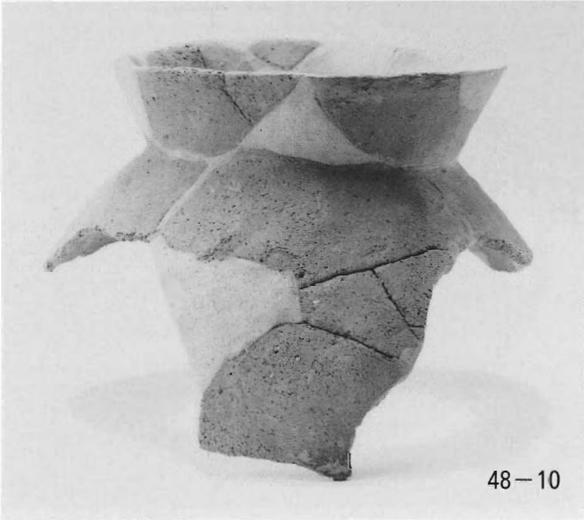
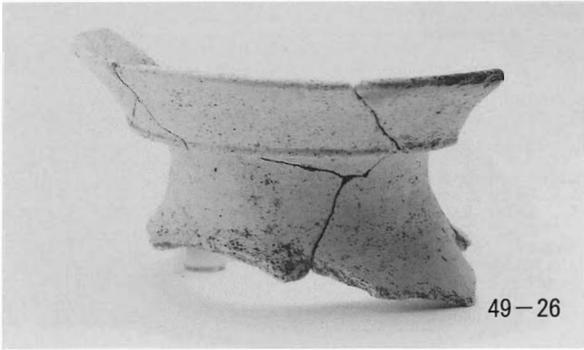
1 F区 土器溜り2 (1 F-D 2) 出土遺物(2)



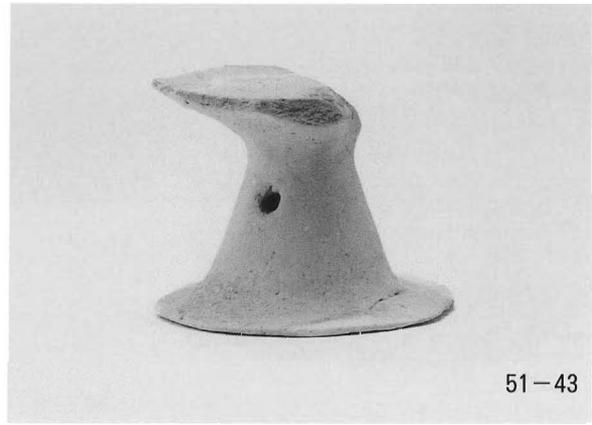
1 F区 土器溜り2 (1 F-D 2) 出土遺物(3)



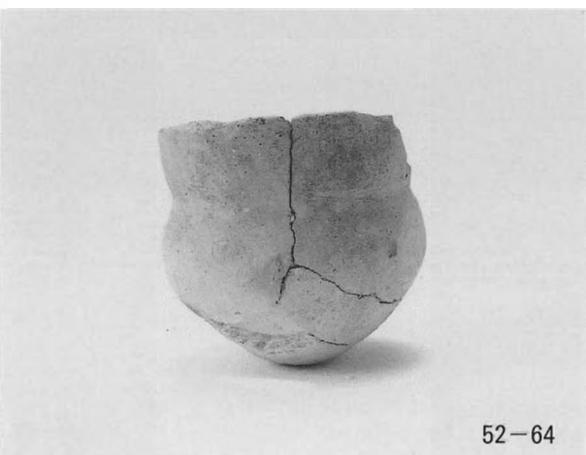
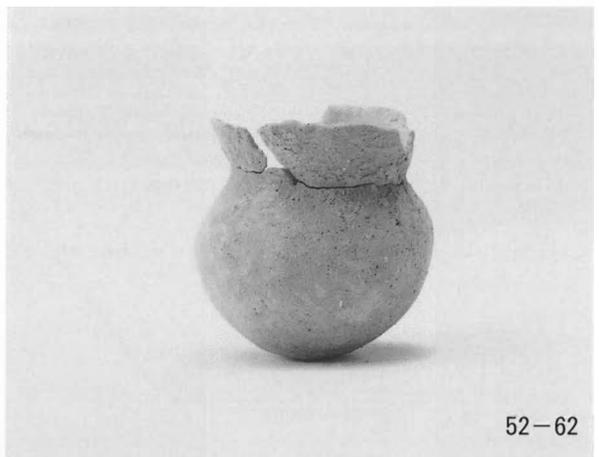
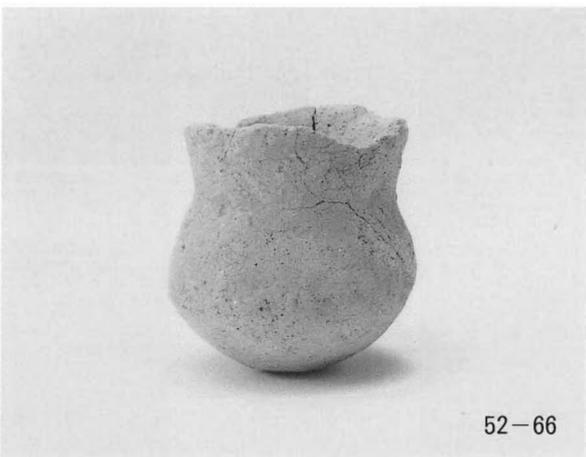
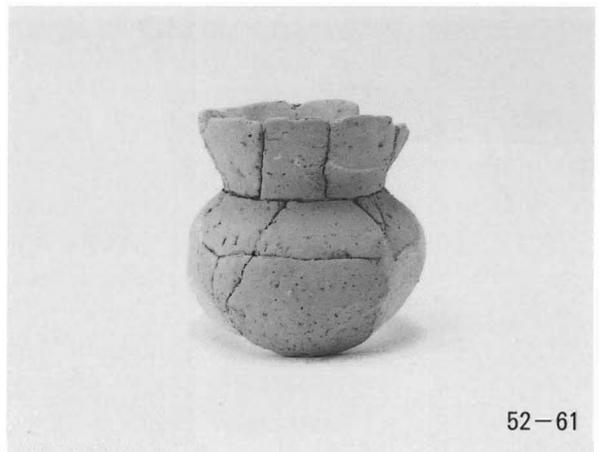
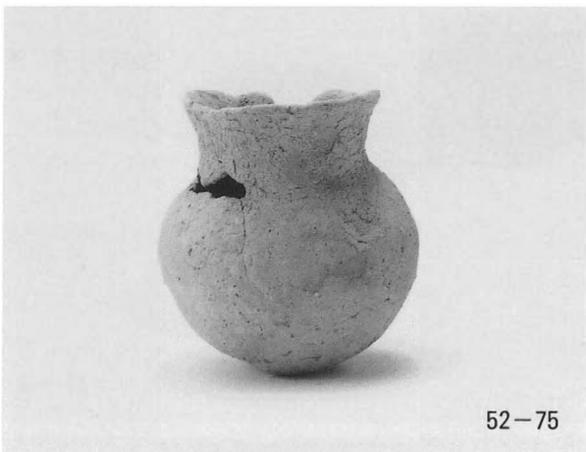
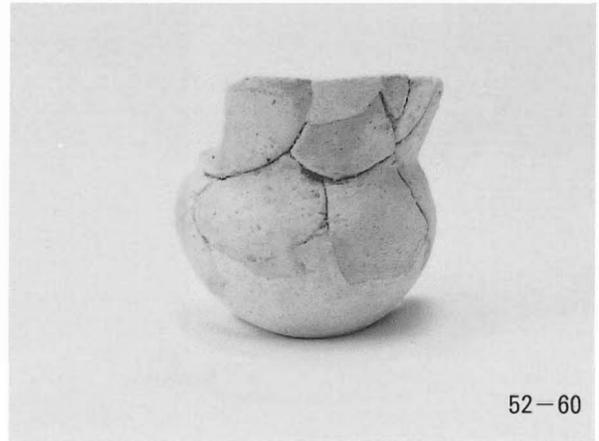
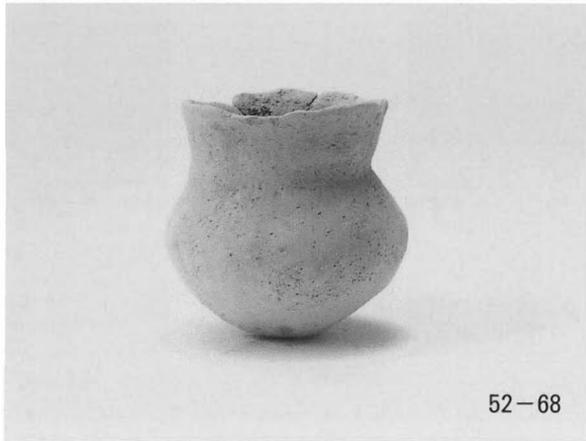
1 F区 土器溜り2 (1 F-D 2) 出土遺物(4)



1 F区 土器溜り2 (1 F-D2) 出土遺物(5)



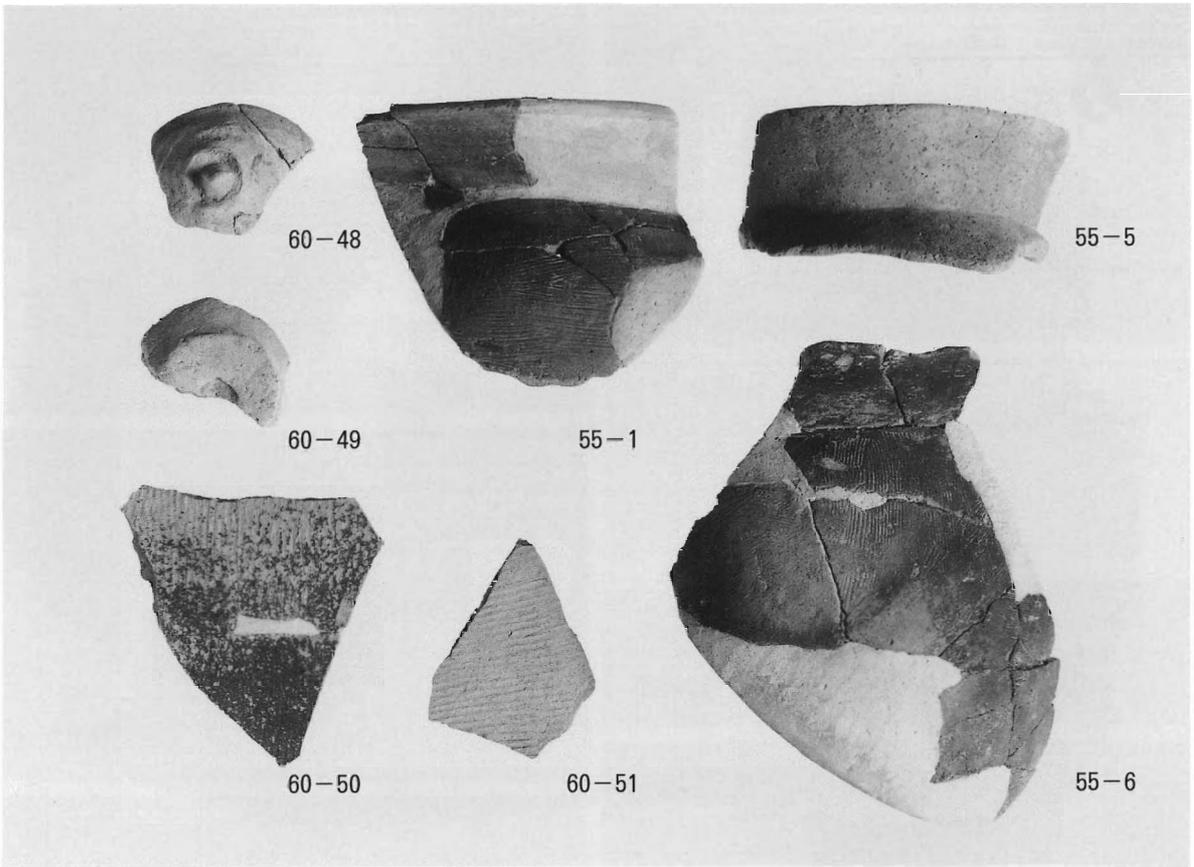
1F区 土器溜り2 (1F-D2) 出土遺物(6)



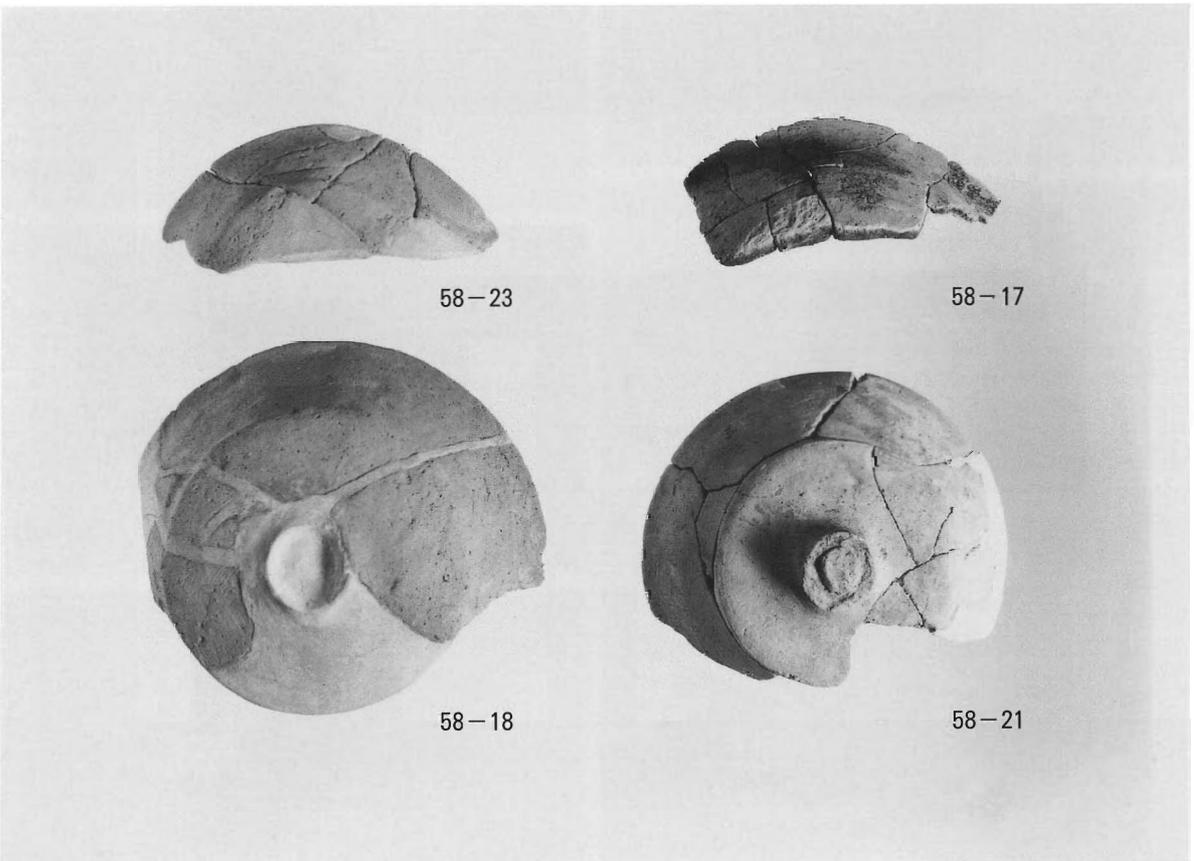
1F区 土器溜り2 (1F-D2) 出土遺物(7)



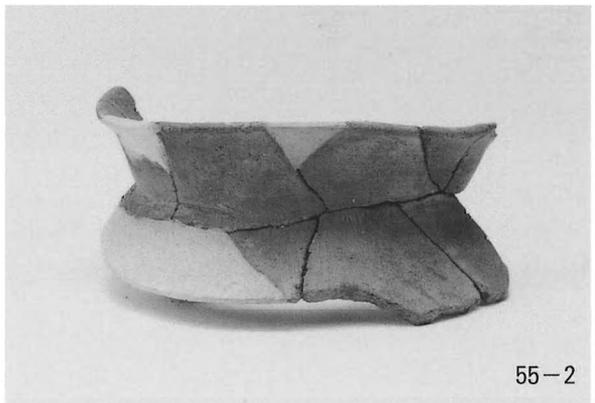
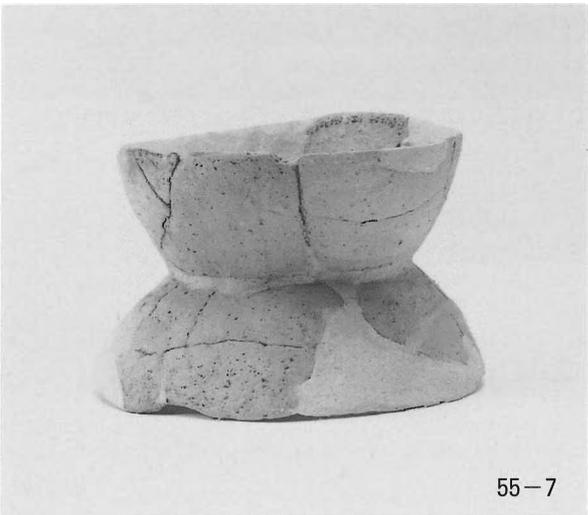
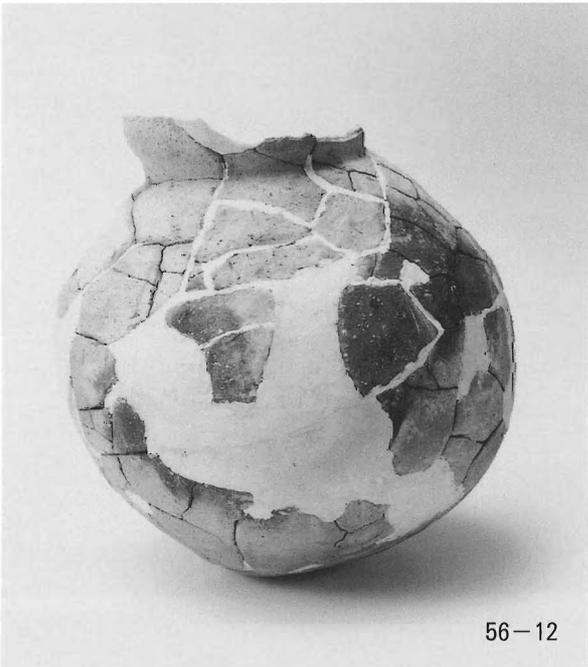
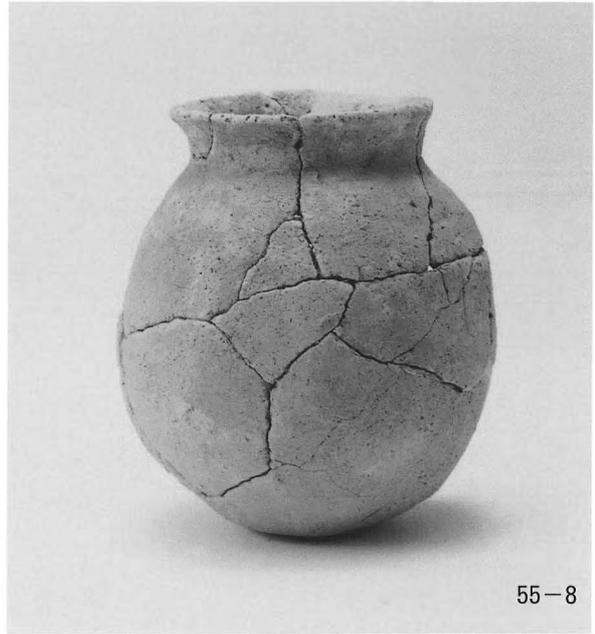
1F区 土器溜り2 (1F-D2) 出土遺物(8)



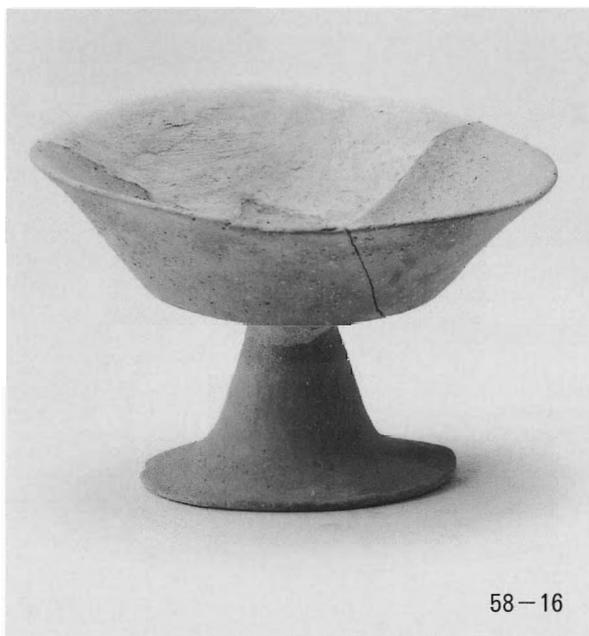
1 F区 土器溜り3 (1 F-D 3) 出土遺物(1)



1 F区 土器溜り3 (1 F-D 3) 出土遺物(2)



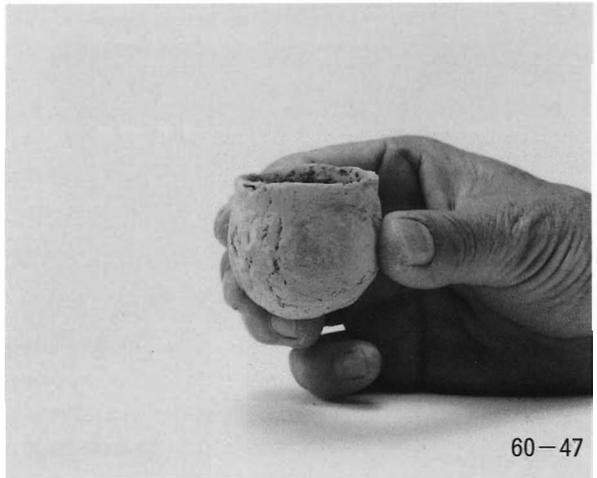
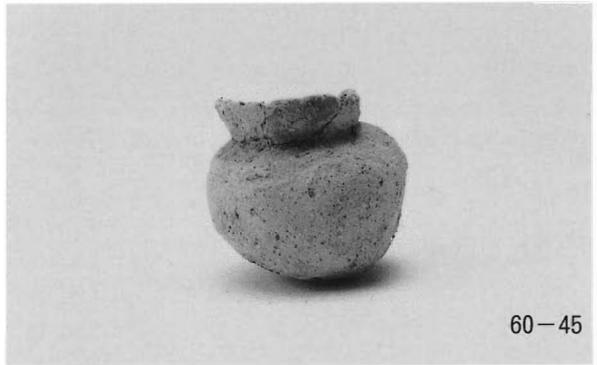
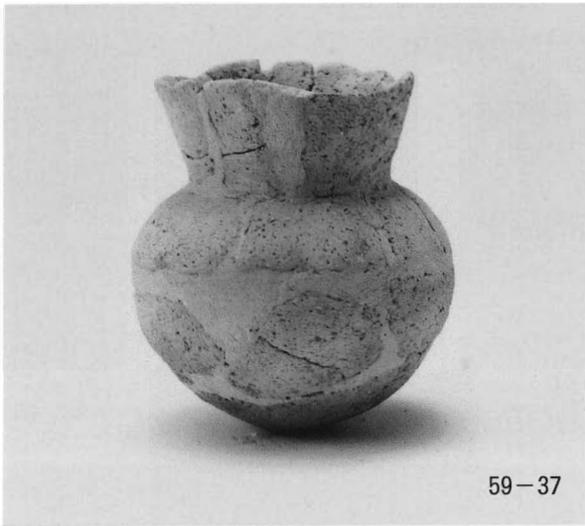
1 F区 土器溜り3 (1 F-D 3) 出土遺物(3)



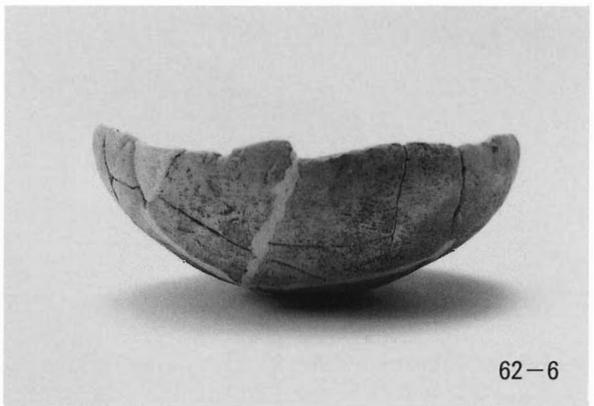
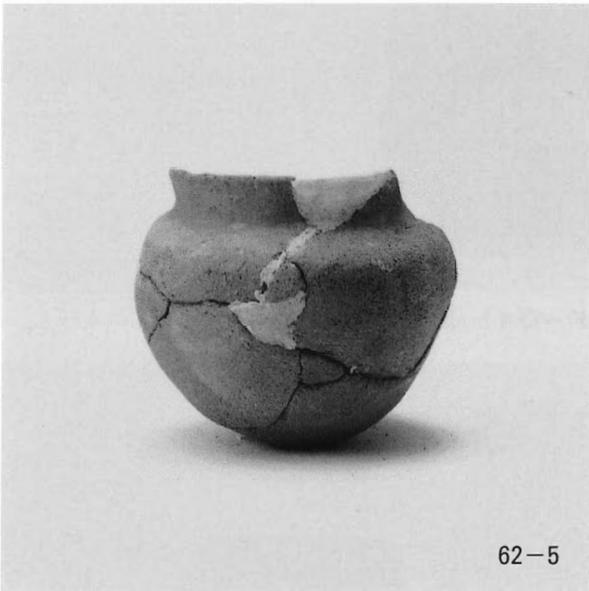
1F区 土器溜り3 (1F-D3) 出土遺物(4)



1 F区 土器溜り3 (1 F-D 3) 出土遺物(5)



1 F 区 土器溜り 3 (1 F - D 3) 出土遺物(6)



1F区 土器溜り4 (1F-D4) 出土遺物(1)